子どもの学校外活動と利用施設に関する研究

２００７年

櫻 木 耕 史

目　　次

第１章　序論
第１節　研究の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２節　研究の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３節　子どもと学校外活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第４節　論文の構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第５節　既往研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

第２章　子どもの学校外活動の実態と利用施設
第１節　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第２節　文化系活動と利用施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
２－２－１　調査内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
２－２－２　活動組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
２－２－３　利用施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
２－２－４　利用施設の評価 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
２－２－５　利用施設と問題点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第３節　運動系活動と利用施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
２－３－１　実態調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
２－３－２　活動組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
２－３－３　利用施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
２－３－４　利用施設の評価 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
２－３－５　利用施設と問題点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第４節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

第３章　トワイライトスクールの活動の実態と施設利用
第１節　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第２節　新しい試みとしてのトワイライトスクール ・・・・ 86
第３節　トワイライトスクールの活動実態 ・・・・・・・・・ 98
３－３－１　トワイライトスクールの特徴 ・・・・・・・・ 98
３－３－２　トワイライトスクール実施校の類型化 ・・・ 105
第４節　トワイライトスクールの実態調査 ・・・・・・・・・ 111

３－４－１　調査内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
３－４－２　活動実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
３－４－３　利用施設　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
３－４－４　活動と利用施設の評価　・・・・・・・・・・・・ 133
３－４－５　施設の類型と評価構造の関係　・・・・・・・・ 142
３－４－６　管理の実態と問題点　・・・・・・・・・・・・・ 145
第５節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156

第４章　学校外活動の比較と施設の計画条件
第１節　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 158
第２節　名古屋市の学童保育の施設利用環境　・・・・・・・ 160
４－２－１　学童保育の実施状況　・・・・・・・・・・・・・ 160
４－２－２　施設利用環境調査内容　・・・・・・・・・・・・ 163
４－２－３　活動と利用施設　・・・・・・・・・・・・・・・ 170
４－２－４　活動と施設の評価　・・・・・・・・・・・・・・ 172
第３節　愛知県の学校外活動の施設利用環境　・・・・・・・ 174
４－３－１　調査対象地の選定　・・・・・・・・・・・・・・ 174
４－３－２　施設利用環境調査内容　・・・・・・・・・・・・ 183
４－３－３　活動と利用施設　・・・・・・・・・・・・・・・ 198
４－３－４　活動と施設の評価　・・・・・・・・・・・・・・ 201
第４節　学童保育及び愛知県の学校外活動とトワイライト
スクールとの比較　・・・・・・・・・・・・・・・ 203
４－４－１　学童保育とトワイライトスクール　・・・・・・ 203
４－４－２　愛知県の学校外活動とトワイライトスクール・ 205
第５節　学校外活動施設の計画条件・・・・・・・・・・・・・ 207
第６節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 212
参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217

第５章　結論
第１節　結論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 220

謝辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228

第１章　序論

第１節　研究の背景

（１）はじめに

「子どもの生活環境はめまぐるしく変化し続けている。」という言葉をよく耳にする。この言葉は、単に子どものおかれている状況を表現しているわけではない。私たち大人が、もう少し自覚を持って生活せよ、と警鐘を鳴らしているものと、捉えなければならない。なぜなら、子どもは自らの意志を持ってその生活環境を作り上げたわけではなく、子どもは環境に応じて成長していかざるを得ないからである。子どもは、大人社会が作り上げた生活環境に強制的に入れられて生活していくことを、常に念頭におかなければならない。

（２）子どもの生活環境の変化

日本の経済発展にともなう社会の急激な成長は、私たちの生活環境を大きく変えた。この変化は居住する全ての人々に、生活面のみならずさまざまな影響を与えている。とりわけ子どもたちを取り巻く環境の変化は、学校におけるいじめや学級崩壊、さらに凶悪化する少年犯罪等に代表される問題行動の一因ともなっている。本来これらは社会全体の問題として提起されるべきである。しかし、メディアなどを通じて一般に配信される情報では子ども特有の一時的な問題としてとらえられている。

子どもたちは以前に増して「受験」中心の生活を送っており、勉強の本質や成長のプロセスからますます乖離し、人格の形成に重要な体験の蓄積を日常生活で行うことが困難となっている。このような状況を脱するために、社会全体が子どもたちの生活する環境を見つめ直す必要がある。

子どもの健全な成長を考えるという議論の中で、「ゆとり」というキーワードがあげられている。平成４年度から実施された学校週５日制は、この流れに沿った内容である。この「ゆとり」の時間を「受験」のために使うのではなく、生活に根ざした体験的なプログラムを子どもたちに与えてやることが重要である。

（３）「よこ」と「たて」の関係

子どもの教育を「学校」「家庭」「地域」の三者が互いに協力して行うことの重要性は今日共通の認識であろう。「学校」は子どもの生活時間のなかで、大きな割合を占めている。

学校で作られる人間関係は、先生との関係と同学年の友達という「よこ」のつながりが中心の閉鎖的な関係である。子どもは、学業など狭い評価基準のみで自分の位置を認識し、自己の存在を確認することとなる。

しかし、学校をはなれ社会の中で生活していくとき、異年齢や異世代との「たて」の関係の中にいる。

従来は生活の基盤を守るための住民同士のつながりの中に子どもたちも位置づけられて、「たて」社会のなかに子ども自身が自己の存在を認識していた。しかし今日、核家族化や1世帯あたりの子どもの数の減少、就業形態の変化により地域と家庭の接点が減少している。このため、子どもが「たて」の関係を意識しづらい環境にある。

選択の幅が広く自由度の高い「たて」の人間関係を構築し子どもに居場所を与えることが、学級崩壊など子どもの社会問題に対する一つの解決策になる。そのために地域における異世代間交流や子ども社会の形成を促進して、地域が本来もっていた教育の力を再生してやることが重要である。

（4）学校外活動の推進

地域における「たて」の関係を構築するために、子どもと大人が同一の体験を共同して行う場を設けることが必要である。その一つとして「学校外活動」を取り上げる。本研究で「学校外活動」とは、子どもが「地域」の中で大人と共に行う体験的な活動をいう。学校外活動への参加は義務ではないため、活動内容を選択して、子どもが自発的に参加している。また、子どもと地域社会との関係を復活させる試みでもある。さらに、「学び」の場を地域に作ることにより、学校へ過度の依存を防ぎ、地域社会との協力関係を作ることにもなる。地域社会の構成員である子どもが、人々とのかかわりの中で、地域文化を継承、創造、展開することは、子どもにとって貴重な体験である。

このように子供たちの自発的な活動が中心となっている学校外活動の推進は、「地域」の教育力の回復と、異世代間の積極的な人間関係の構築により、地域社会再生のきっかけとなるといえる。

第２節　研究の目的

子どもの学校外活動は、小中学校における学校週５日制の導入に際し、土曜日における子どもの受け皿づくりの一環として注目をされた。当時の文部省（現在の文部科学省）が、平成４年頃に各都道府県の教育担当部局を通じて活動状況の調査を行っている[参考文献１，２，３]。それまで、子どもの生活環境や子どもの遊び場に関する調査研究はなされていたが、学校外活動が大きく取り上げられることはなかったようである。

研究の背景で述べたとおり、学校外活動は子どもの成長と地域交流に大きな効果が期待できる優れた取り組みであることから、これらの活動がよりよく、継続して行える環境作りを支援していくことが重要であると考えている。

そこで本研究では、建築学的な側面から学校外活動の活動環境を整備するために、学校外活動の現状、新たな取り組みや児童福祉施策などとの関係を明確にし、これらを比較してやることにより、学校外活動の施設の計画条件を明確化することを目的としている。

その手順は以下の通りである。

（１）「子どもの学校外活動の実態と利用施設」を調査し、学校外活動の現状を把握する。

（２）「トワイライトスクールの活動の実態と施設利用」として、新しい取り組みの事例である「トワイライトスクール」の調査から学校外活動のあり方を検討する。

（３）「学校外活動の比較と施設の計画条件」として、児童福祉施策と現在の活動について調査し、（２）で取り上げた活動と施設利用と比較する。さらに、各章で得られた結果を総合し、施設の計画条件を導き出す。

第３節　子どもと学校外活動

（１）学校外活動の種類

学校の授業終了後、子どもはそれぞれの家庭で時間を過ごす。その使い方は様々で、家で過ごしたり、外で友達と遊んだりしている。その一つとして、地域社会で実施されている活動への参加がある。

本研究では、この地域社会で実施されている活動を総称して「学校外活動」と定義する。学校外活動には、①個々の活動内容に興味や関心のある大人達が集まり、非営利で子どもとともに活動を行っているもの、②営利を目的として企業や個人が実施しているもの、③児童福祉を目的で実施されているものがある。これを模式化したものが図１－３－１である。

①非営利で子どもとともに活動するもの

地域における祭礼や子供会、ボーイスカウト、スポーツ少年団といった活動である。親や地域に居住する大人が指導者となり、地域の施設を利用して活動を行っているものである。

②営利を目的とするもの

お稽古事や学習塾といった、企業や個人がある目的を達成するために行うものである。

③児童福祉を目的とするもの

児童福祉施策として、多くの自治体で児童館が整備され、児童館活動として遊びや、遊び場の提供が行われている。また、留守宅児童の支援策として学童保育が実施されている。

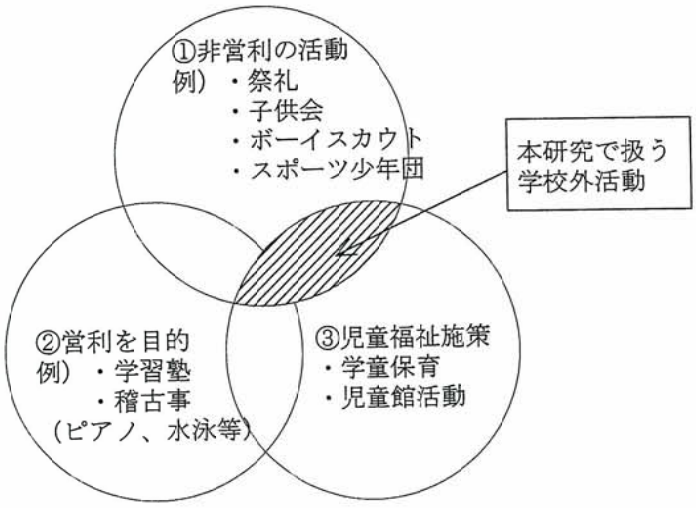


図１－３－１　学校外活動の模式図

（２）本研究の対象とする学校外活動

本研究の対象とする「学校外活動」は、①非営利で子どもと共に活動するもののうち特に活動と施設が密接に関係しているものと③児童福祉施策として実施されている児童館や学童保育の活動の一部が主なものである。

①非営利で子どもと共に活動するものは施設利用の形態から３つに分類できる。１つめは、合唱、工作、神楽や祭囃子といった目的で、主として屋内で活動が行われる文化系のもの。２つめは野球、サッカー、バレーといったスポーツを中心に屋外や体育施設で活動を行っている運動系のもの。３つめは全児童を対象として小学校を拠点とした活動である。

③児童福祉施策として実施されている学校外活動については、全児童を対象として小学校を活動拠点とする活動が、活動内容や活動時間が学童保育と重複し、両者が互いに影響を与えている場合がでてくることから、学童保育について対象とした。

（３）学校外活動の効果

学校外活動には、学校教育では培われない様々な要素が含まれている。地域の住民たちによる異年代間の交流や文化・伝統の継承による地域のアイデンティティの復活があげられる。また、学校教育では行われない様々な学習や体験により、情操を豊かにする事などである。特に１つの活動や目的を通して年齢の上下を超えて助け合うことは、社会性を育む上では大変重要な事である。以前のように子どもが比較的数多く近所に住み、容易に１つの集団を形成できた頃は、集団の中で行動することにより社会性をはぐくみ、また地域には必ず子どもたちを見守る住民の目があった。現代は、子どもの数も少なく、また地域社会と生活が疎遠で住民の目の届かない場所が数多く存在する。そのため学校外活動は数少ない地域交流の機会となっている。

第４節　論文の構成

本研究の構成を以下に示す。

第１章「序論」では、子どもの学校外活動と利用施設に関する研究を行う背景とその目的について述べる。

第２章「子どもの学校外活動の実態と利用施設」では、学校外活動の実態と利用施設について文化系と運動系の活動組織に分けて調査する。調査の結果から学校外活動の全体像を把握する。

調査対象を愛知県全体として、学校外活動にはどのような活動があるかを調査する。また、どのような人々がそこに関わっているのか、またどのくらいそのような活動があるのか等、学校外活動の活動実態を明らかにする。活動実態として、活動目的及び活動内容、活動組織の規模や構成と活動の状況について明確にする。

学校外活動という行為の観点から、どのような施設をどのように利用しているのかを調査する。学校外活動で行われる行為は一定ではなく、子どもと地域と大人との関係において様々な活動が行われる。このため、利用行為の側から施設を捉えた場合、利用方法や対象者等に制約を受ける場合も想定され、活動の参加者に利用施設の現状を評価してもらい問題点を探る。利用施設については、通常利用されている施設、発表や試合に利用する施設、また通常利用施設に対して、立地や利用条件といった施設利用について明らかにする。

さらに活動と施設利用の実態を調査、分析することにより、文化系活動、運動系活動、学校外活動施設の整備の条件について明確化する。

第３章「トワイライトスクールの活動の実態と施設利用」では、名古屋市で実施されているトワイライトスクールについて、学校外活動の新しい取り組みとして捉え、活動の実態と施設利用について調査する。

「トワイライトスクール」という活動は名古屋市が平成９年度から小学校を選定し実施しているもので、順次実施校を増やし市内全域で行われている。子どもが自らの通う小学校で定期的に様々な活動が体験できるため他の自治体においても応用性の高い活動である。近年、大都市やその周辺では子どもの遊び場の減少と遊び場自体の安全性の要求に対し、空き教室

や放課後の小学校を開放し利用する試みは多い。特に東京都や神奈川県では、学校開放と学童保育を融合させたものや、児童館を活用した取り組みも多くみられる。大阪府の「児童いきいき放課後」や千葉県市川市での「ビーイング」など、いろいろな活動内容で多くの人々と一緒に体験する事を通して異学年や世代間の交流を進めていこうとする名古屋市と同様の試みも行われている。しかし、小学校との連携なしでは活動が成立しないなど、実施されている学校数に限りがあるのが現状である。そこでいち早く全市的に取り組みを進めている名古屋市の「トワイライトスクール」をモデルケースとして取り上げた。

まず、トワイライトスクールの類型化を行うと共に特徴を把握し、実施施設の環境を明確化する。トワイライトスクールの活動の実態を、施設の管理者、活動の指導者、子ども、行政の立場から明確化する。さらに、調査の結果を基に、他の自治体への応用性も検討する。

第４章「学校外活動の比較と施設の計画条件」では、学校外活動を推進していく上で、現状に即して活動環境を整える必要があることから、児童福祉施策や愛知県の学校外活動とトワイライトスクールを比較して影響や課題を整理し、学校外活動施設の計画条件を導き出す。

まず、児童福祉施策との関係を探るために、名古屋市における学童保育の実態を調査する。従来より留守宅児童については学童保育が、また子どもの遊び場として児童館の整備が多くの自治体で行われている。これらは活動時間や内容が重複する場合があり両者の区分けが難しくなっているケースが多く見られた。また、現在小学校における子どもの居場所づくりに全てを一本化し、児童館の廃止や縮小が検討される傾向にある。今後の学校外活動を実施する施設のあり方に大きく影響を与えることが予想される。そこで全児童を対象とした活動を行っている名古屋市においては、学童保育を調査の対象として加えることにより、学校外活動の位置づけを明確にする。この結果と、トワイライトスクールと学童保育を比較し両者の影響について考察する。

さらに、学校外活動のよりよいあり方を検討するために、愛知県内の他の市町村で実施されている学校外活動を調査し、これと有効性の高いと考えられるトワイライトスクールとを比較することで、施設整備の方向性を検討する。

これらの結果から、子どもの学校外活動のより良い環境について考察し、

学校外活動施設の計画条件を導き出す。

第５章「結論」では、本研究における研究成果の概要を述べる。

研究の構成を、図１－４－１に示す。

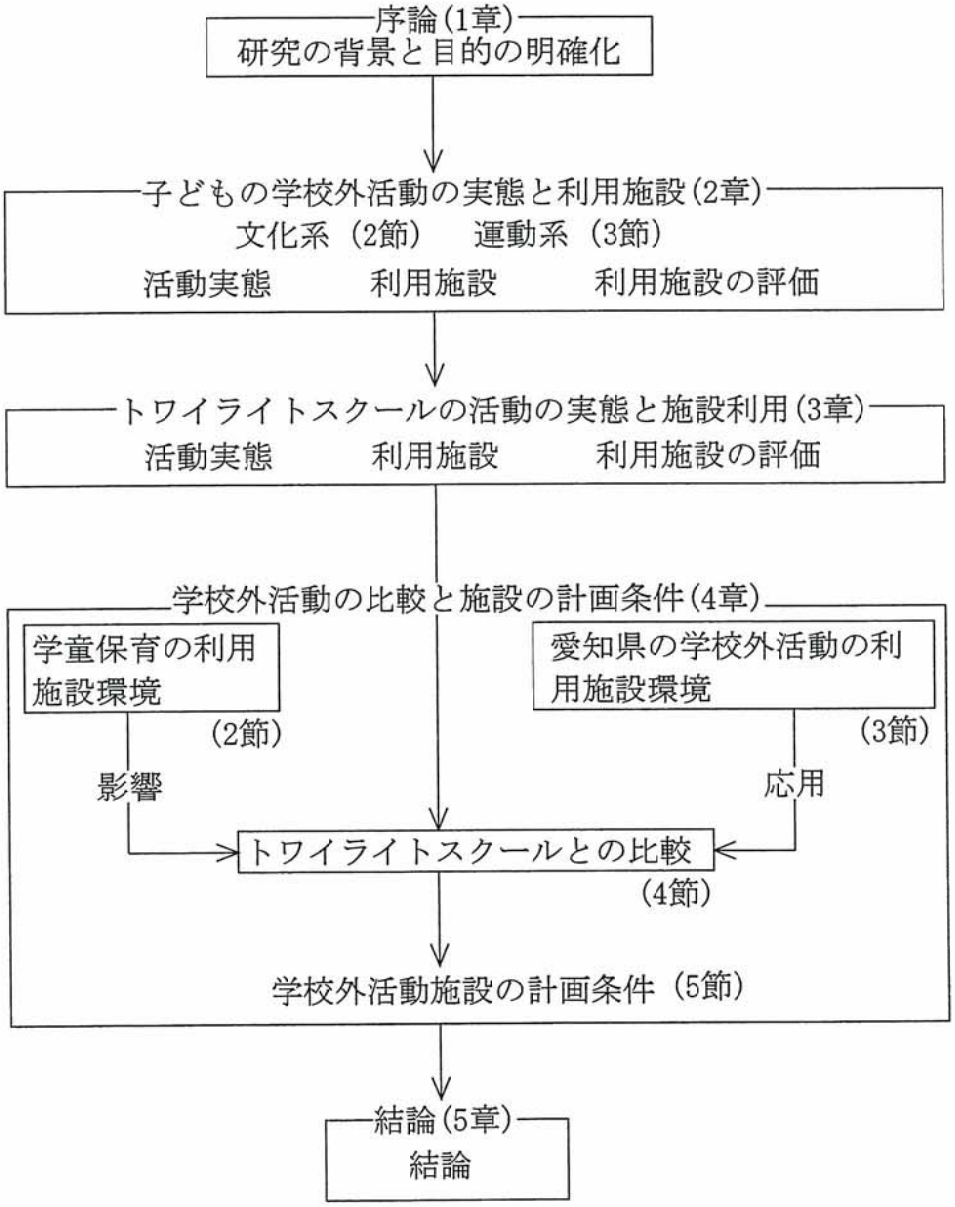

序論(1章)
研究の背景と目的の明確化
子どもの学校外活動の実態と利用施設(2章)
文化系（2節）　運動系（3節）
活動実態　利用施設　利用施設の評価
トワイライトスクールの活動の実態と施設利用(3章)
活動実態　利用施設　利用施設の評価
学校外活動の比較と施設の計画条件(4章)
学童保育の利用施設環境
(2節)
愛知県の学校外活動の利用施設環境
(3節)
影響
応用
トワイライトスクールとの比較
(4節)
学校外活動施設の計画条件（5節）
結論(5章)
結論

図１－４－１　本研究の構成

第５節　既往研究

本研究は、子どもを対象として、利用行為から施設のあり方を導き出すものである。学校外活動という利用行為は、子どもが地域住民の一員として、大人と共に施設を利用することになる。このため、主たる行為者である「子ども」と、活動の場所である「地域施設」に関する視点から、総合的に施設のあり方を検討することが求められる。建築学におけるこれらの既往研究は、「子ども研究」、「地域施設研究」「施設利用における地域類型研究」の３つに分類できる。以下にそれぞれの既往研究について述べる。本研究の位置づけを図１－５－１に示すとともに、既往研究を表１－５－１に示す。

（１）子ども研究

子どもを対象とした研究は、学校を対象とした施設論的な研究と学校外での子ども空間を捉えた研究に分けられる。

さらに学校外については、体験活動、遊び、学童保育の研究に分類することができる。

体験活動に関しては、１９９０年頃に室崎生子らの論文がある。また、遊びに関する研究は１９８０年頃に、仙田満、木下勇らによって体系化されている。

学童保育に関する研究は、空間に関して萩原美智子、北浦かほるらの研究がある。

学校に関する研究は、施設に関して数多くの研究がある。

（２）地域施設研究

地域施設研究は、従来より公民館などの各論的研究が、先学諸氏によって数多くの論文がある。

利用形態に着目した研究として、集会施設の利用行為から、施設需要、要求を解明する研究に桜井康宏のものがある。

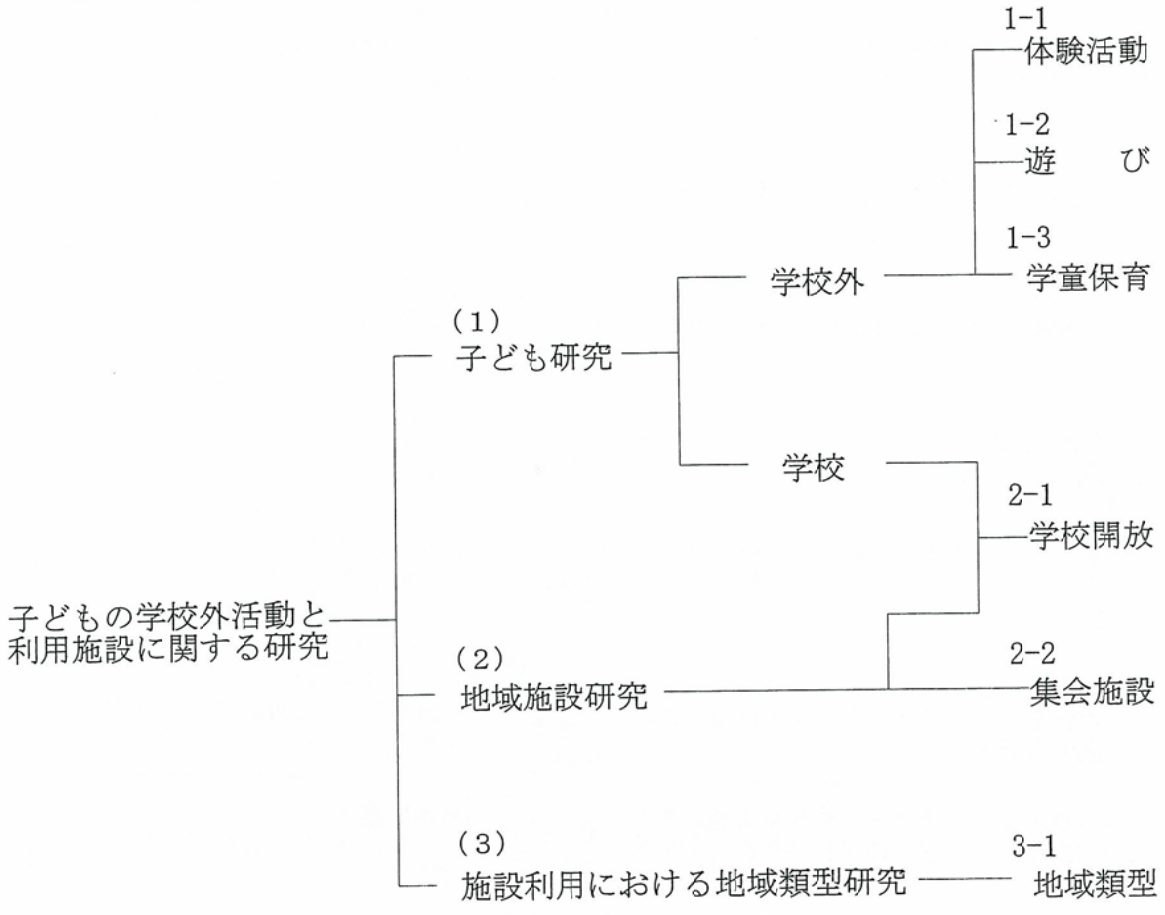
近年学校施設の地域開放の流れをうけ、小学校の地域開放に関する研究が多くみられ、上記子ども研究との中間に位置する研究もみられる。

（３）施設利用における地域類型研究

調査の実施は、利用行為の発生している全数を行うことが望ましいが、

現実的には困難である。そこで利用行為が発生する前提となる居住環境や施設環境を統計的に処理し、傾向の似ている地域を分類して調査を行うことが必要となる。データ収集の基礎となるため、調査対象となる施設にあわせて様々な研究がなされている。

○本研究の位置づけ



※数字は次表における分類を示す。

図１－５－１　本研究の位置づけ

表１－５－１　既往研究

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－1 体験活動	子どもの遊びの成立にかかわる空間の構成要素と性質に関する研究　-京都市内での事例分析から-	室崎生子 市岡朋子	日本建築学会計画系論文集	1989/11	NO.405
		子どもの遊び集団形態からみた空間利用行動に関する研究　-京都市内での事例分析から　その２-	室崎生子 市岡朋子	日本建築学会計画系論文集	1999/4	NO.422
		子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察	倉原宗孝 後藤由紀 日景敏也	日本建築学会計画系論文集	1996/5	NO.483
		子供の空間表象にみる住空間概念の発達	萩原美智子 北浦かほる 増田朋子 宮内美和	日本建築学会計画系論文集	1999/7	NO.521
		空間経験と規模が子供の空間把握に及ぼす影響　―住宅と児童館の比較を通して―	萩原美智子 北浦かほる	日本建築学会計画系論文集	1999/10	NO.524
		個人の成長にみる子供の住空間概念の発達　―２年後の空間表象追跡実験より―	萩原美智子 北浦かほる	日本建築学会計画系論文集	2000/4	NO.530
		子どもの学校外活動組織の実態と施設利用　―子どもの学校外活動と利用施設に関する研究　その１―	櫻木耕史 松本直司 谷口汎邦	日本建築学会計画系論文集	2001/10	NO.548
		子どもの自主活動の展開とスペースの使用状況　―フリースクールの建築計画に関する研究　(1)―	垣野義典 須田眞史 初見学 長澤泰	日本建築学会計画系論文集	2002/11	NO.561
		トワイライトスクールの活動実態とその応用性　―子どもの学校外活動と利用施設に関する研究　その２―	櫻木耕史 松本直司	日本建築学会計画系論文集	2005/4	NO.590
		子どもの課外活動組織と利用施設に関する研究	櫻木耕史 松本直司	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p401
		子どもたちの体験活動を通した住民参加のまちづくりに関する考察（意識づくりから組織・モノづくりへ）こどもまちかど解決隊（’96）の活動	倉原宗孝 後藤由紀	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	F-1, p407
		子ども達の体験活動を通した住民参加のまちづくり促進に関する考察　―こどもまちかど解決隊（’94～’97）の試みを通して―	後藤由紀 倉原宗孝	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	F-1, p313

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－1 体験活動	学校外活動組織における施設利用　―子どもの学校外活動組織における施設利用に関する研究：その１―	藤原直樹 松本直司 櫻木耕史	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p347
		学校外活動組織における施設利用圏に関する研究　―子どもの学校外活動組織における施設利用に関する研究：その２―	櫻木耕史 松本直司 藤原直樹	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p349
		愛知県スポーツ少年団の施設利用について　―子どもの学校外活動組織における施設利用に関する研究その３―	櫻木耕史 松本直司 谷口汎邦	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p235
		子どもの利用圏域と図書館像 ― 子どもの居場所としての地域施設利用―	大前裕樹 今井正次 中井孝幸 熊谷健太郎	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p447
		愛知県スポーツ少年団の利用施設に関する研究　―子どもの学校外活動組織と利用施設に関する研究：その4―	櫻木耕史 松本直司 谷口汎邦	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p149
		愛知県の地域類型に基づく子どもの学校外活動と利用施設の実態調査　―子どもの学校外活動組織における施設利用に関する研究：その5―	吉野宏 松本直司 谷口汎邦 櫻木耕史 勝崎香奈	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p173
		施設整備の特徴と子どもの学校外活動における利用施設の関係　―子どもの学校外活動組織における施設利用に関する研究：その6―	櫻木耕史 松本直司 谷口汎邦 勝崎香奈 吉野宏	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p175
		学校施設を利用した子どもの学校外活動の実態と施設管理　－子どもの学校外活動組織と施設利用に関する研究　その７－	櫻木耕史 松本直司 吉野宏	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p497
		管理者・指導者からみた子どもの学校外活動施設の整備要件－子どもの学校外活動組織と施設利用に関する研究　その８－	吉野宏 松本直司 櫻木耕史	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p499

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－2 遊び	あそび環境のデザイン	仙田満	鹿島出版会	1987/11	
		こどものあそび環境の構造の研究-あそび場の構造の研究	仙田満 宮本五月夫	日本建築学会計画系論文集	1981/5	NO.303
		公園利用の児童の遊びと居住地環境との関連について	桂久男 青木恭介	日本建築学会計画系論文集	1982/1	NO.311
		戦後農村地域の子供の遊びと遊び場の変遷過程に関する調査研究　-千葉県野栄町東栢田集落のｹｰｽ･ｽﾀﾃﾞｨｰ-	中村攻	日本建築学会計画系論文集	1982/11	NO.321
		児童の遊び生活における遊び相手の分布について	桂久男 青木恭介	日本建築学会計画系論文集	1983/4	NO.326
		児童の遊び生活における遊び場の分布について	桂久男 青木恭介	日本建築学会計画系論文集	1983/8	NO.330
		児童の遊び生活における遊び場の分布構造について	桂久男 青木恭介	日本建築学会計画系論文集	1984/9	NO.343
		子どもの立場からの遊び場所の分類　-遊び活動における子どもと場所の意味的関連性から-	池田豊彦	日本建築学会計画系論文集	1984/12	NO.346
		都市との比較からみた農村の児童の自然との接触状況　　-児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究　その１-	木下勇	日本建築学会計画系論文集	1992/1	NO.431
		三世代への聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容　-児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究　その２-	木下勇	日本建築学会計画系論文集	1993/8	NO.450
		あそび環境要素からみた計画集合住宅地におけるこどものあそび構造	谷口新 仙田満 矢田努 水谷考治	日本建築学会計画系論文集	1999/4	NO.518
		計画集合住宅地における日当り・日影とこどものあそび場に関する考察	谷口新 仙田満 天野克也 梅干野晁	日本建築学会計画系論文集	2000/5	NO.531
		計画集合住宅地のこどものあそび場年間利用と住区空間におけるあそび利用分布の特性	谷口新 仙田満 天野克也 梅干野晁	日本建築学会計画系論文集	2000/12	NO.538

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－2 遊び	こどものあそび空間発生性に関する研究 ―大都市市街地におけるこどものあそび環境実態調査データにもとづく分析―	三輪律江 仙田満 矢田努	日本建築学会計画系論文集	2001/1	NO.539
		市街地におけるこどものあそび空間発生量の予測に関する研究　―こどものあそび環境実態調査データの重回帰分析より―	三輪律江 仙田満 矢田努	日本建築学会計画系論文集	2001/5	NO.543
		「子どもの遊び」にみる「生きた環境」の意味に関する研究　―遊びの志向性と遊び場所の関係について―	粟原知子 熊澤栄二	日本建築学会計画系論文集	2002/8	NO.558
		計画集合住宅地におけるこどものあそび空間と街区の特徴	谷口新 仙田満 矢田努 水谷考治	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-2, p199
		冬季日当りと夏季日影からみた計画集合住宅地におけるこどものあそび場計画に関する考察	谷口新 天野克也 仙田満 梅干野晃	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-2, p219
		居住地域内屋外における児童のあそび場確保のパターンと選択性　―都市既成住宅地における児童のあそび場確保に関する研究　その1	三澤夏美 藍澤宏 斎尾直子 尹榮三 後藤匠	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p151
		児童のあそび場確保と大人のあそび場認識との相違　―都市既成住宅地における児童のあそび場確保に関する研究　その2	斎尾直子 藍澤宏 尹榮三 後藤匠 三澤夏美	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p153
	1－3 児童館	空間経験と規模が子供の空間把握に及ぼす影響：住宅と児童館の比較を通して	萩原美智子 北浦かほる	日本建築学会計画系論文集	1999/10	NO.524
		児童館の施設機能の現状について	木村信之	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p393
		小学生にみる児童館の利用特性	萩原美智子 北浦かほる	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p395
		都心部と周辺部の児童館の規模・配置計画と現状	菊地洋之 湊谷浩 小林千穂子 石川允	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	F-1, p501

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－3 児童館	都心部と周辺部の児童館の圏域と機能	湊谷浩 菊地洋之 小林千穂子 石川允	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	F-1, p503
		民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究	三矢勝司 高橋博久	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p59
		愛知県児童総合センターにおける利用実態調査　児童施設における利用行動に関する研究	中山豊 仙田満 谷田真	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p337
		児童館関連施設の利用形態と空間に関する研究　―相模原市におけるケーススタディ―	丸山省吾 仙田満 矢田努	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p339
		東京23区における児童館の整備状況　―児童館の複合化に関する研究―	中澤佐余子 広田直行 若木滋	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p341
		子どもの生活空間に関する調査研究　―児童会館の利用実態について―	加藤慶子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p343
		世田谷区児童館の地域開放に関する要件	堀覚 広田直行 若木滋	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p151
		子供の生活空間に関する調査研究　＝児童会館の施設運営について＝	加藤慶子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p157
		児童館関連施設の施設内容についての研究	丸山省吾 仙田満 矢田努 井上寿	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p159
		地域の遊び拠点としての児童館の役割に関する研究　―神戸市における調査事例―　その１：来館状況	瀬渡章子 田中智子 梶木典子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	F-1, p777
		地域の遊び拠点としての児童館の役割に関する研究　―神戸市における調査事例―　その２：遊び実態	梶木典子 瀬渡章子 田中智子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	F-1, p779
		世田谷区立山野児童館の利用実態調査の意義　（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査―その１）	堀部幸晴 佐藤直樹 関沢勝一 大村虔一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p203

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－3 児童館	世田谷区立山野児童館の遊び空間に対する意識調査　（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査―その２）	佐藤直樹 堀部幸晴 関沢勝一 大村虔一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p205
		世田谷区立山野児童館の行事とその空間の役割　（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査―その３）	三浦幸雄 堀部幸晴 佐藤直樹 関沢勝一 大村虔一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p207
		大分県における小型児童館の利用特性に関する基礎的研究	中村堅志 鈴木義弘 中武啓至 石津史郎	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p209
		川崎市こども文化センターの貸し出し利用について　児童館に関する建築計画的研究 ―その１―	福住茂久 渡辺富雄 若色峰郎	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p211
		子どもの行為と家具配置から見た平面評価　―学童保育施設の計画に関する研究	中津慶介 今井正次	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p137
		小型児童館の利用状況及び平面構成による類型化　―放課後児童利用施設の建築計画に関する研究　その1	石津史郎 鈴木義弘 中武啓至 月川一成	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p139
		小型児童館の平面構成類型に基づく行動特性の基礎的分析　―放課後児童利用施設の建築計画に関する研究　その2	月川一成 鈴木義弘 中武啓至 石津史郎	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p141
		世田谷区の児童館における空間構成の変遷に関する研究　―世田谷都市デザイン行政における児童館施設への影響	楯石和之 堀部幸晴 佐藤直樹 関澤勝一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p143
		運営方法から見た学童保育の実態と特性プレイベース・コミュニティベースとしての学童保育の可能性に関する研究（1）	永川靖洋 横山俊祐 玉井伸幸	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p155
		学童保育が子供及び地域にもたらす可能性　プレイベース・コミュニティベースとしての学童保育の可能性に関する研究2	玉井伸幸 横山俊祐 永川靖洋	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p157

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－3 児童館	相模原市内のこどもセンターの使われ方に関する予備調査	平本恵理 水嶋克典 糸井孝雄	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p163
		学童保育施設における児童の行為と領域形成に関する研究　名古屋市の学童保育所を対象として	田中真悟 清水裕之 有賀隆 大月淳	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	E-1, p665
		東京都区内の公立児童館に関する研究 －建設期からみた施設空間の質について－	大高真紀子 定行まり子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p145
		学校週5日制導入と今後の児童館計画に関する研究　－児童および保護者の意識－	五十嵐宜子 定行まり子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p147
		室の分離段階からみた学童保育所の保育室計画に関する研究	谷村真理 今井正次	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p149
		学童保育施設における児童の行動に関する研究　＝設置形態の異なる施設の比較考察＝	松橋圭子 大原一興 小滝一正	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p151
		「放課後児童健全育成事業」に基づく学童保育サービス及び学童保育施設の実態に関する研究	富田啓介 三浦研	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p153
		学校施設を利用した学童保育施設の整備状況と利用実態　放課後における児童の学校施設利用に関する研究　その2	山口勝巳	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p155
		神奈川県下学童保育施設の運営と利用実態に関する調査	齋藤学 山崎俊裕	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p157
		学童保育所に求められる空間条件に関する研究大阪市内の学童保育所の事例調査より	塚田由佳里 小伊藤亜希子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	E-1, p159
		開設・運営からみた学童保育の実態と特性　プレイベース・コミュニティベースとしての学童保育の可能性に関する研究3	小池孔子 横山俊祐 玉井伸幸 武田直人	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p501
		空間特性からみた「地域型」学童保育の評価　プレイベース・コミュニティベースとしての学童保育の可能性に関する研究 4	武田直人 横山俊祐 玉井伸幸 小池孔子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p503
		学童保育所の保育室空間における分節に対する意識とその有効性	谷村真理 今井正次	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p505

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
1 子ども研究	1－3 児童館	神奈川県下学童保育施設各室空間の使われ方と周辺施設利用について	齋藤学 江野口重人 山崎俊裕	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p507
		墨田区学童保育施設の運営・設置形態と利用実態に関する調査	江野口重人 山崎俊裕	日本建築学会大会学術講演梗概集	2004	E-1, p509
		東京都における「地域子ども教室推進事業」による小学校の利用状況　-放課後における児童の学校施設利用に関する研究 その3-	杉山正樹 山口勝巳	日本建築学会大会学術講演梗概集	2005	E-1, p155
		学童保育施設における活動機能と平面構成	岩渕千恵子 宮本文人	日本建築学会大会学術講演梗概集	2005	E-1, p445
		神奈川県央・湘南地区における学童保育施設の特性と生活行動場面の展開について	小島啓 江野口重人 山崎俊裕	日本建築学会大会学術講演梗概集	2005	E-1, p447
		共働き・ひとり親家庭における子どもの放課後の生活に関する研究　大阪市・神戸市内の民設型学童保育所を利用する家庭を対象に	塚田由佳里 小伊藤亜希子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2005	E-2, p189
2 地域施設研究	2－1 学校開放	校庭開放における運営方式の機能と利用圏形成メカニズム－学校開放による公共スポーツ施設の整備条件に関する研究 その１－	青木正夫 上和田茂	日本建築学会計画系論文集	1981/12	NO. 310
		校庭開放における＜複線的運営－重層的配置＞方式の有効性　－学校開放による公共スポーツ施設の整備計画に関する研究　その２－	青木正夫 上和田茂	日本建築学会計画系論文集	1983/7	NO. 329
		小学校における余裕教室の活用実態に関する研究	李志民 竹下輝和 牧敦司 志賀勉 金尚本	日本建築学会計画系論文集	1996/6	NO. 484
		公立小・中学校と地域公共施設の複合化事例における建築計画と管理・運営の実態　―東京都区部についてのケーススタディー―	上野淳 本野純	日本建築学会計画系論文集	1997/3	NO. 493
		居住地域における公共生涯学習施設の機能分担と施設評価に関する研究　―学校施設開放を含めた生涯学習空間計画のあり方―	斎尾直子 藍澤宏 吉田健二	日本建築学会計画系論文集	1999/3	NO. 517

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
2 地域施設研究	2－1 学校開放	公立小中学校の余裕教室を活用した高齢者福祉施設の複合化の実態と課題　―デイサービスセンターを中心とした複合事例―	本庄宏行 三橋伸夫 藤本信義	日本建築学会計画系論文集	1999/7	NO. 521
		公立小・中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究	斎尾直子 藍澤宏 土本俊一 村山直樹	日本建築学会計画系論文集	1999/9	NO. 523
		公立小・中学校と地域社会との複合化水準とその計画要件に関する研究　―学校と地域との「空間の共用化」及び「活動の融合化」を視点として―	斎尾直子 藍澤宏 土本俊一	日本建築学会計画系論文集	2000/4	NO. 530
		学校と地域施設の相互利用と複合化に関する研究　実態調査指標による学校教師・利用者意識の数量化分析	増田成政 渡邊昭彦 上田哲嗣	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p99
		東京都板橋区の地域特性からみた小学校の余裕教室の利用に関する基礎的研究（小学校の施設再整備に関する研究　その２）	村田逸平 関澤勝一 岡田真人	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p267
		学校開放における施設開放状況と利用意向　公立小中学校の地域施設としての役割とその評価に関する研究・その１	東條敦子 藍澤宏 鈴木直子 吉田健二	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p311
		公立小中学校の地域施設としての評価 公立小中学校の地域施設としての役割とその評価に関する研究・その２	吉田健二 藍澤宏 鈴木直子 東條敦子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p313
		行政及び公立小中学校の機能複合化に対する基本方針の比較　―公立小中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その１―	斉藤亮司 藍澤宏 村山直樹 鈴木直子 土本俊一	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p383
		公立小中学校における機能複合化の現状と今後の課題　―公立小中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その２―	土本俊一 藍澤宏 鈴木直子 村山直樹	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p385

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
2 地域施設研究	2－1 学校開放	公立小・中学校と市町村行政及び地域生涯学習施設との連携・協力のあり方　―公立小・中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その３―	土本俊一 藍澤宏 斎尾直子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p215
		公立小・中学校と地域社会との機能複合化水準の検討　―公立小・中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その４―	斎尾直子 藍澤宏 土本俊一	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p217
		公立小学校の敷地内における自然・農空間の構成と活用状況　公立小学校及び保育園・幼稚園における自然・農空間の構成とその活用に関する研究－１	後藤匠 藍澤宏 斎尾直子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p133
		自然・農空間の活用特性からみた公立小学校の類型化　公立小学校及び保育園・幼稚園における自然・農空間の構成とその活用に関する研究－２	藍澤宏 後藤匠 斎尾直子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p135
		公立小・中学校と地域住民との空間の共同利用の実態と段階性　公立小・中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その５	斎尾直子 藍澤宏 土本俊一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p169
		公立小・中学校の単位空間ごとにみた地域との共同利用の方向性　公立小・中学校の地域施設としての機能複合化に関する研究　その６	土本俊一 藍澤宏 斎尾直子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-1, p171
		児童の活動時間別にみた小学校敷地内の屋外空間の使われ方　―児童の活動実態からみた小学校の屋外空間整備に関する研究　その1	尹榮三 藍澤宏 斎尾直子 後藤匠 三澤夏美	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p61
		小学校敷地内・外の屋外空間での児童の活動パターンと空間活用　―児童の活動実態からみた小学校の屋外空間整備に関する研究　その2	後藤匠 藍澤宏 斎尾直子 尹榮三 三澤夏美	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p63

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
2 地域施設研究	2-2 集会施設	公民館の施設機能について　-地域教育関連施設計画に関する研究(1)-	若木滋 浅野平八	日本建築学会計画系論文集	1983/8	NO. 330
		生活時間と階層的視点から見た余暇性向とグループ活動参加の動向　-集会関連施設の配置計画に関する研究　その2-	桜井康宏	日本建築学会計画系論文集	1985/3	NO. 349
		一心型都市構造における市域対象集会関連施設の利用圏域構造　-集会関連施設の利用圏域構造に関する研究-	桜井康宏	日本建築学会計画系論文集	1985/7	NO. 353
		余暇生活のグループ化傾向と住様式・住意識の連関　-集会関連施設の需要構造論に関する基礎的研究-	桜井康宏 城谷豊	日本建築学会計画系論文集	1986/3	NO. 361
		グループ活動類型別にみたグループの性格および活動形態と集会関連施設との対応関係　-集会関連施設の配置計画に関する研究 その4-	桜井康宏	日本建築学会計画系論文集	1986/4	NO. 362
		余暇生活グループ化の展開過程と施設要求の連関に関する事例的研究　-集会関連施設の需要構造論に関する基礎的研究-	桜井康宏	日本建築学会計画系論文集	1987/1	NO. 371
		地域集会施設の圏域設定-首都圏市区町村調査による実証的研究-	浅野平八 若木滋	日本建築学会計画系論文集	1987/6	NO. 376
		集会関連施設の段階構成と室構成　-集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究-	桜井康宏	日本建築学会計画系論文集	1989/4	NO. 398
		余暇生活グループ化の展開過程からみた大都市コミュニティセンターの意義（名古屋市におけるケーススタディ）　-集会関連施設の施設需要論に関する基礎的研究-	桜井康宏 尾崎正治	日本建築学会計画系論文集	1996/1	NO. 479
		都市居住高齢者の生活特性と余暇関連施設の利用特性について　-都市居住高齢者の地域施設利用構造に関する研究　その2-	浅沼由紀 天野克也 谷口汎邦	日本建築学会計画系論文集	1997/2	NO. 492
		地域活動の活性化からみた地域施設計画の評価に関する研究	智原聖治 横山俊祐	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p427
		地域生涯学習における行政の推進整備目標と活動事業の現況　市町村における地域生涯学習の活動支援方向と住民要望に関する研究～その1	芦川弓 藍澤宏 鈴木直子 西口有紀	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p437

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
2 地域施設研究	2－2 集会施設	地域生涯学習における活動状況と住民要望の対応　市町村における地域生涯学習の活動支援方向と住民要望に関する研究～その２	西口有紀 藍澤宏 鈴木直子 芦川弓	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p439
		地域生涯学習における市町村が行う活動支援の方向性　市町村における地域生涯学習の活動支援方向と住民要望に関する研究～その３	鈴木直子 藍澤宏 西口有紀 芦川弓	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	E-1, p441
		市町村の生涯学習推進におけるネットワーク効果に関する研究　居住地域における生涯学習空間整備に関する研究　その１	鈴木直子 藍澤宏 西口有紀	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p359
		地域住民の生涯学習活動需要からみた空間整備に関する研究　居住地域における生涯学習空間整備に関する研究　その２	鈴木麻衣子 藍澤宏 鈴木直子 東條敦子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p361
		地域住民の生涯学習活動と施設側の活動機会提供に関する研究	川崎佳代子 藍澤宏 斎尾直子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	E-1, p195
		居住地域に対する住民の意識及び評価の特徴 ― 地域資源の利活用による住民主体の地域づくりに関する研究 その１―	山田和臣 藍澤宏 斎尾直子 斎藤亮司	日本建築学会大会学術講演梗概集	2000	E-2, p469
		地区公民館の建築的変化と現状　―都市における地域活動拠点と施設運営に関する研究・その6	粟村仁視 無漏田芳信 酒井要	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	E-1, p379
		都市部の地域社会における住民の関心と人間関係　―地域社会の自治組織形成に関する研究　その1	高橋尚子 藍澤宏 鈴木麻衣子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	F-1, p371
		都市部における地域社会の機能と住民の役割　―地域社会の自治組織形成に関する研究　その2	鈴木麻衣子 藍澤宏 高橋尚子	日本建築学会大会学術講演梗概集	2001	F-1, p373

内容		タイトル	著者 研究者	出版社	出版年、 掲載年/月	巻、頁
3 施設利用における地域類型研究	3－1 地域類型	地域生涯学習活動からみた市町村の類型化に関する研究（その１　地域資源を利用した地域学習）	藍澤宏 鈴木直子 西口有紀	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p403
		地域生涯学習活動からみた市町村の類型化に関する研究（その２　整備状況からみた市町村類型）	鈴木直子 藍澤宏 西口有紀	日本建築学会大会学術講演梗概集	1996	E-1, p405
		地域施設整備の動向からみた広域市町村圏の類型化　「広域」の概念からみた地域施設計画に関する基礎的研究　その１	森下克也 今井正次 中井孝幸 丁圓 永田麻由子	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p13
		地域特性からみた地域施設整備の経年的推移　「広域」の概念からみた地域施設計画に関する基礎的研究　その２	丁圓 今井正次 中井孝幸 永田麻由子 森下克也	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p15
		地域施設の集中・分散配置からみた施設サービスと施設利用　「広域」の概念からみた地域施設計画に関する基礎的研究　その３	永田麻由子 今井正次 中井孝幸 丁圓 森下克也	日本建築学会大会学術講演梗概集	1998	E-1, p17

〈参考文献〉

１．学校外活動推進事業の手引き　愛知県教育委員会　平成７年２月
２．学校５日制の解説と事例　文部省　１９９２年６月
３．学校５日制に対応した学校外活動の充実のための取り組みに関する事例集　文部省　１９９１年
４．学校５日制でなにが問題か　少年少女組織を育てる全国センター編　１９９２年　青木書店
５．変貌する地域社会の生活と教育　中嶋明勲・渡辺安男編著　１９９１年６月　ミネルバ書房
６．あそび環境のデザイン　仙田満著　１９８７年１１月　鹿島出版会
７．子ども世界の地図　寺本潔著　１９８８年１０月　黎明書房

第２章　子どもの学校外活動の実態と利用施設

第１節　はじめに

本章では学校外活動とはどのような活動であるかその全体像を明らかにする。愛知県全体を調査対象として、学校外活動組織の活動目的や活動内容等の活動組織と、利用施設の実態について調査、分析することにより、その活動実態と施設利用を明確にする。

（１）学校外活動の把握

学校週５日制導入に伴い、学校外活動環境を整備する基礎的資料を収集するため、平成４年から３カ年にわたり学校外活動の事例調査が愛知県教育委員会によって実施された。その調査結果が愛知県教育委員会編「地域少年少女サークル活動の手引き、－平成4年度地域少年少女サークル活動促進事業－」(参考文献１)により示された。この調査では、各市町村において行われている様々な活動が紹介されている。

また、「スポーツ少年団」というスポーツを目的とした組織が長年地域に根付いて活動をしている。スポーツ少年団は、生涯スポーツを目的としてその普及を図るために活動を行っている全国組織である。その主体である日本スポーツ少年団は、1962年に財団法人日本体育協会が創設した歴史あるスポーツクラブである。組織としては日本スポーツ少年団の下に各県ごとのスポーツ少年団が組織されており、さらに実際に活動を行っている組織がその下に所属している。一定の要件を満たす活動組織は各県の体育協会へ登録することによりスポーツ少年団として活動を行うことができる。スポーツ少年団の状況については財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団編「平成9年度スポーツ少年団育成事業報告書 スポーツ少年団年鑑」(参考文献５)に紹介されている。

（２）学校外活動の実態調査

学校外活動を調査するにあたり、建築学的観点から特に施設との関わりの深い活動を選定した。また、活動目的によって施設利用方法が大きく異なるため、文化系と運動系の活動を分けて調査を行うこととした。

文化系学校外活動については、「合唱」や「演劇」などの活動を行っている組織について愛知県の調査によって明らかになっている活動組織を対象として行った。

運動系学校外活動については、愛知県体育協会に平成１０年度に登録の

あったスポーツ少年団を対象として調査を実施した。

（3）本章の構成

第1節では、本章の目的について述べる。

第2節では文化系活動組織について調査分析をおこない活動実態と利用施設について述べる。

第3節では運動系活動組織について調査分析をおこない活動実態と利用施設について述べる。

第4節では第2節、第3節の結果から学校外活動の活動実態と整備の条件について述べる。

第２節　文化系活動と利用施設

２－２－１　調査内容

学校外活動は、どのような環境で、どんな内容が実施されているのかその実態を把握する。本節では文化系の学校外活動組織として、主に合唱などの文化的な活動、発明、レクリエーションといった活動を行っているものを対象に調査を実施する。また、施設を利用している場合は、その施設に関する評価を求め、施設利用に関する問題点についても考察する。調査は、活動参加者全員とすることが望ましいが、全体像を把握することを優先するために、各活動組織の代表者に対して行った。

調査目的：文化系学校外活動組織の実態を把握するため、活動組織、利用施設、利用施設の評価、利用施設に対する満足度、施設選択の重点項目、問題点、要求点を明確にする。

調査対象：・調査対象組織

１年以上の活動実績を持ち、平成４年度に愛知県に報告のあった文化系の学校外活動組織１０４団体

・回答者

学校外活動全般に関する事項及び施設の利用に対する評価をしてもらうために、活動を最も把握していると思われる代表者１名に対して回答を求めた。

アンケート調査の仮説と調査の構成を表２－２－１に示す。

表２－２－１　アンケートの仮説と調査の構成

仮説	アンケート項目				
			現状	評価	要望（問題点や意見など）
・活動内容の種類 ・指導者の確保 ・参加人数が少ない	活動	形態	活動内容、発足年、運営母体、運営資金、活動回数	活動環境	
		組織	参加者数、指導者数	指導環境	
・施設（活動場所）の不足 ・子どもの利用に向いていない	施設	屋内	利用施設の名称、種類、施設の広さ、天井高さ、窓の有無、床材料、備品、設備、活動時の姿勢	交通の便、距離、位置、代替性、選択性、駐車場、施設の広さ、汚せるか、明るさ、雰囲気、掃除の容易さ、遮音性、騒げるか、新しさ、電気設備、音響機器、照明機器、視聴覚機器	施設確保に関する重点項目
		屋外	場所の種類、広さ、特徴、備品	交通の便、距離、位置、代替性、選択性、駐車場、施設の広さ、明るさ、雰囲気、騒げるか	
・施設確保の難しさ ・活動報告の重要性	運営		活動記録、施設確保、利用料金の支払い	利用料金、許可の出やすさ、苦情の有無	
上の項目の他、団体名称、問題点を自由に記述してもらう					

調査方法：愛知県全体を調査対象としてアンケート調査を実施するため、代表者に対して返信用封筒を同封の上郵送にて調査用紙を配布し、郵送にて返却を求めた。

調査期間：平成７年９月１０日～平成７年１０月１０日の１ヶ月間

回収状況：配布総数１０４、回答数７５（回収率７２．１％）

有効回答６９（平成６年度に活動していたものを有効回答とした）

回収状況を図２－２－１に示す。

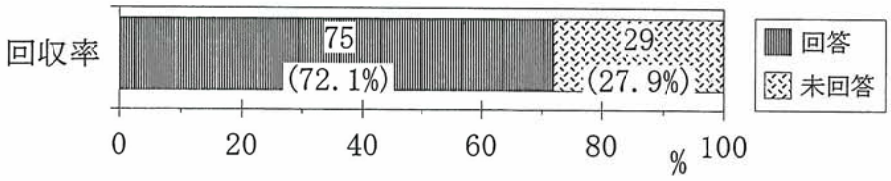
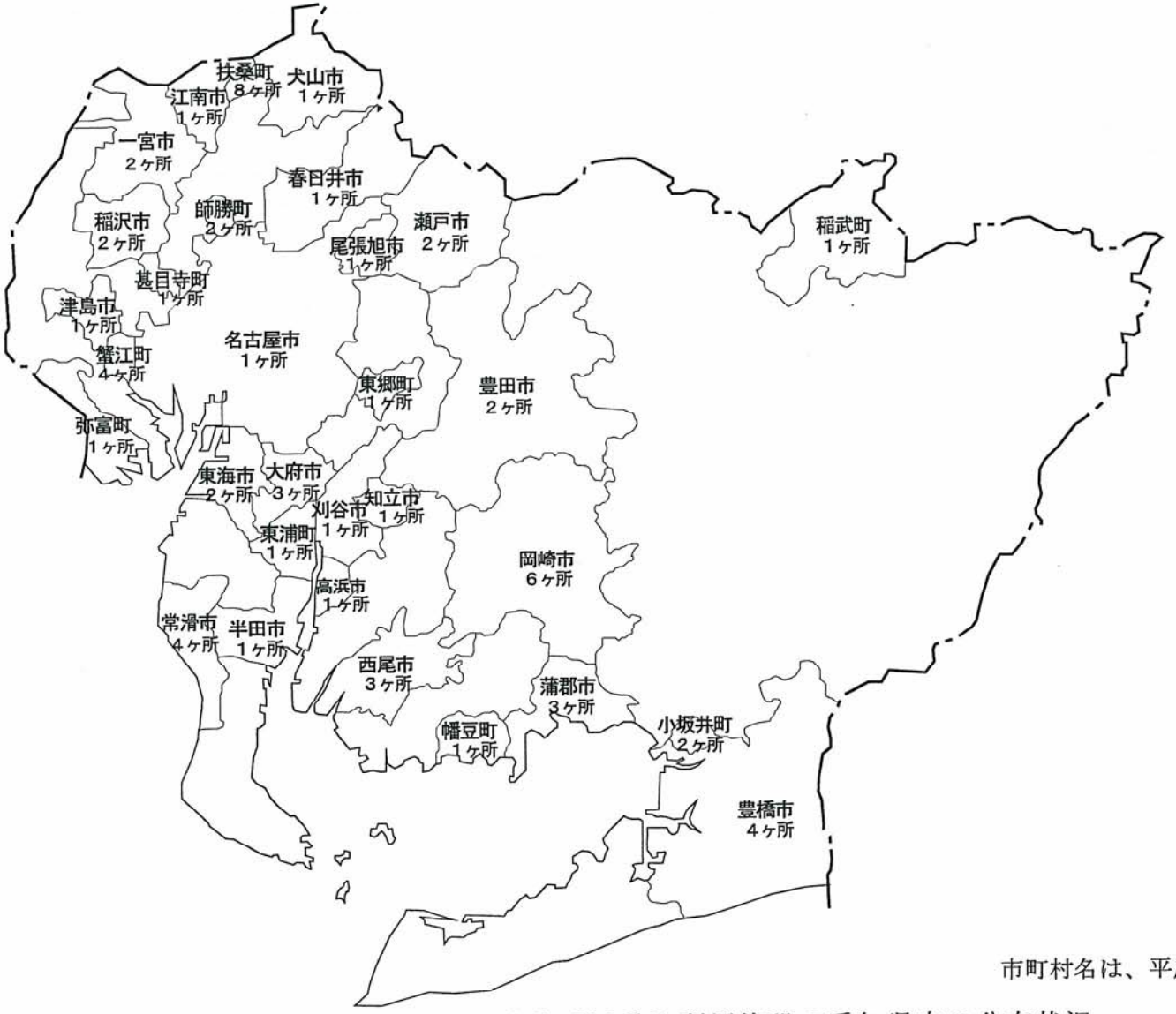


図２－２－１　回収率

回答のあった愛知県内で活動している文化系学校外活動の分布を図２－２－２に示す。

さらに、調査に用いたアンケート用紙を示す。



市町村名は、平成7年9月現在

図２－２－２　回答のあった文化系活動と利用施設の愛知県内の分布状況

アンケート調査用紙　　１９９５．９

アンケートの回答方法
（１）ご回答いただく方
　　団体の代表の方にお願いします。
（２）調査用紙を返送いただく時期
　　誠に勝手ながら９月３０日までにご返送ください。
　　尚、活動に関する資料がございましたら、一緒に郵送していただけると幸いです。
（３）現在のところ活動を中止している団体の代表者の方は、お手数ですがその旨を記入の上白紙でご返送下さい。

下のアンケートの数字には○を、また空欄の部分と下線の部分には記入をお願いします。

１、団体名

２、活動内容
（具体的な内容）

３、発足年　＿＿＿＿＿年＿＿月
４、運営母体　１．自治体　２．地域　３．個人　４．その他（　　）
５、運営資金　１．団費　２．補助金　３．寄付　４．自己資金
（複数回答）　５．その他（　　）
６、活動回数　＿＿＿回（昨年度）
７、活動記録　１．あり　２．なし

昨年度の貴団体の活動についてお尋ねします。
１、構成人数をお聞きします。
　ア、子供の数
　　１．幼児・園児＿＿人　２．小学生低学年＿＿人　３．小学校高学年＿＿人
　　４．中学生＿＿人　５．高校生＿＿人　６．その他＿＿人
　イ、指導員についてお答え下さい。
　　１、人数は何人ですか　＿＿＿人
　　２、指導員の種類はどうですか
　　１．プロ　２．アマ
　　３、指導員の住所はどこですか
　　１．地域　２．市町村内　３．近隣市町村　４．その他（　　）
　ウ、その他　＿＿＿人　（主な仕事　　）

２、昨年度に使った活動場所についてお聞きします。
　２－１、普段の活動で最も多く使った場所についてお聞きします。
　　ア、その場所は屋内ですか屋外ですか。
　　１．屋内　２．屋外　３．両方
　　イ、その場所の名称は何ですか。上の設問で　３、両方　を選んだ方は両方記入して下さい。

　２－２、発表などに使った場所はどこですか。全てあげて下さい。

　２－３、それ以外に使った場所（全てあげて下さい）

アンケート用紙（１）

３、２－１のアの設問で　<u>１．屋内と３．両方</u>　を普段の活動で最も多く使った場所としてあげた方にお尋ねします。数字には該当するところに○を、下線部には記入して下さい。

３－１、施設についてお聞きします。

ア、使った施設の種類は何ですか。

１．公民館　２．児童館　３．児童センター　４．市民会館　５．文化会館
６．集会所　７．図書館　８．個人住宅　９．寺社・教会等　10．小学校
11．中学校　12．高校　13．研究所　14．団体所有の専用施設
15．団体で長期に借用している施設
16．その他（　　）

イ、使った場所（部屋）の広さはどれくらいですか。

およそ　＿＿＿ｍ×＿＿＿ｍ　（和室の場合＿＿＿畳）

ウ、使った場所（部屋）の高さはどれくらいですか。

およそ　＿＿＿ｍ　（天井高さ）

エ、使った場所（部屋）に窓は有りましたか。

１．ある　２．なし

オ、使った場所（部屋）の床の材質は何ですか。

１．畳　２．じゅうたん　３．木　４．プラスチックタイル・ビニルタイル
５．陶磁器タイル　６．土　７．石　９．コンクリート
８．その他（　　）

カ、使った場所（部屋）に備えてあったものを全てあげてください。

１．机　２．いす　３．消火器　４．黒板　５．ホワイトボード　６．映写幕
７．映写機　８．ＯＨＰ　９．スライド　10．暗幕　11．マイク　12．ＣＤ
13．テープレコーダ　14．レコード　15．アンプ　16．電話　17．ＦＡＸ
18．ビデオ　19．テレビ　20．コンピュータ　21．時計　22．ピアノ
23．オルガン　24．楽器（　　）　25．ゴミ箱
26．その他（　　）

キ、活動時の子供たちの姿勢はどうですか。

１．椅子に座る　２．畳に座る　３．床に座る　４．立っている
５．その他（　　）

ク、誰が利用施設を確保してますか。

１．団体の担当者　２．地域　３．行政　４．その他（　　）

ケ、施設利用料の支払いはどのような方法を採っていますか。

１．団費　２．補助金　３．寄付　４．自己資金　５．無償
６．その他（　　）

３－２、建物の使い勝手についてお聞きします。（複数回答）

ア、設備の有無についてお聞きします。使えたものに○をつけてください。

１．ガスコンロ　２．ガスバーナー　３．水道　４．クーラー　５．エアコン
６．スポットライト　７．ステージ　８．その他（　　）

イ、施設の満足度について５段階で評価してください。例に従って該当するところに○をつけてください。

		1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
例）交通の便はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
１、交通の便はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
２、距離はどうですか	近い	├	┼	┼	┼	┤	遠い
３、施設の位置はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
４、近くに他の利用できる施設が多いですか	多い	├	┼	┼	┼	┤	少ない
５、使う施設が選べますか	選べる	├	┼	┼	┼	┤	選べない
６、駐車場は十分ですか	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分

アンケート用紙（２）

7、その場所（部屋）の広さはどうですか	広い	├─┼─┼─┼─┤	狭い
8、その場所（部屋）は汚せますか	汚せる	├─┼─┼─┼─┤	汚せない
9、その場所（部屋）は明るいですか	明るい	├─┼─┼─┼─┤	暗い
10、その場所（部屋）の雰囲気は	よい	├─┼─┼─┼─┤	悪い
11、掃除のしやすさはどうですか	よい	├─┼─┼─┼─┤	悪い
12、遮音性はどうですか	よい	├─┼─┼─┼─┤	悪い
13、そこでは騒げますか	騒げる	├─┼─┼─┼─┤	騒げない
14、そこは新しいですか	新しい	├─┼─┼─┼─┤	古い
15、電気設備の利用に満足してますか	満足	├─┼─┼─┼─┤	不満
16、音響機器の利用に満足してますか	満足	├─┼─┼─┼─┤	不満
17、照明機器の利用に満足してますか	満足	├─┼─┼─┼─┤	不満
18、視聴覚機器の利用に満足してますか	満足	├─┼─┼─┼─┤	不満
19、利用料金はどうですか	高い	├─┼─┼─┼─┤	安い
20、利用許可は出やすいですか	出る	├─┼─┼─┼─┤	出ない
21、近所から苦情がありますか	多い	├─┼─┼─┼─┤	少ない

4、2－1のアの設問で　<u>2．屋外と3．両方</u>　を普段の活動で最も多く使った場所としてあげた方にお尋ねします。数字には該当するところに○を、下線部には記入して下さい。

4－1、その場所についてお聞きします。

ア、その場所はどのような所ですか。

1．公園　2．空き地　3．山　4．川原　5．海岸　6．湿原　7．個人の庭
8．寺社などの境内　9．小学校のグランド　10．中学校のグランド
11．高校のグランド　12．地区全域　13．市町村全域
14．その他（　　）

イ、その場所の範囲はどれくらいですか。

およそ　＿＿＿＿m×＿＿＿＿m

ウ、その場所にある物は何ですか。

1．自然　2．歴史的や文化的な遺産　3．街並み　4．よい景観　5．広い土地
6．その他（　　）

エ、誰が利用施設を確保してますか。

1．団体の担当者　2．地域　3．行政　4．その他（　　）

オ、施設利用料の支払いはどのような方法を採っていますか。

1．団費　2．補助金　3．寄付　4．自己資金　5．無償
6．その他（　　）

カ、その場所に備えてあった物を全てあげて下さい。

1．いす　2．水道　3．トイレ　4．ゴミ箱　5．遊具　6．植栽　7．電灯
8．分からない、回答しにくい
9．その他（　　）

4－2、場所の満足度について5段階で評価してください。例に従って該当するところに○をつけてください。

		1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
例）交通の便はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
1、交通の便はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
2、そこまでの距離はどうですか	近い	├	┼	┼	┼	┤	遠い
3、その場所の位置はどうですか	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い

アンケート用紙（3）

4、近くに他の利用できる場所は多いですか　多い　├─┼─┼─┼─┤　少ない
5、使う場所が選べますか　選べる　├─┼─┼─┼─┤　選べない

6、駐車場は十分ですか　十分　├─┼─┼─┼─┤　不十分
7、その場所の広さはどうですか　広い　├─┼─┼─┼─┤　狭い
8、その場所は明るいですか　明るい　├─┼─┼─┼─┤　暗い
9、その場所の雰囲気は　よい　├─┼─┼─┼─┤　悪い
10、そこでは騒げますか　騒げる　├─┼─┼─┼─┤　騒げない

11、利用料金はどうですか　高い　├─┼─┼─┼─┤　安い
12、利用許可は出やすいですか　出る　├─┼─┼─┼─┤　出ない
13、近所から苦情がありますか　多い　├─┼─┼─┼─┤　少ない

5、今後の活動で利用していく施設や場所についてお尋ねします。
5－1（1）、現在の施設や場所で十分な活動ができますか。五段階評価でお答え下さい。

1　2　3　4　5
十分　├─┼─┼─┼─┤　不十分

（2）、現在の施設や場所で十分な指導ができますか。五段階評価でお答えください。

1　2　3　4　5
十分　├─┼─┼─┼─┤　不十分

5－2、活動場所として重視する点はどれですか。下記の中から3項目選んで○をつけて下さい。

1.交通の便がよい　2.近い　3.使う施設が選べる　4.適当な位置
5.ちょうどよい広さ　6.汚せる　7.きれい　8.掃除しやすい
9.利用料が安い　10.許可がでやすい　11.新しい　12.古い　13.火が使える
15.水が使える　16.電気機器が使える　17.遮音性　18.音響機器が使える
19.照明が使える　20.苦情がない　21.騒げる　22.楽器がおいてある
23.舞台がある　24.自然が豊富　25.歴史的・文化的な遺産がある
26.グランドがある　27.利用目的に合っている　28.よい景観
29.その他（　　）

5－3、4－1（1）、（2）でいいえ（5段階評価の4と5）へ答えた方にお聞きします。
どのような施設であれば十分に活動ができると思われますか。施設名があれば施設名とその理由を、施設名が思いつかない場合は施設の内容をお書き下さい。
施設名（　　）
その理由もしくは内容

（　　）

6、現在利用している場所に関してその他に問題点や要望点があればお書き下さい。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

アンケート用紙（4）

２－２－２　活動組織

調査から得られた活動組織の実態について、（１）活動内容と活動規模、（２）組織運営、（３）活動回数の観点から以下に述べる。

（１）活動内容と活動規模

①活動内容

愛知県の実施した調査によって、大まかな活動内容は示されている(参考文献１)が、利用施設との関係を明らかにする目的から、活動内容を正確に把握する必要があるため、活動内容を記述してもらった。調査の結果本研究では、その内容から、「合唱」、「伝統音楽」、「演劇」、「創作」、「文化」の大きく５つに分類した。活動内容の詳細をみると全部で２３種類あり、「合唱」は合唱を、「伝統音楽」には神楽や詩吟、和太鼓といったものが、「演劇」においては人形劇やバレエといった活動から伝統的な民踊や剣詩舞といったものまで幅がある。「創作」は、発明や料理といった内容のものである。「文化」はこれらに属さない文化的な活動のものを分類した。さらに５つの分類に属さない自然観察などを「その他」とした。活動内容の分類と回答状況を表２－２－２－に示す。

表２－２－２　活動内容の分類と回答の内訳

	内容分類	合唱	伝統音楽			演劇							創作				文化							その他	
活動内容の分類	活動内容	合唱	神楽	詩吟	太鼓	人形劇	影絵	バレエ	人形劇とスポーツ	民踊	剣詩舞	花笠	料理	手芸	発明	工作	将棋	百人一首	文化財愛護	伝承遊び	けん玉	本の貸し出し	本の読み聞かせ	自然観察	その他
	配布数	18	25			18							18				20							5	
	返却数	14	13	3	2	3	1	2	1	3	1	1	4	1	6	2	2	1	2	1	1	3	1	1	0
	合計	14	18			12							13				11							1	

②活動規模

②－１　活動参加者数

活動の規模を把握するために参加者数の状況について集計した結果、図２－２－３に示すように子どもと指導者等をあわせた全体の参加者数は４０人未満が全体の６割で、１００人に満たない組織で９５％を占めるが、１，０００人を超えるものもある。

さらに活動内容別に参加者数と指導者に分けて平均値で比較する。これを表２－２－３に示す。「演劇」が最も少なく２０人程度である。「創作」のうち「発明」の参加者に前述した１，０００人を超えているものがあり、平均の参加者数が多くなっている。それ以外の内容では４０人程度である。活動の実効性を把握するために指導者１人あたりの子どもの数で比較すると、５～１５人となっているが、「演劇」は子どもの数が少ないため５人程度と他の活動内容と比較すると半分程度となっている。

②－２　参加者の年齢

活動参加者の内訳を図２－２－４に示す。小学校高学年が最も多くなっている。

幼児・園児および小学校低学年では活動内容の理解度が低く活動に適さない場合があるが、小学校高学年になるとおおむね内容が理解できる年齢になることが大きな理由であると考えられる。また学年があがると授業終了後は部活動への参加や塾などにより、参加する数が少なくなっているものと考えられる。

指導者も同じ地域から活動に参加していることが多いが、世代間交流の柱となる地域住民などの参加は指導者の半分程度となっており、活動そのものが地域に開放されることや、活動への参加の機会を作ることなど積極的な地域との連携が望まれる。

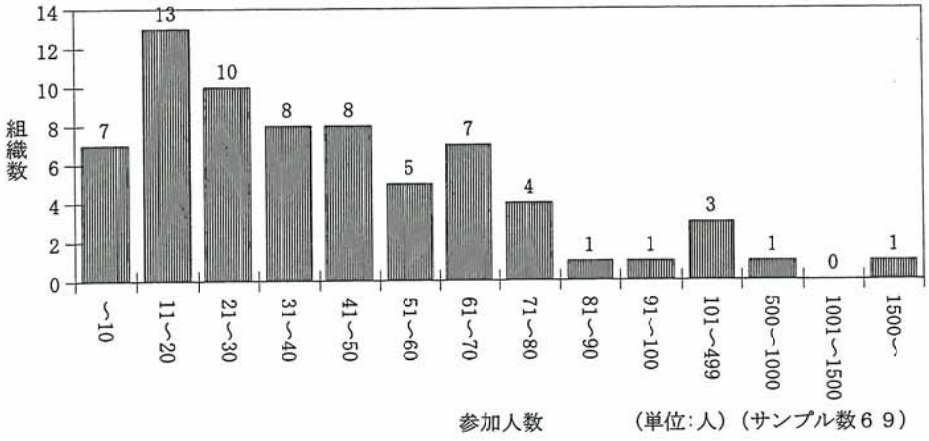


図２－２－３　参加者数

表２－２－３　活動内容別の参加者・指導者の比較

	内容分類	合唱	伝統音楽	演劇	創作	文化	その他
平均人数	参加者数	36.8	45.2	20.3	179.5	38.4	60.0
	指導者数	3.4	4.3	3.8	12.7	2.6	10.0
子ども数／指導者数		10.8	10.5	5.3	14.1	14.7	6.0

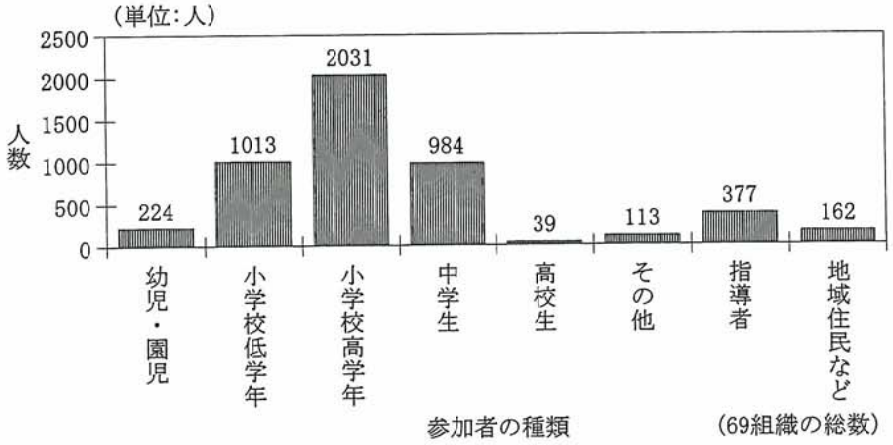


図２－２－４　参加者の内訳

（２）組織運営

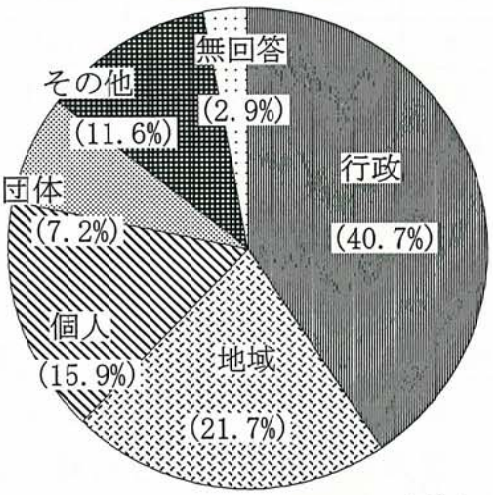
安定して継続的に活動を行うためには、一定の組織化が図られることや活動には資金の確保が必要である。そこで運営の母体と運営資金の確保の方法について集計した。

①運営母体

運営母体の種類を図２－２－５に示す。文化系の組織は、市町村などの行政が母体となっているものが４割を占め最も多い。ついで地域の組織となっている。組織化された団体で運営しているものは１割に満たない。

文化系活動においては、組織的な展開よりも社会教育や生涯学習の文化施策の一環として行政が中心となっているものが多くみられる。

今後、地域に根付いた活動としていくためには、運営母体の明確な組織化が必要である。



（サンプル数69）

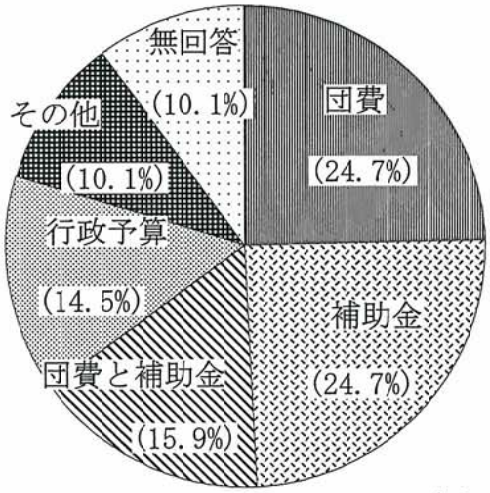
図２－２－５　運営母体

②運営資金

運営資金について図２－２－６に示す。活動に必要な資金の確保は、活動の継続や活動内容の幅、活動場所の確保など様々な面で大きな影響がある。また、子どもが自由に参加するためには比較的安価であることが求められる。

集計の結果、行政予算や、行政の補助金の交付など行政から何らかの金銭的補助を受けている活動組織が５５．１％と多いのが特徴である。

これは補助金を得ることで、地域や個人の組織においても活動の基盤の安定をはかっていると考えられる。



（サンプル数69）

図２－２－６　運営資金

（３）活動回数

活動回数を集計したものを図２－２－７に示す。活動回数は週１回（月４回程度）か月３回程度が最も多く、週1回より少ない組織が約９０％であった。

これを活動内容別でみたものを図２－２－８に示す。「合唱」、「伝統音楽」、「演劇」では、活動の成果を集団で発表する必要があることから活動回数の多い組織が多く、逆に「創作」や「文化」など発表する機会がなかったり、個々人で成果を見いだす活動においては活動回数が少ない。

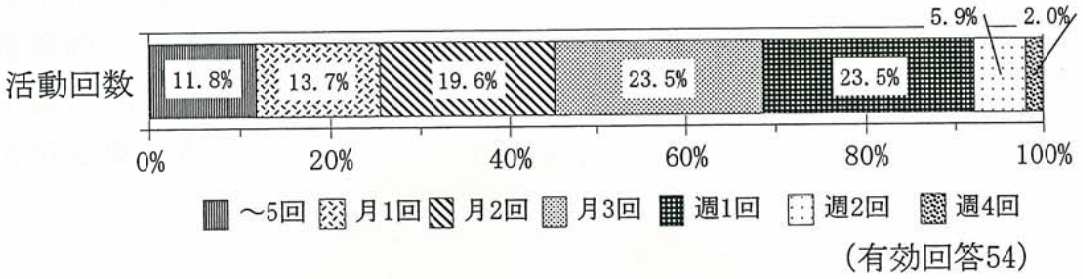


図２－２－７　活動回数

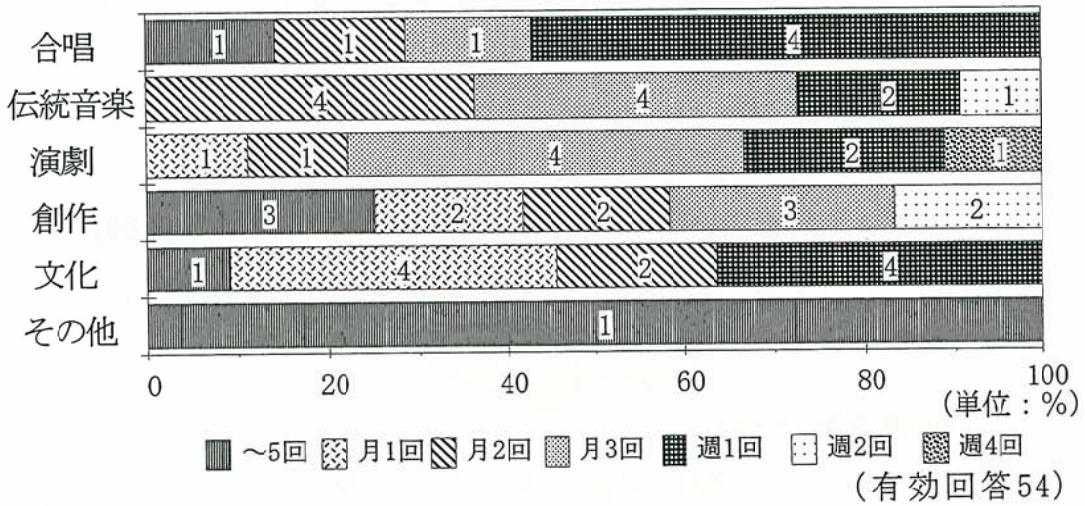


図２－２－８　活動内容と活動回数

２－２－３　利用施設

利用施設については、普段の活動や練習などに利用する場所と、活動成果を公表する施設がある。本章において普段の活動で利用する施設を「通常利用施設」、活動の成果を公表する施設を「発表施設」と呼び、それぞれどの様な施設を利用しているかを集計した。

（１）通常利用施設

通常利用施設として施設種類を回答してもらい、どの様な施設が利用されているかを把握した。これらを活動内容別にみたものを図２－２－９に示す。

通常利用施設の種類については、身近に存在する公民館や地区の集会所の利用が多い。また、児童福祉施設を利用した活動も多くみられた。小学校の利用は非常に少なく、活動場所として適していないかもしくは利用できる環境が整っていないと考えられる。また、ホール等が整備された大規模集会施設の利用も少ない。

活動組織専用の施設として、建物の全部もしくは一部を長期間借用して、いつでも利用できる体制が確保されているものがあった。このような施設確保の方法については、施設の形態や管理の方法が注目される。

さらに活動内容別に通常利用施設の特徴をみると、「合唱」においては、半数が公民館を利用している。「伝統音楽」では集会所を利用する割合が多い。「演劇」においては、日本に伝統的に伝わるものと、そうでないもので利用施設が分かれている。「創作」、「文化」は児童福祉施設が多かった。

それぞれの活動内容で利用されていた施設の一例を図２－２－１０に示す。

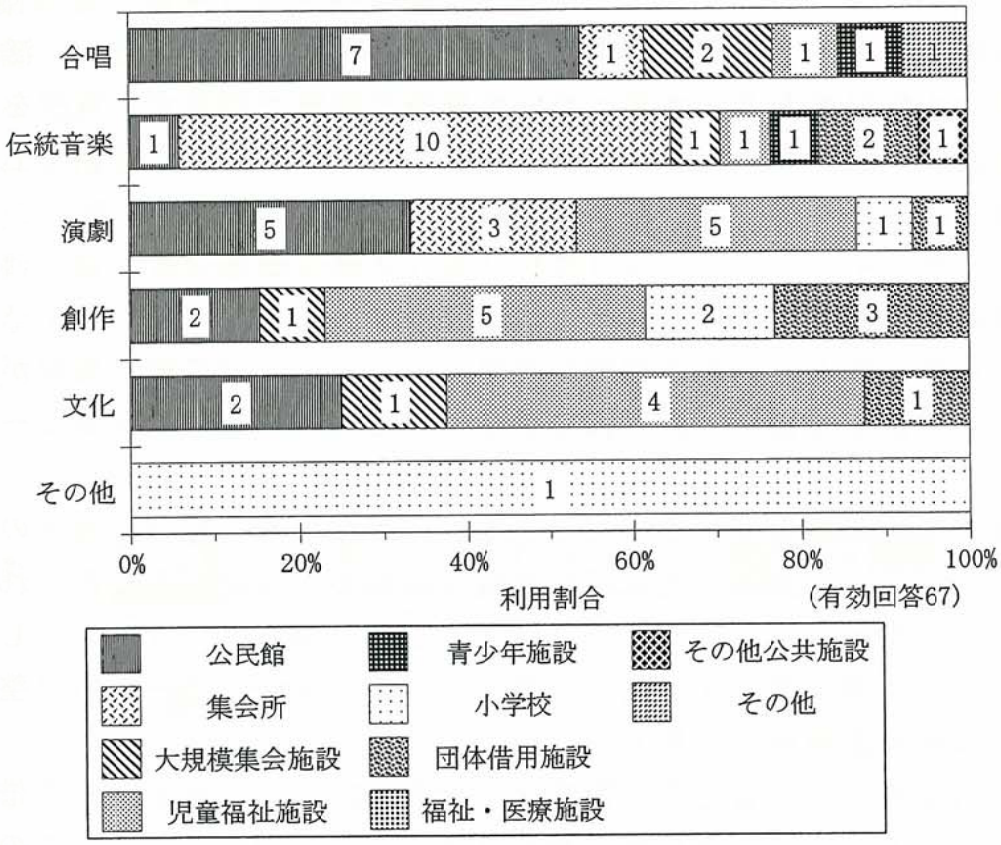

合唱
伝統音楽
演劇
創作
文化
その他
0%
20%
40%
60%
80%
100%
利用割合
(有効回答67)
公民館
青少年施設
その他公共施設
集会所
小学校
その他
大規模集会施設
団体借用施設
児童福祉施設
福祉・医療施設

図２－２－９　通常利用施設

合唱（例：公民館）

伝統音楽（例：地区集会所兼社務所）

演劇（例：児童福祉施設）

創作（例：大規模集会施設）

文化（例：大規模集会施設）

図２－２－１０　文化系学校外活動の活動施設

（２）発表施設

発表施設は、公民館や大規模集会施設が多くみられた。発表にホール等の比較的広い空間が使用されるためである。公立体育館なども同様な使われ方をしているものと考えられる。発表施設と活動内容との関係を図２－２－１１に示す。「合唱」、「演劇」で大規模集会施設の利用が多くみられる。「伝統音楽」は、様々な施設で発表が行われている。

発表施設において特徴的なのは、数は少ないが、病院や老人ホームといった医療・福祉施設への慰問活動もあり、活動が社会との関係をもつ動きがみられる。また、小学校は発表にも利用されていない。

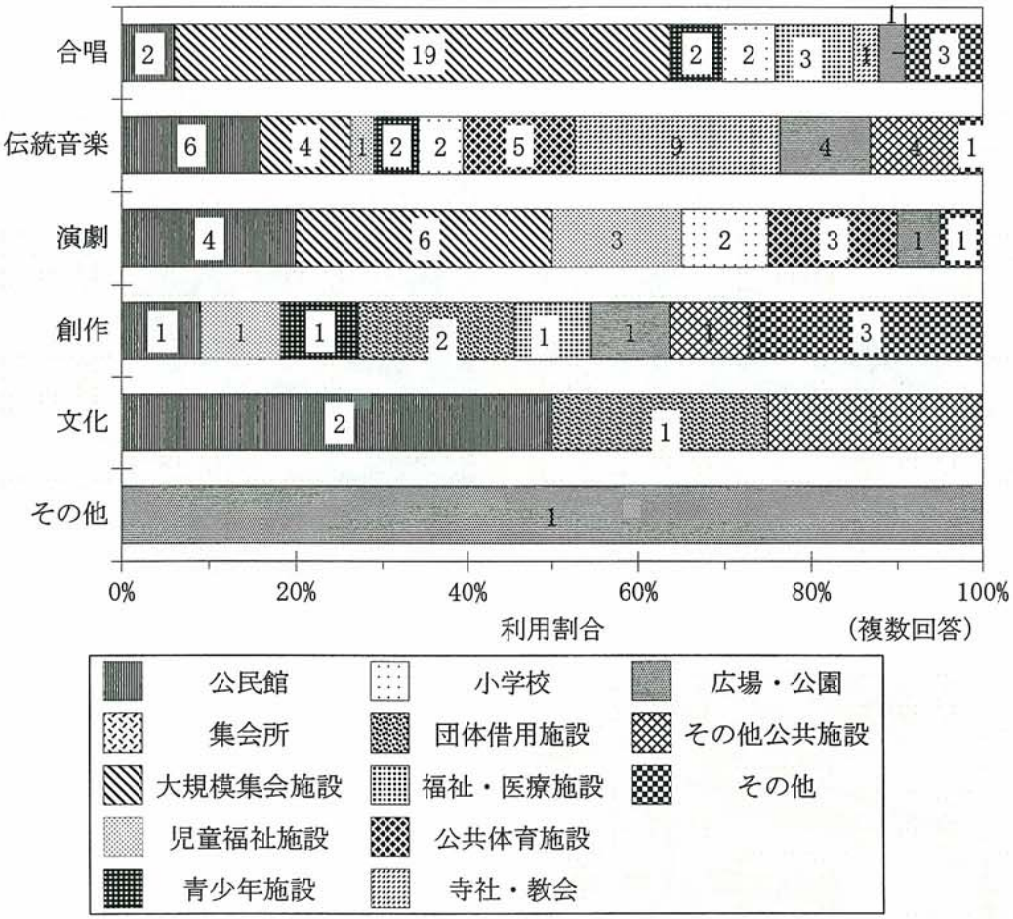


図２－２－１１　発表施設

２－２－４　利用施設の評価

文化系学校外活動が目的にあった施設が使えているかどうかを把握するために、通常利用施設について代表者の利用評価を求めた。学校外活動を行う施設として求められる条件を「立地条件」、「代替性」、「空間条件」、「空間及び設備の機能条件」、「利用条件」、「その他」に分類して検討した。「立地条件」は交通の便など３項目、「代替性」は代替可能性と施設の選択性の２項目、「空間条件」として広さなど４項目、「空間及び設備の機能条件」として駐車場など９項目、「利用条件」として利用料金など３項目、「その他」の項目として、施設や指導の満足度の２項目で評価してもらった。

（１）文化系学校外活動における利用施設評価

全回答者から得られた評価を、その評価の割合で比較し、どの様な条件が不十分であるかを考察する。これを図２－２－１２に示す。

立地条件は「交通の便」「距離」「位置」ともにほぼ半数がよいと評価している。

代替性については「代替可能性」や「選択性」は半数以上が悪いと答え、身近にある施設が利用されているが、地域にある施設の数や種類は不足し、選択の幅がないことがわかる。

空間の条件は「広さ」については半数がよいと答え「明るさ」、「雰囲気」に関してはよいと評価する割合が高い。

空間及び設備の機能の条件では、「駐車場」については３割が悪い方に評価している。「掃除の容易さ」は容易が多いが、「汚しやすさ」は汚すことができないところが多い。「騒げるか」と「遮音性」に関してはよいと評価した割合は両者ともほぼ同数であったが、「遮音性」では悪いほうへ評価したのが３割ほどあった。「音響機器」や「視聴覚機器」に不満が多い。

利用条件の「利用料金」や「利用許可」についてはよいと評価され、また近隣からの「苦情」は少ない。

「施設の満足度」と「指導の満足度」はほぼ半数の組織で良いと評価している。

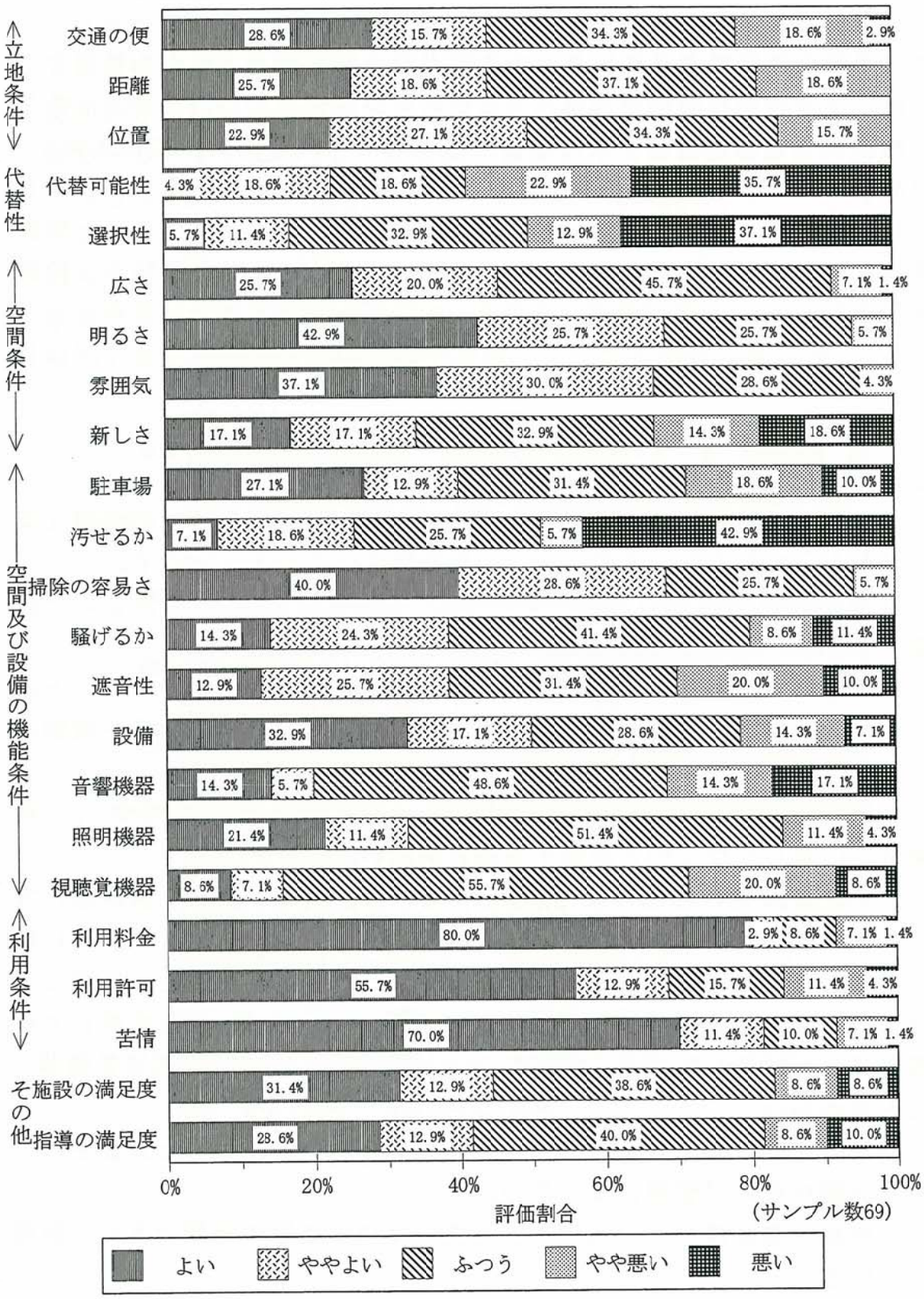


図２－２－１２　通常利用施設の評価

（２）利用施設評価の構造

利用施設の現状について、２３項目の評価に基づき特徴を述べてきた。さらにこの評価の傾向が似ているものを集約し、どのような評価の構造となっているかを明確化するために、多変量解析を用いて考察する。

全回答者の各項目への評価を変量として因子分析（主因子解法）を行った。

その結果、６つの軸を得ることができた。これを表２－２－３に示す。

Ⅰ軸には「雰囲気」「明るさ」「掃除の容易さ」「広さ」といった、施設環境に関する項目が集約され『環境性』を表している軸であるといえる。寄与率は１５％であった。

Ⅱ軸には「音響機器」「視聴覚機器」「照明機器」「遮音性」が集約され、施設の『性能性』を表現しているといえる。寄与率は１３％であった。

Ⅲ軸に「施設の位置」「距離」「交通の便」が集約され、施設へ通うための項目であることから『通館性』を表しているといえる。この寄与率は１１％であった。

Ⅳ軸に「代替可能性」や「選択性」といった項目が集約され『代替性』を表現している。寄与率は８％である。

Ⅴ軸に「施設の満足度」「指導の満足度」「利用料金」が集約され、活動の目的の達成に関する項目であることから『目的性』を表している。この寄与率は７％である。

Ⅵ軸には新しさや苦情といった利用に関する項目が集約され『利用性』を表している。寄与率は６％である。

これらの６軸で全体の評価内容の６０％が説明できる。

Ⅰ軸に環境性を得たことは、子どもたちが安全に活動できる場が求められていると考えられ、これを満足している場所が使われている。また、Ⅱ軸に性能性が得られ、この評価があまり良くないことから、施設の内容を充実させる必要があるといえる。

表２－２－４　通常利用施設の評価構造

	Ⅰ軸 環境性	Ⅱ軸 性能性	Ⅲ軸 通館性	Ⅳ軸 代替性	Ⅴ軸 目的性	Ⅵ軸 利用性
雰囲気	0.87	0.19	0.10	0.08	0.00	0.16
明るさ	0.71	0.16	0.09	−0.03	0.18	0.02
掃除の容易さ	0.66	0.15	0.28	0.18	0.11	0.18
広さ	0.62	0.13	0.16	0.11	0.18	0.12
設備	0.61	0.53	0.26	−0.02	−0.01	0.10
駐車場	0.43	0.35	−0.13	0.00	0.07	−0.10
音響機器	0.20	0.85	−0.07	0.09	0.21	−0.10
視聴覚機器	0.16	0.71	−0.23	0.10	0.05	0.01
照明機器	0.31	0.64	0.07	0.13	0.20	0.14
遮音性	0.36	0.43	0.22	0.38	−0.04	0.24
施設の位置	0.06	−0.05	0.89	0.03	0.06	0.03
距離	0.15	−0.02	0.81	−0.11	0.16	−0.12
交通の便	0.23	−0.07	0.77	−0.06	−0.04	0.02
代替可能性	−0.04	0.14	0.23	0.70	−0.03	0.17
汚し易さ	−0.01	−0.13	−0.29	0.66	0.20	0.04
選択性	0.27	0.20	−0.10	0.61	0.00	−0.09
騒げるか	0.02	0.17	−0.04	0.40	0.06	0.38
施設の満足度	0.26	0.38	0.24	0.27	0.72	0.08
指導の満足度	0.31	0.41	0.20	0.26	0.70	0.05
利用料金	0.01	0.02	0.01	−0.23	0.50	0.16
新しさ	0.34	0.51	0.13	−0.02	−0.03	0.65
苦情	0.06	−0.15	−0.06	0.09	0.16	0.59
利用許可	0.22	0.03	−0.07	−0.03	0.37	0.39
固有値	3.39	3.04	2.64	1.92	1.75	1.35
寄与率	0.15	0.13	0.11	0.08	0.07	0.06
累積寄与率	0.15	0.28	0.39	0.47	0.54	0.60

２－２－５　利用施設と問題点

利用施設を今後選定する場合に必要な項目を選定してもらうとともに、活動や利用施設の不満点や要望点を自由に記述してもらった結果について、前節で得られた「環境性」「性能性」「通館性」「代替性」「目的性」「利用性」の６つの評価構造を用いて分類し、活動内容も考慮して整理した。これらから導き出される施設の整備要求を、「活動について」、「施設全体について」、「施設、道具について」の３つの観点から考察する。これを文化系活動の利用施設の整備要求として図２－２－１３に示す。

（１）活動について

文化系活動全体のソフト面での問題点として、地域の中での理解がどのくらい得られているかが問題となる。地域の中で活動を行うには、その活動の意味や位置づけがなければ、活動への参加や協力を得ることもできない。伝統の活動は地域文化の継承という目的があるが、合唱や創作などは学校教育の場でも行われており、活動の特殊性や専門性を明確にし、目的を設定する必要があるといえる。

また、活動において「他と競う」ことは重要でないため、成果をアピールしにくいという側面もある。

さらに地域の人的な交流や活動の内容、継続性などが指導的立場にたつ人材に依存しており、活動の機会の均一化は難しいといえる。地域として人的なストックをどのように見出していくのかが課題となる。

子どもに対して金銭的な負担は最低限のものとする必要があることから、施設の利用にかかるコストはより安い方がよい。

（２）施設全体について

施設に関する問題点は、まず、どの組織においても活動場所を定期的に確保することが最優先の問題であり、特定の空間はなく、身近にある多目的に使える場所を利用している。そのため、環境性や性能性の問題点が多くあげられた。

（３）施設、道具について

空間の形状や床の材質などが活動に適さないといった性能性に関する問題は、運動を伴う活動の場合、床の材質により怪我を誘発する可能性

も否定できないため、施設の利用について利用者の側が考慮する必要があるが、現実には目的に合った機能を持つ空間自体が少なく、利用することは難しいといえる。

使用する道具や備品は、目的に応じて必ずないと活動が成立しない場合があり、施設で確保するか利用者が確保するかという問題と、またその保管場所の確保が問題となる。

以上のことをまとめると、活動のソフト的な面での充実を図ることが重要である。常に活動の機会を与える場を整備し、定期的に行える環境作りをすることが望ましい。活動が全ての地域で同一条件で行われるのではないことから、参加者や指導者が居住している地域が広範囲となり、送迎等の利便性をはかり、学校の余裕教室などの既存施設を利用しながら特徴的に施設や空間を整備することが必要である。

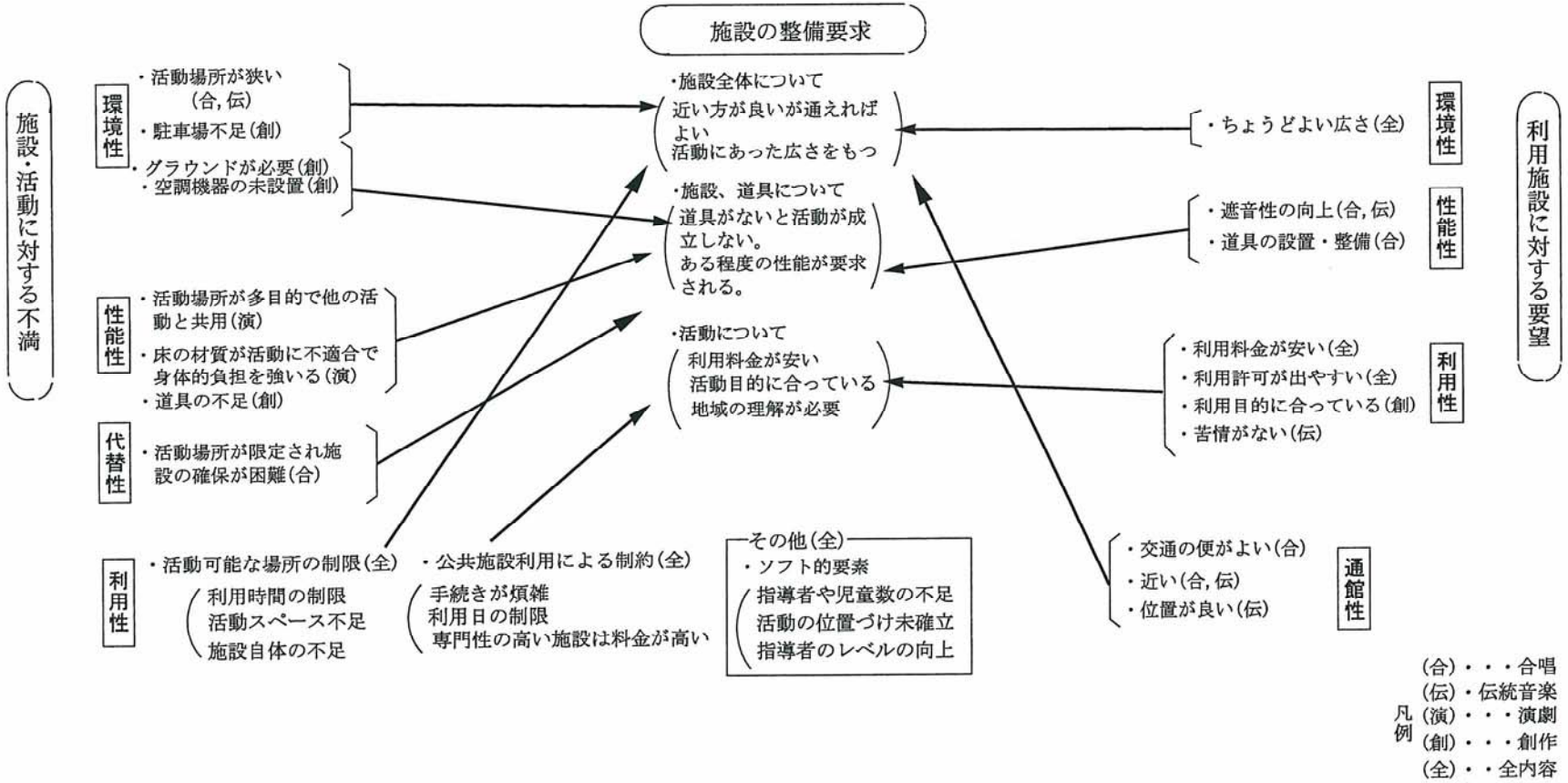


図２－２－１３　文化系活動の利用施設の整備要求

第３節　運動系活動と利用施設

２－３－１　調査内容

本節では野球やサッカーなどの運動系の学校外活動として多くの市町村で長年にわたり活動が行われているスポーツ少年団を対象にその活動実態を明らかにするために調査を行った。また活動で利用している施設に関する評価を求め、施設利用に関する問題点についても考察する。調査は、活動参加者全員とすることが望ましいが、全体像を把握することを優先するために、各活動組織の代表者に対して行った。

調査目的：運動系学校外活動の実態を把握するため、活動組織、利用施設、利用施設の評価、利用施設選択の重要点、問題点、要求点を明確にする。

調査対象：・調査対象組織
平成１０年度に愛知県体育協会に登録申請のあったスポーツ少年団７５０団体
・回答者
活動全般に関する項目と施設の利用に対する評価を求めるために、活動全体を最も把握していると考えられるスポーツ少年団の代表者１名に対して回答を求めた。

アンケート調査の仮説と調査の構成を表２－３－１に示す。

表２－３－１　アンケートの仮説と調査の構成

<table>
<tr><th rowspan="2">仮説</th><th colspan="5">アンケート項目</th></tr>
<tr><th colspan="2"></th><th>現状</th><th>評価</th><th>要望（問題点や意見など）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">・活動内容の種類
・指導者の確保
・参加人数の少ない
・資金確保が困難</td><td rowspan="2">活動</td><td>形態</td><td>活動内容、発足年、運営母体、運営資金、活動回数</td><td>活動環境</td><td></td></tr>
<tr><td>組織</td><td>参加者数、指導者数</td><td>指導環境</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">・活動場所の不足
・目的に合致する施設が利用されていない</td><td rowspan="2">施設</td><td>通常利用施設</td><td>利用施設の種類、利用できる道具、備品、使用可能な施設と設備</td><td>交通の便、距離、位置、代替性、選択性、周辺環境、規模、駐車場、施設の広さ、汚せるか、明るさ、雰囲気、掃除の容易さ、新しさ、道具、備品、、施設・設備</td><td>施設確保に関する重点項目
理想とする施設</td></tr>
<tr><td>試合等利用施設</td><td>施設名称</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>・施設確保の難しさ
・活動報告</td><td>運営</td><td></td><td>活動記録、施設確保、利用料金の支払い</td><td>目的との適合、利用料金、許可の出やすさ、苦情の有無</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="6">上の項目の他、団体名称、問題点を自由に記述してもらう</td></tr>
</table>

調査方法：愛知県内の全市町村を調査対象としてアンケート調査を実施するため、代表者に対して返信用封筒を同封の上郵送にて調査用紙を配布し、郵送にて返却を求めた。

調査期間：平成１１年８月２４日～平成１１年９月２４日の１ヶ月間

回収状況：総配布数750、回答数376（回収率50.1%）

有効回答376

回収状況を図２－３－１に示す。

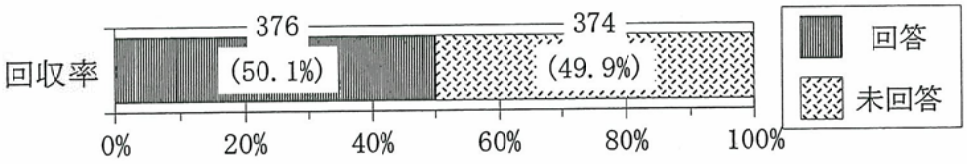
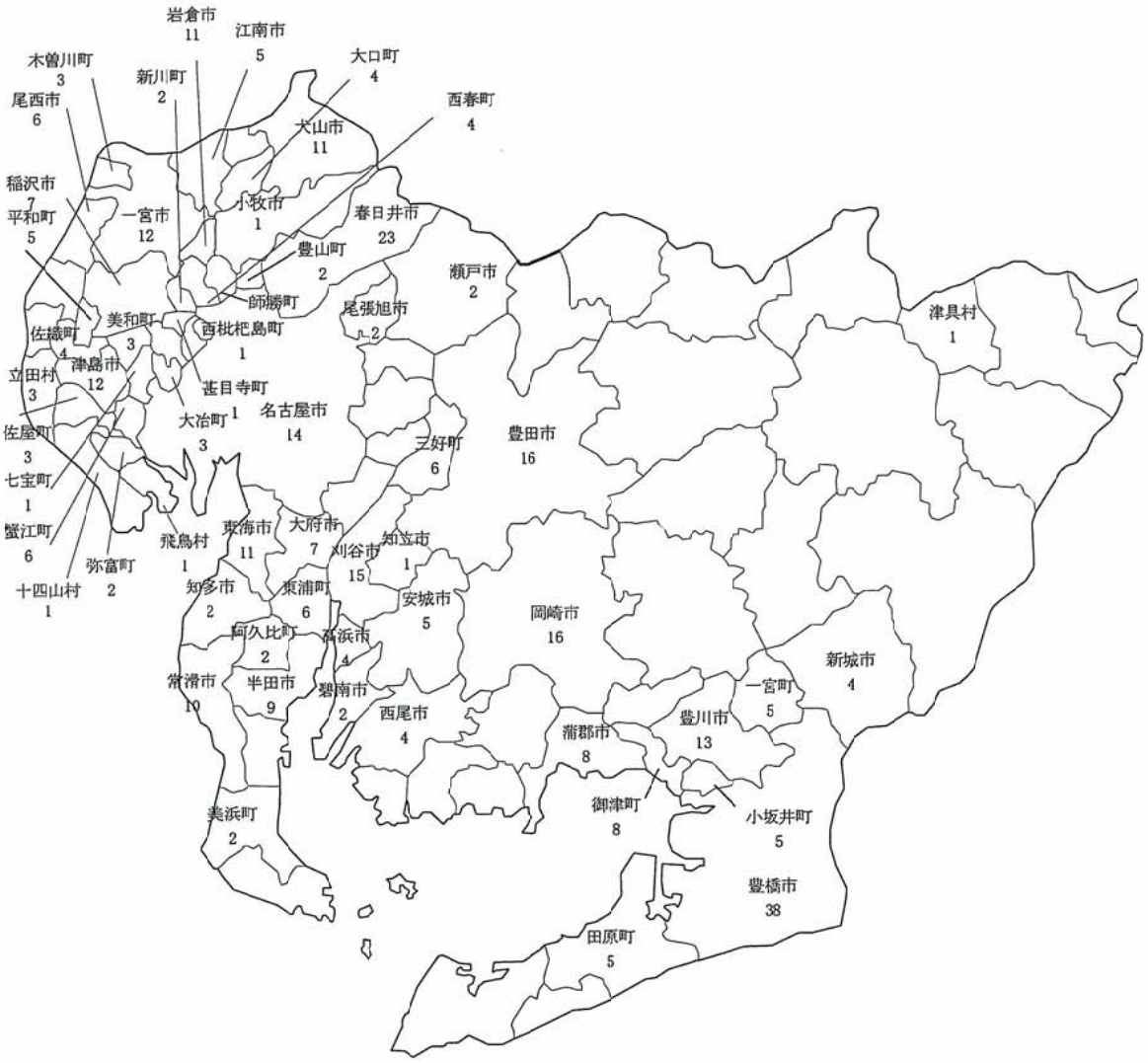


図２－３－１　回収率

回答のあった愛知県内で活動している運動系学校外活動の分布を図２－３－２に示す。

さらに、調査に用いたアンケート用紙を示す。



市町村名は平成１１年現在

図２－３－２　回答のあったスポーツ少年団の愛知県内の分布状況

アンケート調査用紙

アンケートの回答方法

（1）．ご回答いただく方

団体の代表の方にお願いします。

（2）．調査用紙を返送いただく時期

誠に勝手ながら　　までにご返送ください。

尚、活動に関する資料がございましたら、一緒に郵送していただけると幸いです。

（3）．現在のところ活動を中止している団体の方は、お手数ですがその旨を記入の上白紙でご返送ください。

下のアンケートの数字には○を、また空欄の部分と下線の部分には記入をお願いします。

1. 団体名　〔　　〕

2. 活動内容（具体的な内容）〔　　〕

3. 発足年　＿＿＿年＿月

4. 運営母体　1. 行政　2. 個人　3. 団体　4. その他（　　）

5. 運営資金（複数回答）　1. 団費　2. 行政の補助金　3. 寄付　4. その他（　　）

6. 活動回数（平成10年度）　週・月・年＿＿＿回（いづれかに○を打ってください）

7. 活動の記録　1. あり　2. なし

昨年度（平成10年度）の貴団体の活動についてお尋ねします。

1. 構成人数をお聞きします。

ア　子供の人数

1．幼児・園児＿＿人　2．小学生低学年＿＿人　3．小学生高学年＿＿人

4．中学生＿＿人　5．高校生＿＿人　6．その他＿＿人

イ　指導員についてお聞きします。

1　人数は何人ですか　＿＿人

2　指導員のお住まいはどこですか（複数回答）

1．地区　2．市町村内　3．近隣市町村　4．その他（　　）

ウ　その他　＿＿人　主な仕事（　　）

2. 昨年度（平成10年度）に利用した活動場所についてお聞きします。

普段の活動でもっとも多く利用した場所についてお聞きします。

ア　その場所の名称は何ですか。

例）○○小グランド、○○中体育館、○○市体育館トレーニング室

〔　　〕

試合などに利用した場所はどこですか。全てあげてください。

〔　　〕

アンケート調査用紙（1）

3. 施設についてお聞きします。

ア　利用した施設の種類は何ですか。

1．体育館　　2．武道館　　3．スポーツセンター　　4．小学校
5．中学校　　6．高校　　7．団体所有の専門施設
8．団体で長期に借用している施設
9．その他（　　）

イ　利用した場所に備えてあったもので使えた道具を全てあげてください。

例）野球の場合…バット、グローブ、ボール、ベース、ヘルメット、マスク、プロテクター、ロジンバック…など

（　　）

ウ　利用した場所で使えた備品をすべてあげてください。

例）得点板、とんぼ、水まき用ホース、ライン引き、ゴミ箱…など

（　　）

エ　利用した場所で使えた施設と設備をすべてあげてください。

例）水道、トイレ、照明、更衣室…など

（　　）

オ　どなたが利用施設を確保していますか。

1．団体の担当者　　2．行政　　3．その他（　　）

カ　施設利用料の支払いはどのような方法を採っていますか。

1．団費　　2．無償　　3．その他（　　）

3-1 建物の使い勝手についてお聞きします。（複数回答）

ア　施設の満足度について5段階で評価してください。例に従って該当するところに○をつけてください。

		1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
例）交通の便はどうですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
1. 交通の便はどうですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
2. 活動場所は生活圏内にありますか。	ある	├	┼	┼	┼	┤	ない
3. 施設の位置はどうですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
4. 他に利用できる施設がありますか。	ある	├	┼	┼	┼	┤	ない
5. 使う施設が選べますか。	選べる	├	┼	┼	┼	┤	選べない
6. 利用施設の周辺環境はよいですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
7. 利用施設の規模は適当ですか。	適当	├	┼	┼	┼	┤	不適当
8. 駐車場は十分ですか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分
9. その場所の広さはどうですか。	広い	├	┼	┼	┼	┤	狭い
10. その場所は汚せますか。	汚せる	├	┼	┼	┼	┤	汚せない
11. その場所は明るいですか。	明るい	├	┼	┼	┼	┤	暗い
12. その場所の雰囲気はどうですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い

アンケート調査用紙（2）

		1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
13. 掃除(整備)のしやすさはどうですか。	よい	├	┼	┼	┼	┤	悪い
14. そこでは騒げますか。	騒げる	├	┼	┼	┼	┤	騒げない
15. そこは新しいですか。	新しい	├	┼	┼	┼	┤	古い
16. 使用できる道具は十分ですか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分
17. 使用できる備品は十分ですか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分
18. 使用できる設備・施設は十分ですか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分
19. そこは利用目的に合っていますか。	合う	├	┼	┼	┼	┤	合わない
20. 利用手続きは簡単ですか。	簡単	├	┼	┼	┼	┤	面倒
21. 利用料金はどうですか。	高い	├	┼	┼	┼	┤	安い
22. 利用許可は出やすいですか。	出る	├	┼	┼	┼	┤	出ない
23. 近所から苦情はありますか。	多い	├	┼	┼	┼	┤	少ない
24. 現在十分な活動ができますか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分
25. 現在十分な指導ができますか。	十分	├	┼	┼	┼	┤	不十分

4. 今後の活動で利用していく施設や場所についておたずねします。

4-1 活動場所として重視する点はどれですか。下記の中から3項目を選んで○をつけてください。

1．交通の便がよい　2．近い　3．使う施設が選べる　4．周辺環境がよい
5．駐車場が十分にある　6．ちょうどよい広さ　7．汚せる　8．きれい
9．掃除(整備)しやすい　10．利用料金が安い　11．利用許可が出やすい
12．新しい　13．古い　14．十分な道具が使える　15．十分な備品が使える
16．利用手続きが簡単である　17．十分な設備・施設が使える　18．苦情がない
19．騒げる　20．利用目的に合っている
21．その他（　　）

4-2 どのような施設であれば十分に活動ができると思われますか。施設名があれば施設名とその理由を、施設名が思いつかない場合は施設の内容をお書きください。

施設名〔　　〕

その理由もしくは内容

〔　　〕

4-3 現在利用している場所に関してその他に問題点や要望点があればお書きください。

〔　　〕

ご協力ありがとうございました。

アンケート調査用紙（3）

２－３－２　活動組織

調査から得られた活動組織の実態について、（１）活動内容と活動規模、（２）組織運営、（３）活動回数の観点から以下に述べる。

（１）活動内容と活動規模

①活動内容

活動内容を集計した結果、「屋外球技個人型」、「屋外球技団体型」、「屋内球技」、「武道」、「その他」の５種類に分類することができる。これらの詳細をみると全部で22種目あり、軟式野球が最も多く、全体の35％をしめる。「屋外球技個人型」には野球やソフトボールが分類されるがこの2種目で全体の４０％を占めている。サッカーやハンドボールなどは「屋外球技団体型」、バレーボールやバスケットボールなどを「屋内球技」、剣道や柔道を「武道」に、これらに該当しないものを「その他」とした。活動内容の内訳と調査の回収状況を表２－３－２に示す。

②活動規模

②－１　活動参加者数

活動への参加状況を団員数でみると、平均団員数は約40人であった。これを活動内容別にみたものを表２－３－３に示す。「屋外球技団体型」は競技に必要な人数が多いため、参加人数も他に比べて多い。「武道」は個人競技にもかかわらず約50人と多い。280人という団体もあった。指導者1人あたりの子どもの数で比較すると最小の屋外球技個人型の3.8人と最大の武道の8.4人で2倍以上の差がみられた。

「屋外球技個人型」は人口に占める競技経験者が多く、指導可能な人材も多いことから指導者の確保が容易であるといえる。

②－２　参加者の年齢

参加者の年齢別の内訳を図２－３－３に示す。小学校高学年がもっとも多い。中学生は学校部活動との関係もあり少なくなっている。

親を含む地域住民などの参加が指導者数の1.5倍あり活動が地域に根付いている。

また、スポーツ少年団として組織づくりや指導者の体制に一定のルールが定められていることから、地域住民等も参加しやすいものと考えられる。

表２－３－２　活動内容分類

		屋外球技					屋内球技				武道						その他						
		個人型		団体型																			
活動内容の分類	活動内容	軟式野球	ソフトボール	サッカー	ハンドボール	ラグビー	バレーボール	バスケット	卓球	バドミントン	剣道	空手	柔道	少林寺拳法	なぎなた	日本拳法	複合	乗馬	体操	陸上	ボウリング	レスリング	ソフトテニス
	配布数	307		94			123				193						33						
	返却数	132	9	47	3	3	26	14	11	6	46	35	17	5	1	1	8	6	3	1	1	1	1
	合計	141		53			57				105						21						

表２－３－３　活動内容別の参加者数

		屋外球技		屋内球技	武道	その他
		個人型	団体型			
平均人数	団員数	36.0	61.0	29.7	47.6	44.3
	指導者数	9.5	9.2	4.7	5.7	9.0
団員数／指導者数		3.8	6.6	6.3	8.4	5.0

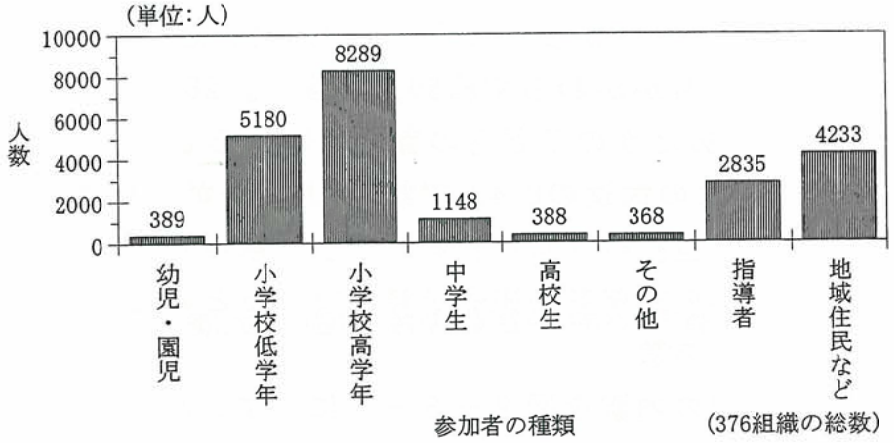


図２－３－３　参加者の内訳

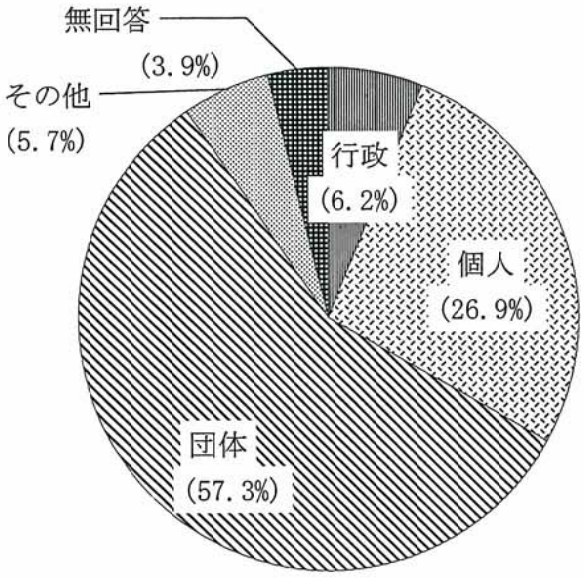
（２）組織運営

安定して継続的に活動を行うためには、一定の組織化が図られることや活動には資金の確保が必要である。そこで運営の母体と運営資金の確保の方法について集計した。

①運営母体

運営母体の種類を図２－３－４に示す。運営の母体は、団体が半数以上を占め、ついで個人が３０％となっている。

「スポーツ少年団」は、全国的な運営組織として東京に本部をもち、各県にその支部があるなど、子ども達とスポーツを行う上で、傷害保険や指導者の育成などの、２次的な外部要因について統一が図られている。このため、指導者等の役割分担も明確で、それぞれの活動組織については運営母体が団体・個人であっても安定的に活動できると考えられる。



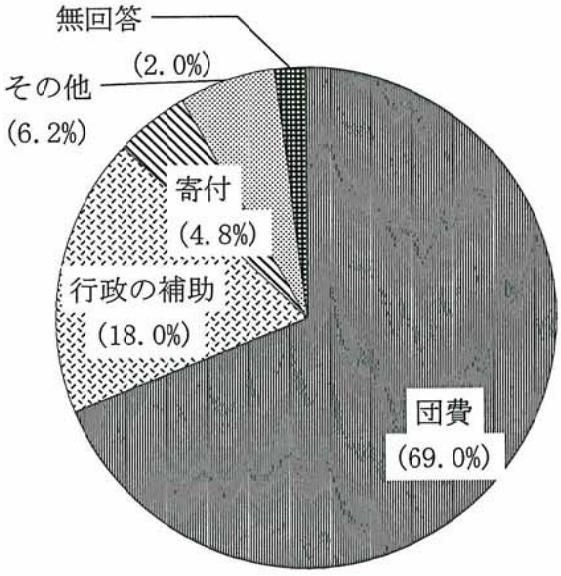
（サンプル数376）

図２－３－４　運営母体

②運営資金

運営資金を図２－３－５に示す。運営資金は団費のみが約７０％となっており、ほとんどが独立した活動組織であることが特徴である。行政からの補助を受けている組織は１８％となっている。

学校外活動を行う上で活動に必要な経費を、参加者の応分の負担である団費のみで賄えることが望ましく、運動系学校外活動においてはその傾向が強い。個々の具体的な支出にまで調査を行っていないが、運動系の活動は個人の持ち物が多く、活動に必要な設備そのものは利用施設にすでに整備されていることも影響していると考えられる。



（サンプル数376）

図２－３－５　運営資金

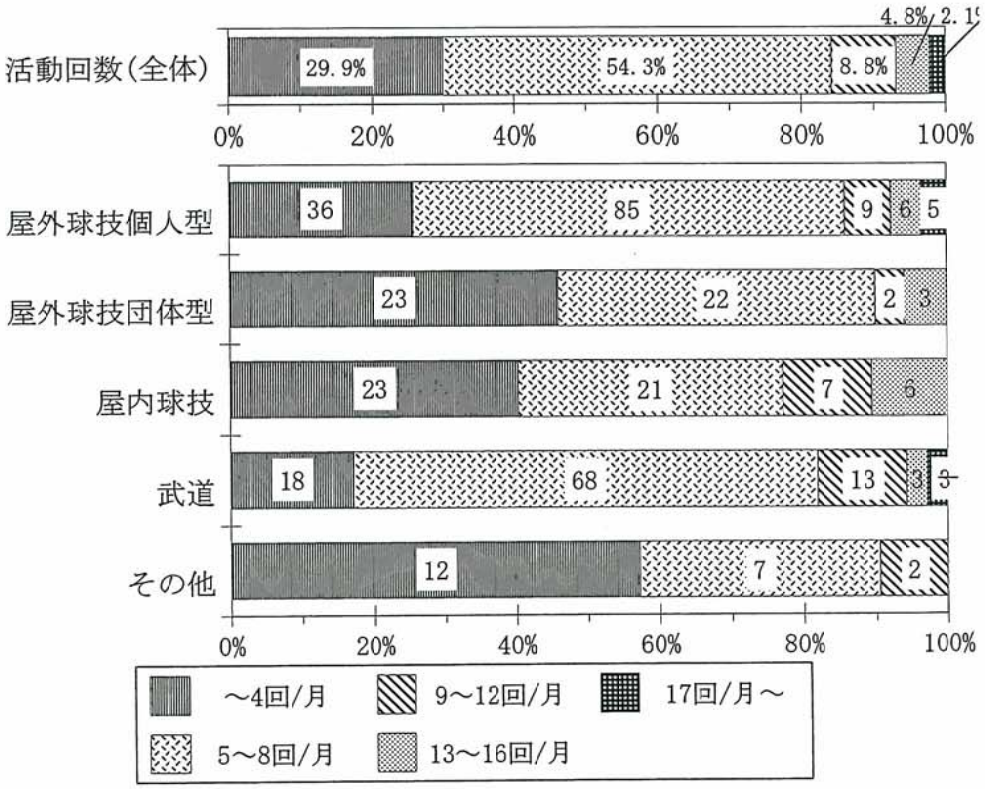
（３）活動回数

活動回数を集計し、活動回数と活動回数を活動内容別に表したものを図２－３－６に示す。

活動回数を全体でみると８回/月の回答が最も多く、平均活動回数は７．５回/月であった。全体に活動が活発である。

活動内容別でみると、屋内球技では１０回/月以上が約２５％もあり特に活発に活動している。屋外球技団体型では、約半数が４回/月の割合で活動している。屋外球技団体型はサッカーやラグビーなど、競技の成立に１０人以上必要な活動については活動回数が少ない傾向にある。

運動系の学校外活動においては、自分たちの成果が試合等を行うことによって明確になることから活動の目標を立てやすく、また定期的に練習を行うことが不可欠である。このため、活動回数も比較的多いものが多い。活動を定期的に行える環境が整っていると考えられる。



（サンプル数376）

図２－３－６　活動回数

２－３－３　利用施設

利用施設については、普段練習などに利用する場所と、公式試合等で利用する施設がある。本章において普段の練習で利用する施設を「通常利用施設」、試合等で利用する施設を「公式試合等利用施設」と呼び、それぞれどの様な施設を利用しているかを集計した。

（１）通常利用施設

最も活動に利用されているのは小学校施設でおよそ６５％が利用している。運動場や体育館などのスポーツに使われる施設の学校開放は進んでいる。中学校の利用は、活動の中心が小学生であること、部活動で利用されており施設開放の対象になっていない等の理由から少ない。

これらを活動内容別にみた通常利用施設の状況を図２－３－７に示す。

屋外球技は個人型、団体型にかかわらず、小学校施設を利用する割合が非常に高くなっている。これは、身近な施設が選定されていることも理由であるが、逆に活動種目を行える広さが確保できるのは小学校しかないとも考えられる。屋内で実施される球技や武道などの競技では公共の体育館の利用も多い。高校の施設やスポーツセンターの利用は少ない。また、武道では、武道館の利用は15％程度で、練習には体育館や小学校の施設など様々な場所が使われている。

通常利用施設は運動系学校外活動の場合、主に練習に利用されることから、規定の広さの確保より、子どもたちの近くにある身近な場所が優先的に使われている。

利用されている施設の一例を図２－３－８に示す。

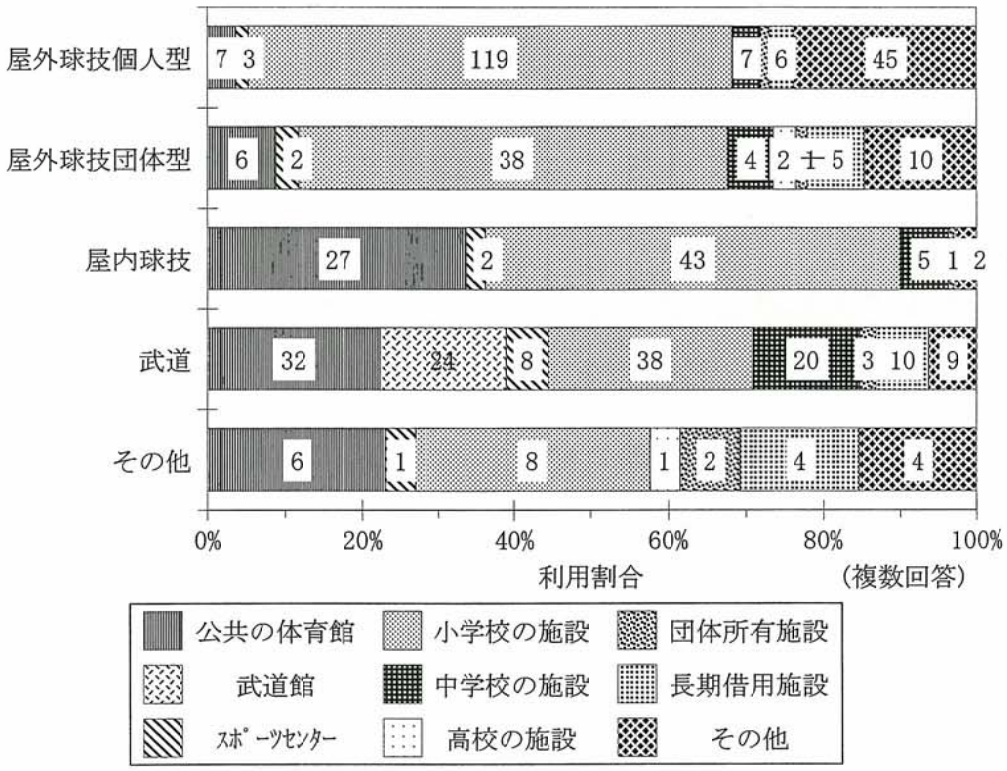

屋外球技個人型
7 3
119
7
6
45
屋外球技団体型
6
2
38
4
2 十 5
10
屋内球技
27
2
43
5 1 2
武道
32
24
8
38
20
3 10
9
その他
6
1
8
1
2
4
4
0%
20%
40%
60%
80%
100%
利用割合
(複数回答)
公共の体育館
小学校の施設
団体所有施設
武道館
中学校の施設
長期借用施設
ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ
高校の施設
その他

図２－３－７　通常利用施設

活動状況

休憩場所

利用施設の状況（屋外球技個人型）

活動状況

休憩場所

利用施設の状況（屋外球技団体型）

図２－３－８　利用施設の状況

（２）公式試合等利用施設

運動系学校外活動は、近隣で行われている他の組織との試合等を通じて練習の成果を競い合うことが多い。この際利用される施設を、公式試合利用施設として、利用施設の種類を集計した。

競技を行うに当たっては定められた大きさの競技場を利用する必要があること、近隣から複数の組織が集合して開催されることなどから、公共で整備されている専用のグラウンドや体育館等の施設が多く利用されている。活動内容別の公式試合利用施設を図２－３－９に示す。屋外球技においては小学校の利用が、個人型、団体型ともに３０％程度あるが、公共の施設すなわち市町村や県が設置しているグラウンドや野球場などが利用が多い。屋内球技では公共の体育館の利用が特に多い。

小学校の施設は、活動内容にかかわらず通常時に比べ半分程度しか利用されておらず、普段の練習には近くに存在し、活動に適しているが、試合の利用としては狭い、規定の大きさの競技場が設置できないなど不充分な点があるといえる。

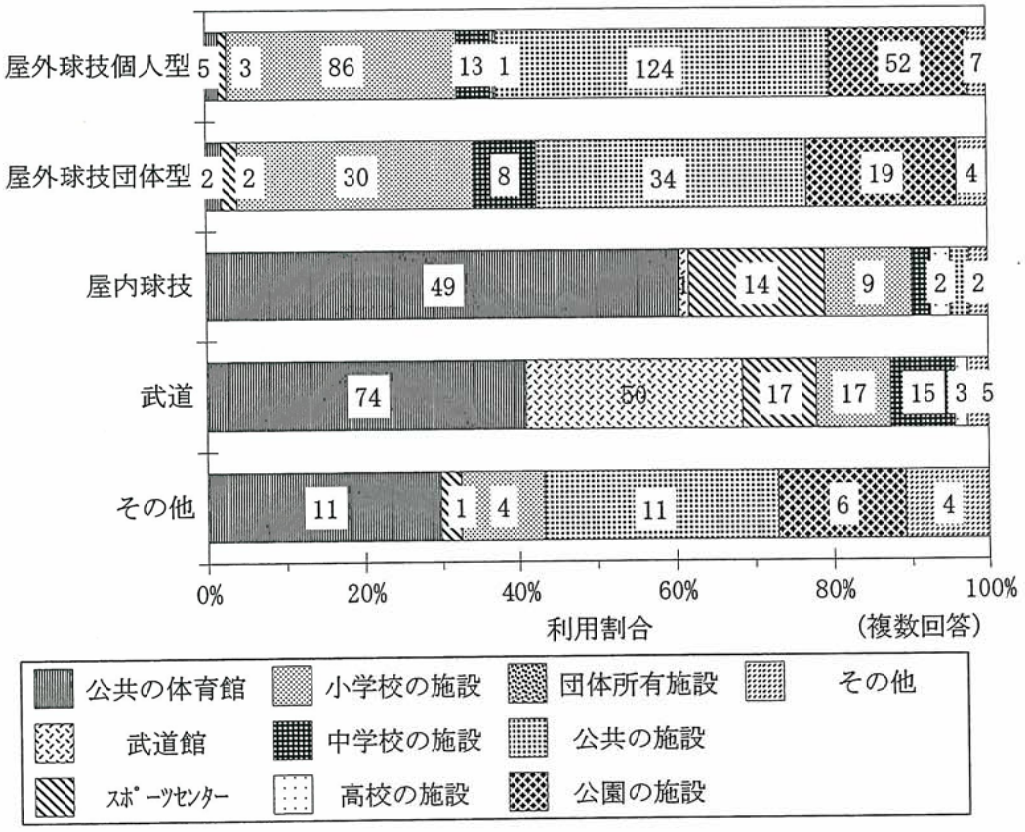


図２－３－９　公式試合利用施設

２－３－４　利用施設の評価

運動系学校外活動が目的にあった施設が使えているかどうかを把握するために、通常利用施設について代表者の利用評価を求めた。利用施設として求められる条件として「立地条件」、「代替性」、「空間条件」、「空間の機能条件」、「利用条件」、「その他」に分類して検討した。「立地条件」は交通の便など３項目、「代替性」は代替可能性と施設の選択性の２項目、「空間条件」として周辺環境や規模など６項目、「空間の機能条件」として駐車場など７項目、「利用条件」として利用目的など５項目、「その他」の項目として、活動や指導の満足度の２項目で評価してもらった。

（１）運動系学校外活動における利用施設評価

全回答者から得られた評価を、評価をした回答の割合で比較して、利用施設の現状を把握した。これを図２－３－１０に示す。

立地条件は半数以上がよいと評価している。

代替性については、施設の代替性で約半数が悪いと評価している。

空間条件である周辺環境や規模、雰囲気の評価は良い評価が多い。施設の広さの評価はやや悪い。

空間の機能条件である道具・備品等の施設自体の評価はやや悪い。

利用条件は、利用料金や手続き、利用許可はよいと評価しているところが多く、また近隣の苦情もあまりない。

その他である、活動と指導の満足度はよい評価が４割を超えている。

立地条件は、文化系に比べ良好な評価である。文化系と比較した場合、他の条件については目立った差はみられない。

小学校施設の利用が多いということを考えると、立地や環境などは当然良いが、施設の規模や備品の充実度は満足されていない。しかし、現在利用している施設に不満な点はあるが代わりの施設がないということがうかがえる。

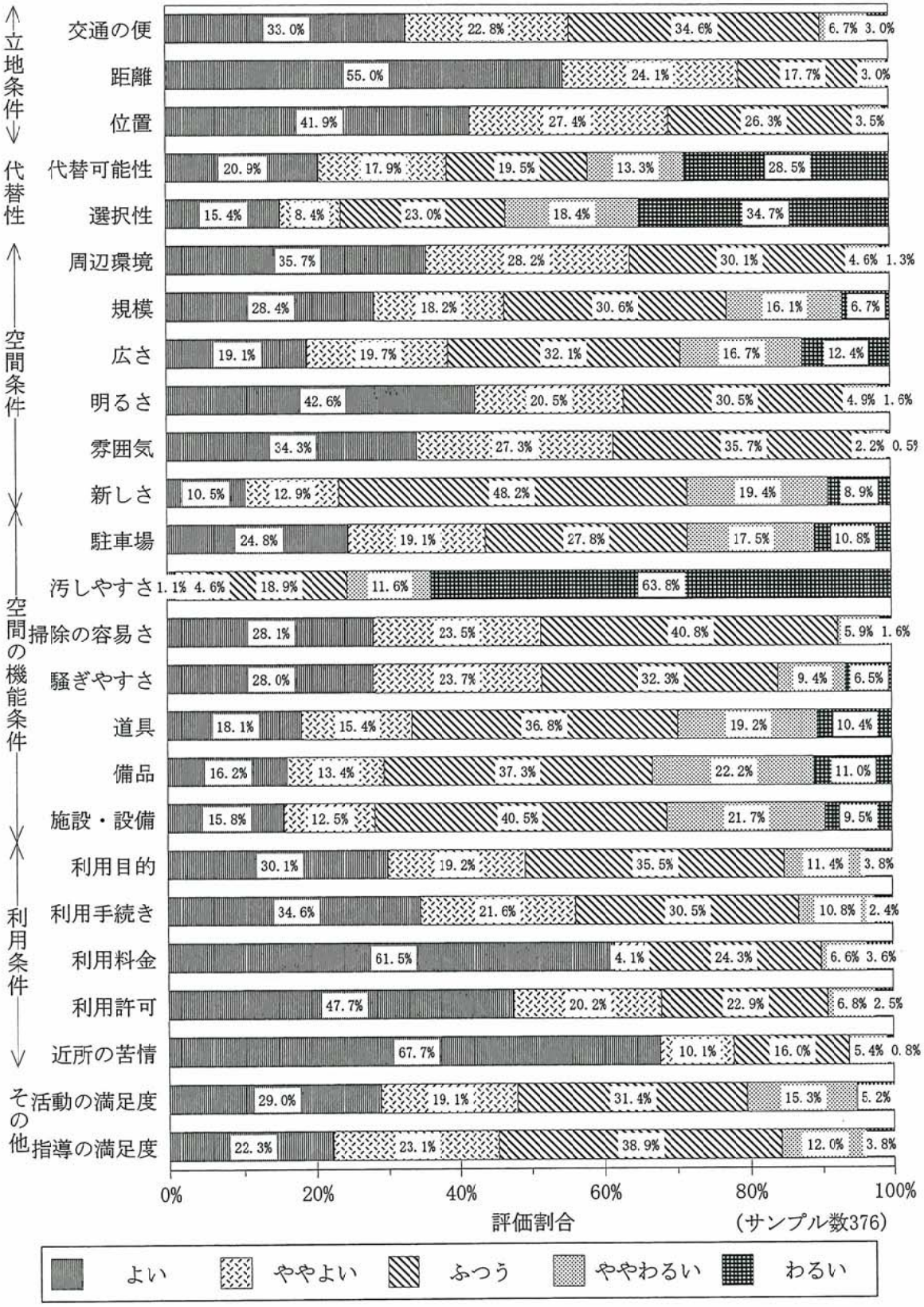


図２－３－１０　通常利用施設の評価

（２）利用施設評価の構造

利用施設の現状について、２５項目の評価に基づき特徴を述べてきた。さらにこの評価の傾向が似ているものを集約し、どのような評価の構造となっているかを明確化するために、多変量解析を用いて考察する。

全回答者の各項目への評価を変量として因子分析（主因子解法）を行った。

その結果、５軸を得ることができた。これを表２－３－４に示す。

Ⅰ軸には「雰囲気」「明るさ」「掃除の容易さ」「周辺環境」といった施設や周囲の環境に関する項目が集約され『環境性』を表す軸といえる。寄与率は３０％である。

Ⅱ軸には「備品」「道具」「施設設備」が集約され施設の『性能性』を表現している軸である。寄与率は８％であった。

Ⅲ軸には「活動の満足度」「指導の満足度」「利用目的」といった利用行為に関する項目が集約され『利用性』をあらわしている。寄与率は７％である。

Ⅳ軸に「距離」「位置」「交通の便」に代表される施設へ通うための項目が集約され『通館性』を表している。寄与率は６％である。

Ⅴ軸に「選択性」「代替可能性」が集約され『代替性』を表している。寄与率は５％である。これら５軸で全体の利用評価の５７％が説明できる。

文化系の場合と、軸の順位が入れ替わっている。Ⅰ軸、Ⅱ軸に「環境性」、「性能性」を得たことは同一であった。しかし、Ⅲ軸では運動系は「利用性」が重視されているが、文化系では「通館性」となっている。運動系は、小学校利用が多く、普段通い慣れた場所であることが、順位の入れ替わった要因であると考えられる。

Ⅰ軸の環境性は評価も全体的によく、子どもが活動しやすい環境が得られていると考えられる。

表２－３－４　通常利用施設の評価構造

	Ⅰ軸 環境性	Ⅱ軸 性能性	Ⅲ軸 利用性	Ⅳ軸 通館性	Ⅴ軸 代替性
雰囲気	0.83	0.12	0.10	0.12	0.08
明るさ	0.68	0.12	0.08	0.19	-0.04
掃除の容易さ	0.58	0.30	0.16	0.14	0.11
周辺環境	0.50	0.13	0.17	0.25	0.36
新しさ	0.49	0.22	0.20	-0.11	0.05
広さ	0.48	0.19	0.41	-0.12	0.29
騒ぎやすさ	0.42	0.05	0.23	0.08	0.09
駐車場	0.41	0.31	0.25	0.08	0.26
備品	0.22	0.89	0.18	0.09	0.14
道具	0.22	0.86	0.22	0.05	0.09
施設設備	0.29	0.71	0.30	0.05	0.23
活動の満足度	0.24	0.14	0.77	0.10	0.09
指導の満足度	0.18	0.09	0.70	0.11	0.05
利用目的	0.42	0.39	0.46	-0.03	0.14
規模	0.42	0.24	0.45	-0.04	0.25
利用手続き	0.14	0.27	0.43	0.21	-0.07
利用許可	0.05	0.18	0.37	0.22	0.01
近所の苦情	-0.20	-0.13	-0.25	-0.16	-0.06
距離	0.06	0.02	0.08	0.74	0.16
位置	0.23	0.09	0.10	0.69	0.18
交通の便	0.18	0.06	0.04	0.59	0.09
利用料金	-0.02	-0.01	-0.16	-0.28	0.08
汚しやすさ	0.10	0.01	0.00	-0.18	0.10
選択性	0.11	0.12	0.08	0.05	0.69
代替可能性	0.08	0.10	0.02	0.05	0.65
固有値	7.60	2.09	1.65	1.51	1.32
寄与率	0.30	0.08	0.07	0.06	0.05
累積寄与率	0.30	0.39	0.45	0.51	0.57

２－３－５　利用施設と問題点

利用施設を今後選定する場合に必要な項目を選定してもらうとともに、活動や利用施設の不満点や要望点を自由に記述してもらった結果について、前節で得られた「環境性」「性能性」「利用性」「通館性」「代替性」の５つの評価構造を用いて、施設利用の差となる屋外か屋内かを考慮して整理した。これらから導き出される施設の整備要求を、「活動について」、「施設全体について」、「設備について」の３つの観点から考察する。これを運動系活動の利用施設の整備要求として図２－３－１１に示す。

（１）活動について

運動系学校外活動においては利用性の問題が多くあげられた。小学校施設の利用が多く、学校開放が進んでいることが裏付けられた反面、ほとんどの組織の活動単位の基本が小学校区であり、複数の内容の異なる団体が同一小学校の利用を希望するため、同じ時間帯に共用することが多く、十分な活動スペースがとれない場合がある。また、土日の学校開放は大人も同じ施設を使うため、そちらの利用が優先されるという問題点も指摘された。武道館や公共体育館などの公共施設利用の場合、活動内容にあう空間となるため条件はよいが利用料金が高い。

（２）施設全体について

施設に関しては環境性に関する項目において問題点があげられた。小学校施設は場所によっては種目規定の活動スペースが確保できない場合がある。利用性との関係もあるが、広い場所の確保は全体として困難である。

（３）設備について

設備に関して性能性に関する項目で問題点があげられた。施設自体の問題として、水はけや照明の照度があげられいる。また、屋外施設では、木陰などの休憩できる場所やベンチや防球ネットなどの設置型設備に対する要望が多い。

以上のことをまとめると、学校開放施設をふくめ、全体として施設の絶

対数が不足していると考えられる。体育施設は、大人も子供も多くの人の利用が考えられ、また、そこで行われる内容も多岐にわたることから、内容による使い分けや、共有の方策を探り、小学校施設に限らず可能な限り利用できる施設を増やすことが必要である。また、グラウンドのみの整備だけでなく、植栽やベンチ、日よけといった関連する施設を利用者に配慮して計画をする必要があるといえる。

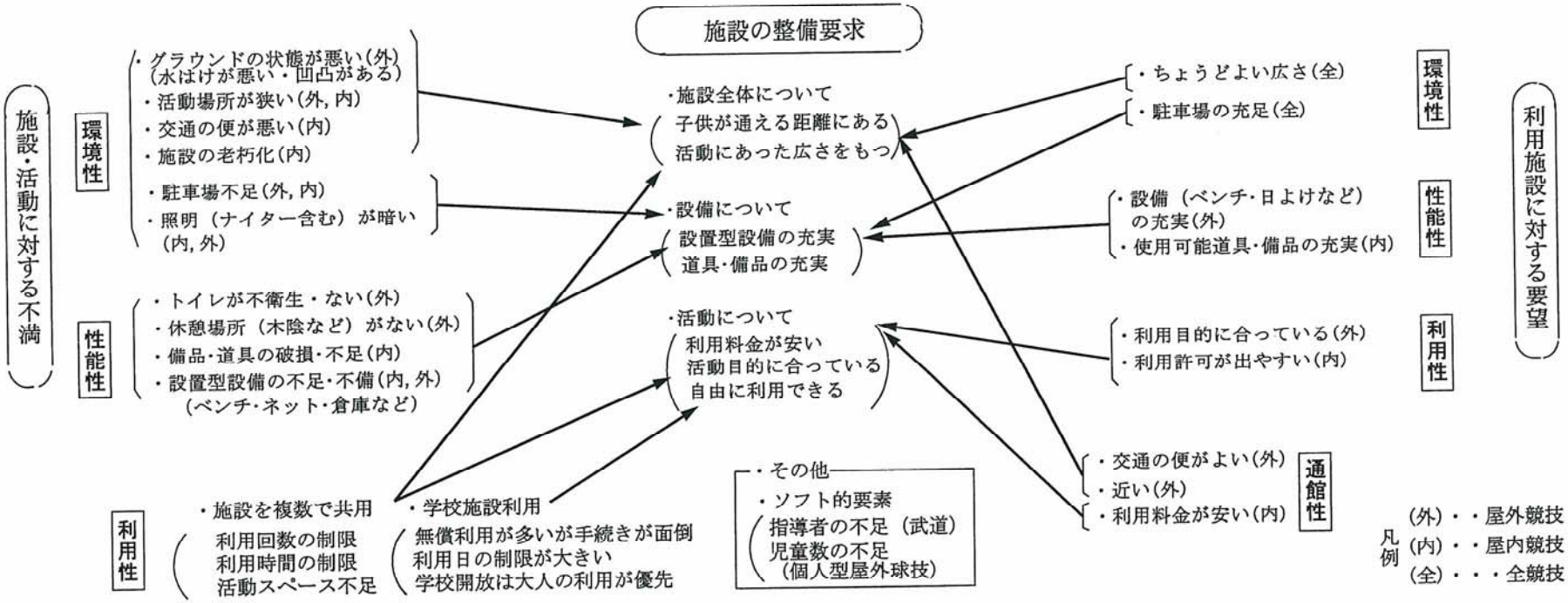


図２－３－１１　運動系活動の利用施設の整備要求

第４節　まとめ

文化系と運動系に分けて愛知県内の学校外活動について調査を行った結果から、学校外活動の実態と利用施設に関する現状について以下のことが判明した。さらに、現状から導き出される整備の条件について考察する。

（１）学校外活動の現状について

①活動組織について

組織に関しては運動系の方が文化系に比べ条件が良く、人数、指導者数が多く、指導者１人あたりの子どもの数も少ない。また組織の独立性も高く、ほとんどが団費のみで組織の運営が可能で活動が盛んであるといえる。しかし、参加者数が子どもの数の減少に伴い減少傾向にあることは、文化系・運動系に関わらず共通の問題である。文化系では活動の継続のため、社会の中での活動内容の明確な位置づけが望まれる。

②利用施設について

利用施設は、文化系は地域集会施設を利用する場合がほとんどであるが、運動系では小学校が多数を占める。これは、施設の管理を分離しやすい体育館、グラウンドなどの開放は進んでいるが、教室等は利用できる体制が整備されていないためであると考えられる。また、掃除道具や整備道具の不備や不具合の指摘も多くあり、施設の利用と関連するこれらの備品の管理についても考慮する必要がある。地域集会施設は地域の人々との共用となるため、利用回数の制限があり、活動に影響を与えている。また、小学校の運動施設においても、地域住民が野球などの運動を行うのに必要な広い場所が他にほとんどないため、大人の利用が優先となる場合がある。

（２）整備の条件について

整備の条件を導き出すために、学校外活動組織の実態と利用施設の現状を文化系と運動系に分けて、それぞれ整理する。さらに、それぞれの項目に対応する整備の条件を「活動について」と「施設について」の２つの観点からまとめた。文化系及び運動系学校外活動の実態と整備の条件を図２－４－１に示す。

①活動組織

①－１文化系学校外活動

文化系学校外活動は、目的や内容といったソフト的な要素を充実させ、いかに地域住民との距離を縮め、アピールするかが重要である。施設の面から考えると、空間の専門性よりも、フレキシブルな空間と自発的な活動を誘発するため、定期的に利用できる固定した場所の確保が望まれる。

①－２運動系学校外活動

運動系学校外活動は、競技人口が多く、指導者の確保が容易であり、活動を継続する潜在的な可能性が高く、活動も活発であることから、利用可能な施設の数を増やしてやることが重要である。

②利用施設

・文化系学校外活動

子どもが一人で通える範囲にあることを前提とし、活動目的にあった広さを確保できること、利用料金を低く設定し、継続的、定期的に使用することができる必要がある。

利用の多かった公民館を、市町村全体を一つの単位として連携させ、それぞれに専門性を付加することによって、様々な活動に対応できる施設とでき、子どもと地域住民が共に幅の広い活動を行うことができるといえる。

・運動系学校外活動

競技の行える広さを確保できることが必要である。

利用可能な施設数を増やすことが必要である。

・共通

地域あたりの施設数、施設の管理、空間の質的側面から、学校施設の利用は、大変有効である。

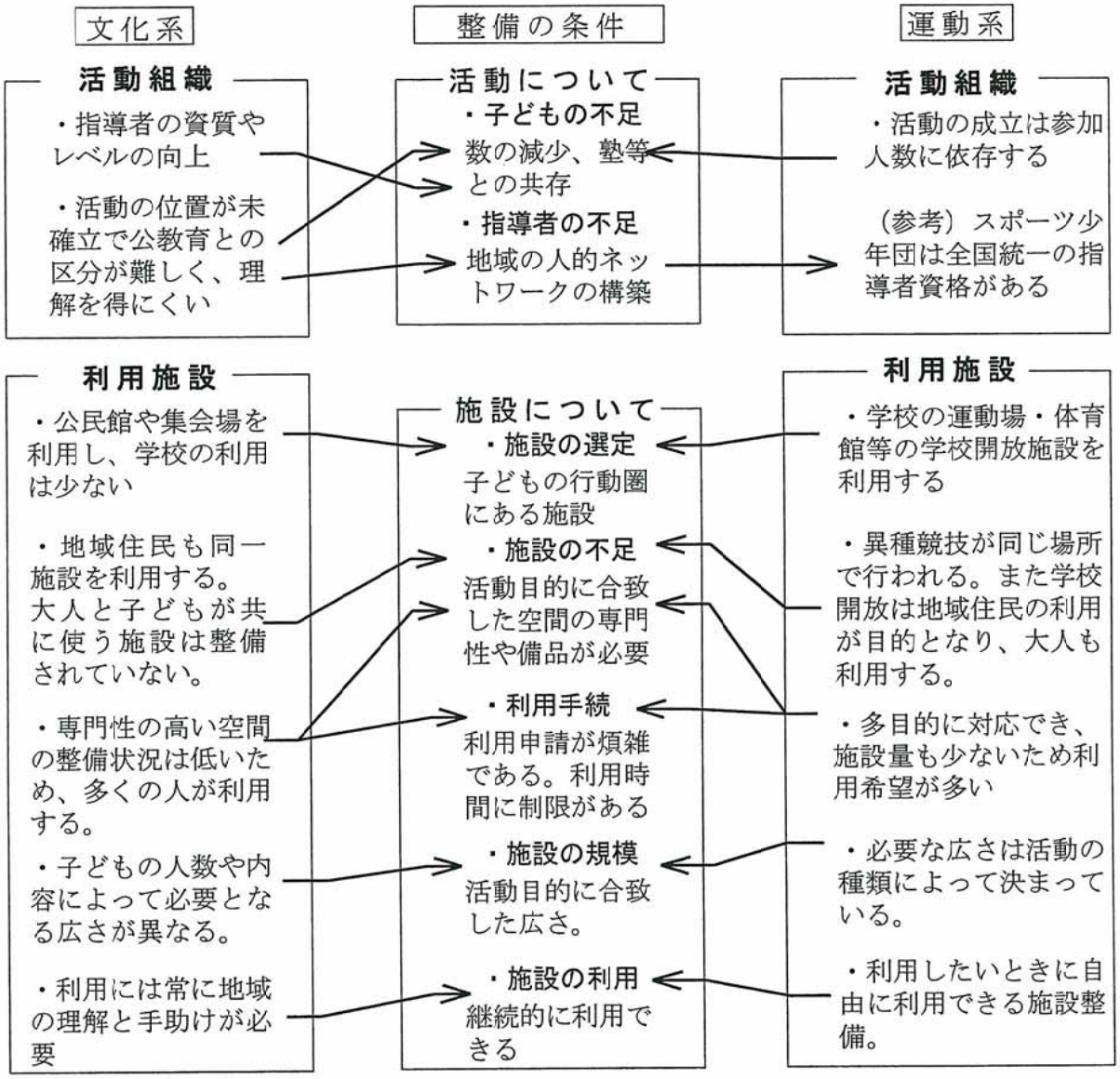


図２－４－１　学校外活動の実態と整備条件

〈参考文献〉

1．地域少年少女サークル活動の手引き　－平成４年度地域少年少女サークル活動促進事業　愛知県教育委員会　平成５年３月

2．地域少年少女サークル活動の手引き（その２）、－平成５年度地域少年少女サークル活動促進事業、愛知県教育委員会、平成６年３月

3．地域少年少女サークル活動の手引き（その３）、－平成６年度地域少年少女サークル活動促進事業、愛知県教育委員会、平成７年３月

4．平成10年度日本スポーツ少年団登録団名簿　＜北信越・東海ブロック版＞　財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団　平成11年1月

5．平成9年度スポーツ少年団育成事業報告書 スポーツ少年団年鑑1997/4～1998/3　財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団　平成10年6月

6．社会体育の実態と課題　愛知県教育委員会体育スポーツ課　平成11年度

7．愛知の公民館一覧　愛知県公民館連合会　平成11年度

8．子どもの遊びの成立にかかわる空間の構成要素と性質に関する研究-京都市内での事例分析から-　室崎生子　市岡朋子　日本建築学会計画系論文報告集　405号　p117～127　1989.11

9．子どもの遊び集団形態からみた空間利用行動に関する研究　-京都市内での事例分析から　その２-　室崎生子　市岡朋子　日本建築学会計画系論文報告集　422号　p77～87　1991.4

10．こどものあそび環境の構造の研究-あそび場の構造の研究-　仙田満　宮本五月夫　日本建築学会論文報告集　303号　p103～109　1981.5

11．生活時間と階層的視点から見た余暇性向とグループ活動参加の動向-集会関連施設の配置計画に関する研究　その２-　桜井康宏　日本建築学会計画系論文報告集　349号　p32～41　1985.3

12．グループ活動類型別にみたグループの性格および活動形態と集会関連施設との対応関係　-集会関連施設の配置計画に関する研究　その４-　桜井康宏　日本建築学会計画系論文報告集　362号　p74～85　1986.4

13．余暇生活グループ化の展開過程と施設要求の連関に関する事例的研究　-集会関連施設の需要構造論に関する基礎的研究-　桜井康宏　日本建築学会計画系論文報告集　371号　p56～67　1987.1

１４．校庭開放における運営方式の機能と利用圏形成メカニズムー学校開放による公共スポーツ施設の整備条件に関する研究　その１－　青木正夫　上和田茂　日本建築学会論文報告集　310号　p107～117　1981.12

１５．校庭開放における＜複線的運営－重層的配置＞方式の有効性　－学校開放による公共スポーツ施設の整備計画に関する研究　その２－　青木正夫　上和田茂　日本建築学会論文報告集　329号　p87～95　1983.7

第３章　トワイライトスクールの活動の実態と施設利用

第１節　はじめに

本章においては、名古屋市の「トワイライトスクール」をモデルケースとして、活動実態と施設利用について明確にする。さらに、他の自治体への応用の可能性を探ることを目的とする。

（１）トワイライトスクールを選定した経緯

前章で学校外活動を活動内容で文化系と運動系に分類して調査した結果活動場所に関して、

１，多くの学校外活動が活動内容に応じて活動場所を選択し確保している。

２，活動で利用される場所は小学校などの公共施設が多い。

３，活動場所の代替性がない

ことが判った。

公共施設に依存している現在の活動場所は、各自治体の地域施設の整備状況によって、活動場所の確保に制約を受けることが想定される。

このため、地域の施設整備状況を把握することが必要であると考え、実際に活動場所や活動可能な場所の調査を行っていたところ、小学校を活動場所として整備して、効果的に学校外活動を推進している事例があった。「トワイライトスクール」と名付けられたこの活動は名古屋市が平成９年度から小学校を選定し実施しているもので、順次実施校を増やし市内全域で行われている。

（２）小学校を利用する学校外活動の全国的な流れ

近年、大都市やその周辺では子どもの遊び場の減少と子どもが被害者となる犯罪の増加から、安全な遊び場の確保が求められている。

子どもが街の中で自由に遊ぶことができないため、小学校の空き教室や放課後の小学校を遊び場の代替施設として利用する試みが始まっている。東京都や神奈川県など首都圏では、学校開放と学童保育を融合させた形態のものや、児童館を拠点に遊び場として整備した取り組みも多くみられる。

遊び場の提供にとどまらず、横浜市の「はまっこ」や大阪府の「児童いきいき放課後」や千葉県市川市での「ビーイング」など、活動内容を提供し、多くの人々と一緒に体験する事を通して異学年や世代間の交流

を進める同様の試みも行われている。

（３）小学校を学校外活動の活動場所とする利点

学校外活動の活動場所を小学校として明確にすることは、以下の点で効果的である。

１，活動場所を常に確保することができる

２，子どもは自らの通う小学校で定期的に様々な活動に参加できる。

３，地域施設の整備状況に影響を受けない。

これは前章で把握した利用施設の整備に関して一定の方向性を与えるものであり、学校外活動の先駆的事例として考えられる。

さらに、小学校での活動は、ほかの自治体においても応用性の高い活動であると考えられる。

（４）本章の構成

第１節では、トワイライトスクールを調査の対象として選定した経緯を述べる。

第２節では、名古屋市におけるトワイライトスクールの実施と背景について述べる。

第３節では、トワイライトスクールの実施環境を整理し、その特徴を明確化する。

第４節では、トワイライトスクールの活動実態と施設利用について調査し、活動の現状を把握する。

第５節では、第２節から第４節までの結果から、トワイライトスクールの有効性と他の自治体への応用性について考察する。

第２節　新しい試みとしてのトワイライトスクール

（１）施設開放とトワイライトスクール

トワイライトスクールの実施に至る経緯は、学校施設の一般開放と既存施設の有効利用、子どもの活動拠点の創設の３つの視点から捉えることができる。名古屋市教育委員会がまとめた「教育要覧」(参考文献５)及び「中学校開放のあらまし」(参考文献６)などからトワイライトスクール実施に至る経緯について以下にまとめた。

①学校施設の一般開放

名古屋市では、生涯学習や社会教育を目的とした小学校施設の施設開放が昭和３０年頃から進められてきた。当初は、小学校の運動場を開放し、市民のスポーツの場として提供していた。昭和４０年代に入ると、高度経済成長に伴い中部圏の中心都市として、また自動車や繊維といった工業生産の担い手として多くの若年労働人口が流入した。これに伴い住宅地開発が盛んに行われ、郊外の丘陵地においても急速に都市化が進んだ。このため急増する勤労青年の交流の場としてスポーツが行える施設を確保することが必要となった。市内各区毎に勤労青少年施設が建設されるとともに、中学校施設の一部を勤労レクリエーションセンターとして位置づけ、学校開放することにより需要に応えてきた。昭和５０年代にはいると、人々の暮らしが豊かになり、今度は余暇や健康に対する関心からスポーツの場の拡充が求められることとなった。そこで一般の市民を対象としてほとんどの小学校の運動場や体育館が開放され、市民のスポーツ等の場として広く利用されることになった。(参考文献6)

②既存施設の有効利用

近年、公共工事に対する市民の意識の高まりをうけ、施設建設を目玉とした政治手法や、施設整備を中心とした行政運営に対して批判が高まり、新規の施設建設が困難となった。地球環境保全に対する意識の高まりによって、施設の新設より有効活用が求められている。また、自治体における税収の減少によって、過去に建設した施設の建設費の償還や維持運営費の確保が困難となってきている。このような市民の意識の変化と財政力の低下により、文化施設はもとより、小学校も地域の中で有効に利用する方策が求められている。

③子どもの活動拠点の創設

子どもの遊び場の減少は、首都圏のみならず名古屋市においても問題で、急激な人口増加に対応する公園等の整備は困難であった。昭和５０年代以降は、小学校の運動場を長期の休業日や土曜の午後などには子どもの遊び場として開放し利用してきた。一方、平成８年度から開始された学校５日制の導入を契機として、子どもが地域で活動できる時間が増え、新たな子どもの活動拠点の整備が求められることとなった。平成９年度に名古屋市教育委員会は「放課後の生活実態調査」(参考文献7)を実施し、子どもの放課後の生活実態を把握し、子どもをどのように地域との関わりを持たせていくかを検討した。その結果、子どもに様々な活動プログラムを提供し、子ども達が自主的に学ぶことができ、また学年を超え、地域の人々とも直接交流できる活動を施策として実施することになった。(参考文献５)

このように「学校施設の一般開放」「既存施設の有効利用」「子どもの活動拠点の創設」の観点から、子どもの学校外活動として「トワイライトスクール」が実施されることとなった。トワイライトスクールの概要を以下に示す。

トワイライト・スクールとは(参考文献５)

活動目的	子どもたちが学年の異なる友達と自然に遊んだり、地域の大人たちとの交流を通して、子どもたちの自主性、社会性、創造性などを育むこと	
活動対象	児童（希望者）	
活動場所	放課後学級ルーム　体育館　運動場等	
活動時間	平日	授業終了後～午後６時
	土曜・長期休業日	午前９時～午後６時
実施主体	名古屋市教育委員会	
施設管理	（財）名古屋市教育スポーツ振興財団	

（2）トワイライトスクールの概要と概念

①トワイライトスクールの概要（参考文献５）

トワイライトスクールは学校の授業が終了した後の施設を活用し、子ども達が異学年交流や体験活動を通して、自主性や創造性・社会性を育む事を目的とした子どもの活動である。平成９年度にまず調査研究として２校からはじまり、順次整備が進み平成14年９月現在では１０３校で実施されている。活動に参加を希望する児童は誰でも参加でき、活動場所は学校内にある放課後学級ルーム（プレイルーム）を中心とし、活動の内容に応じて体育館や運動場、プールなども利用されている。平日は授業終了後から午後６時まで、土曜や長期休業日は午前９時から午後６時までと、いつ訪れても何らかの活動に参加できる体制が作られている。市の教育委員会が主体となってこの事業を行い、公共施設の管理を受託している外郭団体がそれぞれの学校ごとに管理者をおき、各学校ともこの管理者が施設管理と子ども達を監督し、活動を中心的に指導する役割を担っている。活動プログラムはＰＴＡや地域の人々が協力して決定し、指導も行っている。このため学校により活動プログラムは特徴があるものとなっている。

②本研究におけるトワイライトスクールの位置づけ

小学校においては同学年の子ども達と先生という「ヨコ」の関係が構築されている。トワイライトスクールによって子どもは同学年の友達のみならず学年の異なる子ども達と「タテ」の関係のなかで共同して活動体験を行う。さらにそこには地域の大人が指導者として関わりを持つことによって地域との接点となる。小学校施設を中心として子どもが「タテ」「ヨコ」「地域」と関係を構築することができる。

本研究においてはトワイライトスクールを学校外活動の１つであると捉えて、新しい試みとしてその考え方を整理すると次のとおりとなる。

教育の場としての小学校は教育委員会が直接の管理者である。トワイライトスクールは教育委員会の元で、各トワイライトスクール毎に個々に委託された管理者によって運営され地域と連携を図っている。子どもを中心に捉え、小学校・トワイライトスクール・教育委員会などトワイライトスクール実施の体制を模式化すると図３－２－１に示す概念図のとおりとなる。

③トワイライトスクールの実施状況

トワイライトスクールは名古屋市の教育施策として位置づけられているため、全市的に実施されているものである。小学校の新設や統廃合による小学校の建設においては、トワイライトスクール実施のための空間が設計の中に盛り込まれている。また実施に当たっては、既存の小学校施設の中に活動場所となるスペースを整備するために改修工事が必要であることから、全ての小学校で一斉に実施することは困難であった。

そこで、トワイライトスクールの実施状況を名古屋市の区毎に、実施校数を区内の小学校数で除してその割合により比較することにした。平成１４年９月現在のトワイライトスクールの実施状況と本章で行った実態調査の対象校の位置を図３－２－２に示す。各区により実施状況に差がある。市中心部で実施率が高く、南部では今後の整備が待たれる状況である。

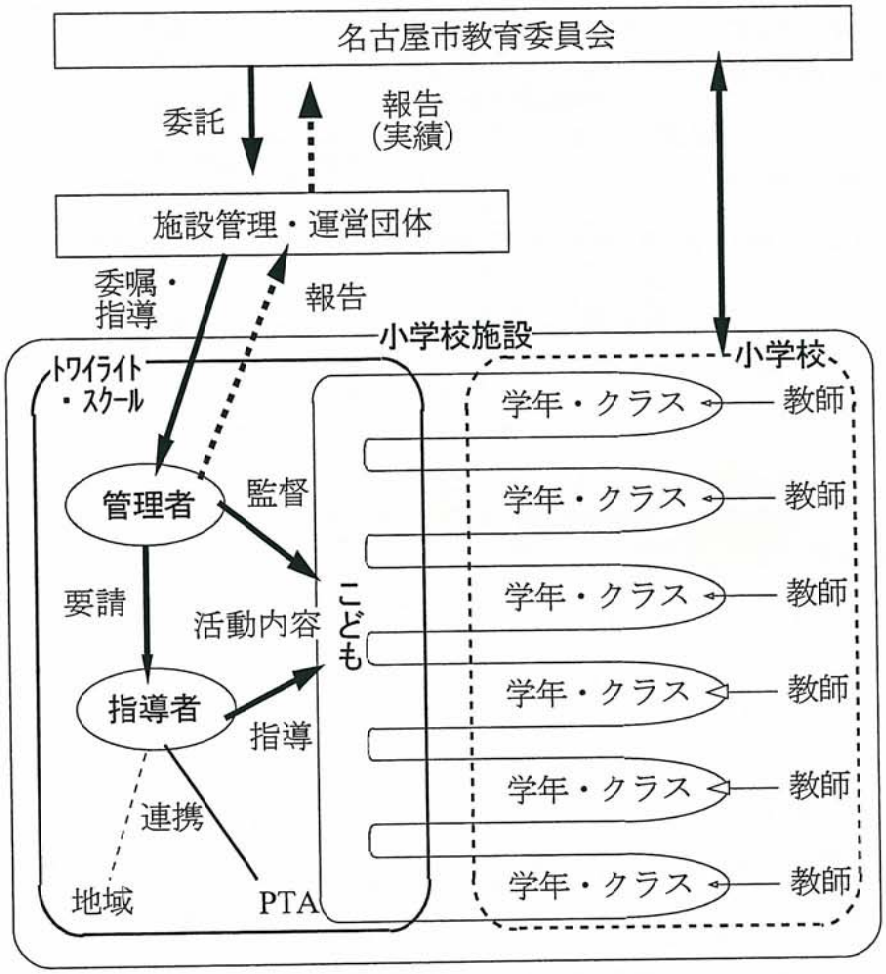
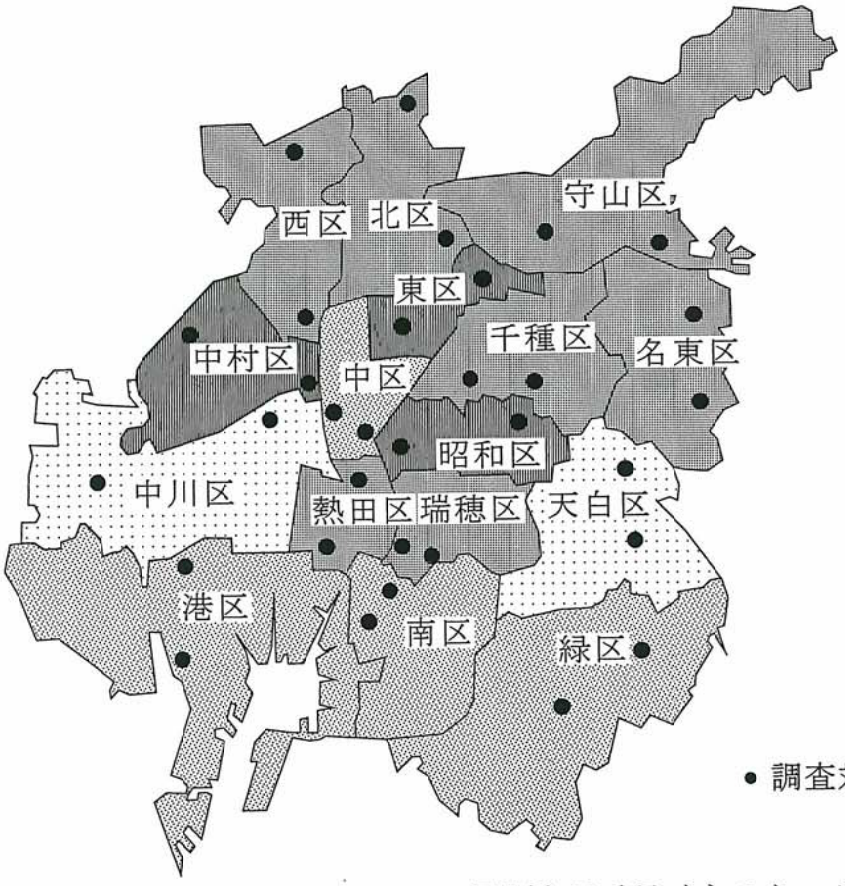


図３－２－１　トワイライトスクール概念図



全小学校数　282校
うち実施校　103校
(平成14年9月14日現在)

区別トワイライトスクール実施率
(実施校／学校数)

- 50%以上
- 40%以上50%未満
- 30%以上40%未満
- 30%未満

(データ出典：教育要覧 (参考文献5))

図３－２－２　名古屋市内の実施状況

（3）トワイライトスクール実施校の例

トワイライトスクールは、既存の小学校の校舎やグラウンド、体育館などを利用して実施されている。しかしその活動は教育の現場である小学校とは完全に区分されている。施設の管理や利用者の動線計画において空間的にも区別される必要がある。名古屋市教育委員会よりトワイライトスクールの全実施校の学校平面図の提供を受けて、トワイライトスクールの空間構成について分析した。多くの実施校で小学校の管理部門である教職員室とは別にトワイライトスクール専用の事務空間が設けられている。さらに活動の中心となるプレイルームが整備されている。また更衣室、倉庫などの付属する室を持つところもある。利用時間が小学校の放課後となることから、トワイライトスクール専用の出入口を設け、直接活動に参加できるようになっている。

トワイライトスクールの小学校における位置関係に着目し、その配置と平面の構成を簡略化して表したものを図３－２－３にトワイライトスクールの構成として示す。

トワイライトスクールで利用される場所は活動内容によって異なる。屋内ではプレイルームを中心に活動している。それに加えて音楽室や図書室を利用しているところもある。屋外の活動にはグラウンドやプール、屋内運動場が利用されている。

既存の小学校施設を改修し実施しているため各小学校の実状により整備の方法が異なる。活動の中心となるプレイルームは、利用されていない普通教室や特別教室などがあてられ、床材をカーペットや畳に改修し、空調設備の導入やコンセントの増設などが見られる。事務空間が室として整備できない場合は、プレイルーム内の一部に事務室が設けられている。１階部分にプレイルームが整備されている場合が多いが、２階にあるものもあった。また、プレイルームの大きさも一様ではない。事務空間以外は小学校の利用と共用する事が前提となる。このため特別教室との連携を図ろうとする場合、プレイルームの設置位置によっては独立してしまい、小学校側の区画に含まれいる特別教室が利用できない場合もある。普通教室は棟で分かれている場合が多く、トワイライトスクールから利用することはできず、小学校の他の日常部分への影響がないように配慮されている。

また、トワイライトスクール実施が決定された後に設計され、あらかじめトワイライトスクールおよび施設開放を行うことを前提に建設され

た小学校の平面図を図３－２－４に、トワイライトスクールの現状を図３－２－５から図３－２－８に示す。この小学校においては、トワイライトスクールのプレイルームと音楽室、図書室などが一体的に配置され相互の利用が図れるようになっている。

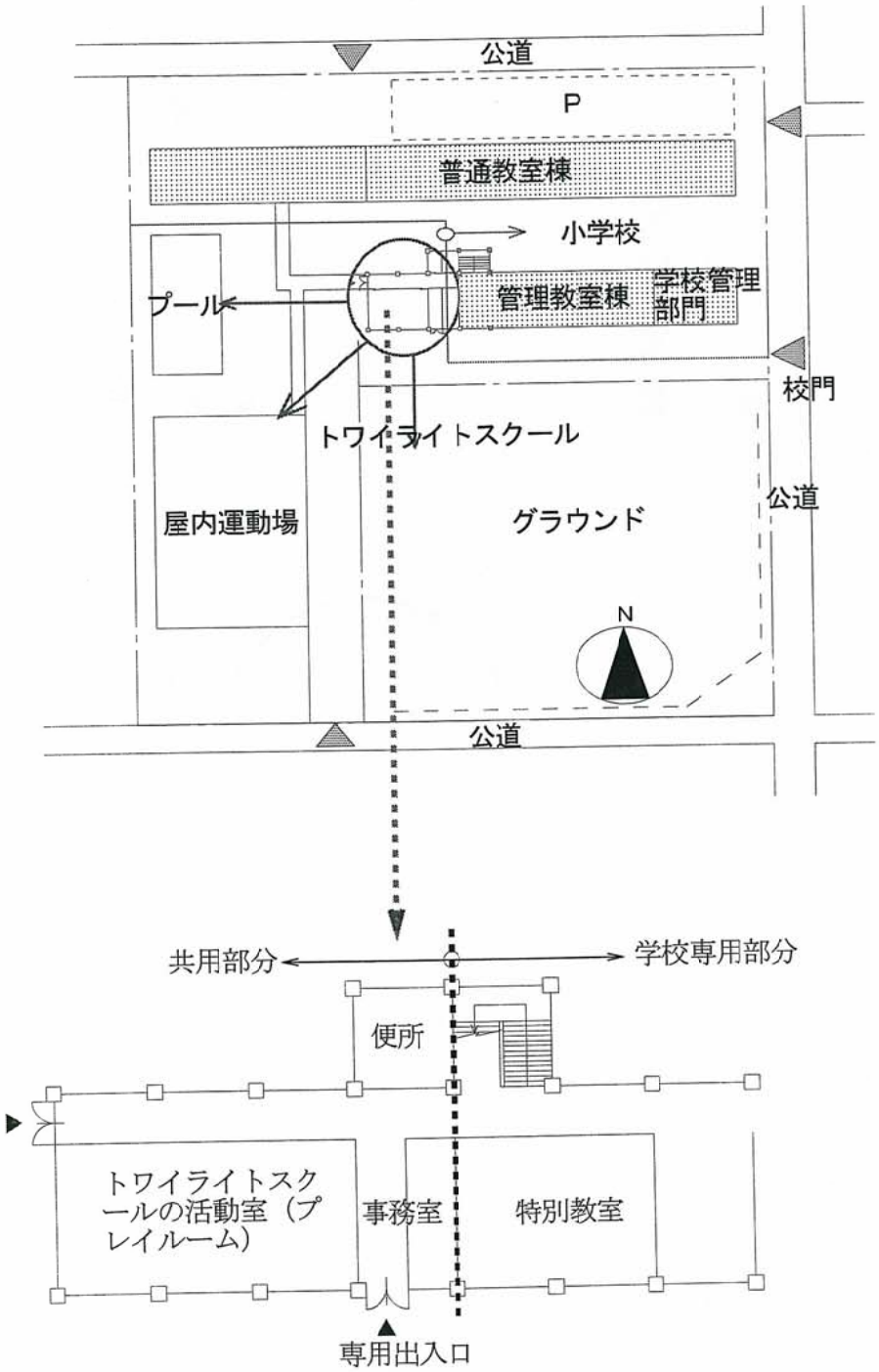


図３－２－３　トワイライトスクールの構成

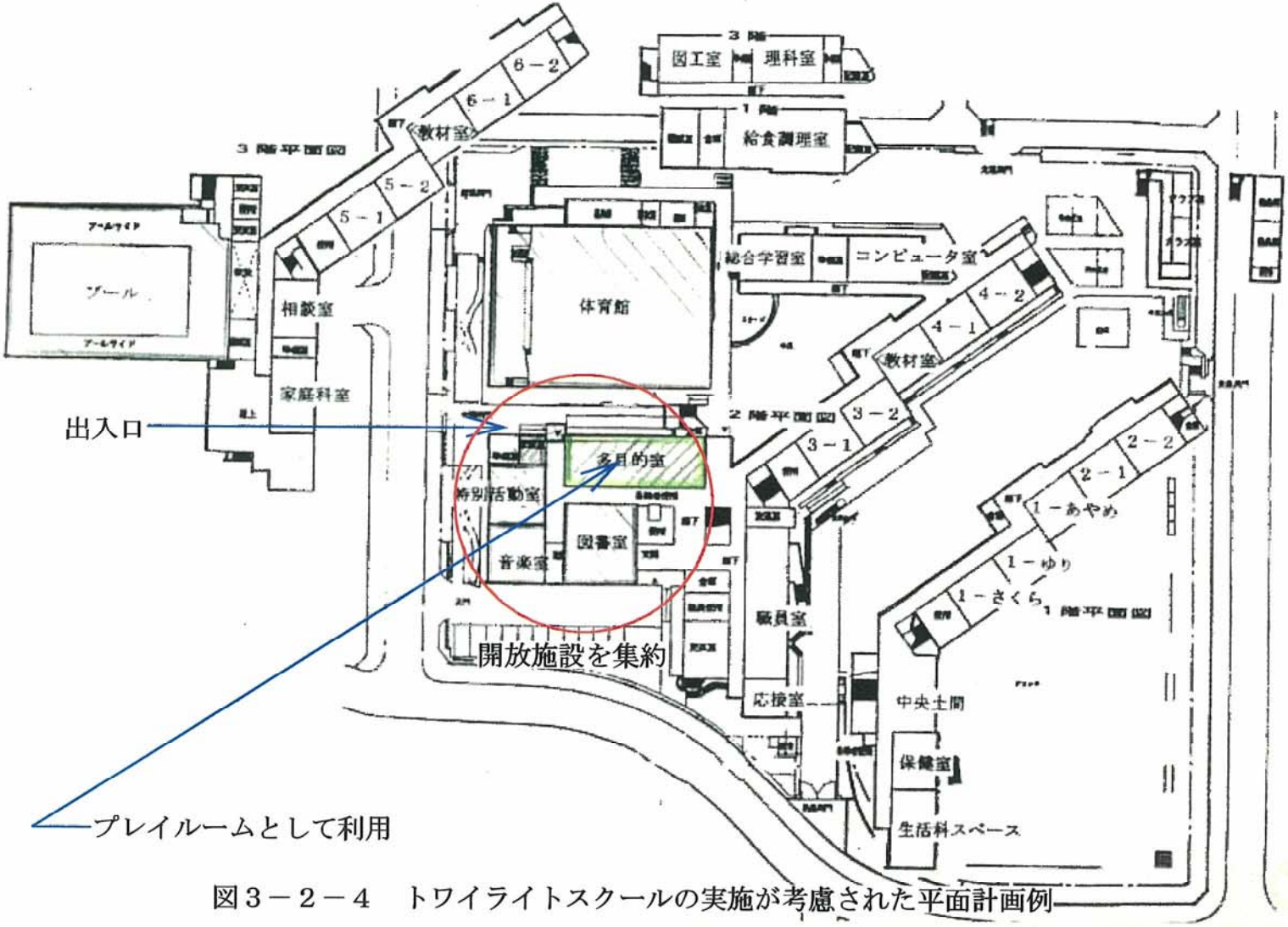


図３－２－４　トワイライトスクールの実施が考慮された平面計画例

図３－２－５　校門

図３－２－６　出入口

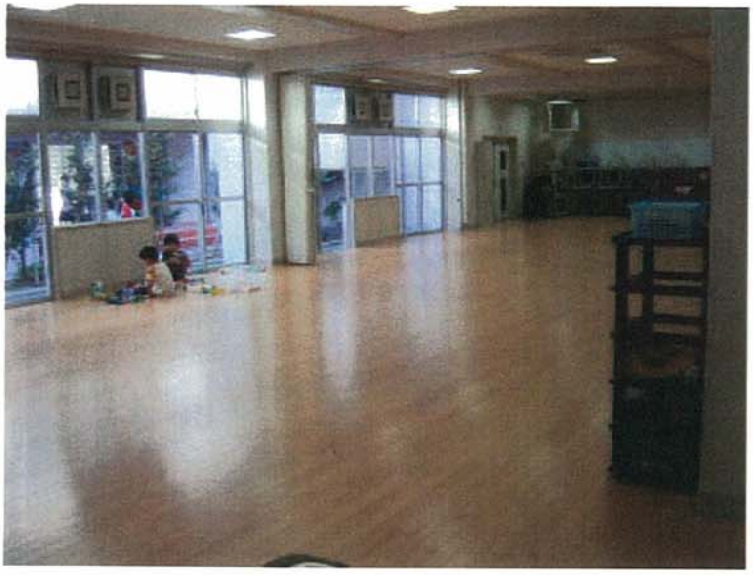


図３－２－７　プレイルーム

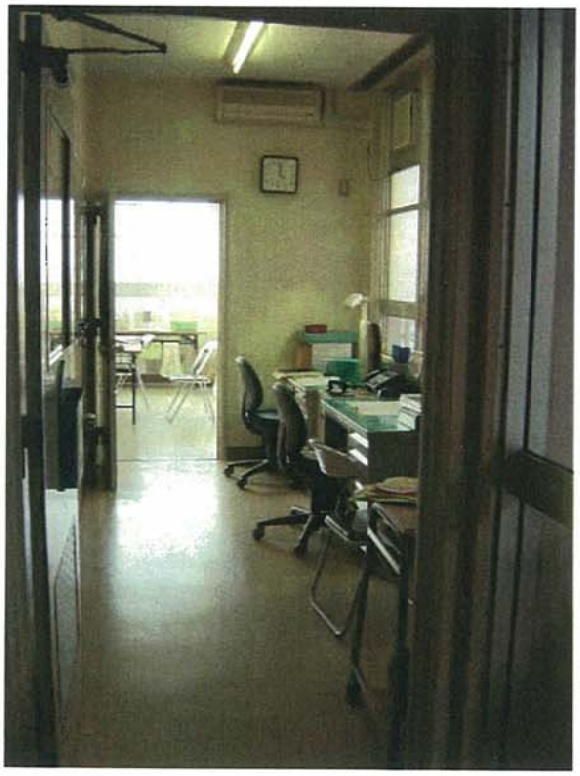


図３－２－８　事務室

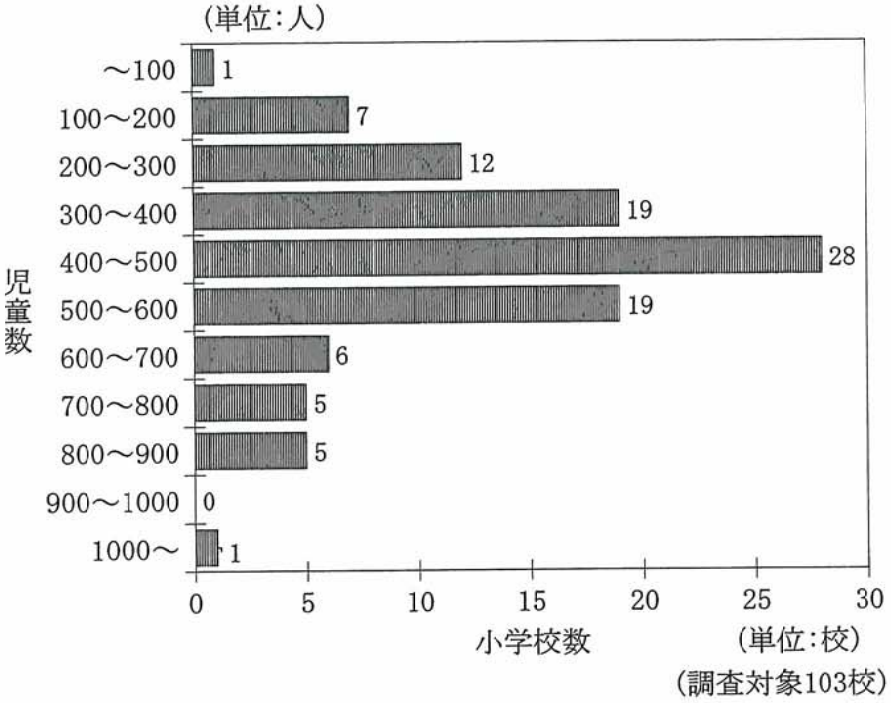
第３節　トワイライトスクールの活動実態

３－３－１　トワイライトスクールの特徴

トワイライトスクールは既存の小学校の校内に整備している。活動実態を明らかにするあたり、どのような小学校で行われているのかその特徴を把握し検討する必要がある。名古屋市教育委員会より公表されている「教育要覧」と名古屋市市民地域振興部より発行されている「学区別生活環境調査報告書」、先に入手した学校平面図を用いて、実施校１０３校の状況と校区の特徴を、「小学校の児童数」「小学校の面積」「居住環境の特徴」「小学校校舎の構成」の４つの項目から把握した。さらにトワイライトスクールの整備状況を把握するために、活動場所の中心となるプレイルームと事務室の整備の状況について分析した。

（１）小学校の児童数

小学校は、そこに在籍する児童の数を元に教室数等の施設の計画が行われる。また小学校の特徴として最も一般的に把握しやすいのも児童数である。プレイルームとして利用可能な余剰教室の存在も、児童数と大きな関係がある。そこで児童数を用いて小学校の規模を比較する。トワイライトスクール実施校の児童数を図３－３－１に示す。児童数は３００人から６００人の学校が６４％を占める。平均児童数を求めると４５４．０８人となる。これを単純に学年数の６で除すと１学年は７５人となり、各学年２クラスないしは３クラス程度の学校となる。その結果普通教室の必要数は３０人学級であれば最大１８教室あれば十分ということになる。１，０００人を超えるような大規模校は１校と少ないが、各学年１クラスしかできない２００人以下の学校は８校ある。また最も少ないのは７８人と１学年が１５人に満たないところもあった。

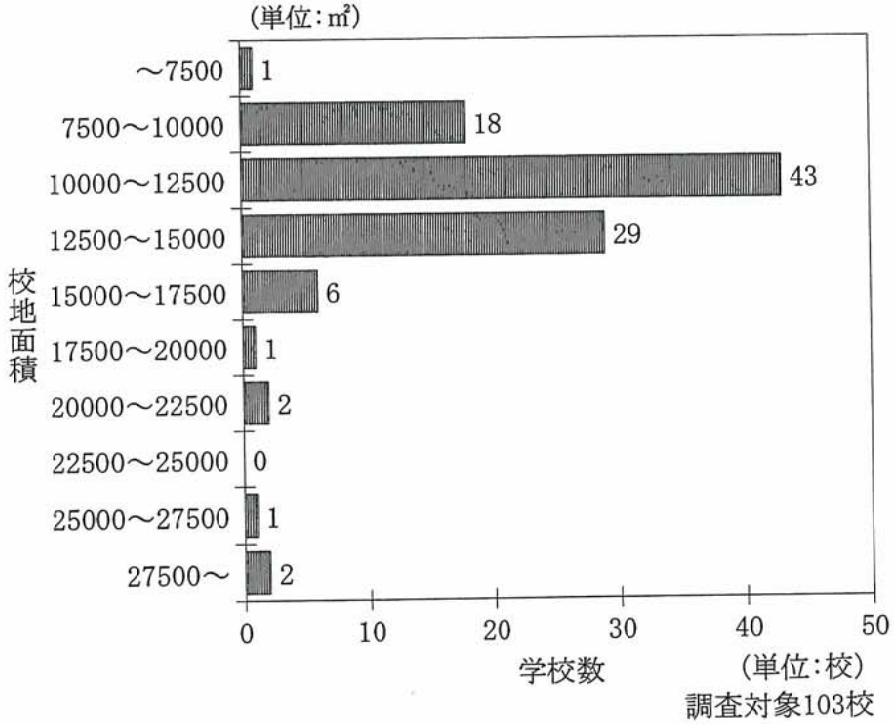


(データ出典：教育要覧 (参考文献5))

図３－３－１　実施校の児童数

（２）小学校の面積

スポーツなどの活動を行う場合、小学校がその種目に適した広さを持っているかどうかにより、活動場所として適地かどうか判断される。子どもが球技などで遊ぶ場合、小学校区内に公園が存在しない場合は、学校のグラウンドが唯一近くにある遊び場となることもある。学校外活動の観点からは、活動で利用できる小学校のグラウンドや屋内運動場の面積で比較することがよい。しかし、名古屋市では公園と学校グラウンドを一体的に整備し、学校と公園を併せて利用できるように計画された学校が数多くあり、学校と公園の境界が曖昧である。そこで、単純に小学校の校地面積として統計上公開されている学校全体の面積を用いて比較したものを図３－３－２に示す。校地面積は１ヘクタール前後の学校がほとんどでありあまり大きな差はみられない。最大はグラウンド以外に遊歩道等も併せて整備された小学校で２．９haあるものがあった。



(データ出典：教育要覧 (参考文献５))

図３－３－２　校地面積

（３）居住環境の特徴

学校外活動として活動を継続していくためには、活動内容の幅を持たせることや、地域とどのように関わりを構築するかを考慮する必要がある。地域との関わりにおいて潜在的な要因、例えば指導者となる人材の豊富さや、住んでいるまちの歴史などその地域の特徴が大きな意味を持ってくる。このため居住している地域や小学校区がどのような地域かを把握する必要がある。しかし、このような潜在的な要因を導きだし、子どもの居住している環境を客観的に表現することは困難である。

そこで、地域の特性を校区の人口を校区の面積で除した人口密度とその小学校区の人口を世帯数で除した１世帯あたりの人数の２つの指標を用いて比較することにした。

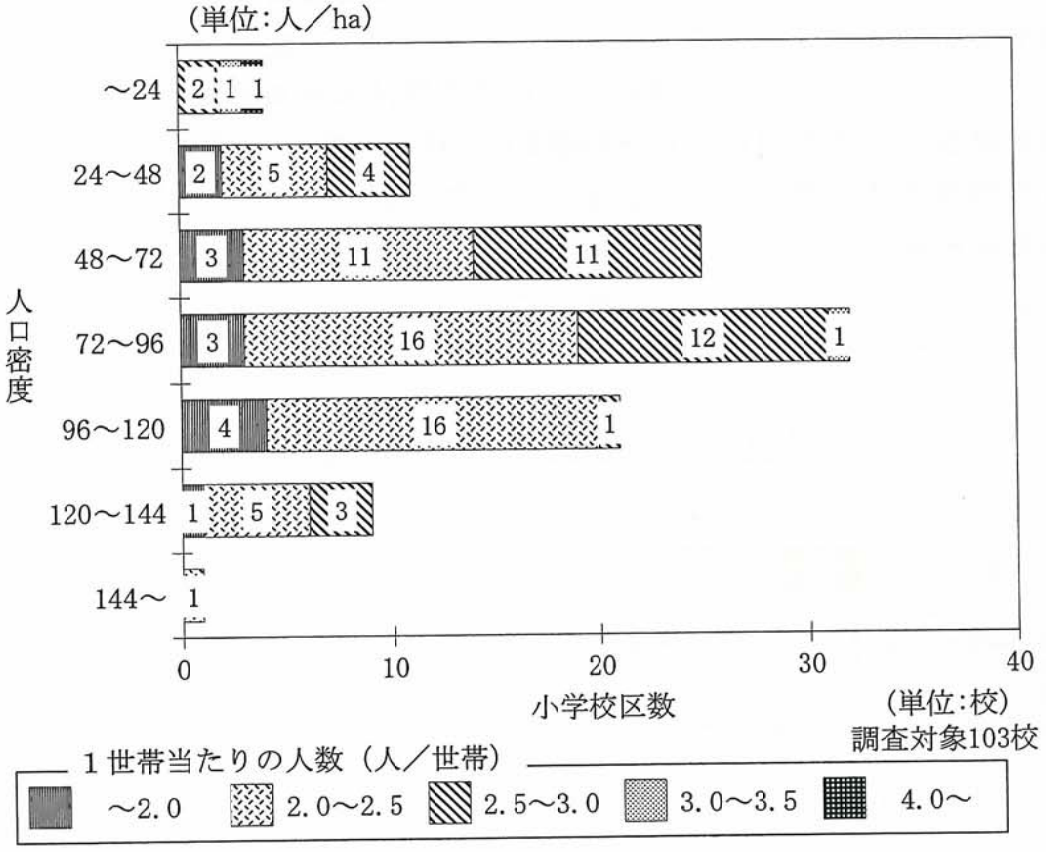
人口密度は、単位面積あたりの居住人口で表されることから、高層化された集合住宅が多いか小規模な住宅が密集していると数値が大きくなり、農地や森林など居住地以外の空地が残っていると数値が低くなることからおおよその土地利用の状況が推測できる。

また１世帯あたりの人口からは、核家族や老人世帯中心とした世帯が主であるか、複数世代が一つの世帯に居住する多世代型の居住形態が残っているかが推測できる。この二つ関係から高密で核家族化が進む都市型の居住環境や農地等が比較的残り多世代が同居する農村型などの居住環境を類推することができる。

両者の関係を図３－３－３に示す。

人口密度をみてみると、１ヘクタール当たり７２～９６人の校区が最も多く平均は８０人となっている。名古屋市全体の平均人口密度は６５．９人／haであることから、トワイライトスクール実施校は土地の高度利用が進んでいる校区が多いことが分かる。トワイライトスクールの中で最大の人口密度を持つのは１７９人／haであった。逆に人口密度が低かったのは１１人／haであった。人口密度が低かったのは市の中心部と最外縁部に位置している校区であった。

１世帯当たりの人数は、最小が１．６人／世帯、最大が３．５人／世帯となり平均は２．３人／世帯であった。人口密度と１世帯あたりの人口との関係をみると、人口密度の高い地域では世帯当たりの人数も小さいところが多くなる。人口密度の低い地域では、世帯あたりの人口が多い。



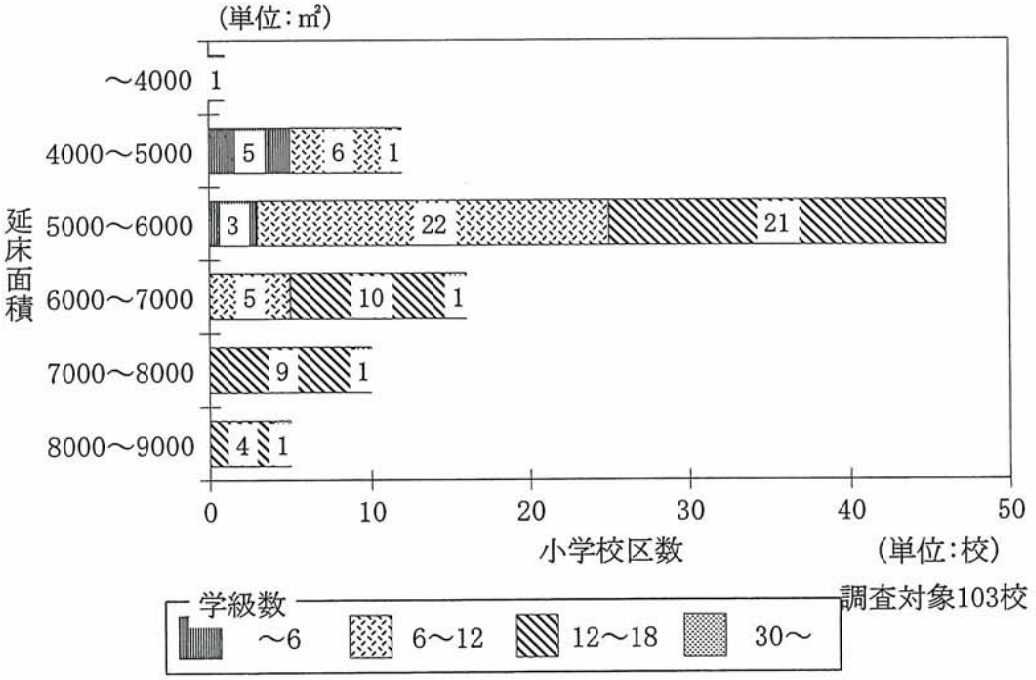
（データ出典：学区別生活環境調査報告書[参考文献1]）

図３－３－３　人口密度と１世帯当たりの人口

（4）小学校校舎の構成

トワイライトスクールの特徴は、既存の小学校を改修して活動スペースである「プレイルーム」を確保していることにある。プレイルームの整備は余裕教室の数や学級数の今後の見通しを含めて整備の検討がなされるものと考えられる。そこで小学校の延床面積と学級数について比較したものを図３－３－４に示す。

各トワイライトスクール実施校の延床面積は5000㎡程度がほとんどで整備の状況に大きな差はない。学級数も学校の規模にほぼ準じているが、大きな面積を持つ学校においても、学級数が減少し、多くの未利用教室がある学校もある。



（データ出典：教育要覧[参考文献5]）

図３－３－４　延床面積と学級数

（５）トワイライトスクールの整備状況

トワイライトスクールの実施環境として、活動空間面積と事務室に着目して整備状況を、名古屋市教育委員会より提供を受けた学校平面図を用いて分析した。

活動空間面積として、屋内活動の中心として全てのトワイライトスクールに整備されているプレイルームの面積を図上計測して、その大きさを調べた。それを図３－３－５に示す。ほとんどが１６０㎡程度で普通教室２教室分の広さを有している。

トワイライトスクールには、管理者が常駐していることから事務スペースは必ず必要である。また子どもの監督や施設の管理などを行うためには独立して事務空間が確保されていることが望ましい。専用の事務室の有無について図３－３－６に示す。専用の事務室は６割しか設置されていない。専用事務室でない場合、プレイルーム内に事務スペースを確保している例が多い。

このように各小学校の余裕教室等の状況により整備の状況に若干の差がある。

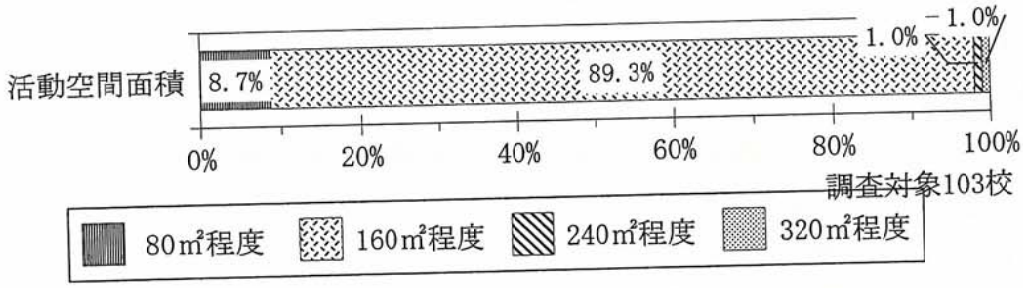


図３－３－５　活動空間面積

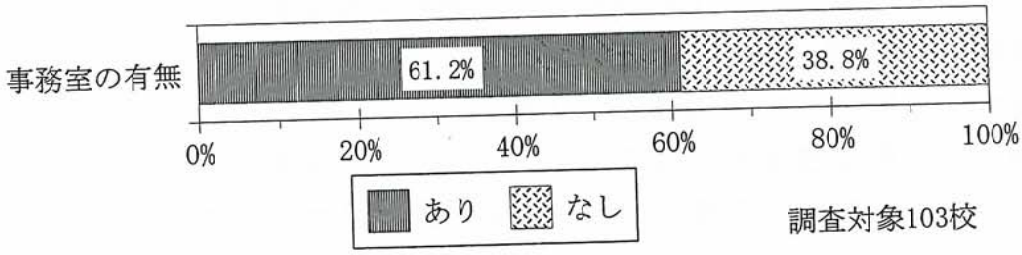


図３－３－６　専用事務室の有無

３－３－２　トワイライトスクール実施校の類型化

前節ではトワイライトスクールの特徴を、居住環境や小学校の状況、トワイライトスクールの整備状況などの代表的な項目でみてきた。これら個々にそれぞれの特徴があるが、より多くの指標を用いてトワイライトスクール実施校の特徴を明確にする。特徴を評価するために用いた指標は、次の通りである。居住環境に関する項目として「人口密度」「世帯当たりの人口」を用いた。小学校に関する項目として「児童数」「校地面積」「建物延床面積」「総教室数」など規模に関するものと、余裕教室の存在を評価するために、学級数を教室数で除した「教室利用率」、児童１人あたりの校地面積を求めた「校地面積／児童数」を用いた。トワイライトスクールに関する項目として、「活動部屋数」「事務室」「活動室の階数」と、小学校全体に対する活動室の割合である「活動室率」、活動施設の代替性を評価するために、別のトワイライトスクールまでの最短距離を計測して数値化した「他のトワイライトスクール間距離」である。

この１３指標から、実施校の特徴を簡潔に表現するために、主成分分析を用いて指標を集約した。その結果、４つの軸に集約することができた。この結果を表３－３－１に示す。

Ⅰ軸には、教室数や児童数、建物延面積、校地面積といった「学校規模」に関するものが相関が高く集約された。この軸の寄与率は３０．４３％である。学校そのものの規模がまず大きな特徴として説明できる。

Ⅱ軸には人口密度、他のトワイライトスクール間距離、世帯当たりの人口が集約され、「地域性」を表す軸であるといえる。寄与率は１４．８０％である。

Ⅲ軸には、校地面積／児童数、活動室階数、事務室、教室利用率が集約された。これらはトワイライトスクール実施にあたり、小学校を改修する際の目安になる項目について相関が高くなった。トワイライトスクール実施に関する「転用性」を表現している。

Ⅳ軸には活動部屋数が１項目で９．５９％の寄与率である。トワイライトスクールの活動を行う場所の大きさを表す項目であることから「活動性」とした。

表３－３－１　実施校の特徴

	Ⅰ軸 学校規模	Ⅱ軸 地域性	Ⅲ軸 転用性	Ⅳ軸 活動性
総教室数	0.94	0.15	0.03	0.10
児童数	0.89	0.04	-0.35	0.13
建物延面積	0.87	0.17	0.10	0.15
校地面積	0.51	-0.28	0.45	-0.01
活動室率	-0.81	0.07	-0.13	0.50
人口密度	0.11	0.76	0.14	-0.27
他のTS間距離	0.02	-0.68	0.10	-0.03
世帯あたり人口	0.31	-0.72	-0.08	0.06
校地面積／児童数	-0.59	-0.17	0.60	-0.22
活動室階数	0.12	0.29	0.40	0.12
事務室	-0.38	0.25	-0.53	0.22
教室利用率	0.04	-0.22	-0.72	-0.08
活動部屋数	0.02	-0.01	0.33	0.87
固有値	3.96	1.92	1.80	1.25
寄与率	30.43	14.80	13.82	9.59
累積寄与率	30.43	45.23	59.04	68.63

主成分分析：サンプル数103校

TS：トワイライトスクール

主成分分析で得られた結果を用いて、実施校１０３校を同様の特徴を持つグループに分類しそれぞれの特徴を把握する。手法は多変量解析を用いた。

主成分分析で得られた各サンプルの主成分得点の平方ユークリッド距離を用いてクラスター分析（Ward法）を行った。この結果、６つのグループに分類することができた。クラスター分析にて得られたデンドログラムと類型化された実施校について主成分得点の平均値を用いて各類型の特徴を説明したものを図３－３－７に示す。各類型の特徴を以下に述べる。

「高密地中規模校型」（ＨＭ型）

学校規模、地域性はやや負の値を示すがほぼ中程度、転用性、活動性が負に布置し低い。この類型に属する小学校は、人口密度が高く、全校生徒が５００人程度の学校が多く、また、トワイライトスクールは普通教室１教室分で、事務室をもつものが分類された。これを「高密地大規模校型」とした。

「中規模校型」（Ｍ型）

各軸とも中位をしめす。この類型に属する小学校は、生徒数が３００人から５００人程度の学校が分類された。トワイライトスクールは普通教室２教室分である。

「高密地大規模校型」（ＨＬ型）

学校規模と地域性が大きい値を示す。この類型に属する小学校は、人口密度が高く、校地面積が大きい。トワイライトスクールの実施環境として、事務室がないところが多く、またプレイルームが２階にある学校が類型化された。

「低密地大規模校型」（ＬＬ型）

学校規模が大きく、地域性が小さい。この類型に属する小学校は、５００人を超える学校が集約された。また、人口密度が比較的小さい。トワイライトスクールの実施環境として、事務室がない。

「極小規模校型」（ＭＳ型）

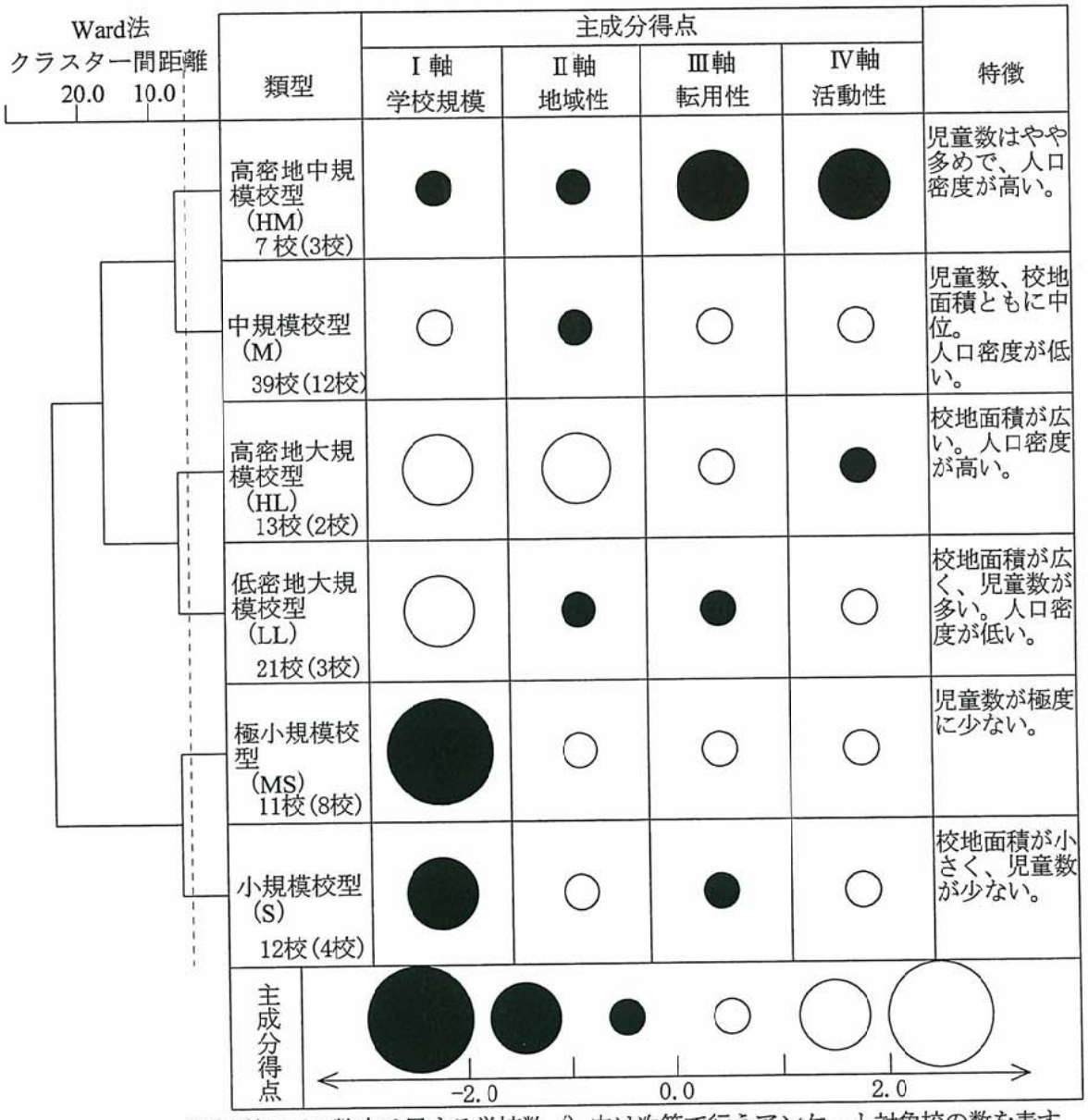
学校規模が極端に小さい。この類型に属する小学校は、生徒数が２００

人に満たない、大変小規模な学校である。トワイライトスクールの実施環境は、プレイルームは普通教室２教室分確保されているが、事務室を持たないものが多い。

「小規模校型」（Ｓ型）

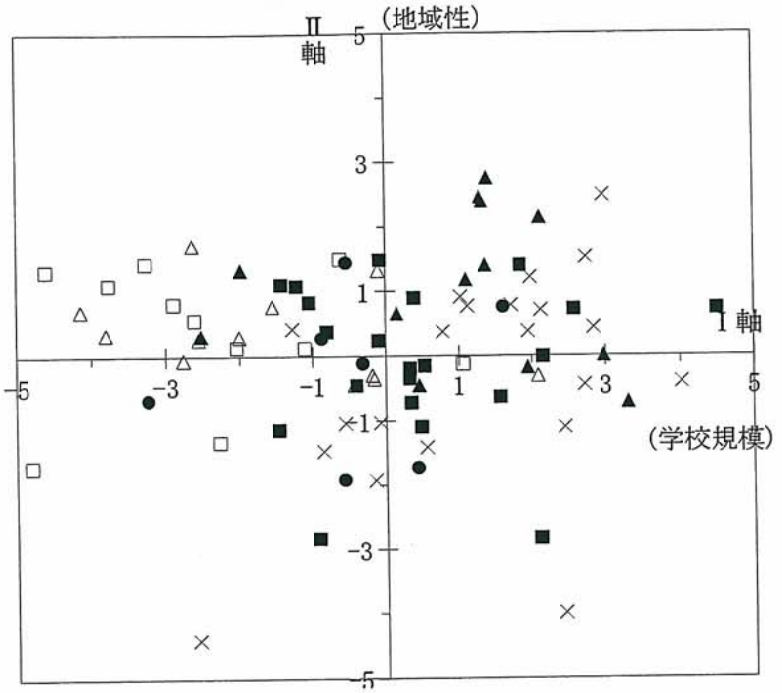
学校規模が小さい。この類型に属する小学校は、生徒数が２００人から３００人程度の学校である。トワイライトスクールの実施環境は、事務室が設けられており、プレイルームは普通教室２教室分確保されているものである。

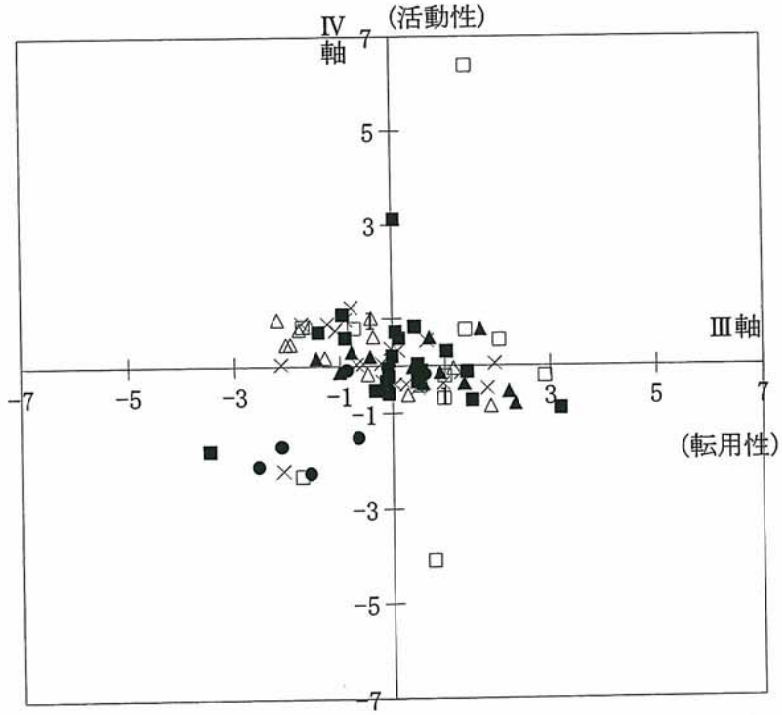
各軸毎に得られたの実施校の主成分得点を、上記で得られた類型ごとに布置させた結果を図３－３－８に示す。



※類型の下の数字は属する学校数 () 内は次節で行うアンケート対象校の数を表す。

図３－３－７　実施校の類型化





●高密地中規模校型 ■中規模校型 ▲高密地大規模校型 ×低密地大規模校型 □極小規模校型 △小規模校型

図３－３－８　実施校の主成分得点と施設類型

第４節　トワイライトスクールの実態調査

３－４－１　調査内容

前節では、主に統計データや学校平面図等の資料を基にトワイライトスクールの実施されている地域の状況や小学校の環境を基に、トワイライトスクールの類型化を行った。本節では実際のトワイライトスクールの活動について調査を行うことにより活動の実態を把握する。トワイライトスクールの実態調査は、管理者である運営責任者・指導者・子どもの３者に行うことが最も適当である。しかし本研究では施設に関して、活動内容と施設の利便性を中心に調査するため、管理者・指導者に対して行った。

調査目的：トワイライトスクールの実態と施設利用の状況を把握するため、活動状況、活動内容、利用施設の実態、活動と利用施設の評価、施設管理状況を明確化する。

・管理者に対して

活動状況、活動内容、施設利用状況、活動と利用施設の現状評価と施設管理

・指導者に対して

指導者の属性と活動状況、活動と利用施設の現状評価。

調査対象：調査対象校

先に得られたトワイライトスクールの類型化を元に、名古屋市１６区から各区２校ずつとなるように、計３２校のトワイライトスクールを選定した。

調査対象者

・活動の中心的存在で、管理も行っている管理者（運営責任者）１名。

・各トワイライトスクールで実際に子どもの指導を行っている指導者に対して、各校５名。各トワイライトスクールの管理者から調査を依頼した。

アンケート調査の仮説と構成を表３－４－１、表３－４－２に示す。

表３－４－１　アンケートの仮説と構成（管理者）

	仮説			アンケート項目（アンケート番号）		
				現状	評価	要望（問題点や意見など）
運営責任者	指導者不足 異学年・世代間交流の少なさ 講座参加人数の少なさ	活動	活動全般	参加人数〔一日(6-a)・男女別(6-c)・学年別(6-c)・曜日別(6-c)〕，近隣学区からの参加人数(6-b)，指導者数〔総人数(7-a)・一日(7-b)〕，講座数〔室内外別(8-a)・活動内容別(8-b)	活動時間(26-1)，楽しさ(26-2)，活動からの学習(26-3)，活動時間外の児童と指導者との関わり(26-4)，今後の活動への参加(26-5)，愛着(32-3)，誇り(32-4)	実際の活動状況とトワイライトスクールの位置付け比較による問題点や意見(39)
			講座	講座数〔室内外別(8-a)・活動内容別(8-b)〕	講座の種類(27-1)，講座参加の活発さ(27-2)，児童からの質問(27-3)，講座からの学習(27-4)	
			児童	参加人数〔一日(6-a)・男女別(6-c)・学年別(6-c)・曜日別(6-c)〕，近隣学区からの参加人数(6-b)	今後の参加児童増加に対しての受け入れ(24)，遊びの選択性(28-1)，遊びの形態(28-2)，活動参加の活発さ(28-3)，児童からの意見(28-4)，自主性・社会性の育成(28-5，28-6)，指導者への挨拶(28-7)，しつけ(28-8)今後の参加児童数の見込み(32-5)	今後の参加児童の増減に対しての考え(32-6)，今後の参加児童増加に対しての受け入れ可能・不可能の理由(25)
	施設（活動場所）の不足	施設・道具		利用施設の種類・利用頻度(9)，利用優先順位(10)	プレイルームの位置(29-1)，動き回るスペース(29-2)，室内の広さ(29-3)・きれいさ(29-4)・明るさ(29-5)・空調設備(29-6)・使いやすさ(29-7)・快適度(29-8)，施設の選択性(29-9)，過ごしやすさ(29-10)，道具の量(30-1)・管理(30-2)・扱い(30-3)，愛着(32-1)，誇り(32-2)	施設整備に関しての要望(38)
	管理の難しさ 活動報告	維持・管理		管理室の有無(11)，活動報告の有無(12)・その方法(13)，参加児童の出欠確認(15)・その方法(16)，児童の活動参加時・帰宅時の体制(17)，苦情の有無(18)・その内容(19)，施設・備品破損時の対応(33)，通常利用の備品消耗時の購入方法(34-1)，消耗してから購入に至るまでの対応のスピード(34-2)，施設の清掃・空調のメンテナンス(35)，施設整備の要求先(36)，施設修繕時の予算配分(37-1)・予算の使途(37-2)・修繕許可(37-3)	活動報告の必要性(14)，学校とは全く別の位置づけによる障害・利点の有無(20-a，20-b)，管理スペースの広さ(31-1)・満足度(31-2)，児童の安全対策(31-3)	学校とは全く別の位置づけによる障害・利点の具体的内容(21，22)，管理上の問題点(23)，施設整備に対しての要望(38)
	上の項目の他、各トワイライトスクールの基本的事項として・・・利用施設（小学校）名称(1)，所在地(2)，運営連絡会名称(3)・構成(4)，活動開始年月日(5)					

表３－４－２　アンケートの仮説と構成（指導者）

	仮説			アンケート項目（アンケート番号）		
				現状	評価	要望（問題点や意見など）
指導者	指導者不足 異学年・世代間交流の少なさ 講座参加人数の少なさ	活動	活動全般	講座参加児童数(11-a)，指導者数(11-b)，関わっている活動の種類(12)	活動時間(13-1)，楽しさ(13-2)，活動からの学習(13-3)，活動時間外の児童と指導者との関わり(13-4)，今後の活動への参加(13-5)，愛着(19-3)，誇り(19-4)	現在の活動状況に対しての問題点や意見(20)
			講座	講座参加児童数(11-a)，指導者数(11-b)	講座の種類(14-1)，講座参加の活発さ(14-2)，児童からの質問(14-3)，講座からの学習(14-4)	
			児童	講座参加児童数(11-a)	遊びの選択性(15-1)，遊びの形態(15-2)，活動参加の活発さ(15-3)，児童からの意見(15-4)，自主性・社会性の育成(15-5，15-6)，指導者への挨拶(15-7)，しつけ(15-8)今後の参加児童数の見込み(19-5)	今後の参加児童の増減に対しての考え(19-6)
	施設（活動場所）の不足	施設			プレイルームの位置(16-1)，動き回るスペース(16-2)，室内の広さ(16-3)・きれいさ(16-4)・明るさ(16-5)・空調設備(16-6)・使いやすさ(16-7)・快適度(16-8)，施設の選択性(16-9)，過ごしやすさ(16-10)，道具の量(17-1)・管理(17-2)・扱い(17-3)，愛着(19-1)，誇り(19-2)	
	管理の難しさ 活動報告	管理			管理スペースの広さ(18-1)・満足度(18-2)，児童の安全対策(18-3)	
	上の項目の他、指導者の基本的事項として・・・利用施設（小学校）名称(1)，所在地(2)，年齢(3)，性別(4)，職業(5)，居住地(6)，トワイライトスクールにおける役割(7)，参加期間(8)，一週間あたりの参加状況(9)，活動の中での役割(10)					

調査方法：各対象校の管理者に対し直接配布し、指導者用については管理者から依頼した。(配布総数：管理者32、指導者160　回収率：管理者100%、指導者94.4%)。

調査期間：平成１４年９月２６日～平成１４年１０月２４日

調査概要を表３－４－３に示す。

表３－４－３　調査概要

調査対象者	管理者	指導者	合計
配布数	32	160	192
回収数	32	151	183
回収率(%)	100.0	94.4	95.3

調査期間：平成14年9月26日～同10月24日
調査対象：管理者，指導者
調査項目：活動実態，現状評価，指導者の属性
調査方法：各TS実施校の管理者に直接配布及び回収を行い、同時に現地調査を行う

以下に調査に用いたアンケート用紙を示す。

管理者用

以下の項目について下線部・空欄には記入を、番号にはあてはまる箇所に○をお付けください。
お分かりになる範囲で結構ですので、よろしくお願い致します。

1．施設名称　　名古屋市立＿＿＿＿＿小学校
2．所在地　　名古屋市＿＿＿＿＿区
3．運営連絡会名称（例　○○運営連絡会）　　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
4．運営連絡会構成　　＿＿＿＿＿名
　1．学校長　　2．区政協力委員　　3．民生委員　　4．PTA　　5．子ども会
　6．老人会　　7．その他（　　）

＜活動についてお聞きします＞
5．活動開始年月日　　平成＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日
6．参加人数
　6－a　一日の参加児童数（一週間の平均）　　約＿＿＿人～＿＿＿人
　6－b　6-aのうち、近隣学区からの参加児童数　　約＿＿＿人
　6－c　一週間の学年別・男女別・曜日別参加人数（下の表に数字を記入してください）

	男子（人）	女子（人）
1年生		
2年生		
3年生		
4年生		
5年生		
6年生		

	参加人数（人）
月曜日	
火曜日	
水曜日	
木曜日	
金曜日	
土曜日	

7．指導者構成
　7－a（総人数を記入してください）
　　1．アシスタントパートナー　　＿＿＿人
　　2．1．以外の地域協力員　　＿＿＿人
　　3．事業ボランティア　　＿＿＿人
　　3の内訳・・・参加児童の保護者　　＿＿＿人
　　地域住民　　＿＿＿人
　　学生　　＿＿＿人
　7－b（一日の活動に参加する人数を記入してください）
　　1．アシスタントパートナー　　＿＿＿人
　　2．1．以外の地域協力員　　＿＿＿人
　　3．事業ボランティア　　＿＿＿人
　　3の内訳・・・参加児童の保護者　　＿＿＿人
　　地域住民　　＿＿＿人
　　学生　　＿＿＿人
8．開催されている講座（講師がついて行う活動）数　　＿＿＿つ
　8－a　そのうち、室内・室外で行うものはそれぞれいくつありますか。
　　室内活動＿＿＿つ　　室外活動＿＿＿つ
　8－b　また、活動内容別の講座数はいくつありますか。
　　1．スポーツ系　　＿＿＿つ
　　（例　サッカー・バドミントン・ゴルフ・一輪車・卓球・ボール・タスポニー・ペタンクなど）
　　2．遊び系　　＿＿＿つ
　　（例　かるた・マジック・ゲーム・お絵かき・将棋・ブロック・ドミノ・碁など）
　　3．体験活動系　　＿＿＿つ
　　（例　工作・切り絵・折り紙・模型・二色サイコロ・紙飛行機など）

4．伝統芸能系　　＿＿＿＿つ
（例　茶道・華道・横笛・太鼓など）
5．地域活動系　　＿＿＿＿つ
具体的な活動内容を下に記入してください。
（　　）
6．その他（　　）

＜利用施設についてお聞きします＞

9．現在までに一度でも利用したことのある施設の番号に○を付け、さらに利用頻度を下の(a)～(g)の中から選び記号を（　）の中に記入してください。

1．プレイルーム（ ）　2．体育館（ ）　3．運動場（ ）　4．図書室（ ）
5．音楽室（ ）　6．理科室（ ）　7．生活科室（ ）　8．図工室（ ）
9．視聴覚室（ ）　10．コンピュータ室（ ）　11．研修会議室（ ）
12．プール（ ）　13．その他（　　）（ ）

(a)　毎日　(b)　週4～6回　(c)　週1～3回　(d)　月1～3回
(e)　今までに数回程度

10．施設を利用できる優先順位はどうですか。優先順位の高い順に（　）の中に番号を記入してください。

（ ）学校活動　（ ）トワイライトスクール
地域活動　（ ）町内会
（ ）大人の活動
（ ）子どもの活動

＜管理についてお聞きします＞

11．管理室としての部屋が設置されていますか。　1．設置されている　2．設置されていない
12．トワイライトスクール側が活動の状況を伝える機会がありますか。　1．ある　2．ない
13．12で　1．ある　と回答した方にお聞きします。その連絡方法は何ですか。
1．定期発行物（発行物の名称＿＿＿＿＿＿）
2．保護者との意見交換会
3．地域住民との意見交換会（保護者を除く）
4．その他（　　）
14．トワイライトスクール側が参加児童の保護者に活動の状況を伝える機会が必要だと思いますか。
1．非常に必要　2．やや必要　3．どちらでもない　4．やや不必要　5．非常に不
15．児童の出欠確認はしていますか。　1．している　2．していない
16．15で　1．している　と回答した方にお聞きします。その方法は何ですか。
1．参加申込書での確認
2．その他（　　）
17．児童の活動参加時・帰宅時は保護者の送迎が原則ですが、実際の状況はどうですか。百分率で回答してください。
・保護者の送迎（　　）％
・集団で　（　　）％　　計100％
・児童個人　（　　）％
・その他　（　　）％
18．今までに保護者や地域住民からの苦情はありましたか。　1．ある　2．ない
19．18で　1．ある　と回答した方にお聞きします。苦情の内容は何ですか。（複数回答可）
1．活動について
2．利用施設について
3．参加児童について（児童同士のトラブルなど）
4．指導者について
5．管理について
6．その他（　　）

２０．指導者が都合により参加不可能になった場合、どのような対応をしていますか。

１．代理の指導者を　指導者自身が確保する

２．代理の指導者を　運営責任者が確保する

３．代理の指導者を確保しない

４．その他（　　）

２１．児童の参加を促すために何か広報活動を行っていますか。（トワイライトスクールだよりを除く）

１．はい　　２．いいえ

２２．２１で　１．はい　と回答した方にお聞きします。その広報活動はどのような形で行っていますか。具体的に以下に記入してください。

２３．トワイライトスクールは学校活動とは全く別の位置付けをされていますが、このことが管理をしていく上で

２３－a　障害になることはありますか。

１．ある　　２．ない

２３－b　利点はありますか。

１．ある　　２．ない

２４．２３－aで　１．ある　と回答した方にお聞きします。具体的にはどのようなことが障害となっていますか。記入してください。

（　　）

２５．２３－bで　１．ある　と回答した方にお聞きします。具体的にはどのようなことが利点となっていますか。記入してください。

（　　）

２６．そのほか、管理をしていく上での問題点や意見などございましたら、下に記入してください。

（　　）

＜その他＞

２７．今後も参加児童数が増加した場合、現在の状況で受け入れが可能ですか。

１．可能　　２．どちらかといえば可能　　３．どちらかといえば不可能　　４．不可能

５．どちらでもない

２８．その理由は何ですか。下に記入してください。

（　　）

以下の項目からは、最もふさわしい番号に○をお付けください。

	1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
２９．＜活動について＞						
２９－１．活動時間はどうですか。	長い					短い
２９－２．活動の中で自ら楽しんでいますか。	楽しんでいる					つまらな
２９－３．活動に参加したことで自身が学んだことはありますか。	ある					ない
２９－４．活動時間外に児童との関わりがありますか。	ある					ない
２９－５．今後も活動に参加していきたいですか。	参加したい					参加したくない
２９－６．現在の参加児童数に対して指導者数は足りていますか。	足りている					不足して
３０．＜講座について＞						
３０－１．開催されている講座の種類はどうですか。	多い					少ない
３０－２．児童は講座に活発に参加していると思いますか。	思う					思わない
３０－３．講座の中で児童は指導者に対して質問をしますか。	する					しない
３０－４．今までに講座で行ったことを児童が生かしているのを見たり聞いたりしたことがありますか。	ある					ない

３１．＜児童について＞

３１－１．児童が自由に遊びを選べると思いますか。　思う　思わない

３１－２．児童は集団で遊びますか。　集団　集団でない

３１－３．児童は活動に活発に参加しますか。　参加する　参加しない

３１－４．活動内容に関して児童からの意見はありますか。　ある　ない

３１－５．活動の中で児童の自主性を伸ばすことができていると思いますか。

思う　思わない

３１－６．活動の中で児童の社会性を伸ばすことができていると思いますか。

思う　思わない

３１－７．児童は指導者に対して挨拶をしていますか。　する　しない

３１－８．児童に対して叱ることがありますか。　ある　ない

３１－９．児童は学年を越えて遊びますか。　遊ぶ　遊ばない

３１－１０．高学年児童が低学年児童に教えたり注意したりすることがありますか。

ある　ない

３１－１１．児童は活動を通して、指導者などの様々な世代の人と交流していますか。

している　していない

３２．＜利用施設について＞

３２－１．プレイルームの位置は児童に判り易いですか。　わかりやすい　わかりにくい

３２－２．室内で児童が自由に動き回れるスペースがありますか。　ある　ない

３２－３．室内の広さに満足していますか。　満足　不満

３２－４．室内はきれいですか。　きれい　汚い

３２－５．室内は明るいですか。　明るい　暗い

３２－６．室内の空調は整っていますか。　整っている　整っていない

３２－７．施設は使いやすいですか。　使いやすい　使いにくい

３２－８．室内では快適に過ごすことができますか。　できる　できない

３２－９．利用したい施設が自由に選べますか。　選べる　選べない

３２－１０．室内で児童が騒げますか。　騒げる　騒げない

３２－１１．活動する上で、現在利用している施設のみで足りていますか。

足りている　不足

３３．＜利用道具について＞

３３－１．道具は足りていますか。　足りている　不足している

３３－２．道具の管理はできていますか。　できている　できていない

３３－３．児童は道具を大切に扱っていますか。　扱っている　扱っていない

３４．＜管理について＞

３４－１．管理専用スペースの広さは広いですか。　広い　狭い

３４－２．管理専用スペースの広さに満足していますか。　満足 ―――― 不満足

３４－３．児童の安全対策はじゅうぶんですか。　十分 ―――― 不十分

３５．<その他>

３５－１．活動している施設（小学校）に愛着を感じますか。　感じる ―――― 感じない

３５－２．活動している施設（小学校）に対して誇りを持っていますか。　持っている ―――― 持っていない

３５－３．トワイライトスクールがきっかけで新たな交流が生まれていますか。

生まれている ―――― 生まれていない

３５－４．トワイライトスクールに愛着を感じますか。　感じる ―――― 感じない

３５－５．活動に対して誇りを持っていますか。　持っている ―――― 持っていない

３５－６．参加児童数は今後さらに増えていくと思いますか。　増える ―――― 減る

３５－７．その理由を記入してください。

（　　）

<維持管理についてお聞きします>

３６．備品に破損が生じた場合、どのような対応をしていますか。

３６－a　破損者が特定できる場合

１．破損者が実費弁償　　２．トワイライトスクール側の修繕費より支出

３６－b　不可抗力（天災など）の破損者が特定できない場合

１．トワイライトスクール側の修繕費より支出

２．その他（　　）

３７．通常利用している備品（蛍光灯やトイレットペーパーなど）が消耗した場合の購入方法はどのようになってすか。

１．配分された予算内で購入　　２．その都度財団に購入を要求する　　３．年度ごとに支給されて

４．各トワイライトスクール側の実費で購入

５．その他（　　）

３８．３７で　２．その都度財団に購入を要求する　と回答した方にお聞きします。要求してから購入に至るまでどれくらいの時間がかかりますか。

１．１日以内　　２．１週間以内　　３．１ヶ月以内　　４．それ以上

３９．新しい備品を購入する場合、その購入方法はどのようになっていますか。

１．ある程度までは配分された予算内で購入するが、それ以外は財団に申請

２．財団に申請し、次年度に購入

３．各トワイライトスクール側の独自予算内で購入

４．寄付

５．その他（　　）

４０．３９で　１．　と回答した方にお聞きします。申請から購入に至るまでにどれくらいの時間がかかりますか。

１．１日以内　　２．１週間以内　　３．１ヶ月以内　　４．それ以上

４１．施設の一部を改修したい場合、改修方法はどのようになっていますか。

１．改修要求をし、その結果予算が配分される。

２．配分予算内で行う

３．自己資金で行う

４．その他（　　）

４２．清掃や草刈りなどの通常の保全業務は誰が行っていますか。

１．各トワイライトスクール側が行う　　２．年間契約で委託　　３．その都度委託

４．その他（　　）

４３．４２で　２．年間契約で委託、３．その都度委託　と回答した方にお聞きします。どのように委託していますか。

１．財団からの委託　　２．各トワイライトスクール側が委託

４４．空調設備や消防設備の保守点検の委託はどのように行っていますか。

１．財団からの委託　　２．各トワイライトスクール側が委託

４５．施設に不具合が生じ、修繕したい場合、修繕費配分されていますか。

１．はい　　２．いいえ

４６．４５で　１．はい　と回答した方にお聞きします。修繕費から支出できる用途は決められていますか。決められているものに○をお付けください。

１．雨漏りの補修（　）　　２．水漏れ（　）　　３．配管のつまり（　）

４．壁や床の塗装（　）　　５．空調設備（　）

６．その他（　）（　　）

４７．水道やガスなどの公共料金の支払いは各トワイライトスクール側が行っていますか。

１．はい　　２．いいえ

以下の質問には、各設問下の余白に記入をしてください。

４８．参加児童について何か気になる点や気づいた点

４９．利用施設に対しての意見・問題点・要望など

５０．児童の安全対策や施設の管理に対しての意見・問題点・要望など

５１．活動に対しての意見・問題点・要望など

５２．今後の活動をより良くするために改善が必要だと思うものはどれですか。下記の中から選んで２つ○をお付けください。

１．活動時間　　２．指導者数　　３．参加児童数　　４．講座の種類　　５．講座の内容

６．施設の広さ　　７．利用できる施設の種類　　８．道具の量　　９．安全対策

１０．広報活動　　１１．その他（　　）

５３．名古屋市では学童保育が児童の「保育」を目的としているのに対し、トワイライトスクール活動はあくまでも児童の「自主的な遊びの場」としての位置づけをしています。このことと、実際の活動状況とを比較して問題点や意見などございましたら以下に記入してください。

ご協力ありがとうございました。

指導者用

以下の項目について下線部・空欄には記入を、あてはまる番号には○をお付けください。

1．指導している施設名称　　名古屋市立＿＿＿＿＿小学校
2．所在地　　名古屋市＿＿＿＿＿区
3．あなたの年齢にあてはまる番号に○をお付けください。
　1．２０歳未満　2．２０代　3．３０代　4．４０代　5．５０代
　6．６０歳以上
4．あなたの性別　1．男性　2．女性
5．あなたの職業は何ですか。
　1．会社員　2．教師　3．主婦　4．学生　5．無職　6．その他（　　）
6．あなたの居住地はどこですか。
　1．学区内　2．隣接学区内　3．同一区内　4．名古屋市内　5．その他
7．トワイライトスクールにおけるあなたの役割
　1．アシスタントパートナー　2．１．以外の地域協力員
　3．ボランティア（参加児童の保護者）　4．ボランティア（地域住民）
　5．ボランティア（学生）
8．現在までの参加期間　（　）年（　）ヶ月
＜活動について＞
9．１週間あたりの活動参加（指導）状況
　1．～２時間／週　2．２～４時間／週　3．４～６時間／週　4．６～時間／週
10．活動の中でのあなたの役割
　1．運営補助　2．児童の指導　3．児童の監督　4．講座の講師
11．１０（活動の中での役割）で　4．講座の講師　と回答された方にお聞きします。
　11－a　講座参加児童数（平均）　＿＿＿＿＿人
　11－b　指導者数（自身も含めて）　＿＿＿＿＿人
12．活動の中であなたが主に関わっているものは何ですか。全て回答してください。
　1．スポーツ系
　　（例　サッカー・バドミントン・ゴルフ・一輪車・卓球・ボール・タスポニー・ペタンク等）
　2．遊び系
　　（例　かるた・マジック・ゲーム・お絵かき・将棋・ブロック・ドミノ・碁など）
　3．体験活動系
　　（例　工作・切り絵・折り紙・模型・二色サイコロ・紙飛行機など）
　4．伝統芸能系
　　（例　茶道・華道・横笛・太鼓など）
　5．地域活動系
　　具体的な活動内容を下に記入してください。
　　（　　）
　6．その他
　　具体的な活動内容を下に記入してください。
　　（　　）

以下の項目からは、最もふさわしい番号に○をお付けください。

13．＜活動について＞

	1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
13－1．活動時間はどうですか。	長い					短い
13－2．活動の中で自ら楽しんでいますか。	楽しんでいる					つまらない
13－3．活動に参加したことで自身が学んだことはありますか。	ある					ない
13－4．活動時間外に児童との関わりがありますか。	ある					ない

１３－５．今後も活動に参加していきたいですか。

参加したい　　参加したくない

１３－６．現在の参加児童数に対して指導者数は足りていますか。

足りている　　不足してい

１４．＜講座について＞

１４－１．開催されている講座の種類はどうですか。　多い　　少ない

１４－２．児童は講座に活発に参加していると思いますか。　思う　　思わない

１４－３．講座の中で児童は指導者に対して質問をしますか。　する　　しない

１４－４．今までに講座で行ったことを児童が生かしているのを見たり聞いたりしたことがありますか。

ある　　ない

１５．＜児童について＞

１５－１．児童が自由に遊びを選べると思いますか。　思う　　思わない

１５－２．児童は集団で遊びますか。　集団　　集団でない

１５－３．児童は活動に活発に参加しますか。　参加する　　参加しない

１５－４．活動内容に関して児童からの意見はありますか。　ある　　ない

１５－５．活動の中で児童の自主性を伸ばすことができていると思いますか。

思う　　思わない

１５－６．活動の中で児童の社会性を伸ばすことができていると思いますか。

思う　　思わない

１５－７．児童は指導者に対して挨拶をしていますか。　する　　しない

１５－８．児童に対して叱ることがありますか。　ある　　ない

１５－９．児童は学年を越えて遊びますか。　遊ぶ　　遊ばない

１５－１０．高学年児童が低学年児童に教えたり注意したりすることがありますか。

ある　　ない

１５－１１．児童は活動を通して、指導者などの様々な世代の人と交流していますか。

している　　していない

１６．＜利用施設について＞

１６－１．プレイルームの位置は児童にわかりやすいですか。　わかりやすい　　わかりにく

１６－２．室内で児童が自由に動き回れるスペースがありますか。　ある　　ない

１６－３．室内の広さに満足していますか。　満足　　不満

１６－４．室内はきれいですか。　きれい　　汚い

１６－５．室内は明るいですか。　明るい　　暗い

１６－６．室内の空調は整っていますか。　整っている　　整っていな

１６－７．施設は使いやすいですか。　使いやすい　　使いにくい

１６－８．室内では快適に過ごすことができますか。　できる　　できない

１６－９．利用したい施設が自由に選べますか。　選べる　　選べない

１６－１０．室内で児童が騒げますか。　騒げる　　騒げない

１６－１１．活動する上で、現在利用している施設のみで足りていますか。

足りている　|―――|―――|―――|―――|　不足

１７．＜利用道具について＞

１７－１．道具は足りていますか。　足りている　|―――|―――|―――|―――|　不足している

１７－２．道具の管理はできていますか。　できている　|―――|―――|―――|―――|　できていない

１７－３．児童は道具を大切に扱っていますか。　扱っている　|―――|―――|―――|―――|　扱っていない

１８．＜管理について＞

１８－１．管理専用スペースの広さは広いですか。　広い　|―――|―――|―――|―――|　狭い

１８－２．管理専用スペースの広さに満足していますか。　満足　|―――|―――|―――|―――|　不満足

１８－３．児童の安全対策はじゅうぶんですか。　十分　|―――|―――|―――|―――|　不十分

１９．＜その他＞

１９－１．活動している施設（小学校）に愛着を感じますか。　感じる　|―――|―――|―――|―――|　感じない

１９－２．活動している施設（小学校）に対して誇りを持っていますか。

持っている　|―――|―――|―――|―――|　持っていない

１９－３．トワイライトスクールがきっかけで新たな交流が生まれていますか。

生まれている　|―――|―――|―――|―――|　生まれていない

１９－４．トワイライトスクールに愛着を感じますか。　感じる　|―――|―――|―――|―――|　感じない

１９－５．活動に対して誇りを持っていますか。　持っている　|―――|―――|―――|―――|　持っていない

１９－６．参加児童数は今後さらに増えていくと思いますか。　増える　|―――|―――|―――|―――|　減る

１９－７．その理由を記入してください。

（

）

以下の質問には、各設問下の余白に記入をしてください。

２０．参加児童について何か気になる点や気づいた点

２１．利用施設に対しての意見・問題点・要望など

２２．児童の安全対策や施設の管理に対しての意見・問題点・要望など

２３．活動に対しての意見・問題点・要望など

２４．今後の活動をより良くするために改善が必要だと思うものはどれですか。下記の中から選んで２つ○をお付けください。

１．活動時間　　２．指導者数　　３．参加児童数　　４．講座の種類　　５．講座の内容
６．施設の広さ　　７．利用できる施設の種類　　８．道具の量　　９．安全対策
１０．広報活動　　１１．その他（　　）

ご協力ありがとうございました。

３－４－２　活動実態

（１）子どもについて

①活動内容

トワイライトスクールでは、それぞれが独自に活動内容を決めて活動を行っている。そこで、まずどのような活動が行われているかを把握した。図３－４－１に活動内容を示す。活動内容は、サッカーやバドミントンなど運動を主体とする「スポーツ」、カルタやゲームなどを主体とする「遊び」、工作や折り紙といった「体験活動」、太鼓や茶道や華道といった「伝統芸能」、地域へ出ていろいろな体験をする「地域活動」に分けて回答を求め集計した。

その結果、「遊び」や「体験活動」が多く行われている。「伝統芸能」や「地域活動」は少なく、特に「地域活動」のように地域と密接な関係を持つ活動は少ない。

②活動時間

トワイライトスクールは月曜日から土曜日まで活動が行われている。そこで１週間の参加状況を集計した。全調査対象トワイライトスクールにおける各曜日毎の参加者数を平均して比較したものを図３－４－２に示す。月から水曜日と金曜日はほぼ同数の参加者であるが、授業時間の関係からか木曜日は参加者が多い。一方学校休業日である土曜日の参加人数が極端に少ない。

学校休業日の活動機会を与える目的とは反する状況になっている。子どもにとって授業後に学校の延長上で活動があると参加しやすいと考えられる。

③参加者の年齢

トワイライトスクールは小学校全児童を対象としていることから、参加している子どもの学年についてまとめた。学年毎の内訳を参加延べ人数で比較したものを図３－４－３に示す。参加者を学年別にみると低学年が大半で、学年が上がるごとに参加者が少なくなっている。

高学年になるとお稽古ごとや塾、クラブ活動など個々の目的に応じた活動に参加している事が原因であると考えられる。

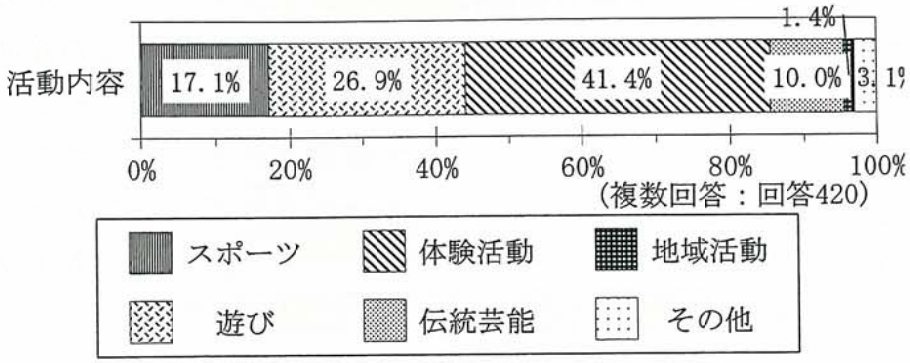


図３－４－１　活動内容

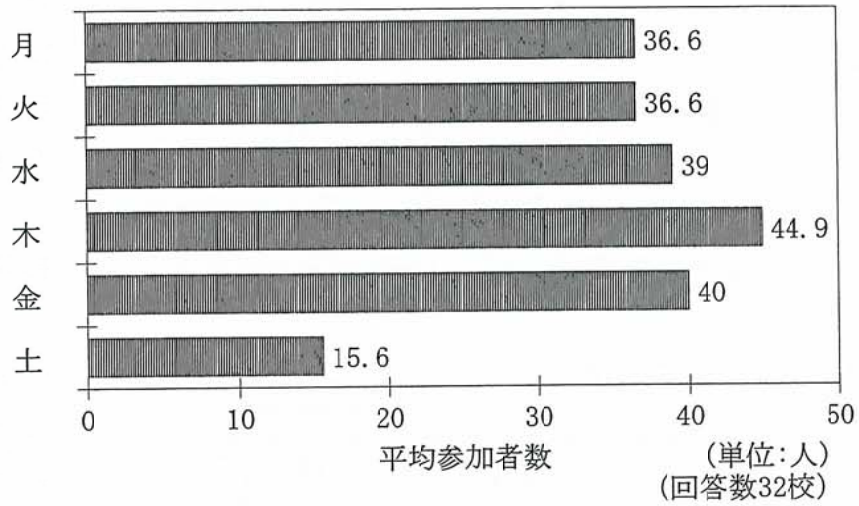


図３－４－２　曜日別平均参加者数

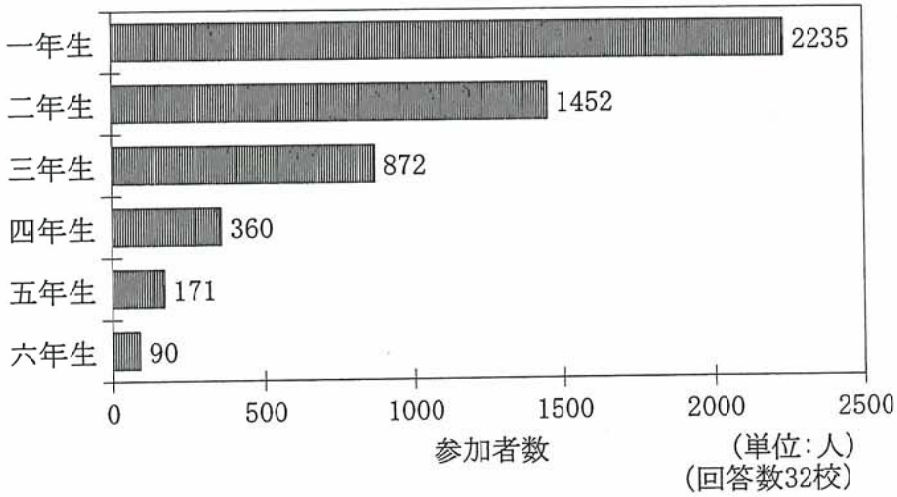


図３－４－３　学年別平均参加者総数

（２）指導者・管理者について

トワイライトスクールの指導の体制は、各トワイライトスクールの管理者であり、指導も行う運営責任者が１名、管理者を援助し運営の補助を行いながら子どもの指導を担当する複数のアシスタントパートナーと、指導のみを中心に行う事業ボランティアによって構成される。管理者である運営責任者は活動の実施主体である財団法人から直接委託されている。それ以外の人材は各トワイライトスクールで確保している。そこで各トワイライトスクール毎に確保している指導者の状況について把握する。

①指導者の数

トワイライトスクールにおいては、指導者が確保できることも実効性の大きな要素となっている。このため指導者の数や役割、参加時間など、指導者について集計した。指導者数の内訳を図３－４－４に示す。各トワイライトスクールで実際に指導をしている指導者の数は、２１人から３０人が多い。

月曜日から土曜日まで活動を行うためには、かなりの数の指導者を必要とする。

次に指導のしやすさの指標として、子どもの参加者数を指導者数で除して、指導者一人あたりの子どもの数によって比較することとした。これを図３－４－５に示す。指導者一人あたりの子どもの数をみると６から１０人が最も多く、比較的少人数である。

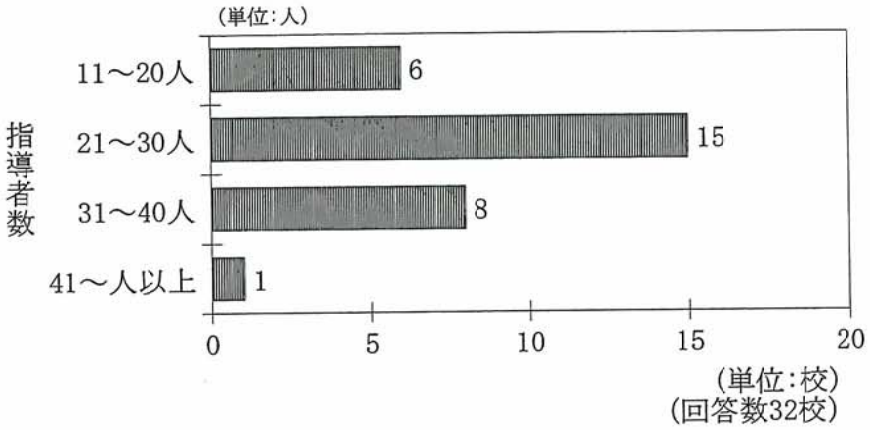


図３－４－４　指導者数

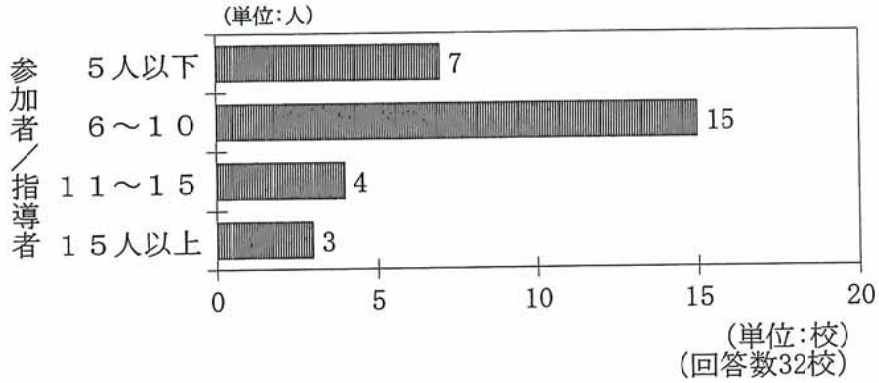


図３－４－５　指導者1人あたりの参加者数

②指導者の属性

指導者の属性について、年齢と職業についてそれぞれ図３－４－６、図３－４－７に示す。指導者の年齢は４０代が中心である。４０代以上でほぼ９割を占めた。職業については主婦が中心である。

これはＰＴＡなど参加児童の親達が活動に関わっているものと考えられる。地域との交流や世代間交流を進めるためにも、幅広い世代の活動への参加が望ましい。また昼間の時間帯に活動に参加できるのは現実的には主婦が中心となってしまい、活動可能な人材に過大な負担をさせることがないように留意する必要がある。それぞれの地域の特徴を生かした活動内容とするためにもより多くの指導者を確保する必要がある。

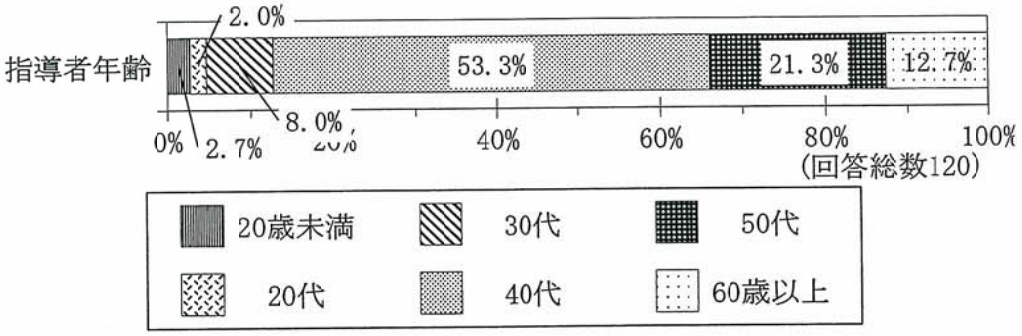


図３－４－６　指導者の年齢

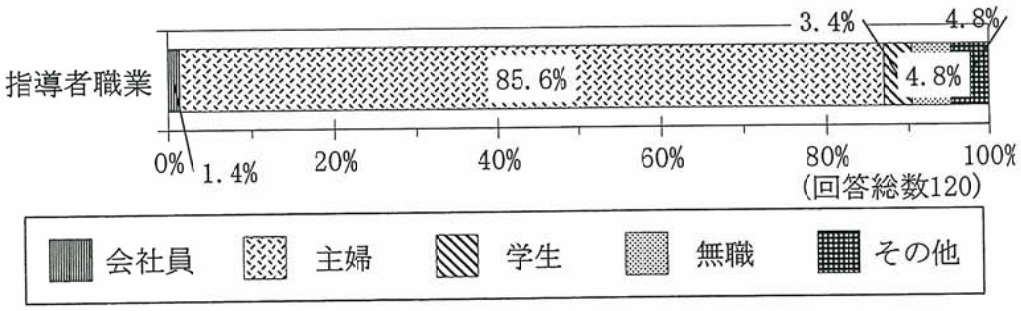


図３－４－７　指導者の職業

③指導者の役割と参加時間

前述したように指導者には、トワイライトスクールの企画運営を、管理者である運営責任者とともに行うアシスタントパートナーと、活動の指導をのみを行う、事業ボランティアの２種類がある。

指導者の役割を図３－４－８に示す。回答した指導者の６割はアシスタントパートナーであった。アシスタントパートナー以外は事業ボランティアとしての位置づけとなり、地域住民として活動に関与している人たちは３割に満たない。活動への参加時間について図３－４－９に示す。１週間の活動参加時間を尋ねたところ２から４時間という回答が最も多かった。

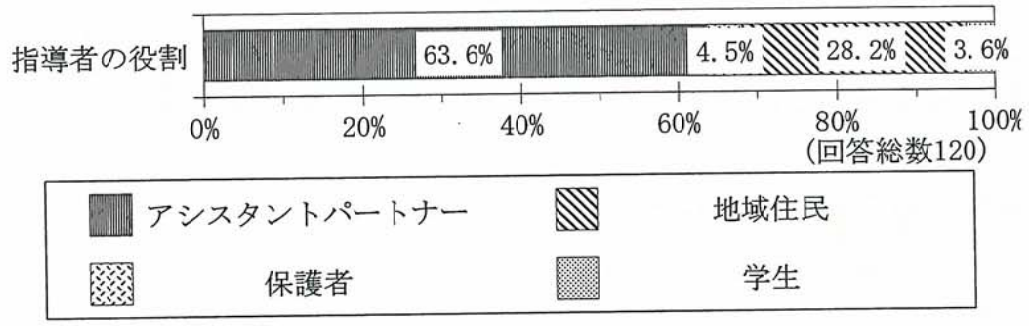


図３－４－８　指導者の役割

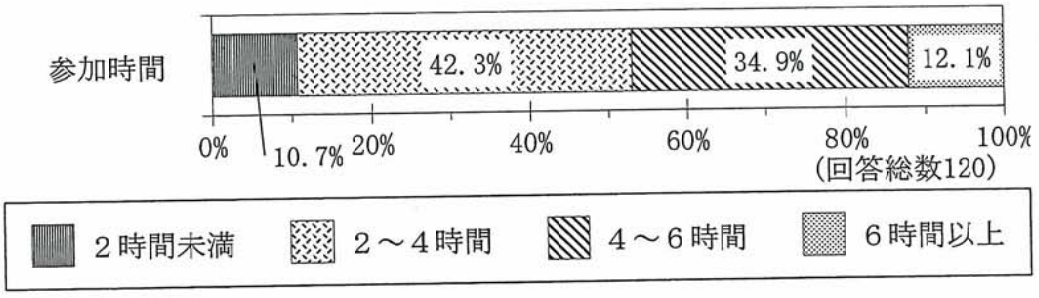


図３－４－９　一週間の参加時間数

３－４－３　利用施設

各トワイライトスクールには、プレイルームや事務スペース等が整備されているが、教室配置や活動内容によって利用される室や頻度は異なっている。そのため利用できる室と利用できる頻度の関係について図３－４－１０にまとめる。

利用できる室や施設についてはプレイルームや体育館、運動場がよく使われていることがわかる。図書室は利用できるところがある。小学校には音楽室や図工室、視聴覚室といった特別教室が整備されているが、あまり使われていない。さらに理科室や家庭科室といった部屋もどの小学校にも整備されているが利用されているところはなかった。

特別教室の利用が少ないのは、活動内容として特別教室を必要とするものが実施されていないことによるためや、施設の配置上の問題である等の理由が考えられる。特別教室は特定の目的を持って整備されているため、活動内容によっては活動場所とすることで飛躍的に活動の効果を得ることができると考えられる。トワイライトスクールの活動の幅を広げるためにも、特別教室を利用した活動が行える環境を作ることが望ましい。またスポーツ施設であるプールもほとんど使われていない。プールは事故の危険性が高く、常時監視をする必要もあり、夏期に限定される施設ではあるが日常的な利用施設としては困難が伴う。

活動における利用頻度をみると、プレイルームは毎日利用されており、日常の活動の中心である。次いで利用頻度が高いのは運動場である。現在の利用施設の状況からはプレイルームしか利用できないともいえる。

小学校の多くの機能を生かした活動とすることが望ましく、フレキシブルに利用できるシステム作りが重要である。

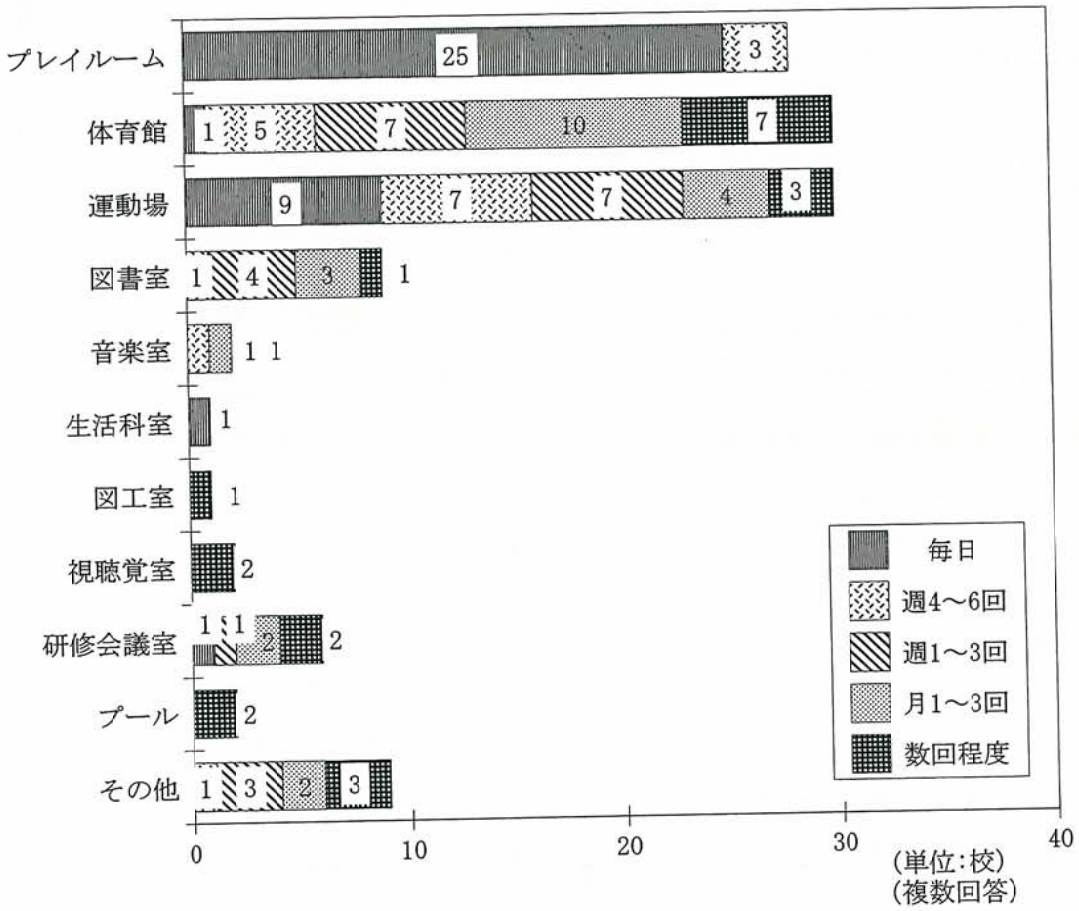

プレイルーム
体育館
運動場
図書室
音楽室
生活科室
図工室
視聴覚室
研修会議室
プール
その他
25
3
1
5
7
10
7
9
7
7
4
3
1
4
3
1
1 1
1
1
2
1 1
2
2
2
1
3
2
3
0
10
20
30
40
毎日
週4～6回
週1～3回
月1～3回
数回程度
(単位:校)
(複数回答)

図３－４－１０　利用施設

３－４－４　活動と利用施設の評価

トワイライトスクールの有効性を評価してもらうために、活動と施設に関して、管理者及び指導者に対して評価を求めた。トワイライトスクールを実施していく上で重要であると考える項目を、大きく「活動」、「講座」、「児童」、「利用施設・道具」、「管理その他」に分類して検討した。

「活動」は活動時間など活動そのものに関するもの６項目、「講座」は講座数など４項目、「児童」は児童の活動に対する取り組みを中心に活発性や主体性など１１項目、「利用施設・道具」に関することとして施設の位置や道具の扱いなど１４項目、「管理その他」として管理部分の広さや活動への誇りなど９項目でトワイライトスクールの現状を評価してもらった。

（１）管理者・指導者の評価

管理者及び指導者の全回答者の評価の状況を図３－４－１１に示す。

道具と管理に関する評価を除いて、おおむね良好な評価を得た。

活動の実効性や学習性の評価が良く、また活動への愛着や誇りの項目も評価が大変良いことから、管理者、指導者自身が活動に対して十分な理解を持ち、やりがいをもって互いに協力しながら活動を行っている事がわかる。

また、施設・空間に関する項目は特に評価が良い。施設の位置、空間の自由度、明るさや快適さなど、活動を支える空間について評価がよいことは、現状の施設整備の方法の有効性を表しているといえる。施設の充足度の評価が分かれており、活動内容に適した空間の利用が行われていないことが原因であると考えられる。

一方、活動に利用する道具に関しては、児童の扱い方に関する評価が大変悪い。

「もの」が充足し氾濫している世相を反映してかみんなで使う「もの」は大事にするという意識の欠如が指摘された。

道具の充足度に対しても評価が良くない。また管理部分に関してては評価が悪く、改善する余地があるといえる。

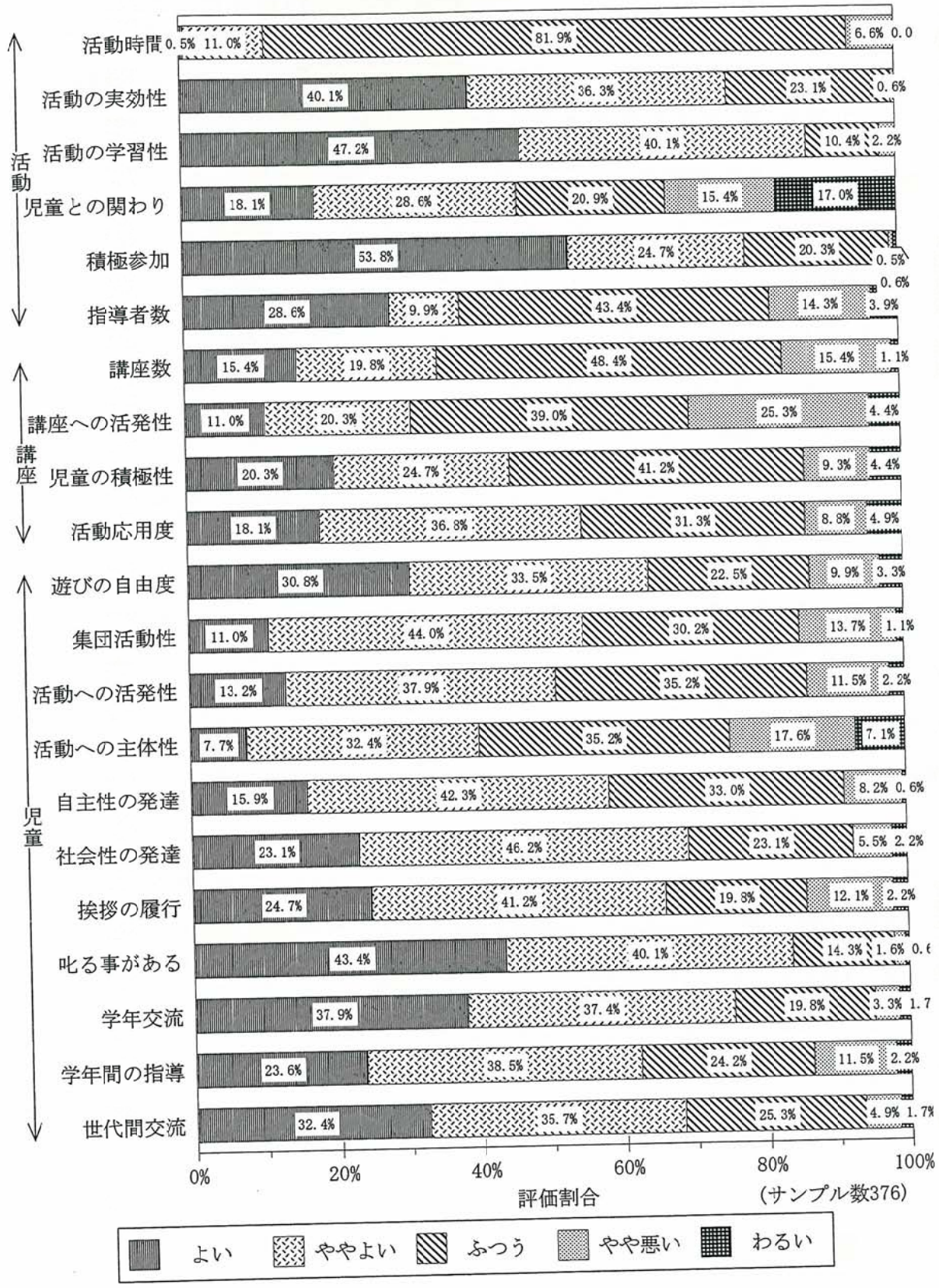


図３－４－１１　利用施設の評価（１）

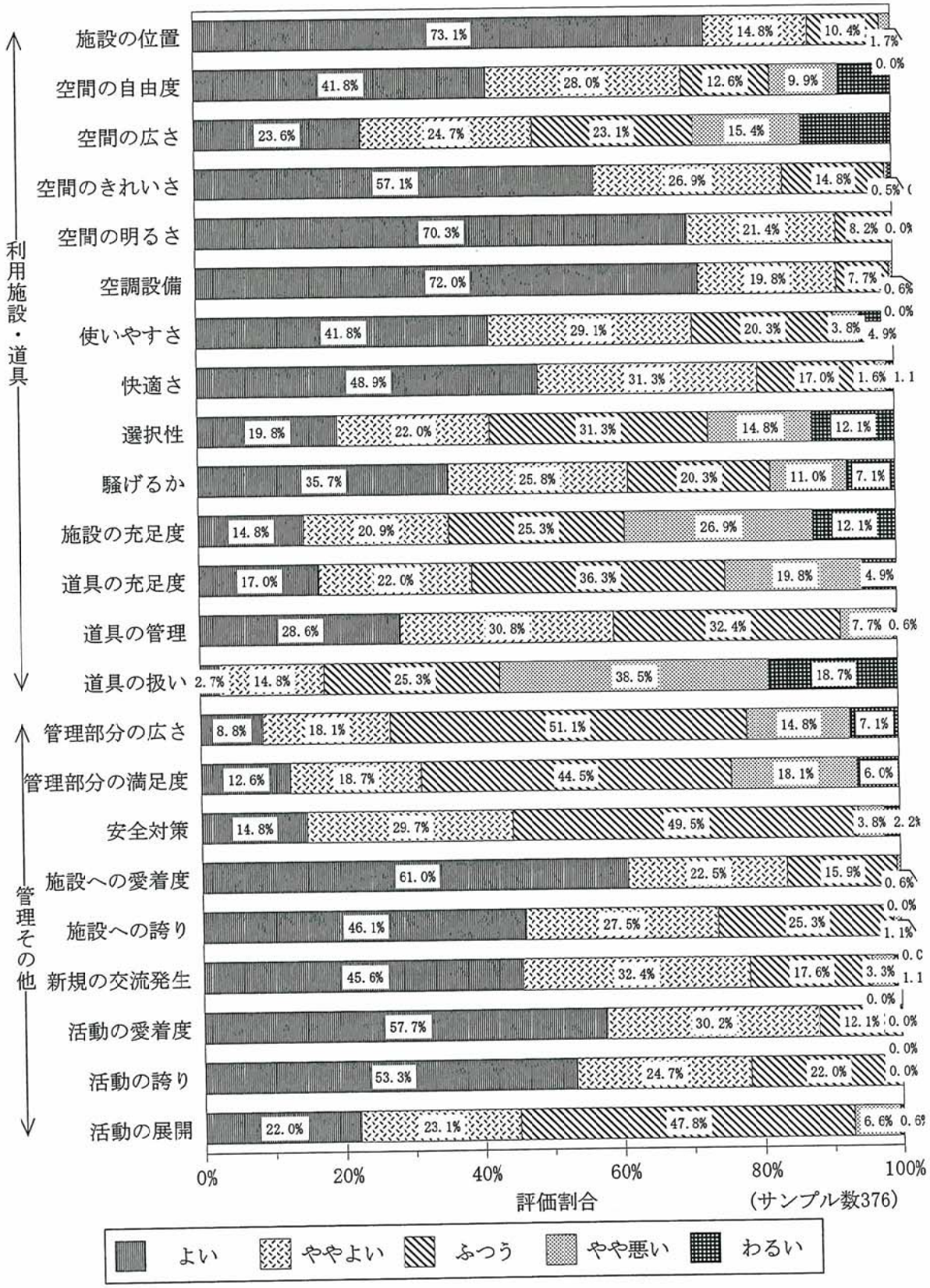


図３－４－１１　利用施設の評価（２）

（２）管理者と指導者の評価の傾向

管理者と指導者の立場の違いによる各項目への評価の違いを把握するために、ｔ検定を用いて検討した。さらにその差をわかりやすく表現するために管理者及び指導者の各項目への評価の平均を用いて視覚化したものを図３－４－１２に示す。

管理者と指導者とも評価の傾向は似ているが、各評価の差をｔ検定によって考察した結果、有意水準５％で１２項目の評価に差があった。

「活動」に関する項目では、児童との関わりを除くすべての項目で差がある。

「講座」に関しては両者に差はみられなかった。

「児童」に関しては「学年交流」と「学年間の指導」の項目で差がみられた。

「利用施設・道具」に関しては、空間の広さにおいて差があった。

「管理その他」に関して管理に関する３項目すべてと、新規の交流発生に関して評価が分かれた。

管理や活動に関する項目は、いずれも指導者の方が良い評価となっているが、指導者数に関しては、指導者自身は充足していると考えていたり、活動時間については、管理者の方が良いと評価していることから、活動全体を捉えて評価している管理者と、自分の関わりのある活動を評価した指導者の立場の違いが顕れている。

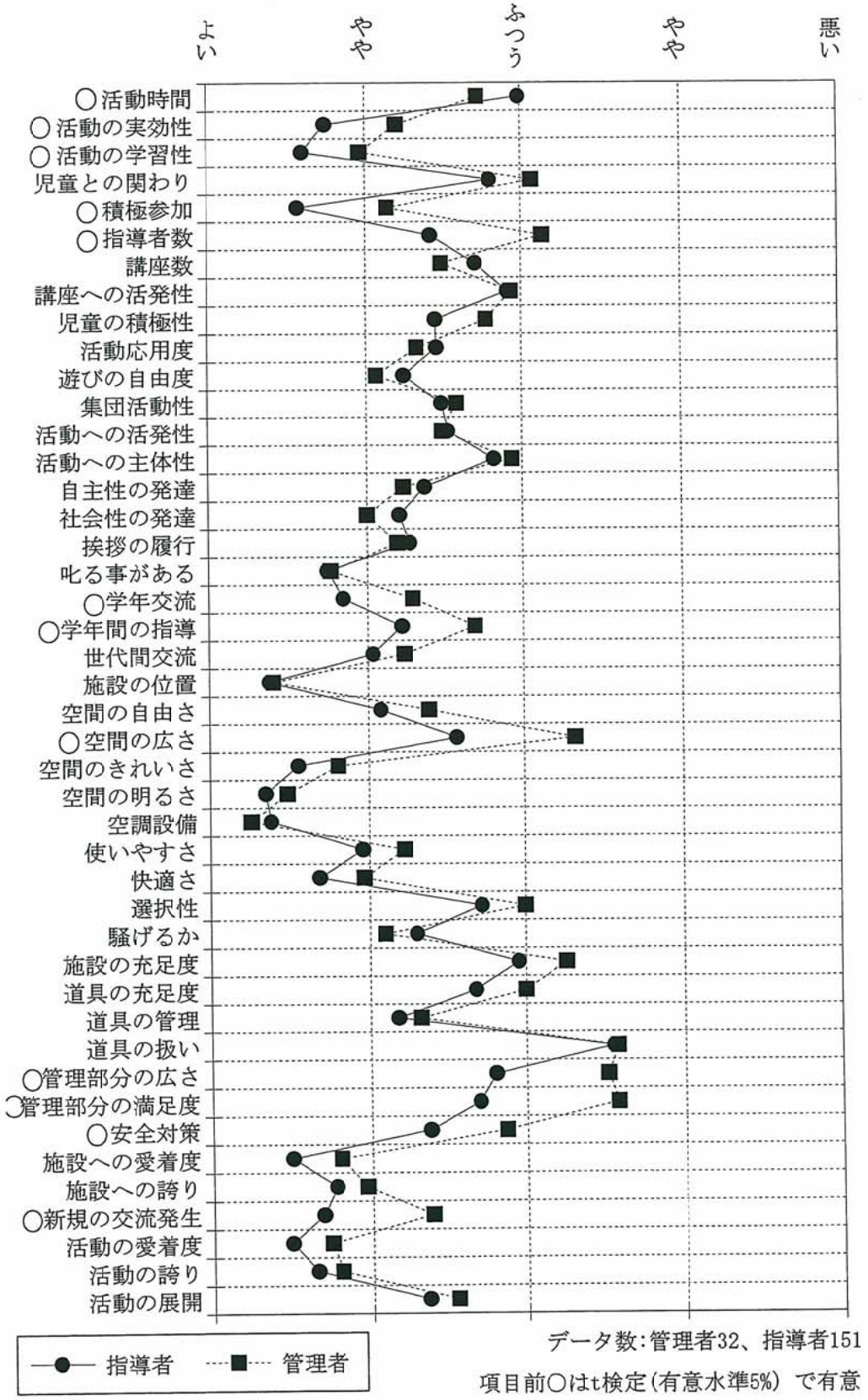


図３－４－１２　指導者と管理者による評価傾向

（３）トワイライトスクールの類型と評価の傾向

管理者・指導者の評価について、地域差や施設差による評価の違いについて考察するために、前節で得られたトワイライトスクールの類型との関係について検討した。各トワイライトスクールの管理者・指導者の評価を施設類型毎に分けて、それぞれχ二乗検定を用いてその差の検定を行った。その結果有意水準５％で９項目に差異がみられた。実際の評価をトワイライトスクールの類型ごとに平均をもとめてプロットしたものを図３－４－１３に示す。

「児童」に関しては学年間の指導と叱ることがあるで差がみられた。

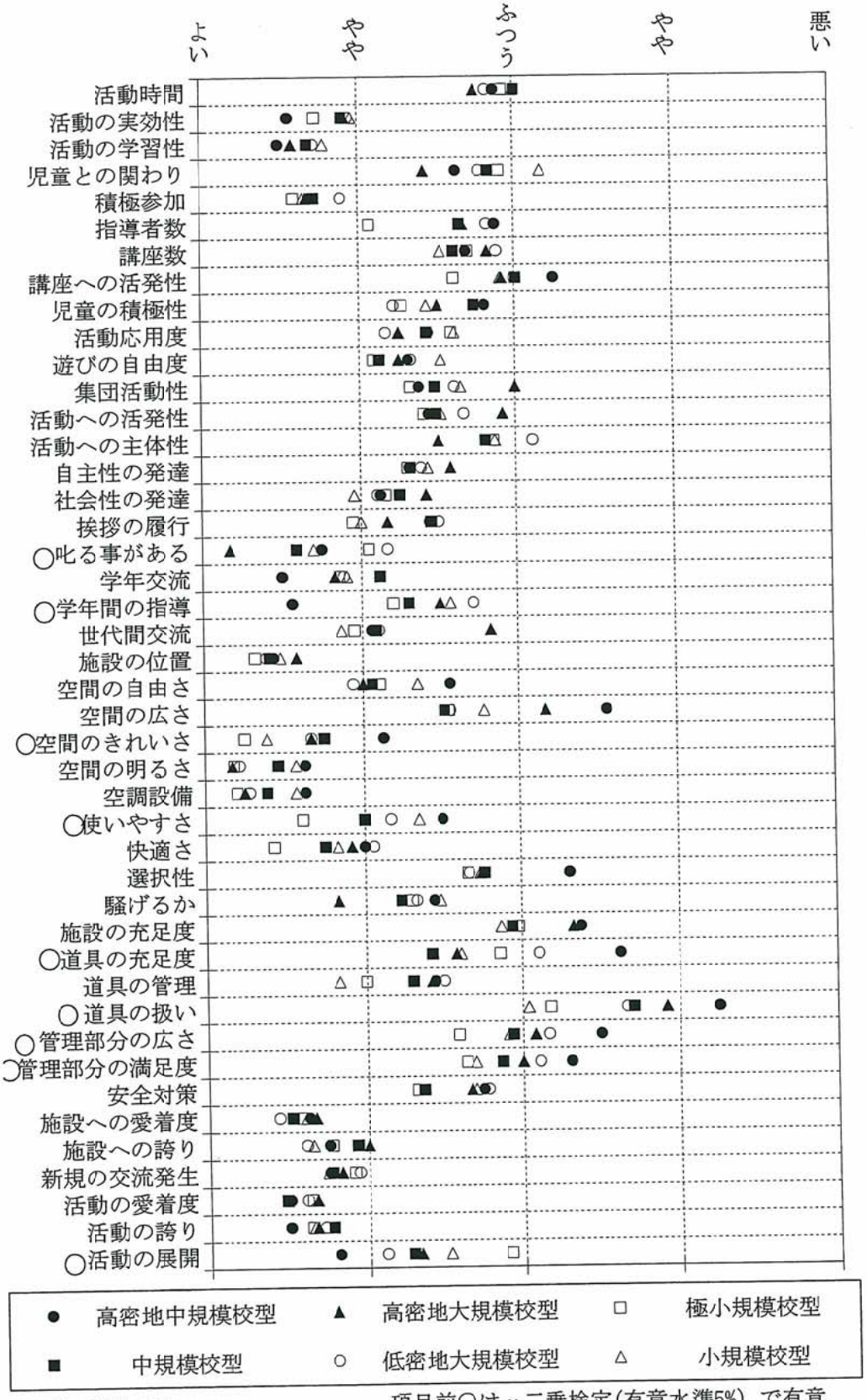
「利用施設・道具」に関しては、空間のきれいさ、使いやすさ、道具の充足度、道具の扱いに差がみられた。

「管理その他」については、管理部分の広さ、管理部分の満足度、活動の展開に差がみられた。

利用施設・道具に関しては、高密地中規模校型の評価が差のみられた５項目のほとんどで最も評価が低くなっている。児童数の対して施設や道具の整備が進んでいないことがうかがえる。

管理部分の評価で差がみられたのは、児童数が少なくトワイライトスクールの活動空間の確保がしやすい極小規模校型では良く、反対に児童数が多いため活動空間を確保しにくい高密地中規模校型では評価が悪い。

高密地中規模校型は、利用施設・道具及び管理に関する評価が悪いが、活動の展開や学年間の指導などの評価が良く、子ども達自身での交流が積極的に行われている傾向にある。



データ数:183　　項目前○はχ二乗検定(有意水準5%) で有意

図３－４－１３　施設類型別の評価傾向

（4）トワイライトスクールに関する評価の評価構造

これまでトワイライトスクールの現状について、４４項目の評価に基づきその特徴を述べてきた。ここでは、この評価の傾向が似ているものを集約してどの様な評価の構造となっているかを多変量解析の手法を用いて明らかにする。分析は因子分析（主因子解法）を用いて行った。管理者・指導者それぞれ及び管理者と指導者全体で検討した結果、いずれも同様の傾向となるため、全回答者の各項目の評価を変量とした。

その結果、４つの軸を得ることができた。結果を表３－４－４に示す。

Ⅰ軸には、管理空間の広さや空間の広さ、施設の充足度、空間自由度など、活動や管理に関する空間的な要素が多く集約された。これはトワイライトスクールの空間がどのくらい確保され、利用できるかという「空間自由性」に関するものであるといえる。寄与率は２４％である。

Ⅱ軸には、社会性の発達、世代間交流、挨拶の履行、学年間の指導、学年交流といったトワイライトスクールが目指す目的に関する評価が集約され「活動効果性」を表しているといえる。寄与率は９％である。

Ⅲ軸には、活動の愛着度や活動の誇り、積極参加など活動や施設に対しての誇りや愛着を表すものが集約された。このため「愛着性」を表しており、寄与率は約６％である。

Ⅳ軸には、空間の明るさや空調設備、空間のきれいさ等の空間の環境を表すものが集約され「環境快適性」を表している。

Ⅰ軸に空間自由性を得たことは、トワイライトスクールの実施と活動への参加や協力を促進するためには、施設の整備が不可欠であり、実効性を担保する大きな要因であるといえる。

表３－４－４　因子分析による評価構造

	Ⅰ軸	Ⅱ軸	Ⅲ軸	Ⅳ軸
	空間自由性	活動効果性	愛着性	環境快適性
管理部分の広さ	0.77	0.14	0.09	-0.01
空間の広さ	0.76	0.10	-0.04	0.11
管理部分の満足度	0.72	0.10	0.16	0.05
施設の充足度	0.69	0.16	-0.04	-0.01
空間の自由さ	0.69	0.24	-0.07	0.19
使いやすさ	0.62	0.19	0.08	0.43
道具の充足度	0.60	0.27	0.00	0.02
選択性	0.58	0.37	0.00	0.15
安全対策	0.52	0.14	0.04	0.20
騒げるか	0.48	0.17	0.01	0.28
指導者数	0.44	0.04	0.21	0.19
道具の管理	0.32	0.12	0.12	0.22
施設の位置	0.26	0.08	0.22	0.17
社会性の発達	0.06	0.69	0.14	0.17
世代間交流	0.18	0.62	0.34	0.10
挨拶の履行	0.02	0.58	0.02	0.16
学年間の指導	0.24	0.54	0.17	0.02
学年交流	0.19	0.51	0.27	-0.03
自主性の発達	0.30	0.51	0.24	0.18
集団活動性	0.24	0.50	0.09	-0.02
講座への活発性	0.31	0.50	0.02	0.14
活動への活発性	0.21	0.47	0.21	0.09
遊びの自由度	0.43	0.44	0.00	0.11
活動応用度	0.08	0.41	0.10	0.09
児童の積極性	0.24	0.38	0.21	0.12
道具の扱い	0.25	0.37	-0.05	0.11
活動への主体性	0.03	0.25	0.15	-0.01
活動の愛着度	0.05	0.09	0.82	0.11
活動の誇り	-0.01	0.11	0.74	0.14
積極参加	0.06	0.13	0.64	0.12
新規の交流発生	0.04	0.04	0.58	0.09
活動の学習性	0.04	0.21	0.56	-0.13
施設への愛着度	0.13	0.09	0.51	0.26
活動の実効性	0.02	0.35	0.47	0.01
施設への誇り	0.19	0.09	0.47	0.28
活動の展開	0.09	0.13	0.38	-0.13
叱る事がある	-0.11	0.06	0.23	0.09
児童との関わり	-0.09	0.20	0.22	-0.05
活動時間	-0.08	-0.15	-0.16	0.10
空間の明るさ	0.26	0.10	0.14	0.76
空調設備	0.19	0.18	0.08	0.75
空間のきれいさ	0.40	0.14	0.12	0.58
快適さ	0.55	0.15	0.15	0.55
講座数	0.21	0.19	0.07	0.23
固有値	10.68	4.02	2.54	1.86
累積寄与率（%）	24.27	33.42	39.18	43.41

３－４－５　施設の類型と評価構造の関係

トワイライトスクールの類型により評価の差が見られたことから、本節においては類型と各軸の評価との関係をさらに詳しく見ていくこととする。各軸を構成する評価項目のうち特に差の大きい項目について図３-４-１４に示す。

Ⅰ軸の「空間自由性」においては、使いやすさ、騒げるか、管理部分の広さ、管理部分の満足度、道具の充足度について考察する。Ⅱ軸の「活動効果性」では、道具の扱い、学年間の指導について比較する。Ⅲ軸の「愛着性」では、活動の展開について、Ⅳ軸の「環境快適性」では空間のきれいさで比較する。

・「空間自由性」

「空間自由性」では、全体として評価が良好であったのは極小規模校型で、悪いと答えた評価の割合が他に比べ多かったのは高密地中規模校型であった。使いやすさについては、極小規模校型と高密地中規模校型で大きな差が見られた。

管理部分の広さ及び満足度については、極小規模校型で評価が良好で、学校規模が小さい分、整備水準が同じであれば人数の少ない規模の学校にとっては有利である。逆に高密地大規模校型では管理部分の評価が悪い。道具の充足度については高密地中規模校型と低密地大規模校、小規模校型で悪い評価が目立った。

空間自由性からは極小規模校型がよい。

・「活動効果性」

「活動効果性」については、道具の扱いについては、全体的に悪いと評価しているが極小規模校型と小規模校型ではその割合が低く、高密地中規模校型と中規模校型で悪いとの評価が高くなっている。学年間での指導については、極小規模校型、小規模校型、高密地中規模校型で評価が良好であった。

活動効果性は、規模の小さい学校のほうがよい。

・「愛着性」

「愛着性」では活動の展開については極小規模校型で評価の良い割合が

他の類型に比べ少ない。

空間の自由度や効果はよいが、人数が少ないことや学校規模が小さいことで新規の活動の展開は余り見込めないと考えられる。

・「環境快適性」

「環境快適性」の空間のきれいさは、高密地中規模校型で評価の良い割合が6割と他が8割を超えているのに対して少なくなっている。

空間自由性は高密地中規模校型が特に悪くなっているが、活動効果性は良好である。空間自由性、活動効果性とも高密地大規模校型での評価が他と比べると余り良くない。

極小規模校型では、空間自由性、活動効果性ともに良好であり、トワイライトスクールの実施環境としては良い。

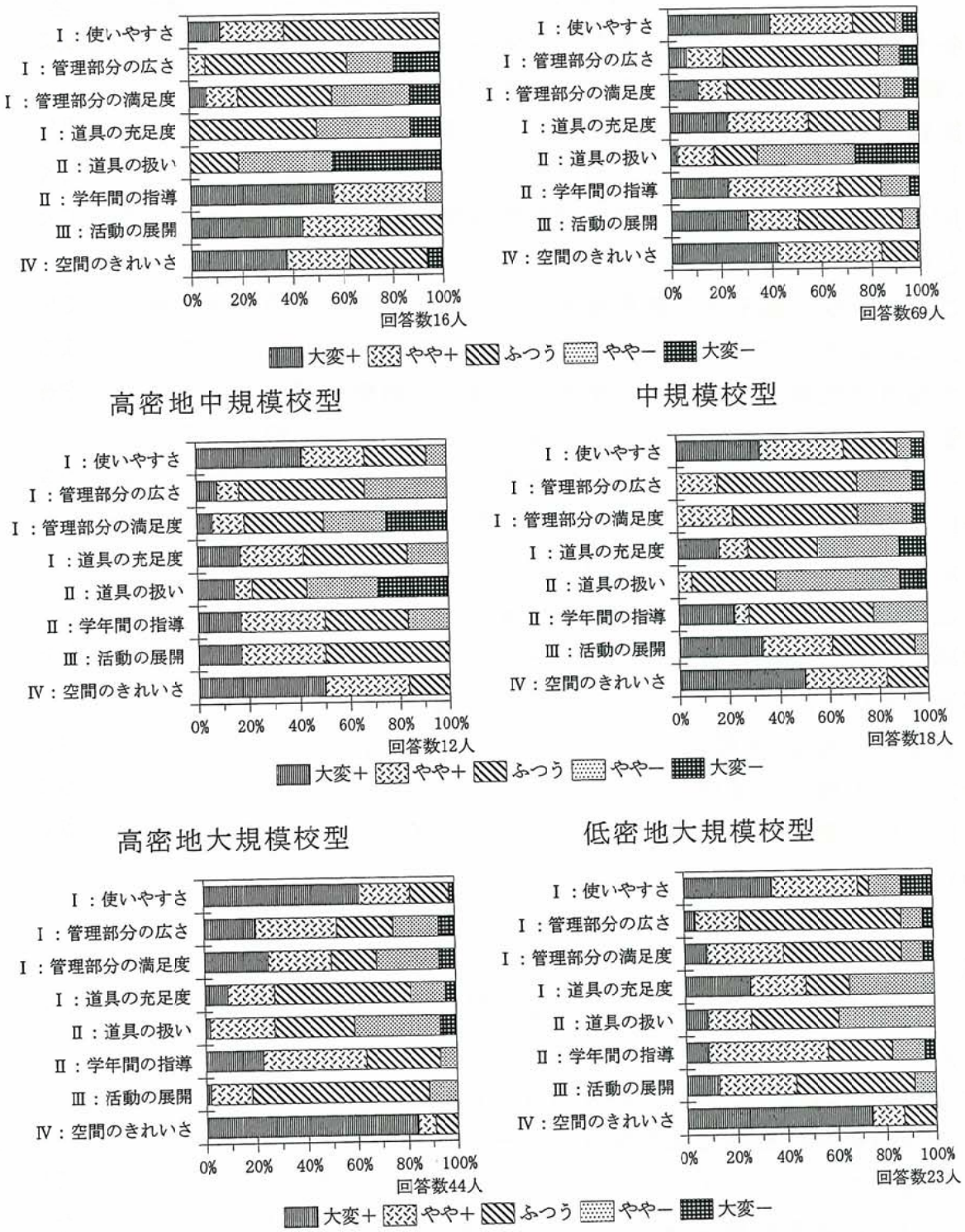


図３－４－１４　施設類型と評価の関係

３－４－６　管理の実態と問題点

各小学校を学校外活動の場として整備し、継続的に利用していくためには、施設管理及び運営管理の手法は重要なポイントとなる。

施設管理に関しては、事前に財団法人名古屋市教育スポーツ振興財団に対して聞き取りを行ったところ、各トワイライトスクールに一定の物品や費用が分配されており、その中で消耗品等を補充し、施設を維持管理することになっているとのことである。

このような、集中的な施設管理は、ほぼ同程度の活動状況を維持していく上では効果的である。しかし、それぞれのトワイライトスクールが独立して独自に地域と協力して活動を行う場合、施設管理にかかる消耗品や維持管理対する費用をどのように負担を求めていくかが鍵となる。

一方、運営管理に関しても、指導者に対する交通費や資料作成費等の実費に対する金銭的な問題や、どのような活動内容をどのような指導者で行うかを管理していくことが必要となる。

このため、管理者である運営責任者は、活動に対する子どもの要望や、指導に関して、子ども、親や地域住民と密接な関係を構築していくことが不可欠となる。

管理の方法は、活動及び施設の整備に関する重要な事項であることから、参加者への周知、苦情、トワイライトスクールと小学校が独立していることについて管理上の障害と利点、トワイライトスクールの問題点の４点についてまとめる。

（１）参加者への周知

トワイライトスクールにおける活動の状況について、参加者の親等に周知する必要性についてを図３－４－１５に示す。

集計の結果、ほとんどの管理者が必要性があると回答した。

活動状況の伝達方法を図３－４－１６に示す。

全てのトワイライトスクールで定期刊行物を発行する方法をとっているが、保護者や地域住民との意見交換会を行っているところもあった。

トワイライトスクールと地域がどのような交流点を見つけていくかが課題である。

（２）苦情

苦情の有無についてを図３－４－１７に示す。

苦情は半数があると回答した。

その主な内容について、活動内容、利用施設、参加児童、指導者、管理、その他とあらかじめ大きな項目を設定してたずねた。その結果を、図３－４－１８に示す。

参加児童についてが最も多く、その内容は参加児童同士のトラブルなどである。

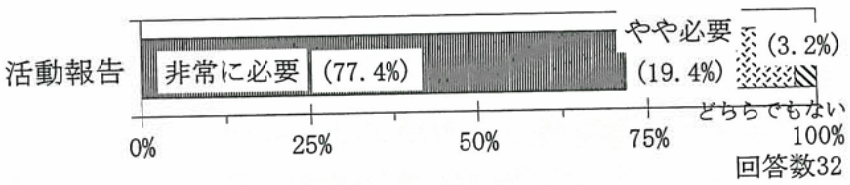


図３－４－１５　活動報告の必要性

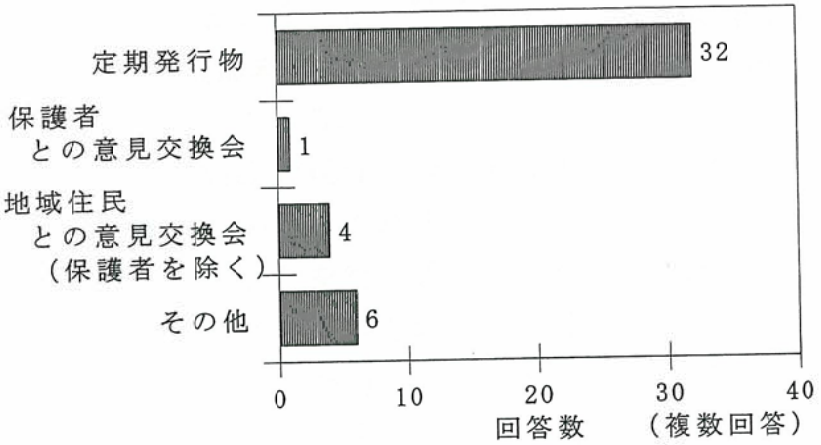


図３－４－１６　活動状況の伝達方法

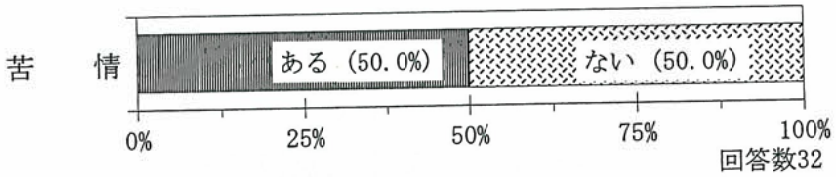


図３－４－１７　活動状況の伝達方法

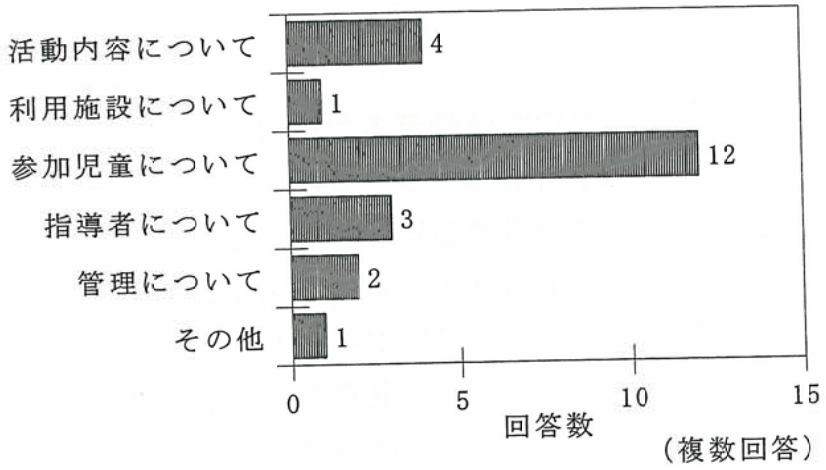


図３－４－１８　苦情の内容

（３）管理上の障害と利点

学校とトワイライトスクールが全く独立して存在していることについて、管理上の障害の有無と利点についてまとめる。その結果を図３－４－１９に示す。

障害はないところがほとんどで、逆に利点があるとの回答が半数以上であった。

そこで自由記述方式で障害の内容を記入してもらった。障害としてあげられたのは、「保護者がトワイライトスクールは学校が実施しているものと勘違いしてしまう」、「施設の空き状況が分からない」、「生活の指導がしにくい」などがあげられた。

一方利点としてあげられたのは、「学校と異なる立場で指導できる」、「学校と協力できる」などがあげられた。

障害としてあげられたものの中には、保護者がトワイライトスクール実施の意義を十分に理解していない部分も感じられ、どのように活動を周知していくかは大きな課題である。また管理者の側からも、生活面に関する指導など、活動の線引きをどこにおくか模索している様子もうかがえる。

トワイライトスクールの実施には、施設利用、保護者との関係や、子どもの安全確保の観点からも、学校との連携が不可欠であるといえる。

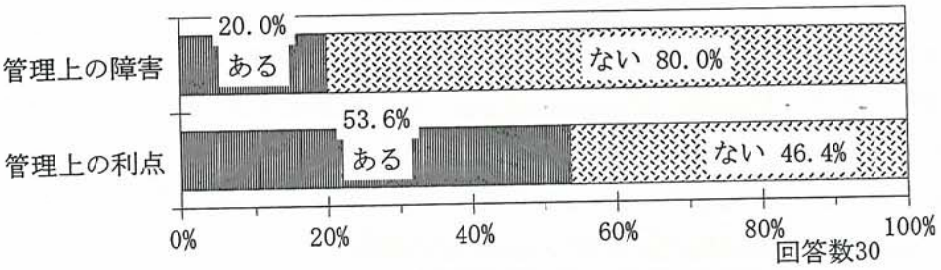


図３－４－１９　管理上の障害と利点

（４）問題点

トワイライトスクールを実施していく上で改善の必要な問題点について、管理者及び指導者の回答を集計した。その結果を図３－４－２０に示す。

利用施設の種類が最も多くあげられ、プレイルームを中心とした活動のあり方について検討が必要である。また講座の内容や種類といったものも問題点としてあげられており、参加する子どもにとって魅力のある活動を行うことが必要である。子どもの数の減少による参加児童の確保や道具の量についても多くあげられた。

ここで上位にあげられた内容は、各々の項目が関係をもっていると考えられる。利用施設の種類は活動の種類や内容の自由度と密接な関係を持っている。活動内容や種類が魅力あるものになると、参加児童数が増加し一定の解決策となる。しかし、参加者が増えると道具の充足が問題となってくるといった具合である。トワイライトスクールを継続して実施していく上で、今後どのようにこれらの問題に取り組むかが課題である。

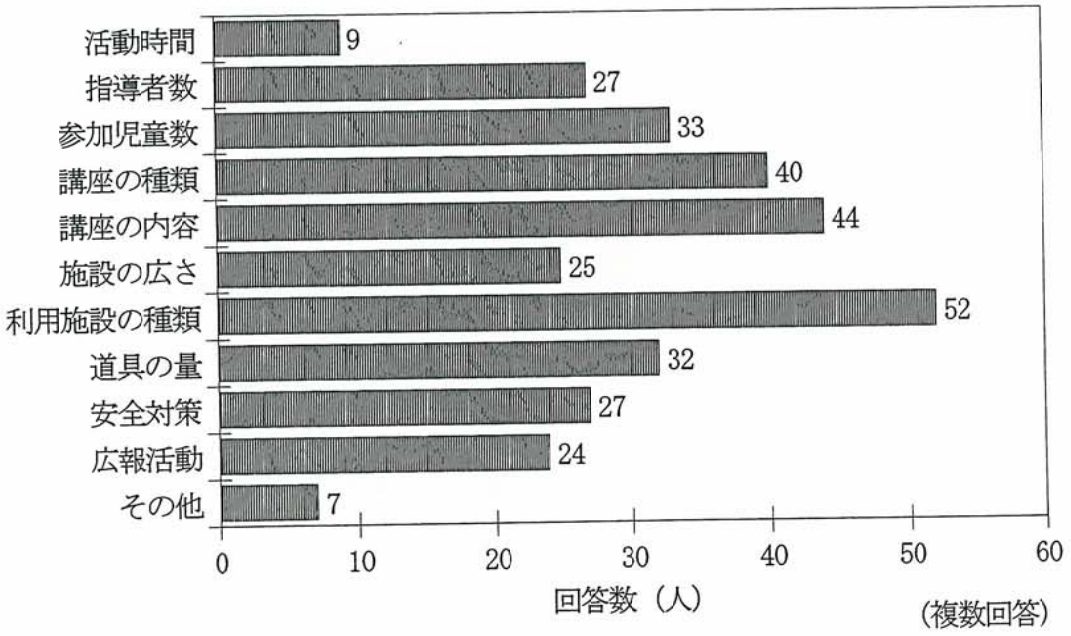


図３－４－２０　改善が必要な問題点

（5）管理システムの改善の方向性

（1）から（4）で得られた結果から、管理システムの改善の方向性を考察する。

トワイライトスクールは専任の管理者を各校におき、管理者を中心に活動を行っているため管理者の役割は非常に大きい。調査から管理者は運営管理として継続的な活動の実施が求められ、安全管理として活動中の子どもの安全と施設自体の安全性、施設管理として施設や道具の維持や補修まで行っている。

特に安全管理に関しては、施設を共用している学校との連携も重要である。

トワイライトスクールには活動そのものに対して一定の予算措置がなされ、活動の実施に必要な道具や消耗品の購入に当てられているが、活動の発展に伴う必要な備品の購入までは難しい。また活動の発展には指導者となりうる人材の発掘が必要であり、継続のためには人材の育成や施設が必要となる。また地域との連携を考慮した活動のために意見の集約も重要となる。

このうち人材や地域の意見集約に関しては、行政側も施策として対応を始めている。名古屋市ですでに実施されている制度を紹介すると、トワイライトスクールに限らず地域で活動できる人材をあらかじめ登録してもらい、この中から必要な人材を活用することができる教育サポーターネットワークの制度や市政懇談会等においてトワイライトスクールに関する意見の集約を行っている。[参考文献5]

管理や運営を円滑に進めるための協力体制づくりの充実が、活動を継続的に実施していくために必要である。

第５節　まとめ

（１）トワイライトスクールの活動実態

トワイライトスクールの施設整備や立地の状況、管理者・指導者・子ども・行政それぞれの立場から、特徴や問題点、整備の方向性を検証する。これらをまとめたものを、図３－５－１に示す。

・トワイライトスクールの類型と特徴

①トワイライトスクールの類型

トワイライトスクールの実施環境は、「学校規模」、「地域性」、「転用性」、「活動性」の４つの軸で説明できる。

実施環境を基にトワイライトスクールを類型化すると、「高密地中規模校型」、「中規模校型」、「高密地大規模校型」、「低密地大規模校型」、「極小規模校型」、「小規模校型」の６つに類型化できる。

②トワイライトスクールの特徴

トワイライトスクールは、プレイルームを基本として活動しているため、広さに差はあるが、基本となる施設の整備状況の差が小さい。

調査の結果からは人数の少ない極小規模校型、小規模校型で空間自由性と活動効果性が良かった。

高密地中規模校型では空間自由性は悪いが活動効果性が良好である。

学校規模の大きな高密地大規模校型、低密地大規模校型は空間自由性と活動効果性があまり良くない。これは施設が参加者に対し十分であれば活動も当然良好であるが、施設的には不十分であっても参加する人々の努力と関わり方で活動の効果を得ているものや、学校の特徴を生かした活動が実施できていないことが考えられる。

これらのことから、活動空間の有無が活動を実施する上での最低条件であるが、均一な空間整備は活動内容などの配慮で一時的に空間の不足や不一致を補う事ができる場合もあるが、参加者数に応じた空間の確保や活動内容の幅に応じて利用可能な空間を増やすなど、利用状況に即したシステムを構築する必要がある。

・トワイライトスクールの実態

①管理者・指導者

管理者・指導者とも活動や施設に対する評価がおおむね良好で、トワイライトスクールが大きな成果を上げていることが分かった。しかし、管理者が担う役割が非常に大きく、参加人数の変化への対応や、新たな指導者や活動内容への取り組みなど、施設の管理以外に運営に対する様々な問題への取り組みが求められる。今後さらに地域や学校との連携を強め活動をサポートしていく協力関係を確立していくことが重要である。

②子ども

子どもは、学校の延長で活動に参加でき利点が多いが、年齢に偏りがみられ、本来の活動の目的である異学年交流の妨げとなる恐れがある。

高学年になると塾通いが増え、学校が行う部活動の活発化などにより子どものゆとり時間が減少し、活動への参加が時間的に難しくなってきていると考えられる。

子ども達が希望した時は常に参加できる環境づくりと、子どもの精神的・身体的な発達に応じ、体験的な活動を元にした作品の制作やスポーツなど、効果の明確な活動内容を考慮し、学校施設を生かして実施することが求められる。

③行政

小学校を利用して実施されているトワイライトスクールでは、活動の中心となるプレイルームや、活動の実施そのものが、教育の現場である小学校と明確に区分する必要がある。そのためには、影響を最小限にするために、それぞれが独立性を確保することが必要である。小学校の大半の施設や備品は利用者である「子ども」とは無関係の管理区分により、相互に利用することが難しい。このため施設整備にあたっては、両者が共有して利用できる「施設」「もの」を明確化し、独立性を最小限に確保したゾーニングをする事が重要である。

④有効性

学校外活動を学校施設の有効活用の要望とそれを子どものために利用することを具現化したこの名古屋市の取り組みは、現段階では、管

理者・指導者とも評価しており、大きな問題点もあげられておらず、有効性が高いものである。

	空間自由性	活動効果性	愛着性	環境快適性	検証	今後の方向性
HM型	活動空間、管理空間とも不十分	異学年間での交流は活発で効果的	愛着がわく	空間性能に不満あり	活動に利用される空間の満足度が低い	TSの施設整備状況は類型による差異がないため、児童数の少ない小規模校の方が評価がよく、活動効果も上がっている。室内空間を利用した活動は内容の差を出しにくいが、屋外空間を利用した活動では、大規模校で施設の大きさを生かし切れていない。規模に応じて利用空間を増減できるシステムづくりが必要
M型					該当する学校数が最も多いが、各軸とも中位の評価をしめす	
HL型		集団活動への積極的性が低い			人口密度が高く学校規模も大きいが、世代交流など活動効果性が低い	
LL型	自由度が高いが空間がやや狭い				施設が大きく様々な活動が可能であるが、空間は十分対応できていない	
MS型	良好	効果的		空間の環境良い	学校規模が極小だが、施設の整備水準が同一のため効果が大きい	
S型		効果的			各軸ともおおむね良好で、活動効果性も高い	
管理者	指導者不足 管理空間に不満				活動の多様化に障害 空き教室利用のため広さに制限がある	親を含め地域との連携を強化 室内整備
共通		自主性・社会性育成 道具の扱い	愛着・誇り	室内空間に不満	家庭の躾との関係 参加児童の偏りの一因	公共性等の教育的効果 活動内容・利用施設の検討
指導者			活動時間の長さ 児童との関係		人数や内容により幅が必要 40代以上の主婦中心 子どもを理解	人数や内容に適した活動 多世代の人材確保
子ども	問題点：参加者が低学年に偏る 土曜日の参加が少ない 利　点：授業終了後、そのまま参加できる 慣れた施設（校舎）で活動できる				年齢により活動の幅が限定される→室内活動中心 学校施設を利用→利用できる空間が限定	高学年対応の活動内容の充実 施設を活かした活動の整備
行政	子どもへの学校外活動の参加機会の付与 住民と学校、子どもとの関わり→まちづくり				学校施設を有効活用し、活動場所として整備	全体として効果的

図３－５－１　トワイライトスクールの実態と施設整備の方向性

（2）トワイライトスクールの応用性

トワイライトスクールの応用性について、実施可能な条件を整理するために、人的要素と施設的要素に分けて整理した。実施に至る経緯を説明する区分として、「社会背景」、「余裕教室の発生」、「利用要求」についてまとめた。その上で「方策」を検討した。それぞれの条件をまとめたものを図３－５－２に示す。

学校外活動の活動の場として、名古屋市では有効であったこの施策について他の自治体への応用性を調査の結果から考察する。

余裕教室の発生をもたらす社会的な背景と、施設利用の要望が大きいことが、実施の基礎的な条件である。

その上で、実施可能な条件として人的要件と施設的要件が考えられる。

人的要件では、旧来からのまちの方が効果があり、校区もあまり大きくなく地縁的なつながりを共有できるところが良い。

施設的要件には応用性に大きな障害となる場合が想定される。それは、通常学校施設の管理者は市町村教育委員会であり、学校で教育を担当するのは都道府県教育委員会が任免権をもつ教員であるため両者の権限の境界が曖昧となる。学校と施設の管理権限が同一である政令市では実施しやすいが、それ以外の場合は両者の関係をより強化し協力体制を構築することが、実施のための大きな条件となることが予想される。

トワイライトスクールの実施は、子ども、地域ともに効果をうみ、さらに現有施設の有効活用も図れることから、施策としての有効性が高いと考えられ、応用性を高めるため、子どもと地域の学校外活動の要望を正確に把握し行政の施策として位置づけ、学校教育と社会教育と施設管理という異なる部署の連携により、活動の場を提供できる体制をつくり、市町村自身が学校と地域との調整の役割を果たしていくことが重要である。

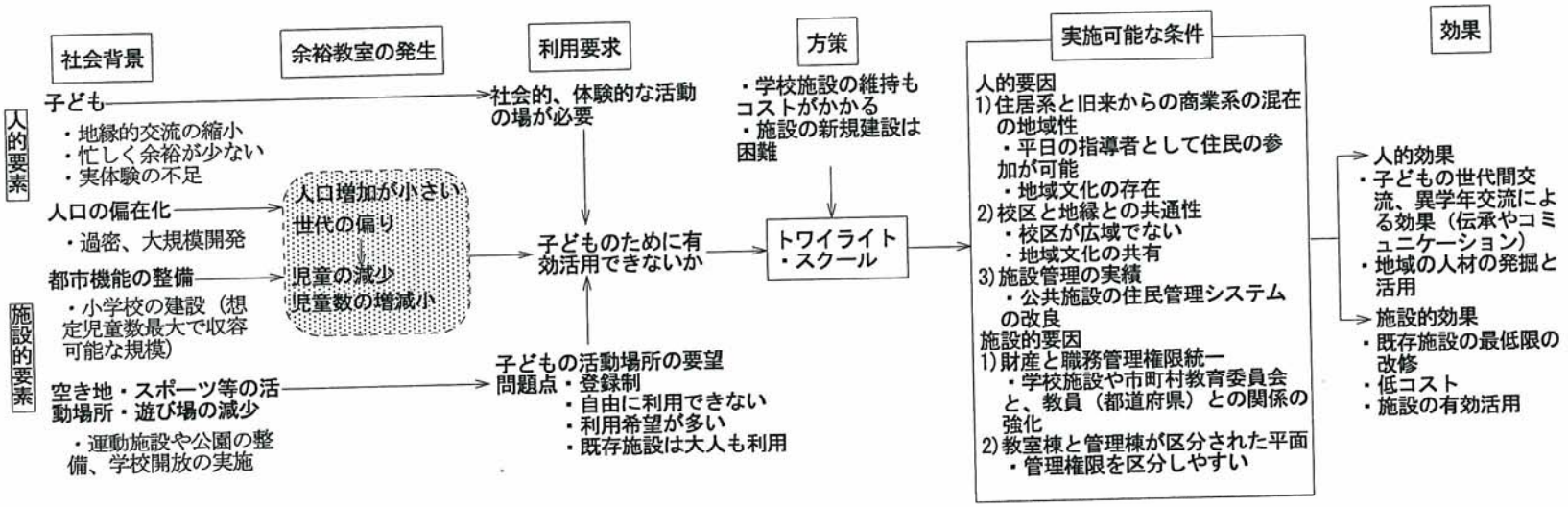


図３－５－２　トワイライトスクールの応用性とその効果

〈参考文献〉

１．学区別生活環境調査報告書　名古屋市市民地域振興部地域振興課　平成10年3月

２．きょういくなごや’９８　名古屋市教育委員会　１９９８年７月

３．教育要覧　名古屋市教育委員会　平成９年度　１９９７年9月

４．教育要覧　名古屋市教育委員会　平成10年度　１９９８年９月

５．教育要覧　名古屋市教育委員会　平成14年度　２００１年９月

６．中学校開放のあらまし－地域スポーツセンター概要　名古屋市教育委員会　平成１２年度　2001年

７．放課後の生活実態調査報告書　名古屋市教育委員会事務局生涯学習部青少年室　平成１０年６月

８．学校開放のための施設・環境づくり　文部省　1995年10月

９．学校週五日制時代の公立学校施設に関する調査研究協力者会議報告－子ども達の未来を拓く学校施設－　文部省教育助成局　2000年７月

１０．生涯学習社会の社会教育　伊藤俊夫　財団法人全日本社会教育連合会2001年３月

１１．学校と地域の教育力を結ぶ　伊藤俊夫　財団法人全日本社会教育連合会　2001年９月

１２．名古屋における再開発の歴史　西山康雄　日本都市再開発史　全国市街地再開発協会　p252-p255　1991.04

１３．学校開放における施設開放状況と利用意向　－公立小中学校の地域施設としての役割とその評価に関する研究　その１－　東條敦子　藍沢宏　鈴木直子ほか　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p311,312　1997.09

１４．公立小中学校の地域施設としての評価　－公立小中学校の地域施設としての役割とその評価に関する研究　その２－　吉田健二　藍沢宏　鈴木直子　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p313,314　1997.09

１５．地域活動からみた地域施設計画の評価に関する研究　福原聖治　横山俊祐　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p427,428　1997.09

１６．計画集合住宅地におけるこどものあそび空間と街区の特徴　谷口新　仙田満　矢田努ほか　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p199,200　1999.09

第４章　学校外活動の比較と施設の計画条件

第１節　はじめに

本章では、学校外活動の施設の計画条件を導き出すことを目的として、児童福祉施策や、現在行われている学校外活動の環境と、前章で明らかにしたトワイライトスクールとの比較をとおして考察する。

名古屋市ではトワイライトスクール以外にも、従来から実施されてきた学童保育が並行して実施されていることから、学童保育の実態を調査し、トワイライトスクールと学童保育を比較し、両者の関係を明らかにする。

愛知県内の他の市町村で実施されている学校外活動を調査し、これと有効性の高いと考えられるトワイライトスクールとを比較することで、学校外活動のよりよいあり方を検討する。

これらの結果と前章までに明確化された学校外活動施設に関する整備要求から、学校外活動施設の計画条件を考察する。

（１）学童保育の施設利用環境

前章で明らかにしたように、全児童を対象として小学校を利用するトワイライトスクールのような活動は、子どもの活動の場としても、活動場所の整備の方向性としてもモデルケースである。しかし、すべての活動を一つの方策に集約することができるのか、既存の活動との関係もふまえて今後のあり方を検討する必要がある。

その代表的なものが、児童福祉施策である。児童福祉施策では、留守宅児童のための学童保育の実施と、子どもの遊び場として児童館が設置されている。児童館の整備は多くの自治体で既に行われており、児童館の中で学童保育を行っているところも多い。

学童保育の意義は大きく、社会状況の変化により共働き世帯が増加し、今後ますます重要性を増してくると想定される。トワイライトスクール実施に伴って、学童保育と活動時間が重複し、それぞれの活動の参加者が他方を利用することが困難な場合がある。また、保護者が学童保育からトワイライトスクールに安易に変更することにより、両者の目的の違いを混同して、トワイライトスクールへ保育的な機能を要求するケースも考えられる。今後ますます両者の区分けや役割分担が曖昧となってくることが懸念される。

また、児童館の役割についても同様で、学童保育＝児童館というイメージのところが多いが、児童館の利用対象者は高校生までが利用する施

設である。また児童館には遊び場としての機能をもたせている。トワイライトスクールを各小学校で実施した場合、遊び場としての児童館の機能・必要性を疑問視する考え方も発生してくる。実際に、現在小学校における子どもの居場所づくりに全てを一本化し、児童館の廃止や縮小が検討される傾向にあり、今後の学校外活動における施設のあり方に大きく影響を与えることが予想される。

（２）愛知県内の学校外活動の施設利用環境

第２章で把握したように、愛知県内には数多くの学校外活動が実施されている。また、前章では名古屋市のトワイライトスクールが学校外活動として有効性が高いことがわかった。

学校外活動の実施環境は、利用可能な施設で実施されているため、市町村によって大きく異なる。そこでこれらをいくつかに集約して、実施環境毎に調査対象を選定して調査を実施し、学校外活動の施設利用環境について明確にする。

さらに、トワイライトスクールとの比較をとおして、利用施設を小学校に固定して、活動を実施することが学校外活動の最適な形態であるかを検討する。

（３）本章の構成

第１節では、本章の目的について述べる。

第２節では、名古屋市の学童保育の施設利用環境について調査し、その活動と利用施設を明確化する。

第３節では、愛知県の学校外活動の施設利用環境を調査し、その活動と利用施設を明確化する。

第４節では、第２節、第３節で明らかにした施設利用環境と、前章でまとめたトワイライトスクールとの比較を通して、学校外活動の現状を明確化する。

第５節では、各章で明確化された内容から、学校外活動施設の計画条件を導き出す。

第２節　名古屋市の学童保育の施設利用環境

本節では名古屋市における学童保育の施設利用環境を調査し、その活動と施設利用の状況を考察する。

４－２－１　学童保育の実施状況

学童保育とは、平日に帰宅しても保護者のいない児童が、毎日の放課後や長期休業中に、親が帰ってくるまでの時間、生活を送る場所である。基本的に生活の場として位置づけられることから、遊びから勉強までそこで行うことになる。児童福祉施策として、保育園と並び大きな柱として実施されてきたものである。

本節では学童保育の実施状況として、学童保育実施率、実施場所、トワイライトスクールとの比較について述べる。

（１）学童保育実施率

学童保育の対象学年はそれぞれの学童保育所によって様々で、多くは１年生～６年生までであるが、各区に１カ所ずつ設置されている市立児童館は１年生～３年生までとなっている。平成１７年度時点での名古屋市における学童保育所の数は、１９９カ所である。学童保育は全ての小学校区で実施されていることが望ましいが、現実にはそのようにはなっていない。「学童保育情報」(参考文献２)から、名古屋市における学童保育所の所在地を把握し、各区毎の学童保育の実施状況を、学童保育実施率として、学童設置学区を各区の小学校区数で除した割合によって比較した。この結果を図４－２－１に示す。各区の実施率には差が見られ北西部ほど実施率が低くなっている。(参考文献２，４)

（データ出典：学童保育情報（参考文献２））

図４－２－１　名古屋市区別学童保育実施率

（２）実施場所

学童保育の実施場所については、名古屋市が調査した結果を表４－２－１に引用する（参考文献４）。活動場所別の内訳は、名古屋市の提供する専用室が最も多いが、民家やアパートの一室を利用して実施されているものが３割近く存在する。市立児童館は各区１カ所しかないため全体の１割に満たない。

（３）学童保育とトワイライトスクールの違い

トワイライトスクールとは、前章で述べたとおり自主的な遊びや学習などを行う活動の場である。両者の違いをまとめたものを表４－２－２に示す。学童保育とトワイライトスクールでは目的が大きく異なり、また内容や利用料金などにも違いがある。

表４－２－１　開設場所別学童保育数（平成16年現在）

開設場所	学童保育施設	割合(%)
専用室	119	59.8
民家・アパート	55	27.6
学校施設内	1	0.5
集会所	4	2.0
児童館	16	8.1
その他	4	2.0
合計	199	100.0

［出典：参考文献４］

表４－２－２　学童保育とトワイライトスクールにおける制度の比較

比較項目	学童保育	トワイライトスクール
目的	働く親を持つ子どもの放課後および長期休業中の生活の保障とそのことを通して働く家庭の生活と権利を保障すること	子どもたちの学校外活動のひとつとして、遊びを通した異学年交流や地域の方の協力による体験活動を通して、子どもたちの自主性・創造性・社会性などを育むこと
対象児童	保護者が働いているなど、昼間家庭に保護者のいない児童	参加を希望する児童
職員の配置・体制	ほとんどが専任複数体制	運営責任者（管理者） アシスタントパートナー
生活内容 活動内容	家庭に代わる毎日の生活の場所として、安定的に、継続的に生活が保障されることを目的とする	スポーツ（サッカー等） 遊び（カルタ、ゲーム等） 体験活動（工作等） 伝統芸能（太鼓、茶道等） 地域活動
保護者負担	ほとんどの学童保育で保育料がある	入会時に年間保険代約500円

（参考：参考文献２）

４－２－２　施設利用環境調査内容

学童保育の実施状況についてその全体像を把握するために、活動内容や参加人数、指導者の構成や利用施設等に関して調査を実施することとした。

長い活動実績をもつ学童保育は、自治体においてその形態が少しずつ異なるようであるが、本研究においては特にトワイライトスクールとの比較を行うために、名古屋市における現状に絞って把握した。

名古屋市における各学童保育全てを調査の対象として全体的にデータを収集するために、アンケート調査方式として調査を実施した。調査の概要について表４－２－３に示す。

調査目的：学童保育の施設利用環境を把握するため、活動状況、活動内容、利用施設の実態と評価を明確にする。

調査対象：・調査対象学童
名古屋市で行われている全学童保育施設１９９カ所。
・回答者
施設利用環境を最も把握していると考えられる、学童保育所の施設管理者１名に対して実施した。

調査方法：すべての学童保育施設へ、返信用封筒を同封して調査用紙を直接郵送して、郵送にて返送してもらう方法で回答を求めた。（配布総数：１９９　回収率：５０．８％）。

調査期間：平成１７年１０月７日～平成１７年１１月１８日

表４－２－３　調査概要

調査対象者	管理者	調査期間：平成17年10月7日～11月18日 調査対象：管理者 調査項目；活動実態、現状評価、施設要件 調査方法：各学童保育施設の管理者に郵送で配布し、同封の返信用封筒にて返送してもらい回収を行う
配布数	199	
回収数	101	
回収率（%）	50.8	

アンケート調査項目の抽出にあたり、前章で把握したトワイライトスクールにおける実態調査の仮説や活動評価項目を参考にし、表４－２－４に示す仮説に基づき作成した。調査用紙をその後に示す。

表４－２－４　アンケートの仮説と構成

運営責任者	仮説			アンケート項目（アンケート番号）		
				現状	評価	要望（問題点や意見など）
	・開設時間の短さ ・指導員不足	活動	活動全般	開設時間(1-2)	開設時間(2-1)	今後の改善点(9-1)
			行事			良いと思う行事(2-2)，やりたい行事(2-3)
			児童	学年別入所児童数(1-4)		
			指導員	指導員数(1-5)	児童数に対する指導員数(7-1)	指導員に対する要求(7-2)
	・施設・室内環境評価の悪さ ・安全対策が不十分	施設	設備		室内の広さ(3-1)，室内の明るさ(3-2)，室内のきれいさ(3-3)，施設の使いやすさ(3-5)，遊び用具の充足度(4-2)，児童の安全対策(4-3)	室内が汚れている理由(3-4)，施設内で不便な所(3-6)，生活を行ううえで足りないと思われる設備(4-1)，児童の安全に対して行うべき対策(4-4)
			立地	施設周辺の環境(5-2)		学校、施設、児童の自宅の位置関係(5-1)，施設周辺にあったらいいと思う建物や自然環境(5-3)
	・指導員体制が不十分	保育			活動時間外に児童と交流を図りたいか(6-4)	児童を保育する上で不便な点(6-1)，児童と指導員の理想の関係(6-2)，児童に教えたいこと(6-3)
	・トワイライトスクールの影響大			学童保育施設への影響(8-2)	トワイライトスクールへの危機感(8-1)	
	上の項目の他、各学童保育施設の基本的事項として・・・名称(1-1)，運営主体(1-3)					

管理者用アンケート用紙

1．以下の項目について空欄には記入を、番号には当てはまる箇所に○をお付けください。

お分かりになる範囲で結構ですので、よろしくお願いします。

（1）学童名　[　　]

（2）開設時間　平日　[　　]～[　　]

土曜日　[　　]～[　　]

日曜日・祝日　[　　]～[　　]

長期休暇期間中　[　　]～[　　]

（3）運営主体

1. 公営　2. 公社・社会福祉協議会　3. 運営委員会　4. 父母会

5. 法人・個人　6. その他（　　）

（4）児童数

	男子（人）	女子（人）
1年生		
2年生		
3年生		
4年生		
5年生		
6年生		

（5）指導員数　[　　人]

2．活動についてお伺いします。

（1）開設時間に関してどう思いますか。（最もふさわしい番号に○をお付けください。）

1. 非常に長い　2. やや長い　3. ちょうどいい　4. やや短い　5. 非常に短い

（2）現時行われている施設の行事で良いと思う行事は何ですか。

（下記の中から２つ選んで○をお付けください。）

1. キャンプ　2. プール　3. スポーツ大会　4. 映画鑑賞　5. お花見　6. 七夕

7. 盆踊り　8. クリスマス会　9. もちつき大会　10. 親子交流会　11. バザー

12. 遠足　13. 卒所旅行　14. 地域交流　15. お食事会　16. ゲーム大会

17. その他（　　）

(3)現在行われている施設の行事以外でどんな行事がしたいですか。

(下記の中から2つ選んで○をお付けください。)

1. キャンプ　2. プール　3. スポーツ大会　4. 映画鑑賞　5. お花見　6. 七夕
7. 盆踊り　8. クリスマス会　9. もちつき大会　10. 親子交流会　11. バザー
12. 遠足　13. 卒所旅行　14. 地域交流　15. お食事会　16. ゲーム大会
17. その他（　　）

3．施設についてお伺いします。

(1)室内の広さに満足していますか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常に満足　2. やや満足　3. ちょうどいい　4. やや不満　5. 非常に不満

(2)室内は明るいですか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常に明るい　2. やや明るい　3. ちょうどいい　4. やや暗い　5. 非常に暗い

(3)室内はきれいですか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常にきれい　2. ややきれい　3. 普通　4. やや汚い　5. 非常に汚い

(4)「やや汚い」、「非常に汚い」と答えた方はなぜだと思いますか。

例) 施設が老朽化しているから、・・・

[　　]

(5)施設は使いやすいですか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常に使いやすい　2. やや使いやすい　3. 普通　4. やや使いにくい　5. 非常に使いにくい

(6)施設内で不便だと感じるのはどんなことですか?

例) 玄関が狭い、・・・

[　　]

4．設備についてお伺いします。

(1)生活を送る上で必要な設備は何ですか。(下記の中から３つ選んで○をお付けください。)

1. 生活室　2. 台所設備　3. トイレ　4. 電話　5. かばん置き場（個人ロッカー）
6. 手洗い場　7. 足洗い場　8. 静養できる部屋またはコーナー
9. ホールなどの室内遊戯室　10. 事務室　11. 冷・暖房設備　12. シャワー設備
13. グラウンド　14. その他（　　）

(2)児童たちの遊び用具は足りていますか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常に足りている　2. やや足りている　3. ちょうどいい
4. やや不足している　5. 非常に不足している

(3)児童の安全対策は十分ですか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常にそう思う　2. ややそう思う　3. どちらともいえない
4. ややそう思わない　5. 非常にそう思わない

(4)児童の安全に対してどのような対策を行えばいいと考えますか。
(下記の中から１つ選んで○をお付けください。)

1. 開放的な空間にして逃げやすくする
2. 閉鎖的な空間にして侵入させにくくする
3. セキュリティーシステム（防犯システム）を充実させる
4. 指導者、保護者などの大人が交代で警備する
5. その他（　　）

5．立地についてお伺いします。

(1)学校、施設、児童の自宅の位置関係はどのようなものがいいですか。
(下記の中から１つ選んで○をお付けください。)

1. 学校と施設が一番近い　2. 学校と自宅が一番近い
3. 施設と自宅が一番近い　4. すべて同じくらいの距離
5. その他（　　）

(2)施設周辺の環境で悪い点は何かありますか。

例）交通量が多い、・・・

[　　]

(3)施設周辺にあったらいいと思う建物や自然環境が何かありますか。

(学校、児童の自宅以外でお答えください。)

例) 病院、川、・・・

[　　]

6．保育についてお伺いします。

(1)児童の世話をする上で不便だと感じていることは何かありますか。

例) 人手が足りない、・・・

[　　]

(2)児童と指導員はどのような関係が理想だと考えますか。

(1つ選択して○を付けてください。)

1. 友達のような関係　　2. 先生と生徒のような関係

3. 親と子のような関係

4. その他 (　　)

(3)宿題以外で児童に教えたいことは何かありますか。

例) 料理を教えたい、・・・

[　　]

(4)児童と活動時間外に交流を図りたいと思いますか。

1. 非常にそう思う　　2. ややそう思う　　3. どちらでもいい

4. ややそう思わない　　5. 非常にそう思わない

7．指導員についてお伺いします。

(1)現在の児童数に対して指導者数はどうですか。(最もふさわしい番号に○をお付けください。)

1. 非常に多い　　2. やや多い　　3. ちょうどいい　　4. やや少ない　　5. 非常に少ない

(2)指導員に対して何か要求することはありますか。

例) 保育の勉強をしてほしい、・・・

[　　]

8．トワイライトスクールについて伺います。

(1)トワイライトスクールが増えていることに危機感を感じますか。

1. 非常に感じる　　2. やや感じる　　3. どちらともいえない

4. あまり感じない　　5. まったく感じない

（2）トワイライトスクールができたことで施設に何らかの影響が出ましたか。

例）学童に通う児童が減った、・・・

[　　]

9．その他

（1）今後の活動をより良くするために改善が必要だと思うものはどれですか。

（下記の中から２つ選んで○をお付けください。）

1. 活動時間　2. 指導者数　3. 児童数　4. 行事の種類　5. 行事の内容

6. 施設の広さ　7. 遊び用具の量　8. 安全対策　9. 広報活動

10. その他（　　）

４－２－３　活動と利用施設

本節では、アンケートにより把握した学童保育の活動と利用施設の現状についてまとめる。

（１）活動の状況

学童保育の活動実態としてまず、学童保育が設置されている小学校区の数、各学童保育が開設している時間や入所している人数についてまとめた。学童保育の概要として平成１７年４月１日現在の設置学区数、平均開設時間、平均入所児童数、平均指導者数を表４－２－５に示す。

学童保育所は名古屋市全体では１９９カ所であるが、小学校区の数との関係をみると、１６０学区でしか実施されていない。名古屋市の小学校区数は平成１７年度現在で２６０学区のため、全体の設置率は６１．５％となる。約４割の小学校区では学童保育所そのものがない。

回答のあった学童保育所の平均開設時間をみると、平日は学校終了後から午後６時３０分頃までの約４時間実施されている。土曜日は朝９時から夕方６時までの約９時間である。夏休み中など長期休業期間中は午前８時頃から午後６時３０分頃までと約１０時間３０分の長時間の保育が実施されている。

子どもの第２の家庭となっている状況が分かる。

平均の入所児童数をみると約３１人と、結構多くの児童が在籍していることが分かった。

また平均の指導員数は２．９人となっており、約１０人に１人の割合で、指導員が入所児童の面倒を見ている状況にある。

長時間保育を行うことを考えると、指導員の拡充が必要であるが、人件費などの運営経費との関係もあり、早急な改善は難しいと思われる。

表４－２－５　学童保育の概要

	名古屋市全体	学童保育設置学区
小学校学区数（ヵ所）	260	160
平均開設時間 月～金曜日：授業終了後～午後6時24分 土曜日　：午前8時56分～午後6時02分 長期休業中：午前8時17分～午後6時22分		学童保育設置率　61.5% 平均入所児童数　31人 平均指導員数　2.9人

（平成１７年現在）

次に学年別児童数の内訳を図４－２－２に示す。学年別の児童数をみると学年が上がるに従い少なくなる。名古屋市立児童館が１年生から３年生までを対象としているのが影響しているのか、４、５、６年生の割合が低くなっている。

学童保育の必要な学年を一律に３年生までとする線引きも困難であるため、高学年に対するフォローが必要である。

学童保育所の設置主体については、図４－２－３のとおりであった。

公共で実施されているものは、公社や社会福祉協議会が主体の学童で全体の１５％程であった。それ以外の８５％は民間で実施されている。民間で実施されている学童保育所の運営主体は、運営委員会を組織して運営しているものが全体の６０％で最も多く、学童に在籍する児童の父母によって組織される父母会によるものが全体の２０％程であった。

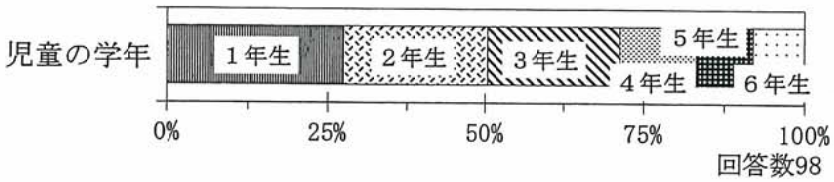


図４－２－２　在籍児童の学年

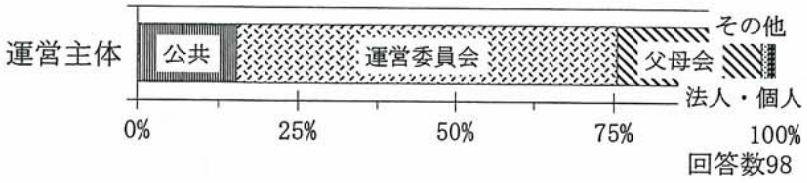


図４－２－３　運営主体

（２）利用施設

利用施設の広さや構成については、回答者に対して調査用紙に記入する方法で調査するのは困難であるため、名古屋市が示している整備水準を述べる。名古屋市における学童保育の設置に関する事項は、「留守家庭児童専用室設置要項」で、施設の具備する要件が定められている。「指導室４８．６㎡にトイレ、台所が設置されていること」が標準として示されており、指導室の最低面積は２４．７５㎡以上となっている。

４－２－４　活動と施設の評価

活動と利用施設について、現状の施設の利便性や活動に対する取り組み、トワイライトスクールとの関係について評価を求めた。

評価は、活動に関して「活動時間の長さ」、利用施設に関しては、「施設の広さの満足度」、「施設の明るさ」、「施設のきれいさ」、「施設の使いやすさ」、「道具数の満足度」について評価してもらった。さらに管理については「怪我などの安全対策」、指導について「交流の促進」、「指導者数の過不足」について、最後にトワイライトスクールとの関係として「トワイライトスクールに危機を感じるか」の項目で評価してもらった。その結果を図４－２－４に示す。

全体的に評価をみると、全ての項目で不満と回答している割合が高い。

「活動時間の長さ」については施設によって回答が分かれている。

「施設の広さの満足度」、「道具数の満足度」、「指導者の過不足」の項目ではかなり不満度の高い評価となっており、施設のハード面、ソフト面双方の整備が必要である。特に広さの満足度については、指導室の標準面積が４８．６㎡に、子どもと指導者をあわせて平均で３４人が長時間生活することになる。１人あたりの使用面積を考えると、畳１畳分も確保できない場所で宿題や食事等をすることになることが原因であると推察できる。

「施設の明るさ」、「施設のきれいさ」、「けがなどの安全対策」については４割以上が「不満」と回答しており、やや低い評価である。安全対策は今一番求められているが、４割が不満に感じている。早急な改善が必要である。

「活動外での交流を図りたいか」については「図りたい」という回答が多く、「図りたくない」との回答は、あまり交流を図りすぎると子どもや保護者の負担が大きくなるためと思われる。

「トワイライトスクールに危機を感じるか」の項目では多くの施設でトワイライトスクールが増えることに危機を感じている結果となった。活動の目的が全く異なるトワイライトスクールに対しては、学童保育の側からも、安価で子どもの居場所が確保できると保護者が誤解しているとの指摘があった。このことは、学童保育所の軽視につながり、学童保育所にとって大きな危機となっている。

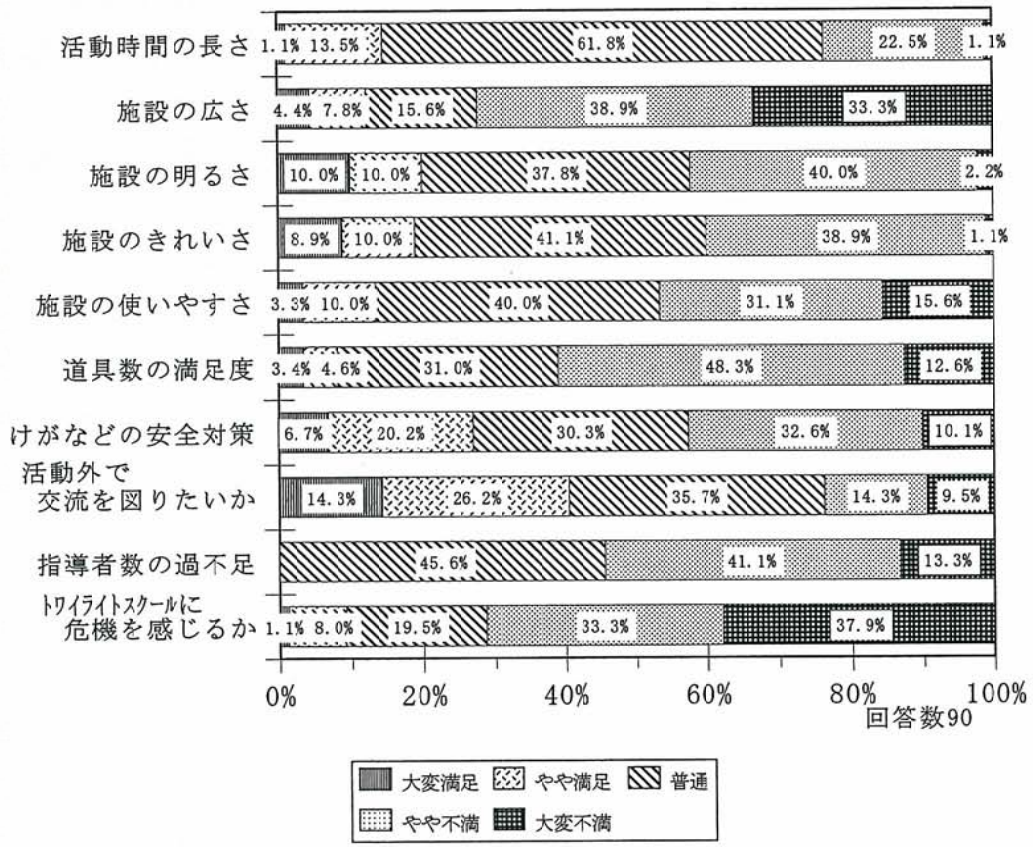


図４－２－４　学童保育における活動と施設の評価

第３節　愛知県の学校外活動の施設利用環境

第２章において愛知県内全域を対象として、学校外活動の全体像を把握した。その結果、地域の公共施設が多く利用されている現状が明らかになった。

よりよい学校外活動の活動環境と利用施設について、有効性の高いトワイライトスクールとの比較をとおして検討するためには、愛知県の学校外活動の施設利用環境を調査し、明らかにする必要がある。

そこで、本節においては、愛知県内を市町村の特徴や公共施設の整備状況など学校外活動に関わる項目でグループ化し、その中から調査対象を選定する。その後、調査対象市町村を選定しそこで行われている学校外活動をトワイライトスクールと同様の評価指標を用いて、活動と施設について評価を求め、施設利用環境について明らかにする。

４－３－１　調査対象地の選定

（１）地域特性指標の選定

愛知県は三大都市圏である中部圏の中核であり88の市町村で構成されている（平成１４年現在。市町村合併前の数）。自動車産業をはじめとする機械機器製造業や繊維業、窯業など工業を中心として発展してきた。また、農業や水産業の分野においても、花卉、茶、養鰻業など日本有数の生産量を誇っている。人口でみると、工業の発展とともに多くの労働人口が流入し、人口が２００万人を超える名古屋市や、人口が２００人程度で過疎化の進む富山村など人口の差が非常に大きい。また、地形的には木曽川扇状地に開けた平野から、標高1000mを超える山々のつながる山間地域まで様々な地形があり、これを同一の条件で扱うことは適当ではないといえる。そこで、学校外活動を行う上で重要と考えられる地域の特徴を用いて分類する。分類に利用する地域特性指標は、以下の４つ仮説に基づき選定を行った。

・仮説

1)「都市の規模」－規模が大きいほど施設整備が充実している可能性が高く、逆に地縁的なつながりは構築しにくい

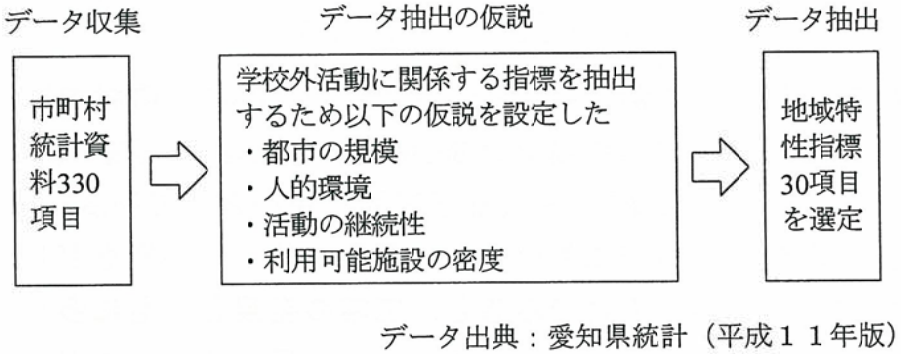
2)「人的環境」－指導環境の確保のためには多くの人間が定住してい

2)「人的環境」－指導環境の確保のためには多くの人間が定住している方がよい

3)「活動の継続性」－子どもの数が活動の継続の条件

4)「利用可能施設の密度」－利用可能施設数が多い方が活動は活発となる

この仮説に基づき対象となる指標を収集した。収集にあたり、すべての市町村で同じ時期に同じ条件でデータ収集されていることが必要であるため、「愛知県統計年鑑（平成１１年版）」で採用されているデータを基に地域特性の指標を選定した。地域特性指標の選定の流れを図４－３－１に示す。



データ出典：愛知県統計（平成１１年版）

図４－３－１　地域特性指標の選定

人口に関する指標は平成８年度の国勢調査による数値である。規模に比例して数の増えるもの、例えば施設数などは、規模の影響をなるべく小さくするために、単位面積当たりや人口当たりとすることで、市町村の特徴を表現できるように工夫した。特に利用可能施設数は、都市の規模と設置数が比例するため子どもが通える事を考慮し、施設数を市町村面積で除した密度を用いることにした。

その結果、表４－３－１で示すとおり、地域特性指標３０項目を選定した。

愛知県の特徴を数値データでみると、面積では最大と最小が１００倍、人口は１万倍の差があるなど都市の規模に関する項目は差が大きい。産業の特徴を表す産業別人口比をみると１次産業：２次産業：３次産業の比は、１０：４０：５０となり、工業に従事する人口割合が高い。また施設に関する数値は、整備されているところとそうでないところの差が大きい。これを密度で表した場合、山間部の面積が大きい市町村では、小数第２位までで表現すると、見かけ上数値として表れない場合もある。

表４－３－１　地域特性指標の特徴

（平成１１年度）

	最大値	最少値	中間値	平均	偏差
面積(km2)	326.35	3.36	34.23	58.55	68.19
人口(人)	2,161,680	197	30,700	79,389.65	236,626.51
１５歳未満人口（人）	311,602	30	4,669	12,474.72	34,563.19
人口密度(1km2当たり)	6,601	6	1,477	1,669.70	1,394.66
市街化率（%）	97.26	0.00	23.35	28.04	25.48
移動者率（昼間人口／夜間人口）	164.41	57.55	99.63	100.80	18.02
流入超過人口（人／年）	399,147	-36,661	-1,867	1,362.64	43,640.49
出生率（%）	20.30	4.09	10.22	9.89	2.48
世帯数	833,163	83	9,345	26,684.22	90,259.08
核家族率（%）	71.26	31.73	59.61	57.17	8.82
第１次産業人口比	60.00	0.41	4.85	9.13	10.78
第２次産業人口比	58.16	12.68	40.84	40.36	8.20
第３次産業人口比	76.65	27.32	50.44	50.51	8.60
歳出総額／人口　（千円）	3,661.54	230.47	308.27	447.02	441.12
国税依存率(%)	0.08	0.01	0.02	0.03	0.02
小学校数	260	1	5	11.16	28.53
児童数	121,191	14	1,879	4,852.52	13,424.14
小学校密度	0.80	0.01	0.22	0.23	0.16
中学校数	108	1	2	4.67	11.88
生徒数	62,164	4	982	2,586.28	6,932.61
中学校密度	0.36	0.00	0.09	0.10	0.08
公民館密度	0.81	0.00	0.09	0.13	0.14
博物館・資料館等密度	0.50	0.00	0.05	0.08	0.09
文化会館密度	0.21	0.00	0.00	0.02	0.04
文化施設密度	0.89	0.00	0.18	0.23	0.20
運動広場密度	0.81	0.00	0.11	0.15	0.14
球技コート密度	1.46	0.00	0.23	0.26	0.24
体育館密度	0.76	0.00	0.10	0.14	0.15
柔剣道場密度	0.25	0.00	0.02	0.03	0.04
水泳プール密度	0.37	0.00	0.03	0.06	0.08
体育施設密度	2.23	0.03	0.58	0.64	0.50

（２）地域の分類

特徴として選定した指標を基に、類似する市町村をグループ化するために多変量解析を用いてデータを集約した。先に得られた各市町村の指標を変数として主成分分析を行い、得られた主成分得点を用いてクラスター分析（最長距離法）を用いて類型化を行った。

主成分分析の結果を表４－３－２に示す。これにより地域特性指標３０項目について、累積寄与率７０％で３つの軸により説明できる。

Ⅰ軸には人口密度をはじめとして施設密度が多く集約された。このためこの軸は「施設の充実度」を表しているものと考えられる。寄与率は３６％であった。

Ⅱ軸に小・中学校数、生徒数、人口に代表される「都市の規模」が説明できる。

Ⅲ軸には、第二次産業人口や転入者率が集約され、工業に伴う人の出入りを表現していると考えられることから「人口転出入度」が得られた。

さらに、各都市をグループ化するために、主成分分析により得られた主成分得点を元にクラスター分析（最長距離法）を行った。図４－３－２に分析結果を示す。

その結果、

「大都市型」（名古屋市）

「中核都市型」（豊橋市・岡崎市・豊田市）

「工業発達型」（藤岡町）

「中規模独立型」（一宮市・春日井市・西尾市等２９市町村）

「都市従属型」（江南市・津島市・東海市等１７市町村）

「面積狭小型」（岩倉市・西枇杷島町・清洲町等７市町村）

「過疎地型」（富山村・渥美町・赤羽根町）

「面積広大型」（新城市・田原町・御津町２７市町村）

の８つに類型化することができた。

表４－３－２　地域特性の構造（主成分分析）

	Ⅰ軸 施設の充実度	Ⅱ軸 都市の規模	Ⅲ軸 人口転出入度
人口密度	0.91	−0.17	0.03
小学校密度	0.89	−0.19	0.12
中学校密度	0.85	−0.24	0.14
市街化率	0.84	−0.26	0.03
体育施設密度	0.73	−0.53	0.24
文化施設密度	0.66	−0.51	0.13
三次産業人口	0.62	−0.09	−0.01
核家族率	0.60	−0.38	−0.42
運動広場密度	0.60	−0.48	0.16
球技コート密度	0.59	−0.39	0.01
水泳プール密度	0.58	−0.39	0.26
博物館密度	0.52	−0.30	0.35
体育館密度	0.51	−0.36	0.30
公民館密度	0.50	−0.46	−0.08
文化会館密度	0.38	−0.26	0.15
歳入依存率	−0.62	0.22	0.50
一次産業人口	−0.62	0.24	0.57
小学校数	0.59	0.80	0.01
中学校数	0.61	0.79	0.01
生徒数	0.62	0.78	−0.02
児童数	0.62	0.78	−0.02
人口	0.63	0.78	0.01
１５歳未満人口	0.63	0.78	−0.02
世帯数	0.62	0.78	0.03
面積	−0.04	0.77	−0.15
流入超過人口	0.54	0.74	0.17
柔剣道場密度	0.34	−0.37	0.19
一人当り歳出額	−0.38	0.23	0.40
転入者率	0.28	−0.20	−0.53
二次産業人口	0.17	−0.22	−0.74
固有値	10.81	7.71	2.27
寄与率	36.04	25.69	7.59
累積寄与率	36.04	61.73	69.31

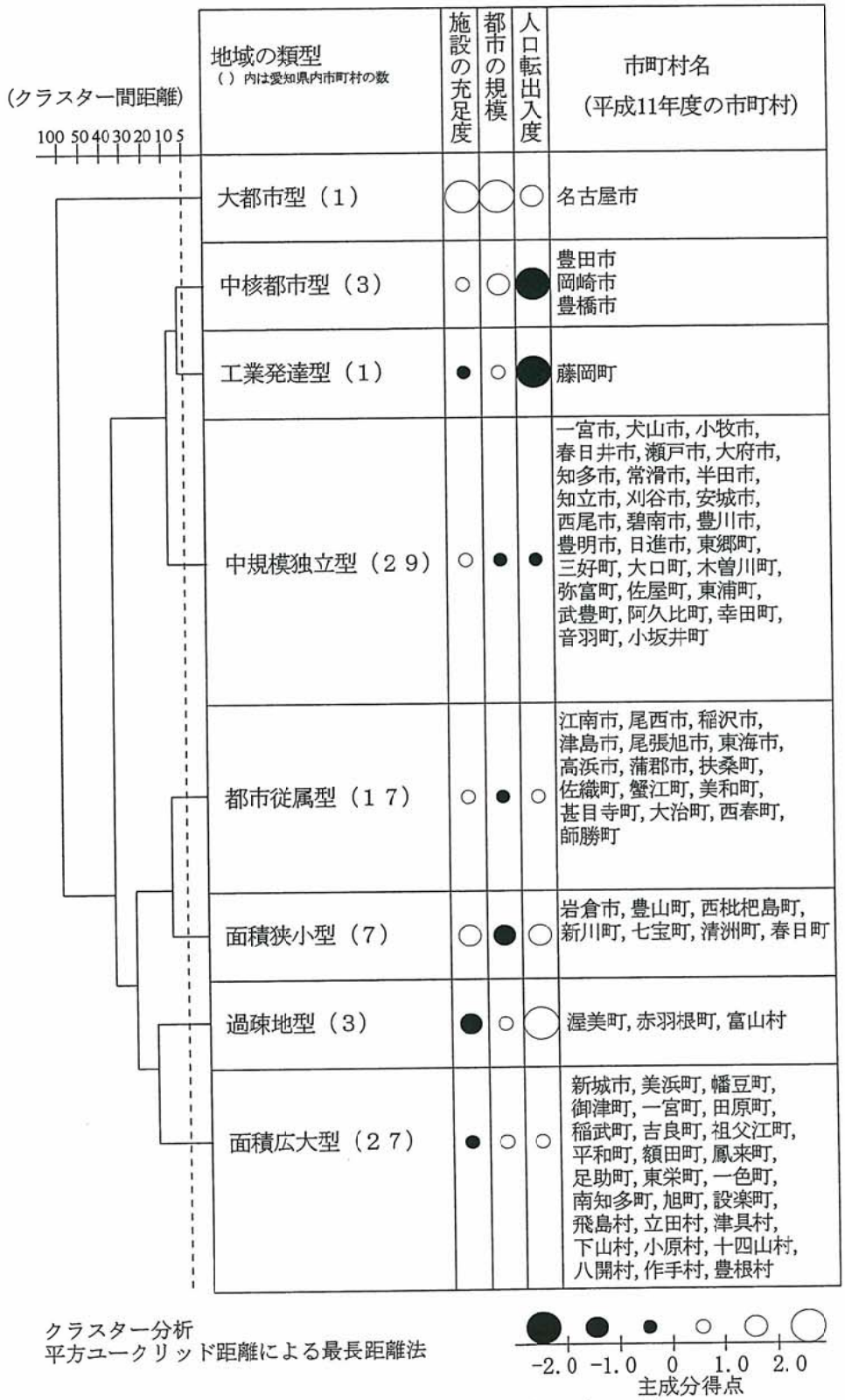


図４－３－２　地域類型と市町村

（３）地域類型と特徴

８つに類型化された各類型の特徴を以下に示す。

①大都市型

大都市型は「施設の充実度」「都市の規模」が極めて高い。「施設の充実度」では人口密度・小学校密度・中学校密度・市街化率・第三次産業人口比が最も大きな値を示し、第一次産業人口比は最も小さな値となった。「都市の規模」では小学校数・中学校数・児童数・生徒数・人口・１５歳未満人口・世帯数・流入超過人口・面積で最も大きな値を示した。

②中核都市型

中核都市型は「都市の規模」が高く、「人口転出入度」が極めて低い。「都市の規模」では大都市型に次いで大きく、歳入依存率では最も小さな値を示した。「人口転出入度」では第二次産業人口比が大きな値を示している。

③工業発達型

工業発達型は「施設の充実度」が低く、「人口転出入度」が極めて低い。「施設の充実度」では小学校密度・中学校密度・市街化率・体育施設密度・文化施設密度・運動広場密度・球技コート密度・体育館密度・公民館密度・文化会館密度で最も小さな値を、核家族率で最も大きな値を示した。「人口転出入度」では転入者率・第二次産業人口比で最も大きな値を示している。

④中規模独立型

中規模独立型は「都市の規模」が他の類型の中間の位置にあたり、「人口転出入度」が低い。「人口転出入度」のうち転入者率・第二次産業人口比で大きな値を示している。

⑤都市従属型

都市従属型は「施設の充実度」が高く「都市の規模」はおおよそ中間的な値を示す。「施設の充実度」の文化施設密度・核家族率・運動広場密度・公民館密度・文化会館密度で高い値を示している。

⑥面積狭小型

面積狭小型は「施設の充実度」が高く、「都市の規模」が極めて低い。「施設の充実度」では体育施設密度・文化施設密度・運動広場密度・球技コート密度・水泳プール密度・博物館密度・体育館密度・公民館密度・文化会館密度で最も大きな値を示し、「都市の規模」では小学校数・面積で最も小さな値、柔剣道場密度で最も大きな値を示している。

⑦過疎地型

過疎地型は「施設の充実度」が極めて低く、「人口転出入度」が極めて高い。「施設の充実度」において人口密度・核家族率・水泳プール密度・博物館密度で最も低い値、歳入依存率・第一次産業人口比で最も大きな値を示している。「人口転出入度」では一人当たり歳出総額で最も大きな値を、転入者率で最も小さな値を示している。

⑧面積広大型

面積広大型では「施設の充実度」が低く、人口密度・中学校密度・市街化率・文化施設密度・核家族率・運動広場密度・球技コート密度・公民館密度・文化会館密度で小さな値、歳入依存率・第一次産業人口比で大きな値を示し、「都市の規模」では面積が大きい値を示している。

4－3－2　施設利用環境調査内容

前章で調査したトワイライトスクールと、愛知県内で行われている学校外活動との比較を行うために、活動や施設に関してトワイライトスクールと同様の項目を用いて施設利用環境について調査を行った。調査対象の選定には、前項で類型化した都市の分類に基づいて、各類型から１つの市町村を選定した。

学校外活動は、各活動組織が独自で活動をおこなっていることから、活動そのものの把握が難しい。そこで各都市においてどのくらい学校外活動が実施されているかを把握するため、各市町村を訪ね調査をした。その結果、多くの市町村で年度が変わる時期に広報誌を用いて学校外活動が団員募集を行っていることが判明した。そこで、学校外活動を把握する基礎的資料として広報紙を収集し、各市町村の広報紙において広く参加者を募集している学校外活動を把握し、調査の対象とした。調査は広報紙において掲載されている代表者を通じて実施した。

利用施設についても活動場所として広報紙に掲載されており、調査対象学校外活動が利用している利用施設の管理者に対しても調査を行った。調査の概要を表４－３－３に示す。さらに選定した調査対象市町村について、図４－３－３に示す。調査は、アンケート形式で行い、利用施設の管理者及び学校外活動組織の指導者に対して行った。アンケートの構造を表４－３－４に示し、調査に用いた調査用紙をその後に掲載する。

調査目的：愛知県内の学校外活動の施設利用環境を把握するため、活動状況、活動内容、利用施設の実態、活動と利用施設の評価、施設管理状況について明らかにする。

・子どもの学校外活動が行われている施設の施設管理者に対して、施設属性、利用団体、施設の現状評価と施設管理を把握する。

・学校外活動の指導者に対して、指導者の属性と活動状況、活動と利用施設の現状評価を求める。

調査対象：（１）調査対象地の選定

調査対象地の選定は先に述べたように、愛知県内を人口規模などを元に８類型して、そのうちトワイライトスクールと

学童保育を調査対象とした名古屋市を除く７類型から各１市町村を選定した。

（２）学校外活動の選定

調査対象の子どもの学校外活動は平成13年度に各市町村で配布された広報紙等において、活動参加者を募集している継続的な活動組織を対象とした。

（３）回答者

管理者は、（２）で子どもの学校外活動が実施されている施設の施設管理者１名。

指導者は、（２）で選定した学校外活動の指導者３名ずつに対して行う。

調査方法：・子どもの学校外活動が行われている９８施設の管理者に施設の現状を郵送にて調査した。

・平成１３年度に実施されていた学校外活動８４団体の指導者各３名に対して、活動団体への郵送により回答を求め、返信用封筒にて返送してもらった。

回収状況：回収率は管理者が８９．８％であった。

学校外活動については、活動組織４０団体の指導者合計１１５人より返答があり、指導者の回収率は４５．８％であった。そのうち１１４が有効回答であった。

調査期間：平成１４年１１月１日～平成１４年１１月２０日

表４－３－３　愛知県の学校外活動の実態調査概要

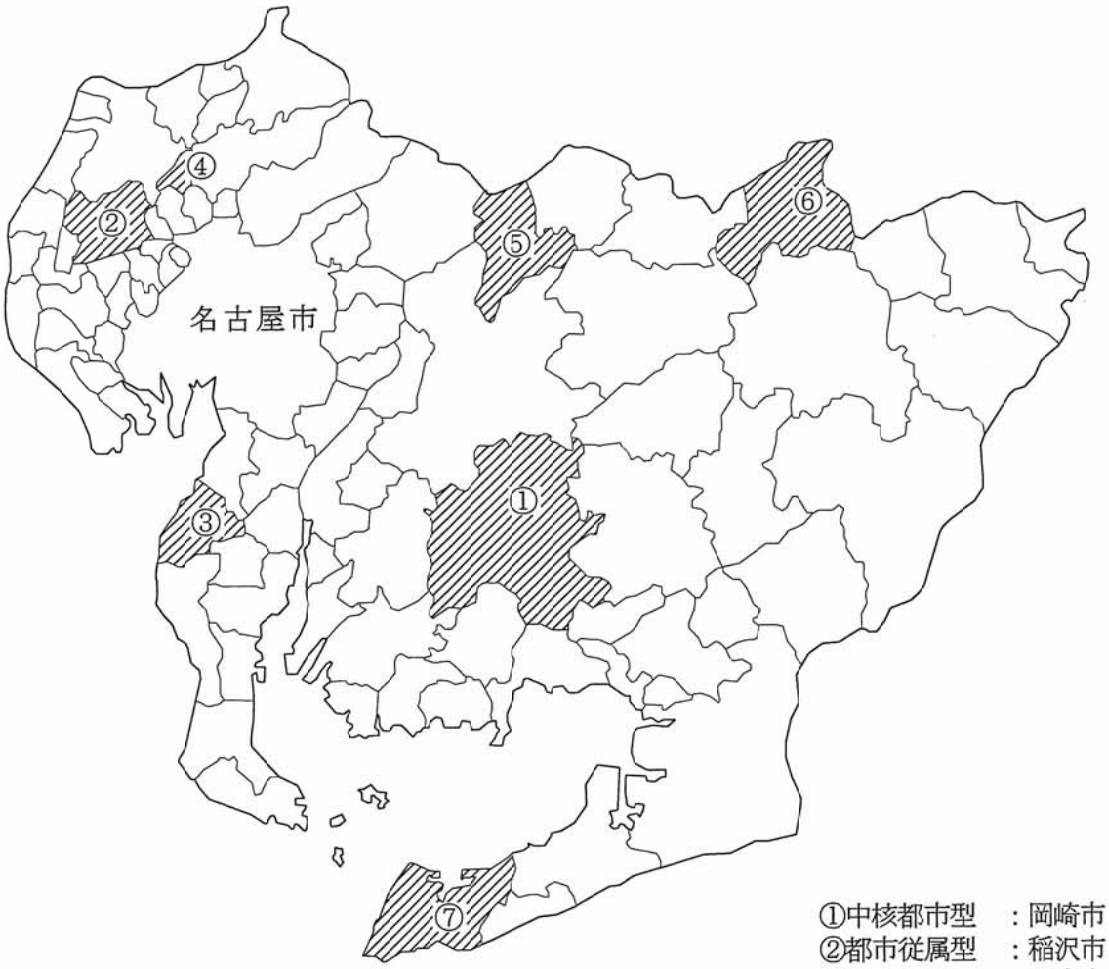
	調査対象者	管理者	指導者	合計
愛知県	配布数	98	252	350
	回収数	88	115	203
	回収率(%)	89.8	45.8	58.0

調査期間：平成14年11月1日～同11月20日
調査対象：管理者，指導者
調査項目：活動実態，現状評価，指導者の属性
調査方法：各団体・施設に返信用封筒を同封し郵送後に現地調査を行う

調査対象地の活動状況と配布状況

	利用施設数	活動団体数	指導者	
			配布数	回収数
岡崎市	21	16	48	23
稲沢市	19	14	42	16
知多市	20	23	69	41
岩倉市	13	13	39	10
藤岡町	9	5	15	4
稲武町	9	2	6	4
渥美町	7	11	33	17
合計	98	84	252	115

愛知県調査対象市町村
（平成14年11月調査時）



①中核都市型　：岡崎市
②都市従属型　：稲沢市
③中規模独立型：知多市
④面積狭小型　：岩倉市
⑤工業発達型　：藤岡町
⑥面積広大型　：稲武町
⑦過疎地型　　：渥美町

図４－３－３　愛知県の学校外活動調査対象地

表４－３－４　アンケートの構成と仮説（施設管理者）

施設管理者	仮説	アンケート項目（アンケート番号）			
			現状	現状	要望（問題点や意見など）
	・施設の種類が多い ・利用状況が異なる ・子ども利用に対する問題 ・管理部分が不十分	施設全般	施設名称(1)、所在地(2)、利用開始年(3)、開館時間(4)、利用申請方法(5)、駐車台数(6)、管理者数(7)	活動時間(26-1)，楽しさ(26-2)，活動からの学習(26-3)，活動時間外の児童と指導者との関わり(26-4)，今後の活動への参加(26-5)，愛着(32-3)，誇り(32-4)	活発化の方策(41)
		利用団体	団体数(8)、子ども団体数(9)、活動内容(10)、1週間当たり利用団体数（全体11-a、子ども11-b）、利用者数（全体12-a、12-b）	子どもからの意見(25-1)、挨拶(25-2)、叱る(25-3)、相談(25-4)	子どもについて気づく点(38)、要望(39)
		管理	管理室の有無（13)、防犯対策(15)、照明設備の利用(16)、空調設備の利用(17)、道具・備品の貸し出し(18)、貸し出し料金(19)	管理室の広さ(14-a)、居心地(14-b)、使いやすさ(14-c)	
		利用	交通手段(20)	交通の便(26-12)、距離(26-13)、駐車場(26-14)	
	・施設の利用希望が多い ・施設が使いづらい ・道具の利用要望	施設道具	利用施設の種類・利用頻度(9)，利用優先順位(10)	分り易さ(26-1)、活動準備(26-2)、見学スペース(26-3)、広さ(26-4)、きれいさ(26-5)、明るさ(26-6)、空調(26-7)、使い易さ(26-8)、快適性(26-9)、騒げるか(26-10)、代替性(26-11)、道具の充足(27-1)、道具の扱い(27-2)、片付け(27-3)	
	・管理の難しさ ・運営の方法	維持管理	苦情(21)、苦情の内容(22)、今後の受入れ(23, 24)、備品の修繕(30-a, 30-b)、備品の購入31, 32)、購入に要する時間(33)、改修(34)、保全(35)、修繕費(36, 37)	安全対策(28-1)、防犯対策(28-2)、保管場所(28-3)、利用増加(29-1)、利用料金(29-3)	管理要望(40)

表４－３－５　アンケートの構成と仮説（指導者）

指導者	仮説	アンケート項目（アンケート番号）				
				現状	評価	要望（問題点や意見など）
	・指導者不足 ・異学年・世代間交流の少なさ ・参加人数の少なさ	活動	活動全般	活動種目(4)、参加人数（指導者・子ども）(5)、活動状況(6)、運営母体(7)、運営資金(8)	活動時間(17-1)、楽しさ(17-2)、活動からの学習(17-3)	活動の要望(27)
			指導者	年齢(9)、性別(10)、職業(11)、居住地(12)、役割(13、14)、参加期間(15)、参加状況(16)	活動時間外の児童と指導者との関わり(17-4)、今後の活動への参加(17-5)、指導者の充足(17-6)	
			子ども	参加人数｛一日(6-a)・男女別(6-c)・学年別(6-c)・曜日別(6-c)｝、近隣学区からの参加人数(6-b)	参加の活発さ(18-1)、活動への意見(18-2)、生活への応用(18-3)、自主性・社会性の育成(18-4, 18-5)、指導者への挨拶(18-6)、しつけ(18-7)、学年交流(18-8)、学年間の指導(18-9)、世代間交流(18-10)、相談(18-11)、参加人数(18-12)	子どもについて気づく点(25)
	・活動場所の不足 ・道具の不足	施設・道具		利用施設の種類・利用頻度(9)、利用優先順位(10)	分り易さ(19-1)、準備スペース(19-2)、見学スペース(19-3)、広さ(19-4)、きれいさ(19-5)、明るさ(19-6)、空調設備(19-7)、使いやすさ(19-8)、快適さ(19-9)、施設の選択性(19-10)、騒ぎ易さ(19-11)、充足度(19-12)、交通の便(19-13)、距離(19-14)、駐車場(19-15)、過ごしやすさ(29-10)、道具の充足(20-1)、道具の貸出(20-2)、道具の扱い(20-3)	利用施設の要望(26)、施設の改善(28)
	・活動の継続の難しさ	その他		苦情の有無(23)、苦情の内容(24)	安全対策(21-1)、防犯対策(21-2)、保管場所(21-3)、新規交流(22-1)、利用料金(22-2)、利用許可(22-3)、誇り(22-4)、参加者の見通し(22-5)	
	上の項目の他、活動名称(1)、施設名称(2)、施設の所在地(3)					

施設管理者用

以下の項目について下線部・空欄には記入を、番号にはあてはまる箇所に○をお付けください。
お分かりになる範囲で結構ですので、よろしくお願い致します。

1．施設名称　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．所在地　愛知県＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．施設利用開始年月日　平成・昭和　＿＿年＿＿月＿＿日

4．開館時間　平日　＿＿：＿＿　～　＿＿：＿＿　土曜日　＿＿：＿＿　～　＿＿：＿＿
日・祝日　＿＿：＿＿　～　＿＿：＿＿　休館日　＿＿＿＿曜日

5．利用申請方法　1．抽選　2．先着順（＿＿ヵ月前から）　3．団体登録制
4．インターネット　5．その他（　　）

6．駐車台数　＿＿＿台

7．管理者（施設勤務者）数　＿＿＿人

＜利用団体について＞

8．施設を利用している団体はいくつありますか。　＿＿＿団体

9．8．のうち、子どもの団体はいくつありますか。　＿＿＿団体

10．それはどのような活動ですか。（複数回答可）
1．野球　2．ソフトボール　3．サッカー　4．ラグビー　5．バスケットボール
6．バレーボール　7．バドミントン　8．卓球　9．剣道　10．柔道　11．空手
12．陸上　13．体操　14．合唱　15．太鼓　16．郷土芸能　17．発明
18．茶華道　19．工作　20．その他（　　）

11．利用団体数（直前一週間の平均）
11－a　一日の利用団体数　約＿＿＿～＿＿＿団体
11－b　一日の子どもの利用団体数　約＿＿＿～＿＿＿団体

12．利用者数（直前一週間の平均）
12－a　一日の利用者数　約＿＿＿～＿＿＿人
12－b　一日の子どもの利用者数　約＿＿＿～＿＿＿人

＜管理について＞

13．管理室としての部屋が設置されていますか。　1．設置されている　2．設置されていない

14．13で　1．設置されている　と回答した方にお聞きします。
14－a　管理室の広さに満足していますか。
1．非常に満足　2．やや満足　3．普通　4．やや不満　5．非常に不満
14－b　管理室の居心地に満足していますか。
1．非常に満足　2．やや満足　3．普通　4．やや不満　5．非常に不満
14－c　管理室は使いやすいですか。
1．非常に使いやすい　2．やや使いやすい　3．普通　4．やや使いにくい　5．非常に使いにくい

15．特別な防犯対策をしていますか。（複数回答可）
1．防犯カメラの設置　2．自動安全装置の設置　3．警備会社委託　4．特にしていない
5．その他（　　）

16．施設利用者は照明設備を利用できますか。利用できる場合は料金もお答え下さい。
1．利用できない　2．利用できる　＿＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

17．施設利用者は空調設備を利用できますか。利用できる場合は料金もお答え下さい。
1．利用できない　2．利用できる　＿＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

１８．施設利用者に道具・備品の貸し出しは行っていますか。

１．行っている　　２．行っていない

１９．１８で　１．行っている　と回答した方にお聞きします。

１９－ａ　貸し出し料金はどうですか。　　１．無料　　２．有料

１９－ｂ　２．有料　の場合、貸し出し内容と料金とはどうですか。

貸し出し内容　（　　）……　＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

（　　）……　＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

（　　）……　＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

（　　）……　＿＿分・時間・回　あたり　＿＿＿＿円

＜その他＞

２０．施設利用者の施設までの交通手段はどうですか。おおよその割合をお答え下さい。

・車　（　　）％

・バス　（　　）％

・自転車　（　　）％

・徒歩　（　　）％

・その他　（　　）％

合計１００％

２１．今までに利用者や地域住民からの苦情はありましたか。　　１．ある　　２．ない

２２．２１で　１．ある　と回答した方にお聞きします。苦情の内容は何ですか。（複数回答可）

１．利用施設について　　２．利用者について　　３．管理について

４．その他（　　）

２３．今後も子どもを中心とした団体が増加した場合、現在の状況で受け入れが可能ですか。

１．可能　　２．どちらかといえば可能　　３．どちらかといえば不可能　　４．不可能

５．どちらでもない　　６．可能だが他の施設で受け入れて欲しい

２４．その理由は何ですか。下に記入してください。

（　　）

以下の項目からは最もふさわしい番号に○をお付けください。

２５．＜子どもについて＞

	1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
２５－１．施設について子どもからの意見はありますか。	ある					ない
２５－２．子どもは施設管理者に対して挨拶をしていますか。	する					しない
２５－３．子どもに対して叱ることがありますか。	ある					ない
２５－４．子どもから相談を受けることがありますか。	ある					ない

２６．＜利用施設について＞

２６－１．利用施設の場所は子どもにとってわかりやすいですか。	わかりやすい					わかりにくい
２６－２．子どもが活動の準備をするスペースがありますか。	ある					ない
２６－３．親や関係者が見学できるスペースはありますか。	ある					ない
２６－４．施設の広さに満足していますか。	満足					不満
２６－５．施設はきれいですか。	きれい					汚い
２６－６．施設は明るいですか。	明るい					暗い

２６－７．施設の空調は整っていますか。（室内の場合）　整っている ├─┼─┼─┼─┤ 整っていない

２６－８．施設は使いやすいですか。　使いやすい ├─┼─┼─┼─┤ 使いにくい

２６－９．施設では快適に過ごすことができますか。　できる ├─┼─┼─┼─┤ できない

２６－１０．施設では子どもは騒げますか。　騒げる ├─┼─┼─┼─┤ 騒げない

２６－１１．近くに代用できる施設はありますか。　足りている ├─┼─┼─┼─┤ 足りていない

２６－１２．施設までの交通の便はどうですか。　よい ├─┼─┼─┼─┤ 悪い

２６－１３．施設までの距離はどうですか。　近い ├─┼─┼─┼─┤ 遠い

２６－１４．駐車場は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２７．＜道具について＞

２７－１．道具は足りていますか。　足りている ├─┼─┼─┼─┤ 足りていない

２７－２．利用者は道具を大切に扱っていますか。　扱っている ├─┼─┼─┼─┤ 扱っていない

２７－３．利用者は後片付けや整理整頓ができていますか。　できている ├─┼─┼─┼─┤ できていない

２８．＜管理について＞

２８－１．けがなどの安全対策は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２８－２．防犯対策は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２８－３．道具などを保管する場所は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２９．＜その他＞

２９－１．利用者数は今後さらに増えていくと思いますか。　増える ├─┼─┼─┼─┤ 減る

２９－２．その理由を記入してください。

（　　）

２９－３．施設を維持していく上で、利用料金は高いと思いますか。

高い ├─┼─┼─┼─┤ 安い

２９－４．その理由を記入してください。

（　　）

＜維持・管理についてお聞きします＞

３０．備品に破損が生じた場合、どのような対応をしていますか。

３０－a　破損者が特定できる場合

１．破損者が実費弁償　　２．施設側の修繕費より支出

３．その他（　　）

３０－b　不可抗力（天災など）の破損者が特定できない場合

１．施設側の修繕費より支出

２．その他（　　）

３１．通常利用している備品（蛍光灯やトイレットペーパーなど）が消耗した場合の購入方法はどのようになっていますか。

１．配分された予算内で購入　　２．年度ごとに支給されている　　３．施設側の実費で購入

４．その他（　　）

３２．新しい備品を購入する場合、その購入方法はどのようになっていますか。

１．申請し、次年度に購入　（申請先……＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

２．独自予算内で購入

３．寄付

４．その他（

３３．３２で　１．申請し、次年度に購入　と回答した方にお聞きします。申請から購入に至るまでにどれくらいの時間がかかりますか。

１．１日以内　　２．１週間以内　　３．１ヶ月以内　　４．それ以上

３４．施設の一部を改修したい場合、改修方法はどのようになっていますか。

１．改修要求をし、その結果予算が配分される。

２．配分予算内で行う

３．自己資金で行う

４．その他（　　）

３５．清掃や草刈りなどの通常の保全業務は誰が行っていますか。

１．各施設側が行う　　２．年間契約で委託　　３．その都度委託

４．その他（　　）

３６．施設に不具合が生じ、修繕したい場合、修繕費配分されていますか。

１．はい　　２．いいえ

３７．３６で　１．はい　と回答した方にお聞きします。修繕費から支出できる用途は決められていますか。決められているものに○をお付けください。

１．雨漏りの補修（　）　　２．水漏れ（　）　　３．配管のつまり（　）

４．壁や床の塗装（　）　　５．空調設備（　）

６．その他（　）（　　）

以下の質問には、あてはまる番号に○をお付けください。（複数回答可）

また各設問に対するご意見等は、余白に記入をしてください。

３８．施設を利用する子どもたちについて何か気になる点や気づいた点がありますか。

１．おとなしい　　２．怒りやすい　　３．疲れている

４．コミュニケーション能力が欠けている　　５．運動能力が落ちている

６．その他（　　）

３９．利用団体に対しての意見・問題点・要望などがありますか。

１．施設の破損が多い　　２．備品の破損が多い　　３．備品の盗難が多い

４．後片付けができていない　　５．利用時間を守らない　　６．違法駐車などが多い

７．その他（　　）

４０．管理する上での意見・問題点・要望などがありますか。

１．管理者が不足している　　２．管理室が狭い　　３．管理費が不足している

４．その他（　　）

４１．今後の施設利用をより活発にするためには、どのように改善すればよいと思いますか。あてはまるものに○をお付けください。（複数回答可）

１．開館時間を長くする
２．自宅からの利用申請を可能にする
３．駐車場を広くする
４．駅・施設間のバスの送迎を行う
５．いろいろな種目に対応した複合的な施設にする
６．専門性の高い施設にする
７．防犯対策を徹底する
８．照明設備利用料金を安くする
９．空調設備利用料金を安くする
１０．道具・備品の貸し出し内容を充実させる
１１．道具・備品の貸し出し料金を安くする
１２．活動の準備をするスペースを整備する
１３．親や関係者が見学できるスペースを整備する
１４．施設を広くする
１５．近くに代用できる施設を整備する
１６．利用料金を安くする
１７．施設の利用に関する広報活動を活発に行う
１８．その他（　　）

アンケートのご協力ありがとうございました。

施設ホームページアドレス（http://　　）

指導者用

以下の項目について下線部・空欄には記入を、あてはまる番号には○をお付けください。
複数の場合は、代表的なものをお答えください。
お分かりになる範囲で結構ですので、よろしくお願い致します。

1．活動団体名称 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．普段活動を行っている施設名称 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．２の施設所在地　愛知県＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4．主に行っている活動種目 ＿＿＿＿＿＿＿＿
（例　野球・ソフトボール・サッカー・バスケットボール・剣道・柔道・空手・体操・合唱・太鼓　など）

5．参加人数　指導者…（　　）人　子ども…（　　）人

6．活動状況
1．１日未満／月　2．１～２日／月　3．１～２日／週　4．３日以上／週

7．運営母体　1．自治体　2．地域　3．個人　4．その他（　　）

8．運営資金（複数回答可）　1．団費　2．補助金　3．寄付　4．自己資金
5．その他（　　）

９～１６の項目は、ご回答くださる方についてお答えください。

9．年齢　1．20歳未満　2．20代　3．30代　4．40代　5．50代　6．60歳以上

10．性別　1．男性　2．女性

11．職業　1．会社員　2．教師　3．主婦　4．学生　5．無職　6．その他（　　）

12．居住地
1．施設のある小学校区内　2．同一市内　3．隣接市内　4．愛知県内　5．その他

13．活動における役割　1．代表者　2．指導者　3．その他（　　）

14．１３の主な内容
1．組織の運営管理　2．子どもの指導　3．その他（　　）

15．現在までの参加期間　（　）年（　）ヶ月

16．活動参加（指導）状況
1．１日未満／月　2．１～２日／月　3．１～２日／週　4．３日以上／週

以下の項目からは、最もふさわしい番号に○をおつけください。

	1 非常に	2 やや	3 普通	4 やや	5 非常に	
17．＜活動について＞						
17－1．活動時間はどうですか。	長い					短い
17－2．活動の中で自ら楽しんでいますか。	楽しんでいる					つまらない
17－3．活動に参加したことで自身が学んだことはありますか。	ある					ない
17－4．活動時間外に子どもとの関わりがありますか。	ある					ない
17－5．今後も活動に参加していきたいですか。	参加したい					参加したくない
17－6．現在の参加人数に対して指導者は足りていますか。	足りている					不足している

１８．＜子どもについて＞

１８－１．子どもは活動に活発に参加しますか。　参加する　参加しない

１８－２．活動内容に関して子どもからの意見はありますか。　ある　ない

１８－３．活動が子どもたちの生活に生きているところを見聞きしたことがありますか。　ある　ない

１８－４．活動の中で子どもの自主性を伸ばすことができていると思いますか。　思う　思わない

１８－５．活動の中で子どもの社会性を伸ばすことができていると思いますか。　思う　思わない

１８－６．子どもは指導者に対して挨拶をしていますか。　する　しない

１８－７．子どもに対して叱ることがありますか。　ある　ない

１８－８．子どもは学年を越えて活動していますか。　している　していない

１８－９．高学年の子どもが低学年の子どもに教えたり注意したりすることがありますか。　ある　ない

１８－１０．子どもは活動を通して、指導者などの様々な世代の人と交流していますか。　している　していない

１８－１１．子どもから相談を受けることがありますか。　ある　ない

１８－１２．参加しているの子どもの人数はどうですか。　多い　少ない

１９．＜利用施設について＞

１９－１．活動施設の場所は子どもにわかりやすいですか。　わかりやすい　わかりにくい

１９－２．子どもが活動の準備をするスペースがありますか。　ある　ない

１９－３．親や関係者が見学できるスペースはありますか。　ある　ない

１９－４．施設の広さに満足していますか。　満足　不満

１９－５．施設はきれいですか。　きれい　汚い

１９－６．施設は明るいですか。　明るい　暗い

１９－７．施設の空調は整っていますか。（室内の場合）　整っている　整っていない

１９－８．施設は使いやすいですか。　使いやすい　使いにくい

１９－９．施設では快適に過ごすことができますか。　できる　できない

１９－１０．利用したい施設が自由に選べますか。　選べる　選べない

１９－１１．施設では子どもは騒げますか。　騒げる　騒げない

１９－１２．活動する上で、現在利用している施設のみで足りていますか。　足りている　足りていない

１９－１３．施設までの交通の便はどうですか。　よい　悪い

１９－１４．施設までの距離はどうですか。　近い　遠い

１９－１５．駐車場は十分ですか。　十分　不十分

２０．＜利用道具について＞

２０－１．道具は足りていますか。　足りている ├─┼─┼─┼─┤ 不足している

２０－２．施設による道具の貸し出しを利用しますか。　利用する ├─┼─┼─┼─┤ 利用しない

２０－３．子どもは道具を大切に扱っていますか。　扱っている ├─┼─┼─┼─┤ 扱っていない

２１．＜管理について＞

２１－１．けがなどの安全対策は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２１－２．防犯対策は十分ですか。　十分 ├─┼─┼─┼─┤ 不十分

２１－３．道具などを保管する場所はありますか。　ある ├─┼─┼─┼─┤ ない

２２．＜その他＞

２２－１．現在の活動がきっかけで新たな交流が生まれていますか。　生まれている ├─┼─┼─┼─┤ 生まれていない

２２－２．施設の利用料金はどうですか。　高い ├─┼─┼─┼─┤ 安い

２２－３．施設の利用許可は出やすいですか。　出やすい ├─┼─┼─┼─┤ 出にくい

２２－４．活動に対して誇りを持っていますか。　持っている ├─┼─┼─┼─┤ 持っていない

２２－５．参加者数は今後さらに増えていくと思いますか。　増える ├─┼─┼─┼─┤ 減る

２２－６．その理由を記入してください。

（

２３．今までに保護者や地域住民からの苦情はありましたか。　１．ある　２．ない

２４．２３で　１．ある　と回答した方にお聞きします。苦情の内容は何ですか。（複数回答可）

１．活動について　２．利用施設について　３．利用者について　４．指導者について

５．管理について　６．その他（

以下の質問には、あてはまる番号に○をお付けください。（複数回答可）

また各設問に対するご意見等は、余白に記入をしてください。

２５．活動している子どもたちについて何か気になる点や気づいた点がありますか。

１．おとなしい　２．怒りやすい　３．疲れている

４．コミュニケーション能力が欠けている　５．運動能力が落ちている

６．塾通いとの両立が難しい　７．その他（

２６．利用施設に対しての意見・問題点・要望などがありますか。

１．予約がなかなか取れない　２．料金が高い　３．場所が狭い

４．トイレがない　５．道具を置かせてほしい　６．駐車台数が少ない

７．空調が使えない（足りない）　８．道具の貸し出しをしていない（数が足りない）

９．その他（

２７．活動に対しての意見・問題点・要望など

１．子どもを集めるのが難しい　　２．指導者を集めるのが難しい

３．試合や発表の機会が少ない　　４．運営費が不足している

５．その他（　　）

２８．今後の活動をより活発にするためには、施設をどのように改善すればよいと思いますか。あてはまるものに○をお付けください。（複数回答可）

１．開館時間を長くする　　２．自宅からの利用申請を可能にする

３．駐車場を広くする　　４．駅・施設間のバスの送迎を行う

５．いろいろな種目に対応した複合的な施設にする　　６．専門性の高い施設にする

７．防犯対策を徹底する　　８．照明設備利用料金を安くする

９．空調設備利用料金を安くする　　１０．道具・備品の貸し出し内容を充実させる

１１．道具・備品の貸し出し料金を安くする　　１２．活動の準備をするスペースを整備する

１３．親や関係者が見学できるスペースを整備する　　１４．施設を広くする

１５．近くに代用できる施設を整備する　　１６．利用料金を安くする

１７．施設の利用に関する広報活動を活発に行う

１８．その他（　　）

アンケートのご協力ありがとうございました。

活動団体ホームページアドレス（http://　　）

４－３－３　活動と利用施設

調査対象とした７市町村で実施されていた学校外活動は８４組織あり、そのうち調査で得られた４０組織の指導者１１４人の回答を元に活動と利用施設についてまとめる。

（１）活動実態

活動実態を、活動種目、活動頻度、指導者数、参加者数で考察していく。活動実態を図４－３－４に示す。

①活動種目

活動種目は野球が最も多く、球技や武道を中心に行われている。ほとんどスポーツを行う活動であった。文化系の活動はあまり把握できなかった。

②活動頻度

活動の頻度は週に１～２日が非常に多く、週末を中心に行われている。

③指導者数

指導者数はばらつきがあるが、５人以下が最も多かった。平均指導者数は８．８人であった。

④参加者数

参加者数は２１人から３０人までの組織が最も多くなっている。平均参加者数は３６人である。平均の参加者数を平均の指導者数で除すとおよそ、子ども５人に1人の割合で指導している。

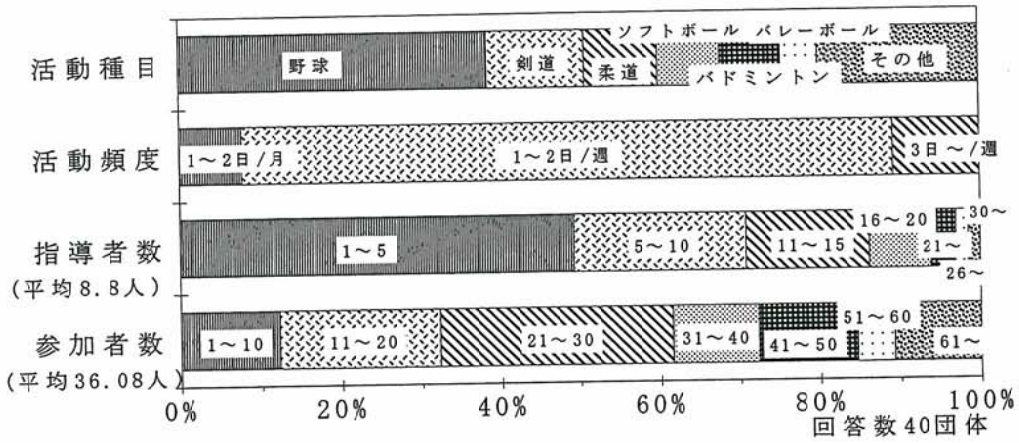


図４－３－４　愛知県の学校外活動の活動実態

（２）利用施設

利用施設は、施設の種類、利用申請の方法、交通手段、利用施設の駐車台数についてまとめる。調査の結果を図４－３－５に示す。

①利用施設の種類

公共施設の利用がほとんどである。学校のグラウンド・体育館、市町村管理のグラウンド・体育館が約９割を占める。それぞれほぼ同割合で利用されている。

約半数が学校の施設を利用しており、スポーツを行う場として学校施設は身近な存在である。公共文化施設は、公民館や児童館などである。

②利用申請の方法

学校外活動は、組織ごとに施設の確保を行っている。公共施設を利用するためには、市民が公平に施設を利用できるよう、利用ごとに申請を行う必要がある。このため定期的、継続的に利用するために団体登録を行った上で先着順で確保している。

③利用の際の交通手段

利用の際の交通手段は車が約半数を占めている。

交通手段として送迎が前提となっている。すべての施設が近くあるわけでないこと、子どもをねらう犯罪の増加により自分達だけで施設に通うことが減少している傾向にある。

④駐車台数

交通手段は自動車が多いため、施設に駐車できる台数についても調査した。駐車場の台数は、数十台～数百台までばらつきが大きい。6割が４０台未満である。

参加者数、指導者数の平均値を合計すると１組織で５０人ほどとなり、送迎もふくめて約半数が自動車利用であることを考えると、ピーク時にはすべての自動車を駐車することは難しい。

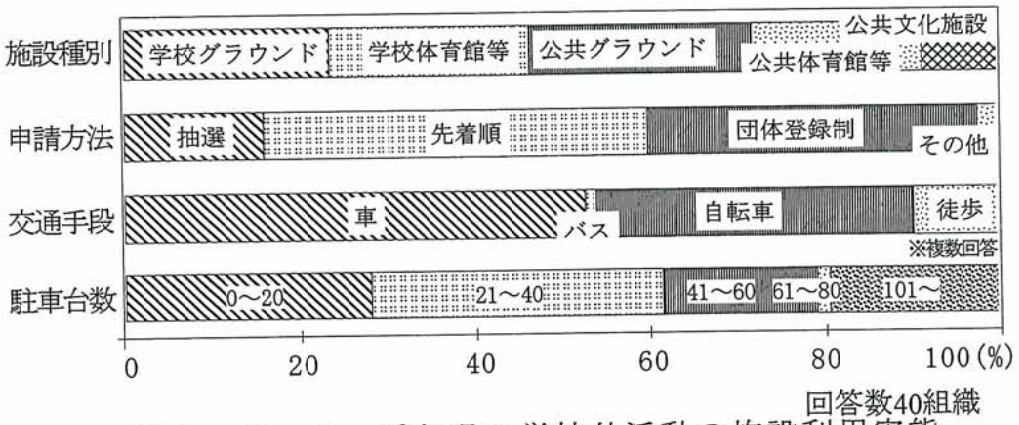


図４－３－５　愛知県の学校外活動の施設利用実態

４－３－４　活動と施設の評価

活動と施設の評価について、管理者及び指導者に対して評価を求めた。

学校外活動の現状を明らかにするために、指導者に対して行った、活動と施設に関する評価について述べる。ここでは、評価を求めた項目のうちトワイライトスクールとの比較を考慮して、前章での実施した調査の評価項目と共通の項目について考察する。

共通する項目は、次の通りである。「活動」は活動時間など活動そのものに関するもの６項目、「子ども」は子どもの活動に対する取り組みを中心に活発性や主体性に関する項目について１０項目、「利用施設」については施設のわかりやすさや広さなどについて９項目、「その他」は、道具の扱いや安全対策など４項目である。愛知県内の学校外活動の現状評価の項目を、指導者の回答割合で比較したものを図４－３－６に示す。

活動に関する評価のうち、「活動時間の長さ」については、満足とはいえないが、おおむね妥当である。指導者の「活動に対する楽しみ」や「活動参加希望」などは良好で、指導者側が学校外活動に対し積極的に関わっている。「指導者の過不足」については半数が少ないと回答しており指導者の確保が難しいことが伺える。

参加者である子どもに関する評価では、「自主性の促進」や「社会性の促進」についても、指導者としては半数以上が良いと評価しており、子どもに対する活動の効果が顕われているといえる。「学年を超えた活動の有無」については８割が良い評価をしており異学年交流は行われている。

施設の評価については、「施設場所のわかりやすさ」については、８割が良い評価をしており、認知度の高い施設が利用されている。「施設の広さ」や「施設のきれいさ」「施設の明るさ」については、６割が良い方の評価をしていることから、おおむね活動目的に適した広さの施設が利用でき、施設そのものに対する評価は良い。施設の選択性については半数近くが悪いと評価している。

その他の評価では、「けがなどの安全対策」について、不満であるとの回答が１割に満たないことから、安全対策については多くの活動で配慮がなされていることが伺える。「道具の保管場所の有無」については、１割程度確保ができず悪い評価となっている。

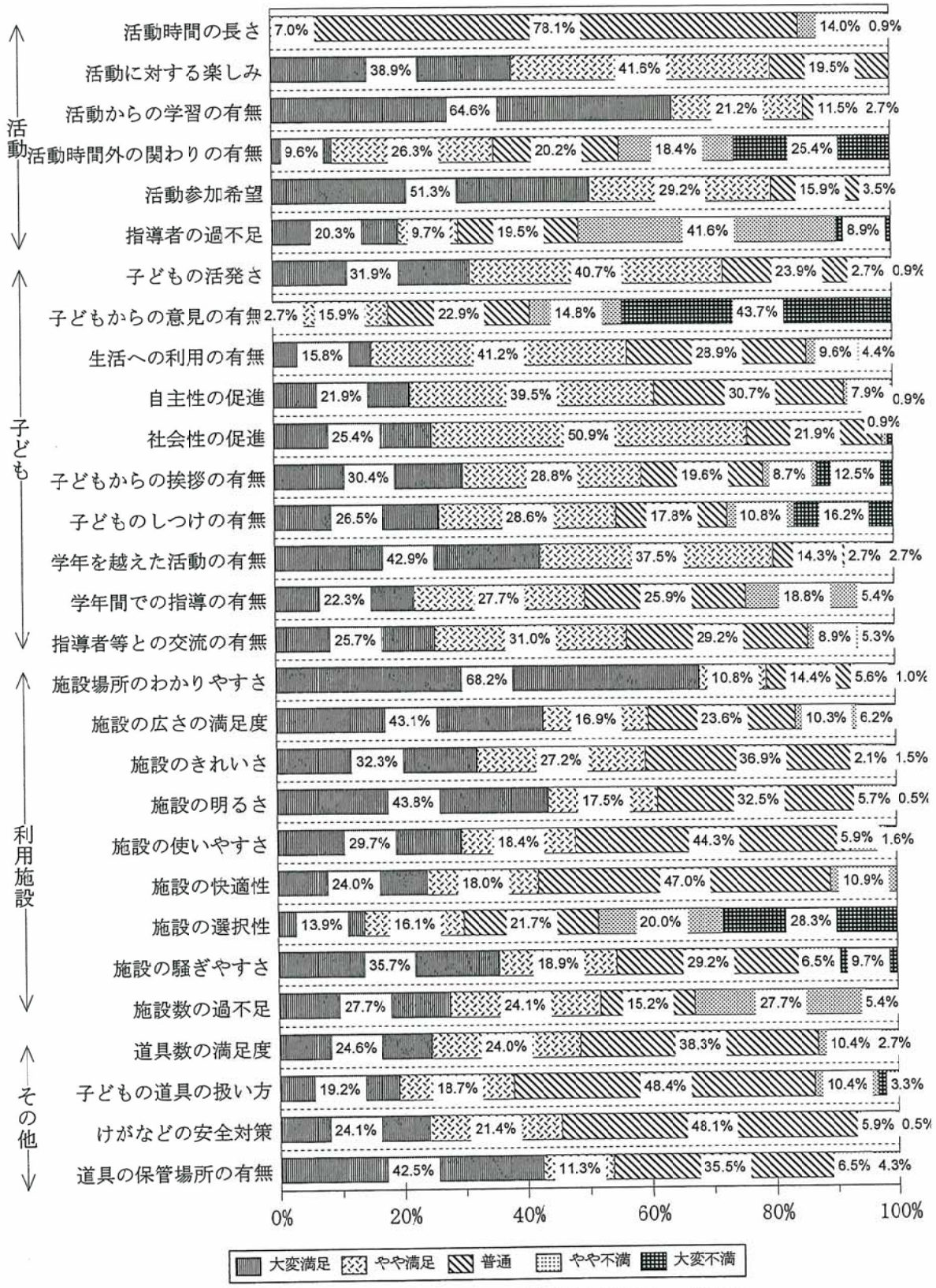


図４－３－６　愛知県の学校外活動の評価

第４節　学童保育及び愛知県の学校外活動とトワイライトスクールとの比較

トワイライトスクールの評価と、学童保育および愛知県内の学校外活動の評価を比較し、学校外活動のあり方を検討する。

４－４－１　学童保育とトワイライトスクール

活動と施設の評価の違いについて、学童保育とトワイライトスクールそれぞれの評価項目について、評価の平均値を出し、プロフィル曲線を用いて比較した。この結果を図４－４－１に示す。

全ての項目で学童保育がトワイライトスクールより低い評価となっている。特に「施設の明るさ」「施設のきれいさ」「施設の使いやすさ」で大きな差がみられる。

学童保育については、第２節でみてきたように、施設の環境が不十分であるという結果を得ている。評価の差は、施設整備環境の差がそのまま顕われた結果である。学童保育施設の環境の改善や整備が必要である。

学童保育の環境は改善の余地が大きいが、さらに今後活動を継続していく上で必要な改善点として捉えている項目についても比較した。これを図４－４－２に示す。

学童保育では施設の広さに関する要望が目立って多かった。施設環境の現状を如実にあらわしている。「施設の広さ」の要望はトワイライトスクールでもあげられた。また、学童保育は、活動の目的や内容が明確であるため「行事の種類」の要望が低い。逆にトワイライトスクールにおいては、「講座の種類」「講座の内容」「指導者数」の項目が多く、何をどのように活動していくかが課題となっている。

学童保育では「その他」の回答として「名古屋市の助成金の増加」など運営に関する要望があげられた。

改善点の違いは施設の整備状況の差が端的にあらわれた。学童保育は施設や児童数といった活動環境に関するものが、トワイライトスクールは、講座の内容といった実施のためのソフトウエアの充実が求められている。

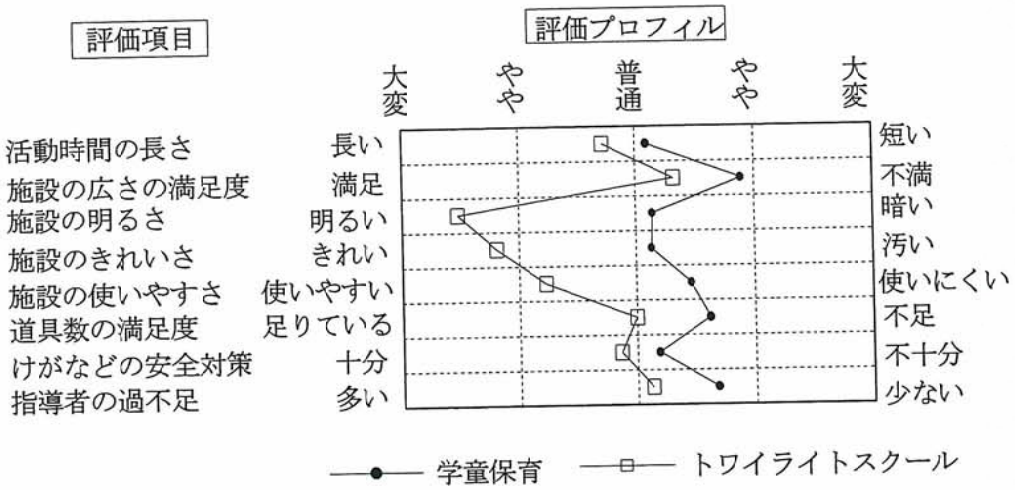
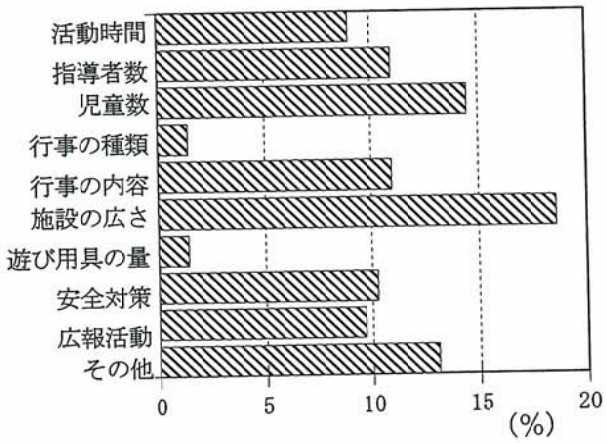
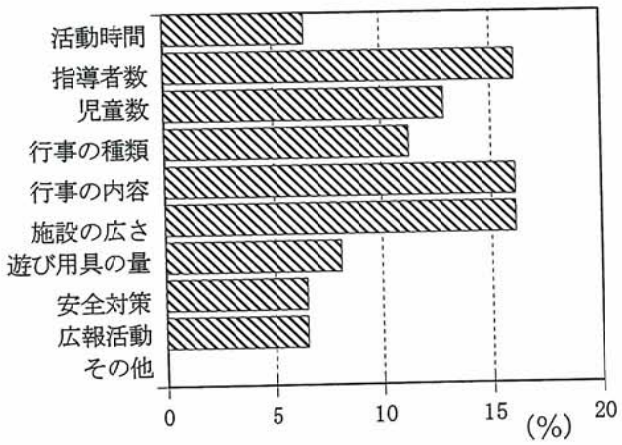


図４－４－１　施設評価の比較



学童保育（総回答数　145）



トワイライトスクール（総回答数　62）

図４－４－２　改善点の比較（学童保育とトワイライトスクール）

４－４－２　愛知県の学校外活動とトワイライトスクール

トワイライトスクールと愛知県内の学校外活動において、共通して設定した評価項目について評価の傾向を比較する。

トワイライトスクールの管理者と指導者の評価の平均と、愛知県の学校外活動の指導者の評価の平均を、プロフィル曲線として比較したものを図４－４－３に示す。

活動との関わりや活動の効果に関する項目については評価の差がほとんど見られない。

子どもの活発さは学校外活動の方が活発である。

指導者についてはトワイライトスクールの方が多く確保できている。指導者との交流については、トワイライトスクールの評価が良い。

施設に関する評価はトワイライトスクールの方が満足度が高く、施設環境整備が進んでいることが伺えるが、空間の広さについては、活動内容にあわせて施設を選択している学校外活動の方が満足度が高い。

道具や安全対策などは学校外活動の評価が良く、道具数の過不足、満足度は活動と参加人数との関係が強いため、参加者を限定しやすい学校外活動においては評価がよく、小学校を単位とするトワイライトスクールでは道具の確保量を想定しにくいことから評価が悪い。

子供の道具の扱い方については、トワイライトスクールの評価がかなり悪く、道具の保管場所の有無については、施設の整備されているトワイライトスクールの方が評価が悪い。

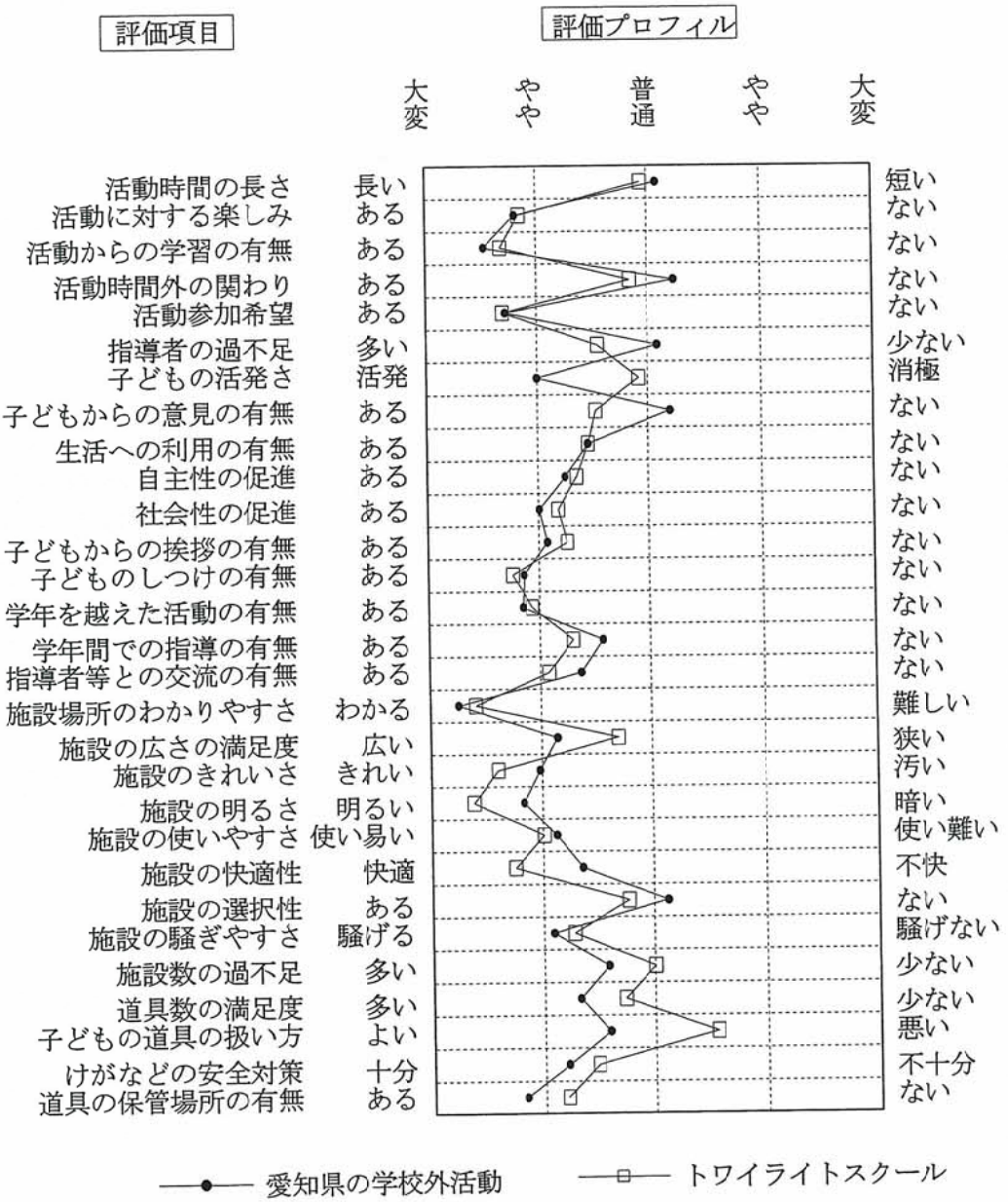


図４－４－３　施設評価の比較（愛知県の学校外活動とトワイライトスクール）

第５節　学校外活動施設の計画条件

学校外活動施設の計画条件を本節で考察する。学校外活動のよりよい施設環境整備を行うために、学校外活動を行う環境作りと、学校外活動施設の計画条件の２つの観点から述べることとする。これを図４－５－１にまとめ以下に述べる。

（１）学校外活動を行う環境づくり

①活動組織と活動内容

学校外活動を新規に始めたり、継続して活動していこうとする場合、活動組織や内容によって環境が大きく異なる。

スポーツを主体とした活動、特に野球・サッカーなどは、学校やプロスポーツなどを通じてふれあう機会が多く、子どもにとって身近な存在である。また、地域の大人や親にも経験者が多く、指導者を確保できる可能性が高い。

活動組織を構成する場合は、チームスポーツの様にある程度人数を必要とするか、武道のように１人でも可能なものなど、種目によっては小学校区やそれ以下の比較的小さい単位の地域での活動も可能である。

逆に、合唱や工作など、学校教育の中でせいぜいその一端に触れる程度の内容は、子どもにとって疎遠な活動である。地域や親の経験者も少なく、指導にある程度の専門知識や技能の習得が必要な場合、指導者の存在に活動が大きく依存する。活動組織を構成する場合も、保護者の経験や理解がないと参加者を集めるのが困難である。指導者の数、参加する子どもの数の確保が市町村単位とならざるを得ない。学校教育との連携をはかり、発展的内容として人々の理解を得て、参加者を確保していく必要がある。

地域の限られた住民の中で守られている祭礼に伴う伝統芸能などは、子どもの数の減少により継続が困難となっているところも出始めている。地域や世代間交流の原点となっている地縁的な活動を存続していくためには、小学校区程度を単位として小学校で活動を実施し、広く参加者を求めるなど活動の位置づけを見直し、文化の継承をしていく必要がある。

学校外活動は指導する側、参加者双方が無理のない関係を保つことが

継続の根本となる。このため調査の結果でも明らかなように週１回程度を活動の基本とする。

活動や指導水準を統一化することで、指導者の育成や活動の安定を図る必要がある。

②学校外活動への支援

市町村の特徴が、豊富な指導者の存在と活発な活動を支えているところもある。例えば自動車関連産業の集積地である愛知県西三河地域があげられる。ものづくりに対する意識が高く、工作を主体として「発明クラブ」の参加者が非常に多い。企業もこの活動を支援し、学校外活動をまち全体で支えている。このように地域に根ざした活動が理想的である。

名古屋市のように、施策として小学校を利用し全児童を対象とする学校外活動を行う場合、子どもは学校終了後にそのまま活動に参加できることから、安全性や活動組織の安定を図ることができる。この場合、子どもの活動への参加機会を均等にすることが課題となる。

学童保育とは目的が全く異なり、効率やコストに関する議論のみで統合することは、両者がともに目的を失う可能性がある。学童保育へ行かざるを得ない子ども達も、ほかの学校外活動へ参加できるような仕組みが必要である。

③今後の展望

高齢化の進行により、学歴も高く、高度な知識や技能を持つ世代の経験を生かす場が求められている。このような社会の潜在的要因は、学校外活動の環境にとっては有利に働く。今まで仕事などで活動への参加の機会をもてなかった人材や、高度な技能を持つ人材を、指導者として学校外活動に生かすことができるようになる。このためには、学校外活動の指導体制について、一定の基準をつくり、安心して参加できる環境をつくることが必要である。

（２）学校外活動施設の整備

施設の利用の観点からみると、学校外活動の場として定期的に利用できる場所の確保は、自発的な活動を誘発し活動の継続性の担保となることから非常に重要である。グラウンドを利用するなど活動にある程度の広さを必要とするものは既に小学校で活動が行われており、トワイライトスクー

ルの評価の高さをあわせて考慮すると、小学校を活動の中心として整備していくことは有効性が高いといえる。一方で小・中学校のグラウンド利用は、もともと社会体育施設として位置づけられた役割の中で子どもたちも利用しているに過ぎず、さらに活動する側が施設を選択した方が、施設そのものに対する評価がトワイライトスクールに比べ総じて高いことから活動内容に応じた専門性を有する施設利用も考慮する必要がある。

その上で、

①．活動内容が小学校区単位のもの

②．活動内容が市区町村単位のもの

に分けて有効な学校外活動施設を考える必要がある。

①小学校区単位の場合の活動施設

活動内容が小学校区単位で可能な活動、例えば運動系の活動やトワイライトスクールのプレイルームで行うことが可能な活動については、トワイライトスクールがまさに先進例であり、小学校を利用施設として以下の点を考慮して整備することがもっとも適している。

・大人や青年の利用がある場合の利用調整

・利用時間の設定

・利用できる施設の範囲と施設管理

小学校内に学校とは区分された管理部分を整備し、学校外活動の拠点となるように設けるとともに、小学校の部分もなるべく共用して利用できるように整備することがよい。

小学校区内に利用できる施設が少ないことが競合を生む要因であることから、地域内で使える施設について検討し、利用を分散してやることが必要である。

地域が活動の単位となっている伝統的な活動は、子どもの数の減少によりその承継が困難となってきているものも多い。このような活動は、活動の対象とする地域の範囲を広げて、小学校単位で参加者を募る等の活動の工夫と、小学校の施設を地域の実情にあわせて利用してやることがよい。

②市町村単位の場合の活動施設

合唱や創作といった文化系の活動や武道といった比較的広範囲から子どもが参加する活動は、利用する施設に専門性や特定の備品を備えてい

るなどといった、利用する側の選択に応じた施設整備となり、以下の点について考慮する必要がある。

・子どもが1人でも通える
・参加者を収容できる広さがある
・利用施設が利用目的に適している
・定期的に利用することが可能

小学校を一律に上記の条件を満たすよう整備することは、活動組織の数から考えても効率が悪い。小学校区の状況や地域の指導者の分布状況に合わせて特徴的に施設を整備してやることが有効である。さらに、複数の小学校が連携することで様々な活動に対応できるような施設整備を行うことがよい。

現在多く利用されている公民館、市民会館、武道館等の公共施設の場合、子どもの利用に制約があり定期的に場所を確保することも難しいが、これら既存の施設内に子育て支援を目的とする施設を併設して整備することで、活動場所の確保を図る。

また、中学校や高等学校の利用はほとんどみられなかったが、中等教育施設における施設整備水準はかなり高く、対象としている校区の範囲も比較的大きいことから、部活動などとの調整を図りこれらの施設を利用できる体制を作ることがよいと考える。

学童保育は、留守宅児童の第二の家庭であることから、参加が子どもの意志にゆだねられている学校外活動とは分けて考える必要がある。児童福祉施策の目的を達成する利用施設環境整備が必要である。

今後の日本は総人口の減少によって、人口が都市に集中し二極化が進むことが想定される。都市部においては、施設利用が増大し、既存施設の効率的な利用が求められる。逆に都市以外では、既存施設の統廃合と効率化利用が大きな課題となる。また、子どもの数の減少により、全国に整備された学校施設も余剰施設となってしまう。

そこで小学校に限らず、地域にある余剰の既存施設を、地域の地縁団体などに開放し、それぞれの地縁団体が地域と子ども達に適した空間の整備をしてやることによって、活動施設の確保と、学校外活動の幅を広げることができると考える。

学校外活動の実態	学校外活動の環境づくり	学校外活動施設の計画条件
経験人口多い ○一般性が高い 小学校区単位で活動が可能	参加者、指導者を確保しやすい 指導水準の統一化による指導者の育成と組織の安定化	小学校に学校外活動組織のための利用環境を整備し、定期的に利用できるようにする ↓ 現在の学校開放施設利用者への配慮 ↓ 学校開放施設に限らず地域に存する施設を最大限に活用する
経験人口少ない ○専門性が高い	指導者の存在に活動が依存し後継者の確保も困難 活動参加機会が均等にならない 活動をPRする場がない 参加者を集めにくい	・小学校を活動場所とする場合、指導者の分布を考慮し特徴的に整備 ・公共施設で活動を行う場合は、子育て支援を目的とする施設と併設するなど施設内での位置づけを明確にして場所の確保図る ↓ 活動可能な場所の拡大 ↓ 中等教育施設の利用の拡大を図る
○地域性が強い	参加者の減少 地域文化継承の危機	小学校を活動場所とするなど地域の実情にあわせて利用できるよう整備する
学童保育	留守宅児童においては第二の家庭である 子どもの意志で学校外活動へ自由に参加	児童福祉の観点から、施設の整備水準を確保する必要がある

図４－５－１　学校外活動の実態と施設の計画条件

第６節　まとめ

学童保育、学校外活動、トワイライトスクールの比較から三者の関係を整理し学校外活動のあり方を考察する。そのために活動を構成する、「参加者・指導者」、「活動・効果」、「施設・設備」、「施設の立地」、「問題点」の５つの項目に分けて、指導者の評価から比較することとした。これを図４－６－１に示す。

さらに、上記の結果と、各章で得られた施設の整備要求や問題点などから、学校外活動施設の計画条件について考察する。これを図４－６－２に示す。

（１）学童保育の現状

学童保育のおかれている現状は非常に厳しい。

参加者については、トワイライトスクールとは活動の趣旨が異なるものの、時間が重複していることから参加者の減少がみられた。

施設については、民間施設を主体とした学童保育では施設整備水準の差が非常に大きく、トワイライトスクールが学童保育に少なからず影響を与えていることがわかった。

学童保育が今後果たす役割は非常に大きいと考えられる。その理由として共働き世帯の増加により、子どもを育てる世代からの実施要望が高くなってきている。しかし、子どもの生活面へのきめ細かい指導を行う必要があることから、全ての児童を対象とした活動とは区別して考えざるを得ない。

指導に関しては、活動の内容に応じて指導者を選択できるものではなく、生活全般にわたって指導できる指導者の育成も課題となる。

社会福祉事業としての学童保育の目的を達成させるため、両者が共存できる環境作りを進めることが必要である。

解決策の一つとして、参加者の増加を図ることや施設の老朽化を解消する為に、活動場所の統合について検討する必要がある。

（２）愛知県内の学校外活動の現状

愛知県内の学校外活動については、参加の可能性が地域の指導者の存在の有無に左右される。このため子どもの意欲や道具の充足などは評価が高い。このことは、一様な活動場所の整備が効果的とはいえない一面

があることを示唆している。しかし、活動場所が確保されていることが活動の継続の前提となっていることを考えると、小学校を定期的な活動場所と位置づけ整備されていることは安定的な活動を担保することができ望ましいものである。

（3）トワイライトスクールとの比較

学童保育は、トワイライトスクールの実施環境に比べ、不十分な施設の中で実施されている。

トワイライトスクールは、活動の効果面については多くの項目で評価が高い。また、子どもの活動場所として、施設の機能に関する評価についても良好で有効性は高い。

子どもの活発さ、施設の広さや道具の満足度などは、愛知県の学校外活動の方が効果的であった。これは、子どもが自分のやりたい活動内容を選択した方が、積極的に活動に参加する。また、学校外活動組織が活動目的に適した空間を選択して利用しているためであると考えられる。このことから、小学校の施設整備と活動との組み合わせを考慮してやることが必要である。

小学校を整備し活動を実施することは、施設に対する評価が良好で、施設整備のモデルとなるものと考えられる。

人材の育成は３者が共通して抱える問題であり、地域の人材の生かし方や育成方法を構築することが課題である。

（4）学校外活動施設の計画条件

本研究の結果から導き出される学校外活動施設の計画条件を図４－５－２に示す。

各小学校の全児童を対象とする活動の場を小学校内に整備することは非常に効果的である。

活動内容を選択し子どもが参加する形態の学校外活動の場合、活動内容によって、小学校を単位とする活動か、地域の公共施設を利用する活動であるかを考慮する必要がある。

小学校を単位とする場合は、小学校利用が複数の利用希望の重複が問題となるため、活動目的に応じて利用できる施設を増やしてやることが良い。

また、地域の公共施設を利用している活動は、現状の活動形態より施設の規模や対象とする範囲を広くした方が効果的である。この場合、小学校

の全てに一様な整備を行うより、中等教育施設の利用や、地域の人材や特徴に応じて重点的に施設整備を行い、施設同士の連携により学校外活動を行うことがよい。

学童保育の持つ保育の目的を達成する為に、名古屋市においては参加人数に合わせた必要空間の確保と施設整備が必要であり、両者の活動の共存が子どもの参加機会を担保することとなる。

		参加者・指導者	活動・効果	施設・設備	立地	問題点
名古屋市	学童保育	参加者の減少 参加要望は大 指導体制が悪い 指導者不足	保育が主目的 子どもの教育 子どもとの交流 しつけ	狭い 使いにくい 収納場所の不足 老朽化 道具の不足 安全対策	学校からの移動 周辺の交通量 屋外活動場所の確保	利用空間の整備が必要 利用希望・人数の増加への対応 施設の老朽化や安全対策、周辺環境を考慮した施設立地が必要 指導者の不足
		↕ 参加者の重複 時間の重複	↕ 子どもの生活面のフォロー	↕ 格差が大きい	↑ 設置場所が一様でない	
	トワイライトスクール	参加者に偏り 土曜は少ない 指導者不足	活動の指導が目的 活動参加は自由 社会性・自主性を育む 積極性・公共性の欠如 活動内容の固定化	学校内の専用スペース 使い易い きれい 場所が固定されている 利用できる空間は限定	通学している小学校	高学年に対応した活動内容の充実 施設を生かした活動の整備 親を含めた地域との連携を強化
			↓ 活動機会に差 希望者が参加	↑ 場所が確保 活動機会の確保	↓ 子どもが自力で参加可能	
愛知県	学校外活動	参加者の減少 活動は指導者に依存	活動選択は難しい 積極的な活動 交流は難しい	活動場所を目的に応じて選択 準備スペースの確保	交通手段の確保 駐車場の確保	活動継続のため代替施設の確保 活動空間の自由度を高める 人材の確保と活動成果の公表
整備の方向性		指導体制の整備 役割の差を明確に位置づける 参加機会の均等化 地域との連携の強化（人材・活動）		学校施設の利用、施設を生かした活動内容の整備 活動の定期的な実施が可能 人数や規模に合わせた空間・設備の整備 安全対策の強化		⟶ 応用すると効果がある ⟷ 影響・関連大

図４－６－１　学校外活動の比較と施設整備の方向性

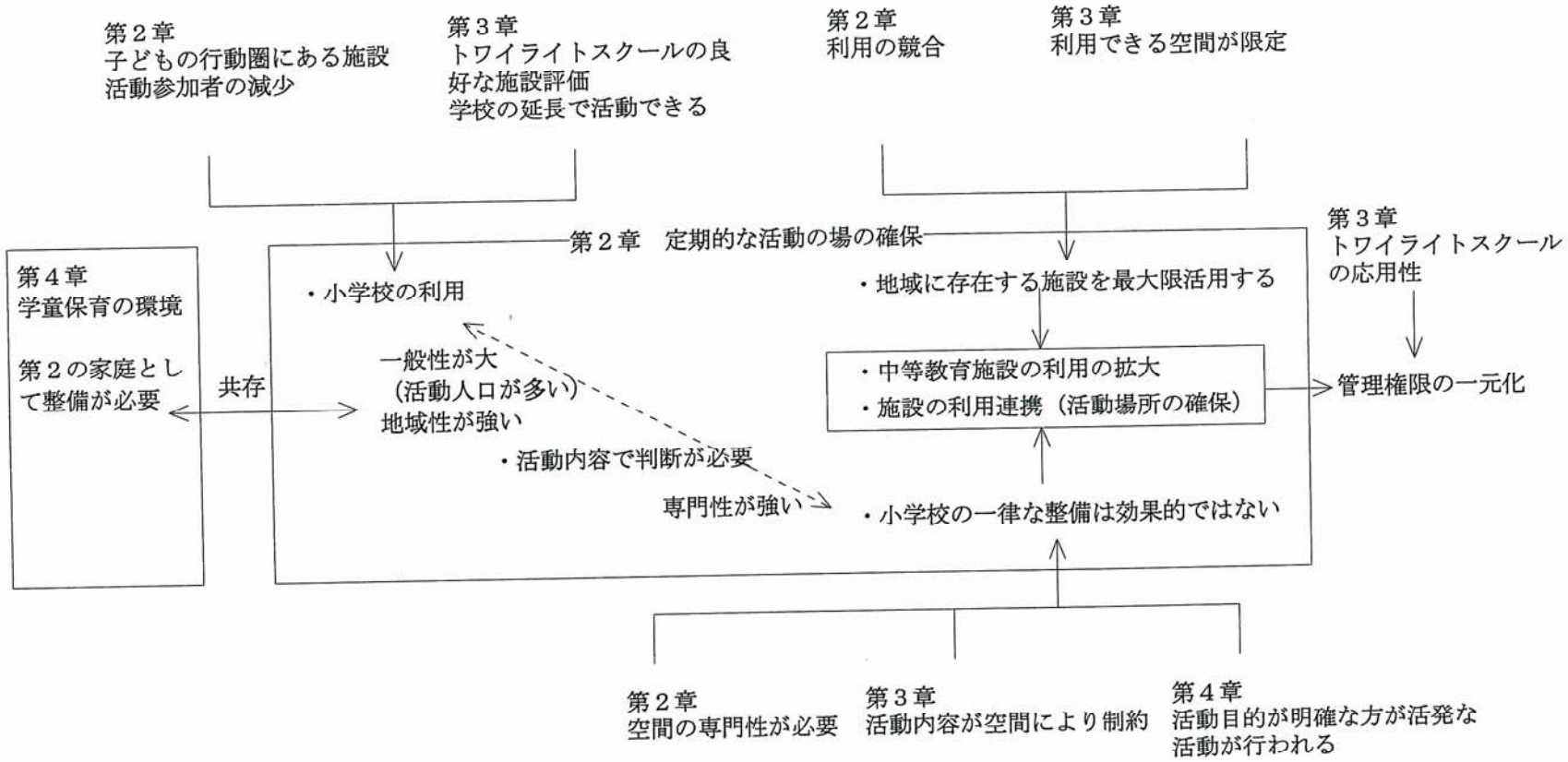


図４－６－２　学校外活動施設の計画条件

〈参考文献〉

１．諸外国の教育の動き2000　文部科学省　平成13年4月10日

２．学童保育情報　2004－2005　全国学童保育連絡協議会　2004年10月

３．学童保育の実態と課題　2003年版実態調査のまとめ　全国学童保育連絡協議会　2003年11月

４．平成１６年度版名古屋市健康福祉年報（事業編）　名古屋市

５．愛知県統計年鑑　平成12年度刊　愛知県統計協会　平成13年3月

６．名古屋市統計年鑑　平成12年度版　総務局企画部統計課　平成13年3月

７．稲沢の統計　2001年　愛知県稲沢市　平成13年3月

８．いわくらの統計　平成12年度版　岩倉市　平成13年3月

９．岡崎市統計書　2000年版　岡崎市総務部行政課　平成13年1月

１０．渥美町町制45周年記念町勢要覧　渥美町総務課　平成13年3月

１１．知多市政施行30周年記念市勢要覧　企画部秘書広報課　平成13年1月

１２．藤岡町町勢要覧　藤岡町役場企画開発課　平成10年4月

１３．地価マップ都市計画用途地域図　愛知県　平成14年　土地情報センター　ゼンリン名古屋営業所　2002年6月

１４．地域施設の計画、日本建築学会　１９９５年９月　丸善

１５．愛知県の地域特性からみた子どもの学校外活動と利用施設に関する研究　櫻木耕史　松本直司　谷口汎邦　日本建築学会第19回地域施設計画研究シンポジウム　p293-p298　2001.07

１６．学校施設を利用した学童保育施設の整備状況と利用実態　放課後における児童の学校施設利用に関する研究　その2　山口勝巳　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p155-p156　2003.09

１７．東京都における「地域子ども教室推進事業」による小学校の利用状況　-放課後における児童の学校施設利用に関する研究　その3-　杉山正樹　山口勝巳　日本建築学会大会学術講演梗概集　(E-1)　p155-p156　2005.09

１８．学童保育施設における児童の行為と領域形成に関する研究　名古屋市の学童保育所を対象として　田中真悟　清水裕之　有賀隆　大月淳　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p665-p666 2002.09

１９．地域活動からみた地域施設計画の評価に関する研究　福原聖治　横山俊祐　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p427-p428 1997.09
２０．小学生にみる児童館の利用特性　萩原美智子　北浦かほる　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p395-p396 1996.09
２１．学校週5日制導入と今後の児童館計画に関する研究　ー児童および保護者の意識ー　五十嵐宜子　定行まり子　日本建築学会大会学術講演梗概集(E-1)　p147-p148　2003.09
２２．「放課後児童健全育成事業」に基づく学童保育サービス及び学童保育施設の実態に関する研究　富田啓介　三浦研　日本建築学会大会学講演梗概集(E-1)　p153-p154　2003.09

第５章　結論

第１節　結論

子どもの学校外活動と利用施設について各章で明確となった点を以下に述べる。

第１章「序論」では、子どもの学校外活動と利用施設に関する研究を行う背景とその目的を明確化した。

第２章「子どもの学校外活動の実態と利用施設」では、学校外活動の実態と利用施設について文化系と運動系の組織に分けて全体像を把握した。

（１）活動組織について

・組織数が文化系に比べて運動系の方が遥かに多く、身近な活動として行われている。
・運動系の活動組織は文化系の活動組織に比べ、参加人数、指導者数が多く、指導者１人あたりの子どもの数も少ない。
・運動系の組織は、ほとんどが団費のみで組織の運営を行っている。
・文化系の組織は、行政からの補助を受けて活動しているものが多い。
・参加者数は、子どもの数の減少に伴い減少傾向にある。
・文化系の活動組織は、活動を継続していくために、社会の中での活動内容の明確な位置づけが必要である。

（２）利用施設について

・文化系は地域集会施設を利用する場合がほとんどである。
・運動系では小学校が多数を占める。
・施設の管理を分離しやすい体育館、グラウンドなどの開放は進んでいる。
・掃除道具や整備道具の不備や不具合の指摘が多く、施設の利用と関連する、備品の管理についても考慮する。

（３）整備の条件

①文化系学校外活動

・目的や内容といったソフト的な要素を充実させるために、指導者の確保、活動や発表の機会の提供など、地域と密着して活動を実施することが必要である。
・地域住民との距離を縮めるために、活動をアピールし地域の中で活動

の存在を広く認知してもらうことが重要である。
・専門的な空間を整備するよりも、フレキシブルな空間がよい。
・利用目的に合致する利用施設の専門性が必要な場合がある。
・自発的な活動を誘発するため、定期的に利用できる、固定した場所の確保が望まれる。

②運動系学校外活動
・競技人口が多いことから、指導者の確保が容易である。
・目的や成果がはっきり分かるため、理解が得られやすい。
・活動が活発で、活動組織の数も多い。
・活動のためのソフト的な要素は環境が整っており、今後も活動を継続していく潜在的な可能性が高い。
・利用可能な施設の数を増やしてやることが望まれる。

③学校外活動施設
・子どもが一人で通える範囲にあることを原則とする。
・活動目的にあった広さを確保できる。
・利用料金を低く設定し、継続的、定期的に使用することができる。
・地域あたりの施設数、施設の管理、空間の質的側面から、学校施設の利用や余裕教室の転用は、大変有効である。
・公民館を、市町村全体を一つの単位として連携させ、それぞれに専門性を付加することによって、様々な活動に対応できる施設とすることで子どもと地域住民が共に幅の広い活動を行うことができる様にする。

第３章「トワイライトスクールの活動の実態と施設利用」では、名古屋市で実施されているトワイライトスクールについて、学校外活動の新しい事例として捉え、活動の実態と施設利用について明確化した。さらに他の自治体への応用性をまとめた。

（1）トワイライトスクールの類型と特徴
①トワイライトスクールの類型
・トワイライトスクールの実施環境は、「学校規模」、「地域性」、「転用性」、「活動性」の４つの軸で説明できる。

・実施環境を基にトワイライトスクールを類型化すると、「高密地中規模校型」、「中規模校型」、「高密地大規模校型」、「低密地大規模校型」、「極小規模校型」、「小規模校型」の６つに類型化できる。

②トワイライトスクールの特徴

・トワイライトスクールは、プレイルームを基本として活動している。
・プレイルームは広さに差はあるが、基本となる施設の整備状況の差は小さい。
・人数の少ない「極小規模校型」、「小規模校型」で空間自由性と活動効果性が良い。
・「高密地中規模校型」は空間自由性は悪いが活動効果性が良好である。
・学校規模の大きな「高密地大規模校型」、「低密地大規模校型」は空間自由性と活動効果性があまり良くない。
・施設が参加者に対し十分であれば活動も当然良好である。
・参加者数に応じた空間の確保や活動内容の幅に応じて利用可能な空間を増やすなど、利用状況に即したシステムを構築する必要がある。

（２）トワイライトスクールの実態

①管理者・指導者

・管理者・指導者とも活動や施設に対する評価がおおむね良好で、トワイライトスクールが大きな成果を上げている。
・管理者である運営責任者が施設と活動のすべてに対して中心的な役割をしている。
・管理者は、参加人数の変化への対応や、新たな指導者の確保、活動内容への取り組みなど、運営に大きな役割を果たしている。
・活動を活発に行っていくために、今後さらに地域や学校との連携を強め、活動をサポートしていく協力関係を確立していくことが重要である。

②子ども

・子どもは、学校の延長で活動に参加でき利点が多い。
・参加年齢に偏りがみられ、本来の活動の目的である異学年交流の妨げとなる恐れがある。
・高学年になると塾通いが増え、学校が行う部活動の活発化などにより

子どものゆとり時間が減少し、活動への参加が時間的に難しくなってきている。
・子ども達が希望した時は常に参加できる環境づくりが必要である。
・子どもの精神的・身体的な発達に応じ、体験的な活動を元にした作品の制作やスポーツなど、活動の効果の明確な活動内容を考慮し、学校施設を生かして実施すること。

③行政
・小学校を利用しているため、活動の中心となるプレイルームや、活動の実施そのものが、教育の現場である小学校と明確に区分する必要がある。
・お互いの影響を最小限にするために、それぞれが独立性を確保することが必要である。
・小学校の大半の施設や備品は利用者である「子ども」とは無関係の管理区分により、相互に利用することが難しい。
・施設整備にあたっては、両者が共有して利用できる「施設」「もの」を明確化し、独立性を最小限に確保したゾーニングをする事が重要である。

④有効性
学校施設の有効活用の要望とそれを子どものために利用することを具現化したこの取り組みは、現段階では、管理者・指導者とも評価しており、大きな問題点もあげられておらず、有効性が高い。

（3）応用性
学校外活動の活動の場として名古屋市では有効であったこの施策について他の自治体への応用性は以下のとおりである。
・余裕教室の発生をもたらす社会的な背景と、施設利用の要望が大きいことが、実施の基礎的な条件である。
・人的要件では、旧来のまちの方が効果があり、校区もあまり大きくなく地縁的なつながりを共有できるところが良い。
・施設的要件として、学校と施設の管理権限が同一である政令市では実施しやすいが、それ以外の場合は両者の関係をより強化し協力体制を構築することが、実施のための大きな条件となる。

・子どもと地域の学校外活動の要望を正確に把握し行政の施策として位置づけ、学校教育と社会教育と施設管理という異なる部署の連携により、活動の場を提供できる体制をつくり、市町村自身が学校と地域との調整の役割を果たしていくことが重要である。

第４章「学校外活動の比較と施設の計画条件」では、児童福祉施策との関係を探るために、名古屋市における学童保育の施設利用環境を明らかにした。また、活動環境の応用性を検討するために、愛知県の他の市町村で実施されている学校外活動の、施設利用環境を明確化した。その上で有効性の高かったトワイライトスクールと比較することで、学校外活動環境のあり方を検討した。さらに、各章で明らかにした学校外活動と活動施設の整備要求などから学校外活動施設の計画条件について明確化した。

（１）学童保育の施設利用環境

・学童保育のおかれている施設環境は非常に厳しい。
・参加者については、トワイライトスクールとは活動の趣旨が異なるものの、時間が重複していることから参加者の減少がみられる。
・施設については、民間施設を主体とした学童保育では施設整備水準の差が非常に大きい。
・トワイライトスクールの実施が学童保育に少なからず影響を与えている。
・子どもの生活面への指導を行う必要があることから、全ての児童を対象とした活動とは区別して考えざるを得ない。
・社会福祉事業としての学童保育の目的を達成させるため、両者が共存できる環境作りを進めることが必要である。

（２）愛知県の学校外活動の施設利用環境

・愛知県内の学校外活動については、参加の可能性が地域の指導者の存在に左右される。
・子どもの意欲や道具の充足などは評価が高い。
・一様な活動場所を整備することイコール活動が効果的であるとはいえない。
・活動場所が確保されていることが、活動の継続の前提となっているこ

とを考えると、小学校を定期的な活動場所と位置づけ、整備することは、安定的な活動を担保することができて望ましい。

（3）トワイライトスクールとの比較

・学童保育は、トワイライトスクールの実施環境に比べ、厳しい環境の中で実施されている。
・トワイライトスクールは、活動の効果面については多くの項目で評価が高い。
・子どもの活動場所として、施設の機能に関する評価については良好で有効性は高い。
・子どもの活発さや施設の広さ、道具の満足度など、活動内容を定めて実施している、愛知県の学校外活動の方が効果的である。
・小学校の施設整備と活動との組み合わせを考慮してやることが必要である。
・小学校を整備し活動を実施することは、施設に対する評価が良好で、施設整備のモデルとなる。

（4）学校外活動施設の計画条件

・各小学校の全児童を対象とする活動の場を小学校内に整備することは非常に効果的である。
・活動内容を選択し、子どもが参加する形態の学校外活動の場合、活動内容によって、小学校を単位とする活動か、地域の公共施設を利用する活動であるかを考慮する必要がある。
・小学校を利用の単位とする場合は、小学校の利用希望の重複が問題となるため、活動目的に応じて利用できる施設を増やすことが良い。
・地域の公共施設を利用している活動は、現状の活動形態より施設の規模や対象とする範囲を広くした方が効果的である。この場合、小学校の全てに一様な整備を行うより、中等教育施設の利用や地域の人材や特徴に応じて重点的に施設整備を行い、施設同士の連携により学校外活動を行うことがよい。
・学童保育の持つ保育の目的を達成する為に、名古屋市においては参加人数に合わせた必要空間の確保と施設整備が必要であり、両者の活動の共存が子どもの参加機会を担保することとなる。

第５章「結論」では、本研究における研究成果の概要について述べている。

謝辞

謝辞

研究を行う機会を与えていただき、平成７年から３年間、平成１１年から途中２年間の休学期間を含めて、８年間にわたり本研究の指導をしていただきました、名古屋工業大学大学院工学研究科教授松本直司博士に深く感謝の意を表します。

本研究全般において指導していただきました、東京工業大学名誉教授谷口汎邦博士に深く感謝の意を表します。

本研究について指導及び助言をしていただきました、名古屋工業大学大学院工学研究科若山滋教授に感謝の意を表します。

本研究について指導していただきました、名古屋工業大学大学院工学研究科山本幸司教授に感謝の意を表します。

本研究について指導していただきました、名古屋工業大学大学院工学研究科兼田敏之助教授に感謝の意を表します。

本研究で行ったアンケート調査はのべ929人に回答をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また現地調査において施設管理者を始め多くの方々に協力していただきましたことに謝意を表します。

「子どもの学校外活動の実態と利用施設」で共に研究を行いました、藤原直樹氏、千石彩未氏、荒島由布子氏、松下智昭氏に厚く御礼申し上げます。また調査に協力していただきました愛知県教育委員会、稲沢市教育委員会、愛知県体育協会の皆様に感謝の意を表します。

「トワイライトスクールの活動の実態と施設利用」で共に研究を行いました鈴木良枝氏、吉野宏氏に厚く御礼申し上げます。また調査に協力していただきました名古屋市教育委員会、（財）名古屋市教育スポーツ振興財団の関係者の方々に感謝の意を表します。

「学校外活動の比較と施設の計画条件」で共に研究を行いました田川哲

郎氏、梅村有香氏、勝崎香奈氏、花井雅充氏、吉野宏氏に厚く御礼申し上げます。

また、本研究に伴う調査の実施に協力していただきました、名古屋工業大学工学部社会開発工学科松本研究室の皆様に謝意を表します。

調査資料の整理等に協力していただきました、名古屋工業大学技官の東美緒氏に感謝の意を表します。